

平成24年度 名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

東アジア先史時代の植物質編物の研究

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻 考古学専門

松 永 篤 知

平成24年 12月

— 目 次 —

はじめに	1
序章 編物研究の目的と方法	3
第1節 日本考古学における先史編物研究史と問題点	3
第2節 研究の目的と方法	23
第1章 日本列島の編物実物資料	40
第1節 縄文時代の編物実物資料	40
1) 縄文時代早期	40
2) 縄文時代前期	43
3) 縄文時代中期	45
4) 縄文時代後期	48
5) 縄文時代晩期	52
第2節 弥生時代の編物実物資料	56
1) 弥生時代前期	58
2) 弥生時代中期	60
3) 弥生時代後期	64
第3節 小結	66
第2章 中国大陸・朝鮮半島の編物実物資料	69
第1節 中国新石器時代・初期青銅器時代の編物実物資料	69
1) 中国新石器時代前期	69
2) 中国新石器時代中期	71
3) 中国新石器時代後期	72
4) 中国初期青銅器時代	73
第2節 朝鮮新石器時代の編物実物資料	74
第3節 小結	75
第3章 日本列島の編物圧痕資料	76
第1節 縄文時代の「敷物圧痕」	76
1) 縄文時代草創期	76
2) 縄文時代早期	78

3) 縄文時代前期	79
4) 縄文時代中期～後期	82
5) 縄文時代晩期	94
第2節 弥生時代の「敷物圧痕」	99
1) 弥生時代前期	99
2) 弥生時代中期	101
3) 弥生時代後期	102
第3節 小結	103
第4章 中国大陸・朝鮮半島の編物圧痕資料	107
第1節 中国新石器時代の「敷物圧痕」	107
1) 中国新石器時代前期	107
2) 中国新石器時代中期	110
3) 中国新石器時代後期	111
第2節 朝鮮新石器時代の「敷物圧痕」	112
第3節 小結	113
終章 東アジア先史時代の植物質編物	115
第1節 東アジア先史時代の編物の特徴とその背景	115
1) 東アジア先史時代の編物に見る三大要素の相関関係とその背景	115
2) 東アジア先史時代の「敷物圧痕」の特徴とその背景	119
第2節 文化史的にみた東アジア先史時代の編物	128
第3節 今後の課題と展望	133
おわりに	135
註	137
参考文献	149

— 表 目 次 —

表1	中国新石器時代の「敷物圧痕」一覧表	109
表2	東アジア先史時代の編物実物資料に見る諸要素の主な組み合わせ	116
表3	東アジア先史時代の編物圧痕資料に見る諸要素の主な組み合わせ	116
付表1	縄文時代の編物実物資料 一覧表	199
付表2	弥生時代の編物実物資料 一覧表	223
付表3	中国新石器時代の編物実物資料 一覧表	231
付表4	中国初期青銅器時代の編物実物資料 一覧表	232
付表5	朝鮮新石器時代の編物実物資料 一覧表	232
付表6	日本列島先史時代の「敷物圧痕」資料 一覧表	233
付表7	中国新石器時代・朝鮮新石器時代の「敷物圧痕」資料 一覧表	267
付表8	日本列島先史時代の網代圧痕素材 一覧表	269
付表9	中国新石器時代の網代圧痕素材 一覧表	281

— 挿 図 目 次 —

図1	モース氏が紹介した大森貝塚の網代圧痕	4
図2	坪井氏による網代圧痕原体の編み方復元	5
図3	組織痕土器の一例（蓆目）	6
図4	中国の網代編み分類・表現方法	8
図5	荒木氏による網代編みの形式分類図表	9
図6	カゴ型土器の一例（籠目土器）	16
図7	超え・潜り・送りによる網代編み分類・表現方法	26
図8	主な編み方の模式図	27
図9	編み台・編み錘の基本構造	29
図10	主な口縁部処理方法（縁仕舞）の模式図	30
図11	編物の主な器種	31
図12	東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類概念図	32

図13	東アジア先史土器の「敷物圧痕」1（編織物圧痕）	34
図14	東アジア先史土器の「敷物圧痕」2（編織物圧痕）	35
図15	縄文時代から推測される主な素材原体	36
図16	東アジア先史土器の「敷物圧痕」3（自然物圧痕・その他）	38
図17	縄文時代の編物実物資料が出土した遺跡の分布	41
図18	縄文時代早期の編物実物資料	42
図19	縄文時代前期の編物実物資料	44
図20	縄文時代中期の編物実物資料	46
図21	縄文時代後期の編物実物資料1	49
図22	縄文時代後期の編物実物資料2	50
図23	縄文時代後期の編物実物資料3	51
図24	縄文時代晩期の編物実物資料1	53
図25	縄文時代晩期の編物実物資料2	54
図26	弥生時代の編物実物資料が出土した遺跡の分布	57
図27	弥生時代前期の編物実物資料	58
図28	弥生時代中期の編物実物資料1	61
図29	弥生時代中期の編物実物資料2	62
図30	弥生時代後期の編物実物資料	65
図31	中国新石器時代・初期青銅器時代の編物実物資料が出土した遺跡の分布	70
図32	中国新石器時代前期の編物実物資料	71
図33	中国新石器時代後期・初期青銅器時代の編物実物資料	73
図34	朝鮮新石器時代の編物実物資料と出土遺跡の位置	74
図35	縄文時代草創期～前期の主な「敷物圧痕」分析対象遺跡	77
図36	縄文時代中期～後期の主な「敷物圧痕」分析対象遺跡	83
図37	縄文時代中期～後期の主な「敷物圧痕」圧痕比率	84
図38	チマキザサ・チシマザサの分布域	86
図39	縄文時代晩期の主な「敷物圧痕」分析対象遺跡と圧痕比率	95
図40	里浜貝塚の製塩土器	96
図41	弥生時代の主な「敷物圧痕」分析対象遺跡と圧痕比率	100
図42	縄文時代中期後葉～後期前半の「敷物圧痕」に見る地域性	104

図43	中国新石器時代の「敷物圧痕」分析対象遺跡	108
図44	朝鮮半島の「敷物圧痕」	112
図45	中国新石器時代におけるC類の分布域	121
図46	織物圧痕の残る輪製土器	121
図47	A-2・1・1類とB-1類の近似例	126
図48	中国新石器時代におけるA類の素材分布	127
図49	東アジア先史時代における編物の変遷	129

はじめに

考古遺跡の発掘調査から得られる遺物資料といえば、大抵の場合、土器・陶磁器や石器・石製品が大半を占めている。何百年、何千年、何万年もの長期にわたり、人間の生活痕跡としての考古遺物が現代まで遺存するためには、破損・焼失・腐朽・腐食といった様々な障害を乗り越えねばならない。そのため、比較的堅く丈夫で腐ることもない、土器や石器のような無機質遺物の出土量が多くなることは至極当然のことである。

ところが、この出土遺物の偏りが、我々に余計な先入観を与えてしまうことがある。特に、文献情報のない先史時代（主に新石器文化段階）に関しては、このような出土遺物から抱くイメージが強く、あたかも「土器と石器の時代」であるかのごとき錯覚をつい引き起こしがちである。

しかし、人間が実際に生活に使う道具は、無機質のものばかりではない。植物製品・骨角製品・皮革製品など、有機質の道具も数多く存在する。我が国では、弥生時代に登場する金属製品に加え、プラスチック製品などの化学製品が増えた現代においても、身の回りを見渡すと有機質の道具が数多く使われていることに気付かされる。我々人間の生活にとって、有機質の道具は切っても切れない存在なのである。

近年、低湿地遺跡の発掘調査が一般的となり、通常の遺跡ではほとんど出土することのない有機質遺物の出土例がかなり増加・充実してきた。それに伴い、先史時代の人々が土器・石器以外の有機質製品を多種多様に使っていたことが改めて確認されている。例えば縄文時代の日本列島における植物製品だけを見ても、木製容器・樹皮製容器・カゴ・編袋・木胎漆器・籃胎漆器・木製斧柄・木製弓・木製櫂・丸木舟・木製発火具（火鑽臼・火鑽杵）・縄・糸・編布・漆塗櫛などと、枚挙にいとまがない。そのような状況は、同じ頃の中国大陸や朝鮮半島においても大きく変わらないものと思われる。東アジア各地のいずれの先史文化においても、有機質製品の占める割合はかなり大きかったと見られ、従来考えられていた以上にヴァリエティ豊かな物質文化が浮かび上がってきている。

本論では、東アジア先史時代の有機質遺物のうち「細長い植物素材を組んだり絡めたり巻き上げたりして平面的ないし立体的に形成した器物」、すなわち編物を取り上げる。編物は、素材の組み合わせ方（編み方および素材選択）によって、土器・土製品ほどではないが自由な形に製作することができ、衣服・容器・敷物・建材など広範な分野に応用が可能である。特に、現代のような代替品が少なく、自然素材に依存していた先史時代におい

では、生活のあらゆる場面で編物が使用されていたことだろう。編物には、通風性・通水性・軽量性といった固有の特徴もあり、その点を活かした使用も推測される。

このように、数多ある有機質遺物の中でも、衣食住その他、人間生活の多くに関わるといって編物は重要な存在であり、その実態を探ろうというのが本論の出発点である。植物製品使用の初期である東アジア先史時代において、編物がどのように作り使われていたのか、現在得られる情報を基に私なりに考えてみたい。

序章 研究の目的と方法

衣食住その他、生活のあらゆる分野に関わる編物を研究することは、東アジア先史時代における人々の生活を明らかにする上で重要である。そのため、これまでも様々な視点で研究がおこなわれてきた。

特に我が国日本では、資料の蓄積を背景として、植物考古学的視点や民俗考古学的視点など様々な視点で研究が進められており、先史時代の編物研究に関して近年進展が見られる。そこで本論では、現時点での日本考古学の成果・知見をベースとして、東アジア先史時代の資料を広く見ることにする。該地・該期の編物がどのように製作され、どのように使用されていたのか、日本考古学研究者の立場からその実態に迫ってみたい。

第1節 日本考古学における先史編物研究史と問題点

繰り返すが、本論の基本的研究姿勢は、日本考古学の成果・知見をベースとして東アジア先史時代の資料を広く見ようというものである。そこで、研究の目的と方法を具体的に示す前に、我が国における先史編物研究の歴史を見ておきたい。土器や石器のような無機質遺物に比べると出土数が圧倒的に少ないため、研究の進展は遅れ気味のように見えるが、日本考古学における編物研究の歴史自体は実はかなり古い。日本考古学という学問の曙と同時に始まって、現在までに数多くの論考が発表されている。本節では、そのような長きに渡る研究の成果を、年代を追って整理し、従来の研究によって何が明らかとなったのか、現時点で何が問題なのかを明確にしておきたい。

ただし、一口に編物研究といっても、土器底部などの編物圧痕資料を対象とした研究、低湿地遺跡などから出土した編物の実物資料を対象とした研究、圧痕・実物両方から編物を分析した研究、民俗資料（または民族資料）との比較研究など、視点は様々である。それぞれに研究の歴史があり、それぞれの発展を別個に捉えることも可能である。しかし、各研究が全く無関係というわけではなく、少なからず相互的な影響が見受けられる。そこで以下では、日本考古学の先史編物に関わる様々な研究を、総合的に捉えてその歴史を概観することにしたい。そのような考えに基づき先行研究を整理してみたところ、日本における先史編物研究の歴史は、大きく3時期に分けられるようである。西暦でいえば、第1期は1879～1967年、第2期は1968～1979年、第3期は1980年～現在（第3期前半：1980年～2004年、第3期後半：2005年～現在）である。以下、各時期の内容を具体的に見ることとする。

第1期 1879（明治12）年～1967（昭和42）年

第1期は、我が国で先史時代の編物研究が始まり、その基礎が作られた時期である。

E.S.モース氏が、日本初の考古学的発掘報告である『大森介墟古物篇』（モース 1879）を発表した1879年をその始まりとする。モース氏は、大森貝塚から出土した縄文土器の底部に残された編物の圧痕を「mat impression（和訳：蓆紋・蓆紋）」として紹介した（図1）。これは、図を見る限り「広義の網代編み」（詳細は後述）の編物を原体とする「敷物圧痕」（土器製作時に使用された敷物の圧痕）、すなわち網代圧痕の類である。この圧痕原体の編物に対する詳細な分析はおこなわれなかったが、大森貝塚の発掘調査当時から土器の底部に敷物の圧痕が残されているという認識があったことは重要である。我が国における先史編物研究は、まさに日本考古学の始まりとともにスタートしたのである。

その後、編物圧痕の資料紹介などがいくつか発表されたが（山崎 1893ほか）、1899年、坪井正五郎氏によって学史的にきわめて重要な論文が発表された。それが、「日本石器時代の網代形編み物」である（坪井 1899）。坪井氏は、縄文土器底部の網代圧痕の編み方（図2）を「簡単網代編み」・「平等筋違縞網代編み」・「変わり縞網代編み」・「雑り縞網代編み」・「小紋編み出し網代編み」・「模様編み出し網代編み」・「三方編み」の7種類に大別し、さらに平等筋違縞網代編みと変り縞網代編みを「超え」・「潜り」・「送り」によって細分した。また圧痕原体となった編物の素材について、「（甲）竹細工の様に突っ張って剛い物」・「（乙）アンペラの様にしなやかに柔い物」の2種類に分類した¹⁾。ここで最も重要なのは、網代編みの条材の交差構造を数値化して表すために、「超え」・「潜り」・「送り」による表現方法を提示したことである。詳細は次節で説明するが（図7）、緯条が経条を何本超え、何本潜り、経条何本分横に送って（ずれて）いくかによって編み方を表すこの表現方法は、実際は平等筋違縞・変り縞以外の「広義の網代編み」の多くに適用が可能である。そのため現在に至るまで、この表現方法は圧痕資料だけでなく実物資料も含めた網代編み分類の基礎として広く用いられている。なお坪井氏は、この分類に基

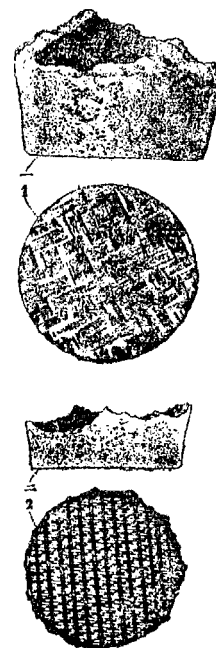


図1 モース氏が紹介した
大森貝塚の網代圧痕
（モース 1879）

づいて青森県から静岡県にかけての圧痕資料53点の分析をおこない、2本超え2本潜り1本送りが最も広範に分布することを指摘している。

そして本論文の発表以後、我が国における先史編物研究は、編物圧痕（特に網代圧痕）の編み方の分析を中心におこなわれることになる。

時は流れ、大正末から昭和初期にかけて、編物の研究を精力的におこなったのが杉山寿栄男氏である。杉山氏は、青森県是川中居遺跡から出土した編物実物資料を詳細な観察所見を交えて紹介したり（杉山 1927・1930）、自編著『日本原始工芸概説』（杉山 1928）中に縄文土器底部の編物圧痕の組織解説を拓影・石膏型写真・模式図付きで掲載したりした。

さらに1942年には、『日本原始繊維工芸史』（杉山 1942a・b）を著し、縄や織物なども含めた繊維工芸全般を、原始篇と土俗篇の2篇にまとめている。杉山氏の研究の最大の特徴と意義は、遺物としての編物資料を実物・圧痕問わず収集し、それらを民具と比較しながら観察したことである。特に『日本原始繊維工芸史』では、編物の考古資料を民具の呼称（「飛し網代編」・「四方網代」・「透編」・「箆編」・「柵形網代」・「籠目編」など）によって表現し、民具と比較しながらその組織や素材について観察している。そして、考古資料に見る組織・素材の多様性や地域差、民具との類似性などが指摘されている。これは、現在の先史編物研究の一角をなす、民俗考古学的研究の先駆けであった。

1961年、大脇直泰氏は、押圧施文による圧痕を器面に有する九州地方の縄文土器（型取り技法によって作られた縄文土器）を「押圧文土器」と呼び、圧痕原体による分類をおこなった上で、その分布や所属時期について検討した。大脇氏は、この種の資料を「網目押圧文土器」・「蓆目押圧文土器」・「箆目押圧文土器」・「布目文土器」に分類し、各原体を網・ムシロ状編物・土器の型となったザル・平織の布として復元した。そして、その分布が九州地方に限られることや、時期が縄文時代晩期の黒川式期・山ノ寺式期に属する可能性を指摘した。

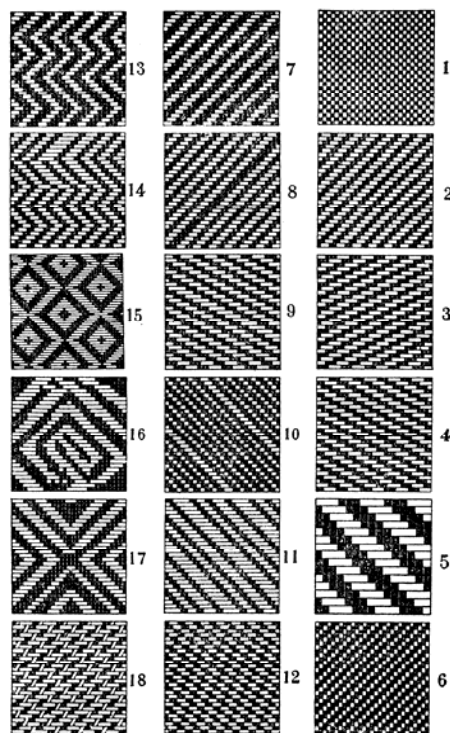


図2 坪井氏による網代圧痕原体の編み方復元（杉山 1928）

大脇氏の論考とほぼ同じ頃、鏡山猛氏が同様の資料を扱った三部作²⁾を發表している(鏡山 1961a・1961b・1962)。鏡山氏は、この種の有圧痕土器を「組織痕土器」と命名し、その圧痕を「蓆目」・「網目」・「布目」・「籠目」の4種類に分類した(図3)。そして、これらの圧痕が土器の型取り技法に起因したもので、東北部を除く九州地方に分布し、時期は縄文時代晩期黒川式期～原山式期に属するという指摘をした。分類・分布・時期に関しては大脇氏と大きな違いはない。しかし、鏡山氏の研究の主眼は日本列島における織布の起源にあり、その点で大脇氏とは一線を画す。40遺跡215点の圧痕資料が詳細に観察・計測され、平織の布が成立するに至った技術的背景について考察されている。特に「蓆目」(編布圧痕)と「布目」(織物圧痕)が重視され、織物が日本列島内で自生したものである可能性が指摘されている(編布は南島からの伝播を想定)。

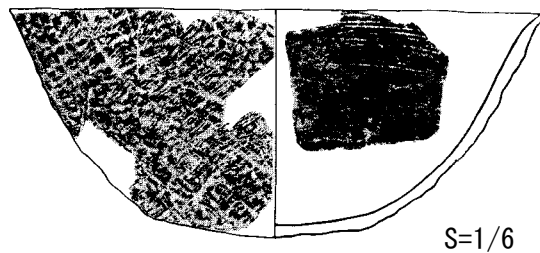


図3 組織痕土器の一例(蓆目)
※佐賀県女山遺跡(鏡山 1972)

1962年、角山幸洋氏は、弥生時代の織物研究における問題点をまとめ(角山 1962)、織物起源解明の手がかりとして縄文時代晩期の組織痕土器(網目圧痕・編布圧痕・平織圧痕)についても触れている。編物研究の視点から注目されるのは、編布の製作技法を具体的に推測している点である。角山氏は、編布を「経糸を上下2本の横木で固定し緯糸2本を組にして、右あるいは左か一方に捻りながら編」んだものと考えた。この技法は、実際にニュージーランドのマオリ族が用いているという。現在、編布は主に編み台と編み錘のセットを用いて製作されたものと理解されているが、別の復元案の存在も決して忘れてはならないだろう。

1964年、小林行雄氏は、『続古代の技術』(小林 1964)の中で、縄文時代から古代までの編物資料を実物・圧痕ともに技術的視点から整理した。本書中、編物は「網代」・「簀席編織」・「籠籠」・「隼人造籠」・「葛箱柳箱藺箱」の5項目に分けられ、各々詳細に解説されている。縄文時代や弥生時代の考古資料に関しては、先述の坪井氏や杉山氏らの研究も踏まえられており、坪井氏の網代編み表現方法や民具の編み方表現が適宜使い分けられている。そして先行研究を参考にしながら、各資料の編み方・器種・素材などの関係が技術的に考察されている。例えば、2本超え2本潜り1本送りをはじめとした筋違縞網代編みを最も基本的な網代編みとし、構造的に単純な簡単網代編み(1本超え1本潜り1本送り)よ

りも多用される理由を、柔軟ではない素材を用いた場合に2本おき・3本おきの方が並行する各条を密接させることができる点に求めるなど、その視点には学ぶべきところが多い。

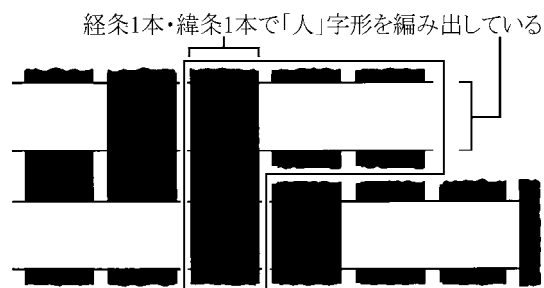
1966年、伊東信雄氏は、縄文時代の布とその製作技法について実物・圧痕両方から考察した。伊東氏は、縄文時代後期～晩期の遺跡から出土した布資料と、新潟県の民俗例の越後アンギン（織機を使わず編んだ布）との類似性に着目し、縄文時代の布は越後アンギンと同様の道具（編み台と編み錘のセット）によって製作されたものであると推測した。そして、綜紵を有する織機によって製作される織物と区別するために、縄文時代の布を「編布」（読みはあんぎん）と呼ぶことを提唱している。なお伊東氏は、編布の起源について、九州地方だけでなく東日本にも資料があることから自生的なものとしている。

1966年、額田巖氏は、編物の類を「Basketry」と呼称し、「硬直な材料と、柔軟な材料とを用いて、巻きつけ、すだれあみ、組合せ、掛け合せ、からげ、編み等の手法を用いて、四方に展開した組織」と定義した上で、世界各地の考古資料・民具資料の編み方・素材などについて検討した。同氏は、前年に日本・タイ・台湾の竹製民具を扱った論文（額田 1965）を発表していたが、それに世界各地の考古資料・竹以外の民具資料も加えて発展させたのである。この論文では、編物の各技法を「組合せ」・「まきつけ（巻きつけ）」・「すだれあみ」・「かけ合せ（掛け合せ）」・「からげ」・「あみ」に大別し、各々を適宜細別している。さらに額田氏は、編み方を最小単位の模式図（単位図形）で表示する方法と、トポロジカル（位相幾何学的）に円で表示する方法を考案し、その使用を提唱した³⁾。しかし、いずれの方法も単純化しすぎた図示法で、逆に元の編み方を想像しづらく、現在では使用されていない。しかし、世界中の資料に視野を向け、素材と編み方の関係や製品と編み方の関係について分析したというのは、重要な視点であった。

以上が、第1期における主な研究例とその成果である。編物研究の基本的な視点の多くがこの時期に示され、先史編物の諸特徴が大まかなながらも指摘されている。しかし、資料はまだ少なく、編物の地域差・時期差などを明確にするまでには至らなかった。

ちなみに、年代的には該期に含まれる1960年代、中国では浙江省銭山漾遺跡の実物資料と陝西省半坡遺跡の圧痕資料に対し若干の分類が試みられている。まず銭山漾遺跡（浙江省文物管理委員会 1960）では、新石器時代後期良渚文化に属する繊維製品（竹編物・草編物など）が多数出土しているが、特に200件以上出土したという竹編物が編み方によって分類されている。具体的には、「1経1緯人字紋」・「2経2緯人字紋（多経多緯含む）」・「梅花眼」・「菱形花格」・「密緯疎経十字紋」・「竹縄」の6種類であるが、それぞれ器種・

用途まで推測されている。一方、半坡遺跡（中国科学院考古研究所・西安半坡博物館 1963）では、新石器時代中期仰韶文化に属する土器底部の編物圧痕が、編み方によって分類されている。大別としては「斜紋編織法」・「纏結編織法」・「絞纏法」・「棋盤格或間格紋編織法」・「捲圈的編織法」の5種類であり、さらに斜紋編織法は「人字紋編織法」・「辮紋平直相交法」・「條帶式編織法」の3種類に細別されている。銭山漾遺跡・半坡遺跡とも、日本考古学とは異なった中国考古学独自の編み方分類・表現方法で実に興味深い。しかし、これらの分類・表現は一部（「〇経〇緯人字紋」という分類・表現方法：図4）を除き、以後ほとんど活かされていない。



〈 1経1緯人字紋の場合 〉

図4 中国の網代編み分類・表現方法
(松永 2003を改変)

第2期 1968（昭和43）年～1979（昭和54）年

荒木ヨシ氏による網代圧痕三部作（荒木 1968・1970・1971）の発表を画期として、第2期の始まりとした。この連作論文の発表以後しばらく、日本考古学における先史編物研究は、縄文土器底部の編物圧痕資料を中心とする傾向が強くなる。これは、第1期の坪井正五郎氏以来の流れを汲んだものであるが、縄文土器編年研究の進展⁴⁾と土器底部編物圧痕資料の増加を背景として、より詳細な検討がこの時期に可能となった。そのため、第1期において明確ではなかった地域差・時期差などが、少しずつ浮き彫りになってくる。

荒木ヨシ氏は、1968年から1971年にかけて、縄文土器底部の網代圧痕についての総合的な研究論文を発表した（荒木 1968・1970・1971）。これは、縄文土器研究の第一人者である山内清男氏の勧めを受けておこなわれた研究であるが、網代の編み方・利用法・素材などについて実に細かく分析している。特に編み方に関しては、坪井氏の分類を基にして46の型式（スタレ状圧痕も含む⁵⁾）に分類され（図5）、東日本を中心に各遺跡の統計データが示されている。分析資料のうち、最西端の静岡県蜷塚遺跡以外は11の型式（2本超え1本潜り1本送り）が多く、地域性を示唆する具体的データとして注目される。この荒木氏の研究の特徴は、編物技術の視点だけではなく、土器製作技術の視点からも考察されている点である。山内氏の影響もあろうが、回転具を兼ねた土器製作用敷物としての網代について、そのあり方や背景まで考察されている。そして、（1）土器の磨り消し技法が発達した時期

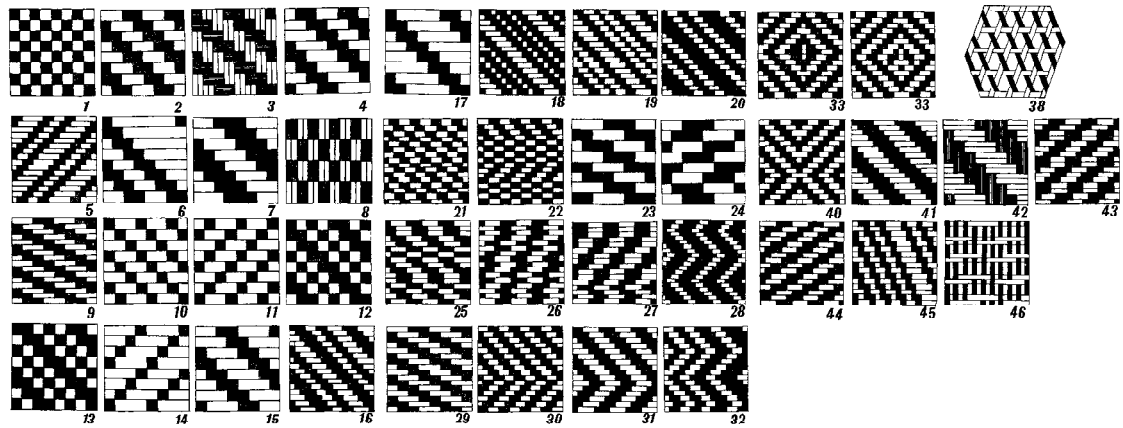


図5 荒木氏による網代編みの形式分類図表（荒木 1971）

に網代圧痕も磨り消されること、(2) 縄文時代後期に発達した模様編みは工芸的水準が高く二次的利用の可能性があること、(3) 網代編みの敷物と土器底部は胎土がかなり乾燥するまで密着していたこと、(4) 網代編みの大きさは竹（比較的細いもの）の節一杯くらいであったこと、(5) 同一の敷物の利用頻度はせいぜい2～3回程度であること、(6) 網代の編み方には地域差・時期差が認められること、が指摘された。荒木氏は、しばらく沈黙を守った後、1995年に全国的な資料集成に基づく研究成果を発表したが（荒木 1995）、1968年～1971年の三部作はそれ以上に画期的な論文であった。

1971年、安孫子昭二氏は、東京都平尾No.9遺跡の発掘報告（安孫子 1971）の中で網代圧痕の編み方を分析している。安孫子氏は、平尾No.9遺跡と周辺2遺跡の資料に、荒木氏のデータ（荒木 1970）を加えて考察をおこない、静岡県蜷塚遺跡付近を境界として西日本では2本超え2本潜り1本送りが基本的編み方であり、東日本では2本超え1本潜り1本送りが基本的編み方であるという仮説を導き出した。これは、荒木氏の研究を踏まえたものであるが、網代圧痕の東西差に一步踏み込んで言及している点ではより進歩的であった。

1970年、小笠原好彦氏は、縄文時代・弥生時代の布を取り上げ、その技術的側面や発展過程について分析した（小笠原 1970）。編物についていえば、第1期における鏡山氏・角山氏・伊東氏の研究成果を踏まえ、編布および組織痕土器（編布圧痕）の資料を整理している。それら編布資料の製作技法や布密度などが改めて検討され、織布との比較もおこなわれた。製作技法については、民俗例との関連性を重視して、伊東信雄氏同様の編み台・編み錘を用いるものが想定されている。小笠原氏は、編布の起源についても伊東氏に同調し、自生的な性格を持つものとした。布密度については、縄文時代晩期における編布の緯糸密度と織布の経糸密度に差があまりないことに着目し、その原因を紡績技術の水準の低

さに求めている。織布製作が編布製作を急激に凌駕できなかった原因も、同じく紡績技術の低さにあるとしており、興味深い指摘である。

1976年、渡辺誠氏は、編布圧痕と同じもじり編みの圧痕の一つであるスタレ状圧痕⁶⁾を全国的に集成し、原体となった編物の特徴や製作技法などについて詳細に分析した(渡辺1976)。同氏は、スタレ状圧痕と編布圧痕の条材間隔を比較し、緯条の間隔・太さ2～2.5mmを境に両者が分かれることを指摘した。この境界より数値が大きいものが、スタレ状圧痕である。そして、スタレ状圧痕と編布圧痕の差違を原体の差違によるものとし、製作技法には差違がないものとした。すなわち、スタレ状圧痕の原体も編布と同じ編み台と編み錘を用いて製作されたものと考え、その例証のために編み台・編み錘の民具資料を多数収集している。それら民具資料を細かく計測し、出土資料と比較した結果、もじり編みの製品が経条間隔によって3群(第1群:ハバキなど、第2群:カゴなど、第3群:ムシロなど)に分けられることや(スタレ状圧痕は第1群と第2群に対応)、編み錘の重量と製品群がある程度対応すること、縄文時代の編み錘として礫石錘が使われた可能性があることなどが指摘されている。この渡辺氏の研究は、数少ないスタレ状圧痕の総合的研究であると同時に、民俗考古学的な視点による研究としても注目すべきものであった。

また同年、角山幸洋氏は、縄文時代晩期における「編物」の組織について、織物起源解明の視点から分析をおこなった(角山1976)。角山氏がここで「編物」としたのは、主に編布や網といった糸材による編物のことである。それらを、出土資料・民具資料含めてA類:横編、B類:縦編、C類:縦横編の3種類に大別し、A類からB類、C類への展開を想定している。そして、縄文時代晩期の編物(出土編布・網および組織痕土器)には、A類d(結縛を伴う横編)とC類a(横編糸をもじるもの)が圧倒的に多いとした上で、特にC類aを織物に最も近い組織として重視している。C類に含まれる編布の製作技法については、第1期同様、マオリ族などと同様のものを想定し、その方が編物から織物への転換をスムーズに考えやすいとしている。ただし、日本列島における編物から織物への転換は連続的なものではなく、綜紵を有する織機(傾斜機)は中国から波及した可能性が指摘されている。

以上のように、第2期は主に編物圧痕資料の研究が進められた時期であった。圧痕以外では、編布の研究があるが、これは編物研究というよりも布の研究という性格が強い。もちろん布研究も重要であるが、先史編物研究としてはやはり、荒木ヨシ氏・安孫子昭二氏・渡辺誠氏による詳細な編物圧痕研究がこの時期を代表する成果といえよう。先にも述べたが、編物圧痕の地域差や時期差に分析の視点が及ぶようになったことが第2期における大き

な前進である。他の考古遺物同様に、編物資料にも様々な情報が内包されていることが認識され、それが第3期における多角的な研究へとつながっていくのである。

第3期 1980（昭和55）年～現在

植松なおみ氏の「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」（植松 1980）を画期として、以降現在までを第3期とした。該期においては、実物資料・圧痕資料ともに資料が充実したことによって、両者の比較研究や、民具資料との比較研究、実物資料を対象とした植物考古学的研究などが進められるようになった。また、第1期・第2期において常に研究対象とされてきた編物圧痕資料の視点がより細かくなり、地域や時期を絞って分析がおこなわれるようになる。なお、該期は野田真弓氏による鳥取県青谷上寺地遺跡の編物実物資料報告を画期（野田 2005）として、前半と後半に分けることも可能である。それは、この報告を期に容器としての編物、すなわちカゴ類の研究が多く発表されるようになったからである。以下、第3期前半、第3期後半の順に主な研究例を見ていくことにする。

第3期前半 1980（昭和55）年～2004（平成16）年

繰り返し述べるが、第3期前半は植松なおみ氏による出土カゴ類の研究（植松 1980）を始まりとする。植松氏は、縄文時代～古墳時代を中心として遺跡から出土したカゴ類および関連資料を集成し、各資料から得られる情報を整理した。カゴ類の研究資料は、直接資料（A：カゴ、B：編物）・間接資料（A：カゴ型土器、B：土器底部圧痕）・類推資料（A：土器の文様、B：有足土器、C：製作道具）に分けられ、それぞれの具体例が挙げられている。そして、各種資料の編み方や形態などが詳細に考察されている。地域差・時期差についても検討されており、縄文土器底部の網代圧痕の地域性や、弥生時代におけるザル目編みの顕著化などが指摘されている。また民具に用いられている多様な素材が挙げられ、素材研究の必要性が強調されている。この研究は基本的にカゴに主眼をおいたものであるが、編物資料が系統的にまとめられ、以後の研究の視点（地域的・時期的特徴、素材の種類など）が示されたという点できわめて重要なものであった。

また翌年、植松氏は、東北地方に多く見られる「丸みを帯びた厚みのある植物」を素材とした「質感の強い」網代圧痕に「東北型網代圧痕」の名称を与え、その分布や素材について検討している（植松 1981）。分布については北海道から鳥取県までの日本海側の多雪地帯（年最深積雪量50cm以上⁷⁾）に見られること、素材については蔓のような軟質の素材

であることが指摘されている。「竹類」のイメージが強かった網代の素材に、硬軟の違いがあることを明示し、さらに気候との関係まで視野に入れた卓見であったといえよう。

1981年、渡辺誠氏は、もじり編みの編み錘と見られる自然石・木製錘について考古資料と民具資料の比較研究をおこなった（渡辺 1981a・b）。これは、第1期におけるスタレ状圧痕研究（渡辺 1976）のうち、製作道具の部分を発展させたものである。各種錘具と製品との対応関係が、具体的な数値で示されている。また1982年には、弥生時代の釜を対象として、民具資料との比較をおこなっている（渡辺 1982）。弥生時代の釜の特徴として、（1）横型の釜であること、（2）編み方は錘具を用いない螺旋状のもじり編みであること、（3）もじり編みは先端部から編み始めていること、（4）素材が竹ではなく木質であること、の4点が指摘され、特に編み方と竹以外の素材との関係が重視されている。この「竹以前」の編物という視点は、後に「タケ・ワラ以前」（渡辺 1986c）という視点に発展し、同氏によるカゴ研究（詳細は後述）へとつながっていく。

1983年、川端敦子氏は、石川県内出土の縄文土器底部の圧痕資料（編物圧痕・葉脈圧痕）を集成し、一部資料の編み方や時期などについて検討している（川端 1983）。特に、もじり編みの圧痕であるカゴ底圧痕・スタレ状圧痕（編布圧痕含む）を取り上げ、それらが示す技術水準の高さや長期に渡る継続性などが指摘されている。なお、この論文発表以後、県規模の小地域を対象とした圧痕研究がしばしば見られるようになる。

1983年、小笠原好彦氏は、『縄文文化の研究』第7巻（小笠原 1983a）の中で、縄文時代の編物・布を網代・す（簀）・かご・網・編布・織布に分けて整理・概説している。論述の視点は編み方が中心であるが、細かい地域的・時期的特徴について多く触れられており注目される。また同年、『季刊考古学』第5号（小笠原 1983b）では、縄文時代～古墳時代における布（編布・織布）の生産と流通について概説している。こちらは、第2期からの自身の研究に、古墳時代の織物資料を加えてコンパクトにまとめている。

1985年、永嶋正春氏は、縄文時代の漆工技術について考えるための典型的漆製品資料として、東北地方の縄文遺跡から出土した籃胎漆器を取り上げている（永嶋 1985）。その主眼はあくまでも漆工技術であるが、胎となっている編物の編み方・素材についても詳細な観察がおこなわれている。特に、表皮圧痕や試料断面などから判断して、編物の素材をタケ類の割り材と推定していることは重要である。

1985年、村越潔氏は、青森県石郷遺跡から出土した籃胎漆器内表面の織物状圧痕をきっかけとして、東北地方北部の編物・織物を概観している（村越 1985）。編物については、

東北地方北部における編み方などの特徴や変遷が示されている。その中で、1本超え1本潜り1本送りの網代圧痕が多いことが該地の地域的特色である可能性が指摘されているが、これは植松なおみ氏のいう東北型網代圧痕と同じものである。

1986年、渡辺誠氏は、スタレ状圧痕や編み錘などを対象としていたもじり編みの研究をさらに展開させ、今度は編布に関する研究論文を発表している（渡辺 1986a）。渡辺氏は、編布の考古資料（出土編布・編布圧痕）だけでなく、民具資料（越後アンギン）・伝世資料（時宗阿弥衣）も収集し、各種の糸密度や糸間隔を詳細に計測・観察した。縄文時代の編布については、経糸間隔5.0mmを境に細密な編布と粗い編布に区別できることを指摘し、前者をアク抜き・水さらし技術との関係で重視している。縄文時代以外の先史考古資料としては、中国新石器時代や弥生時代の編布圧痕が紹介されており、それぞれの歴史的位置づけが示されている。なお同年、渡辺氏は、編物の素材について「タケ・ワラ以前」（弥生時代後期にタケ・ワラ製品が出現するよりも前の各種植物素材という意味）の視点を提唱したり（渡辺 1986c）、組織痕土器について詳細な計測に基づく分析をおこなったりしている（渡辺 1986d）。

1986年、岡元満子氏は、九州地方南部（鹿児島県および宮崎県南部）における縄文土器底部の圧痕資料を集成している（岡元 1986）。一般的な編物圧痕・葉脈圧痕に加え、九州地方特有の鯨椎端板圧痕も集成されており、各種圧痕の特徴や相互関係について考察されている。編物圧痕を有する土器資料に関しては、（1）早期から存在するが中期後半～後期前半に最も集中すること、（2）1本超え1本潜り1本送りが最も多く、もじり編みがかなり見られる点、変形綾編みが多い点など東日本とは異なること、（3）土器との密着性を重視した成形時の回転具の可能性があること、（4）中期後半から特定型式（岩崎下層式ほか）に伴うようになり、阿高式本流（鯨椎端板圧痕）からの離脱と関わる可能性があること、が指摘されている。なお近年（第3期後半）、同氏（前迫に改姓）は、前迫亮一氏と共同で同地域の縄文時代草創期・早期における圧痕集成を発表している（前迫・前迫 2006）。

1986年、長沢宏昌氏は、山梨県内の縄文時代前期末～中期初頭に属する同心円状の圧痕資料を集成し、カゴ底圧痕である可能性を指摘した（長沢 1986）⁸⁾。さらに1988年には、山梨県内の縄文土器底部の圧痕資料（編物圧痕・葉脈圧痕・縄文）を集成し、該地における時期的変遷を整理している（長沢 1988）。編物圧痕に関しては、網代圧痕の多い中期後半以降にスタレ状圧痕が見られないこと、後期～晩期を中心に2本超え1本潜り1本送りが圧倒的に多いこと、中期前半には2本超え2本潜り1本送りが主流をなす可能性あること、など

が指摘されている。

1988年、賀川光夫氏は、熊本県曾畑貝塚の発掘報告の中で、中国新石器時代の長江流域における編物実物資料について整理している（賀川 1988）⁹⁾。同氏は、河姆渡文化や良渚文化の編物について、曾畑貝塚など縄文時代遺跡の資料も参考にしながら遺跡ごとに概観し、編み方や素材の特徴を示した。特に竹編物が多いことについては、竹が該地において豊富で、低湿地帯における最適な素材であることが理由とされている。扱われた遺跡の数は少ないが、中国新石器時代の編物についてまとめた数少ない論考の一つである。

1988年、布目順郎氏は、自身による出土布観察の成果をまとめた『絹と布の考古学』（布目 1988）を刊行した。観察の中心は弥生時代以降の絹と布であるが、それ以前の資料として、編布をはじめとする縄文時代の編物資料についても触れられている。繊維学の専門家ならではの視点で、特に素材について詳細に観察・同定されている。同氏はその後も積極的に繊維遺物資料の調査を続け、1992年には『目で見える繊維の考古学』（布目 1992b）として資料集成を刊行している。

1989年、山本直人氏は、石川県内のカゴ資料（縄文時代・弥生時代を主とする出土カゴ類・カゴ底圧痕）を集成し、編み方や素材について分析している（山本 1989）¹⁰⁾。山本氏は、それ以前から同県内の出土カゴ類やカゴ底圧痕の資料を積極的に収集・観察していたが（山本 1985・1986a・1986b・1987）、これはそれらの総合的成果である。特に、出土カゴ類の素材については、ワラ・タケ以外のヒノキ・マタタビが使用されていることを重視し、石川県内におけるヒノキ笠・コツラ（マタタビ）細工の民俗学的聞き取り調査も実施している。そして、同県内でヒノキ・マタタビ製のカゴ類や編物の製作が発達した理由を、湿気の多い積雪地帯の気候条件に求めている。これは、ヒノキ笠・コツラ細工が12月～3月を中心に製作され、編む際に水気を必要とすることと整合的な解釈である。出土資料の分析に植物学・民俗学的成果も合わせることにより導き出された重要な知見である。

1990年、秋田かな子氏は、縄文土器底部に見られる二重・異方向の編物圧痕を根拠として、「中央詰め込み技法」の存在を推測した（秋田 1990）。これは、編物の上に置かれた環状の粘土紐の中央に、別の編物の上で整形された円板状の粘土帯を詰め込むことにより、中央部と周辺部に異方向の編物圧痕が残されるというものである。近年（第3期後半）この解釈は、製作途中の土器を敷物から持ち上げて再度置く「再置・再圧」に修正されたが（秋田 2006・2008）、いずれにせよ、編物そのものではなく圧痕の残され方に着目している点で興味深い研究である。

渡辺誠氏は、1990年代に入り、より一層研究を進めている。同氏の研究論文は実に多いので、ここで1990年代発表分をまとめて見ることにする。まず1991年には、組織痕土器研究の問題点を整理し、その研究の方向性について検討している（渡辺 1991b）。各種組織の解明とともに、組織痕土器（型取り技法による浅鉢）が九州地方で発達した理由の解明の重要性が説かれた。1992年には、縄文時代の編布から越後アンギンまでの変遷について検討し、起源・画期などの問題を指摘している（渡辺 1992）。1994年には、縄文時代～古墳時代の編物容器（カゴ・笥・箕）を取り上げ、編み方・形態・素材などについて検討している（渡辺 1994）。縄文時代と弥生時代の編物容器の違いとして、弥生時代に箕・笥の形態やタケ素材、コイリング技法（巻き上げ編み）が登場することが挙げられている。1995年には、河北省磁山遺跡から出土した中国新石器時代前期のもじり編み圧痕の詳細な観察がおこなわれている（渡辺 1995）。その結果、（1）編布圧痕の方がスタレ状圧痕より多いこと、（2）粗い編布の方が細密な編布よりも多いこと、（3）粗い編布は全て、経糸を1本おきにずらして緯糸を2本ずつ編んでいること、（4）編布のヴァリエーションとして擬似平織が含まれていることが明らかにされた。特に擬似平織は、編布から平織への発展過程を示していると見られ、注目される。1996年には、マタタビ製のカゴ類の民具集成を示すとともに、東北型網代圧痕との質感・分布の共通性を指摘している（渡辺 1996）。これは、以前より同氏が提唱する「タケ・ワラ以前」の視点に基づくものであり、1999年にはタケ・ワラ以外の素材による編物の集成が示されている（渡辺 1999）。

1995年、荒木ヨシ氏は、縄文土器底部の圧痕資料について、全国的な資料集成に基づく研究成果を発表している（荒木 1995）。荒木氏は、編物圧痕の編み方に当時の地域集団が反映されているものと考え、各種編み方の地域差・時期差を検討した。その結果、東北地方北部（青森県）の1本超え1本潜り1本送りに代表される部族集団が、分派しながら九州地方南部（鹿児島県・宮崎県）に西南下したという解釈が示されている。編み方の地域差・時期差を動的に捉えた、独創的な解釈である。

1996年、尾関清子氏は、生活文化史の視点から縄文時代の編布についてまとめている（尾関 1996）。尾関氏は、縄文時代の出土編布や編布圧痕を詳細に観察し、編布が編み目の単純な「基礎編布」と編み目の複雑な「応用編布」に区別できることや、編布圧痕の中に返し縫いのような刺繍を施したと思われる資料が存在することなどを指摘した。同氏の研究の大きな特徴は、実験考古学的な検証をおこなっている点である。編み方や製作道具について様々な試作実験がおこなわれ、考古資料と同じ組織の編布が復元されている。製作道

具に関しては、編み台・編み錘（「編布法」）以外にも、弓状編み具（「横編法」）が用いられた可能性が指摘されている。編布法・横編法ともに平織の布が製作可能であることが実証されており、編みと織りの転換を考える上で興味深い知見である。

1997年、鐘方正樹氏・角南聡一郎氏は、いわゆるカゴ型土器（弥生時代後期末～古墳時代後期に見られる、器面にカゴ圧痕を有する土器、図6）を「籠目土器」（土器外面にカゴ圧痕が残されるもの）・「笊形土製品」（土器内外両面にカゴ圧痕が残されるもの）に二分し、それぞれのあり方について分析している（鐘方・角南 1997）。製作技法や出土状況などを検討した結果、前者は、型取り技法に伴う圧痕を器面に有するだけで、機能的には一般的な土器と同様のものと推測されている。一方、笊形土製品は、供献用のザルを模した、古墳上の祭祀儀礼に関わるものと推測されている。

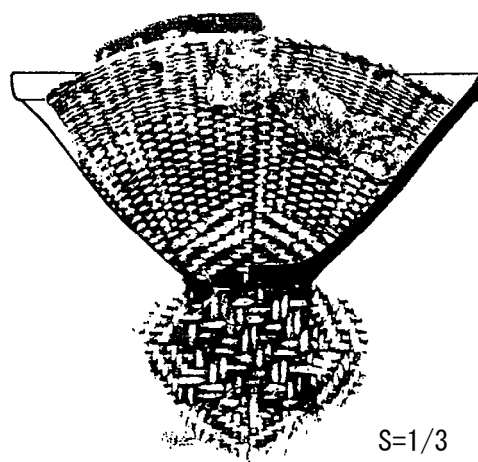


図6 カゴ型土器の一例（籠目土器）
※大阪府国府遺跡（末永 1935）

1998年、名久井文明氏は、縄文時代の編物資料と民具の編物資料を比較し、両者の技術の共通性を明示した（名久井 1998）。「網代組み」（網代編み）の広域性・継続性、「縄目編み」（もじり編み）の広域性・継続性、「底部製作先行の原則」などが指摘され、縄文時代の編物技術が近現代まで連綿と受け継がれてきたことが強調されている。同氏の縄文時代遺物と近現代民具を結びつける視点は、編物以外の樹皮製品にも向けられており、1999年には樹皮製品・編物の考古資料・民具資料を総括した『樹皮の文化史』（名久井 1999）として一冊の本にまとめられている。

1998年、東和幸氏は、鹿児島県内の組織痕土器を集成した上で、型取り技法によって作られた理由や土器としての具体的な用途について検討している（東 1998）。同氏は、組織痕土器が型取り技法によって作られた理由を、浅鉢という器形に求めた。また用途については、雑穀類を炒るための加熱調理具を想定している。編物そのものの研究ではないが、布圧痕に偏重しがちな組織痕土器研究においては大切な視点である。

1999年、田代己佳氏は、網代圧痕の記録方法・観察方法・表現方法について、基本的なルールを確認・提示している（田代 1999）。網代の組織に関しては、経条・緯条が構成する編みパターンの最小単位を「完全組織」と呼び、理論上の組織図・模式図60種を図示し

ている。さらに、モデリング（型取り）の方法や完全組織以外の観察方法についても触れられており、網代圧痕観察の基本が一通りまとめられている。

2001年、篠原浩恵氏は、栃木県内から出土した縄文土器底部の圧痕資料（縄文や木の実圧痕なども含む）について、予察的研究を発表している（篠原 2001）。篠原氏は、各種圧痕の種類を整理した上で、縄文施文（前期中葉まで）→縄文の簡略化（前期後葉）→定形的な網代の採用（中期後半前段階まで）→規則性の払拭（後期前葉）という変遷を想定し、環状集落の消長と対比させて捉えようとした。この予察を検証するために、少数ながら具体的な資料の観察がおこなわれており、概ね近似した様相が抽出されている。

2002年、東京都立大学人類誌調査グループ（岩瀬彬氏・大谷稚歌氏・岡田賢氏・加藤亜希子氏・佐々木由香氏・西山幸恵氏・藤代美津子氏・山田昌久氏ほか）は、岐阜県宮川村の編物を対象とした民具資料調査の成果を発表している。その内容は実に広く、民具資料のデータベース化と概観（佐々木・西山 2002）、考古学における編物の定義や表現の整理（加藤・佐々木 2002）、民具資料調査に際しての編物分類の提示（藤代 2002）、民具の編物素材の観察（岡田 2002）、ダイアミ製品（編み台・編み錘を用いたもじり編みによる製品）の計測調査（大谷 2002）、六ツ目編みの構成要素による器種推定（岩瀬・佐々木 2002）といった多岐に渡っている。編物の諸要素について、考古資料よりも確実に分かる民具資料を用いて検討しており、編物のあり方を考える上で注目される。

2003年、渡辺誠氏は、編布圧痕を有する砂鉄含有塊状物質を取り上げ、その性格について検討した（2003a）。同氏は、一つの可能性として、黒漆の顔料としての砂鉄が、編布に包まれて交易品にされていた可能性を指摘している。ただし民族例から、シャーマンが火にくべた可能性も残されている。また同年、きわめて軟らかい素材を緻密に編んだと見られる網代圧痕の例を紹介し、その技術水準の高さを指摘している（渡辺 2003b）。渡辺氏は、この「もっとも細かい」網代圧痕を織物と誤認してしまう可能性を指摘するとともに、縄文時代における「織り」の存在を否定している。当該資料は、岐阜県飛騨地域のみで確認されており、限られた地域の特産品である可能性も指摘されている。

2004年、名久井文明氏は、編物の技法を「組む」と「編む」の2種類に分け、その違いを断面図によって示した（名久井 2004）。同氏は、編物の各種技法を現代竹工芸（大分県別府産業工芸試験所 1991・1992）の呼称に即して整理し、縄文時代における各種技法の具体例を挙げている。さらに、縄文時代遺物と同じ技法による近現代民具も例示されており、両者の連続性が改めて強調されている。

さて、筆者はこの第3期前半の終わり頃から研究活動を開始し、ささやかながら土器底部の圧痕資料（「敷物圧痕」＝土器製作時に使用された敷物の圧痕）についての論文を発表している。2003年には、『中国考古学』第3号誌上で、中国新石器時代の「敷物圧痕」について土器製作技術・編物技術両方の視点から分析をおこなった（松永 2003）。編物技術に関しては、新石器時代前期から中期にかけて編布圧痕から織物圧痕への転換が見られる一方で、全時期を通じて2本超え2本潜り1本送りをはじめとする網代圧痕が見られることを指摘し、その理由を網代編みの編みやすさなどに求めた。また、網代圧痕の素材に南北差があることを指摘し、植生（特にタケササ類の分布）との関係を想定した。翌年には、『金沢大学考古学紀要』第27号において、東アジア先史土器（縄文土器・中国新石器時代土器）の「敷物圧痕」をA～H類の8種類に分類する案を発表した（松永 2004）。A類：網代圧痕、B類：もじり編み圧痕、C類：織物圧痕、D類：巻き上げ圧痕、E類：葉脈圧痕、F類：ホタテ貝圧痕、G：鯨椎端板圧痕、H：その他である（詳細は後述）。これらのうちA～D類が編織物圧痕で、さらにC類を除いたものが編物圧痕である。

以上の第3期前半における研究を、年代ではなく視点別にまとめてみると、大きく5つに分けることができる。すなわち、（1）カゴ類を中心とした実物資料の研究（植松氏・渡辺氏・小笠原氏・永嶋氏・賀川氏・山本氏）、（2）編布の研究（小笠原氏・渡辺氏・布目氏・尾関氏）、（3）民俗考古学的研究（渡辺氏・山本氏・名久井氏・東京都立大学人類誌調査グループ）、（4）県など小地域に分析対象を絞った圧痕研究（川端氏・村越氏・岡元氏・長沢氏・東氏・篠原氏）、（5）上記以外の視点による編物圧痕研究（植松氏・渡辺氏・秋田氏・荒木氏・田代氏・鐘方氏・角南氏・筆者）である。もちろん、これらはあくまでも研究の主眼によって分けたもので、個々の研究の内容はそれほど単純ではない。しかし、該期の編物研究の視点はこれら5つを基本としており、次の第3期後半においても概ね受け継がれている。

第3期後半 2005（平成17）年～現在

第3期後半は、野田真弓氏による鳥取県青谷上寺地遺跡の編物実物資料報告（野田 2005）を始まりとする。この報告が発表されて以降、カゴなど編物容器への注目度が増し、研究が盛んに進められている。

2005年、野田真弓氏は、鳥取県青谷上寺地遺跡から出土した編物資料を基礎資料として、弥生時代をはじめとするカゴ類の編み方・形態・素材などについて詳細に分析した（野田

2005)。同氏は、青谷上寺地遺跡のカゴの諸特徴（口縁部正円形・底部正方形で外傾する鉢形が多い、底部は経条・緯条2本1組の2本超え2本潜り1本潜りが多い、体部は1本超え1本潜り1本潜り・2本超え2本潜り1本潜りが多い、口縁部部にヨコ添えもじり編みを使用される、など）に、北陸地方との共通点が多いことを指摘し、その理由を素材（マタタビ）に求めている。それ以外にも様々な特徴が抽出・分析されており、カゴ類の総合的研究として特筆される。また同報告では、バスケットリー作家の本間一恵氏によって同遺跡のカゴの復元が試みられており、その過程で出土カゴ類に特殊な技法（経条・緯条を交差させ、それに別の条材を2本単位で絡め巻くもの）が見られることが明らかにされている（本間2005）。本間氏は、この技法に対し「ヨコ添えもじり編み」の名称を与えている。

2005年、安藤広道氏は、縄文時代・弥生時代の繊維製品（布・糸・縄など）を、7グループに分けて整理した（安藤2005）。具体的には、1：繊維製品そのもの、2：繊維製品の圧痕など、3：製作道具、4：繊維製品がないと機能しないもの、5：繊維製品がないと生産できないもの、6：人形・絵画などの表現、7：原材料など自然遺物、である。そして、この分類に基づき、各種資料の具体例を概観している。

2005年、松浦宥一郎氏は、中国古代の紡織技術と紡織品（布類）について、商代以前、商代、周～漢代の順にまとめている（松浦2005）。本論に関わるのは商代以前であるが、土器底部の編布圧痕などについて触れられている。

2005年、東京都立大学人類誌調査グループは、2002年に引き続き民具資料調査の成果を発表している。今度は、編物の素材差と機能差についての分析（岡田2005）や、フジカゴ製作についての聞き取り調査（藤代2005）の成果が示された。前者においては、岡田賢氏によってコツラ（マタタビ）・ヤマダケ（ネマガリダケ）の特徴とショウケの機能との対応関係が指摘されている。後者においては、藤代美津子氏によってフジ（クズ）の採集・加工・乾燥などの聞き取り内容が細かく報告されている。

2006年、渡辺誠氏は、弥生時代における藁細工の発達を考古資料（編み錘・編み台・ヨコツチ・台石）から検討し、稲作文化の発展における縄文文化の重要性を確認・強調している（渡辺2006a）。また同年、熊本県上南部遺跡出土の組織痕土器を細かく観察し、網代・網・編布の組織について検討している（渡辺2006b）。

2006年、佐々木由香氏は、縄文時代のカゴ類（割裂き木部材・蔓・草を素材とする「編み組み加工容器」）について情報を整理し、そのあり方を考察した（佐々木2006b）。佐々木氏は、自身が参加した東京都立大学人類誌グループの調査成果も踏まえつつ、素材・

技法・出土状況を基に利用法を検討している。特に、素材については植物考古学的な視点から考察がおこなわれ、植物の種類や分布、技法との関係が示されている。この素材を軸に編物のあり方を見るという視点は、編物実物資料を考える上で重要である。

2006年、東和幸氏は、九州地方南部の縄文時代の編物について、鹿児島県内出土縄文土器の編物圧痕の観察から復元を試みた（東 2006）。編物の編み方だけでなく素材についても検討され、竹以外の柔軟な素材が用いられた可能性が指摘されている。また、九州地方南部における縄文土器の文様についても検討されており、そのモチーフがカゴなどの編物である可能性が指摘されている。

2006年、筆者は、縄文時代中期中葉馬高式期の編物技術について、「敷物圧痕」を中心に検討した（松永 2006）。縄文時代中期の実物資料や全国的な圧痕分布も参考にしながら考察したところ、技術水準の高さや地域的・時期的特徴が浮かび上がった。

2007年、尾関清子は、鹿児島県の縄文時代草創期・早期に属する編布様の圧痕を観察し、その組織の復元をおこなっている（尾関 2007）。その結果、観察資料がいずれも一般的なもじり編みとは異なる組織であることが示され、その組織・技法に「絡み巻き」の名が与えられている。これは、青谷上寺地遺跡で設定された「ヨコ添えもじり編み」と同一あるいは同類であり、その最古級資料ということになる。尾関氏は、さらに組織・技法についての考察を深め、絡み巻きから基礎編布への移行を想定している。

2007年、北田勲氏・平野祐氏は、岩手県内出土縄文土器底部の編物圧痕資料を集成している（北田・平野 2007）。両氏は、編物圧痕を編み方によって21分類30通りに分け、各種の統計をとった。結果、岩手県全体では1本超え1本潜り1本送りが主体であり、2本超え1本潜り1本送りがそれに次ぐこと（内陸南部ではこの種が主体）が確認されている。また、前期末～中期前葉を画期として、多様な編み方が出現することが指摘されている。

2008年、柳原梢子氏は、縄文時代のカゴ資料を全国集成し、出土状況や編み方について検討した（柳原 2008）。同氏作成の一覧表に基づいて、地域や時期によって出土状況に偏りが見られることや、広義の網代編みともじり編みに分布の偏りが見られることが指摘されている。近年注目されている佐賀県東名遺跡の資料については、1章を割いて別に取り上げられており、編物の種類や帯部のあり方について観察所見が示されている。

2008年には、筆者も複数の論文を発表している。筆者はまず、『考古学雑誌』第92巻 第2号において、縄文土器底部の「敷物圧痕」を土器製作技術・編物技術の視点から分析した（松永 2008a）。全国的な集成データを基に「敷物圧痕」の地域的特徴・時期的特徴およ

び縄文時代を通じての共通点を抽出し、その背景について考察した。編物技術に関しては、主に編みやすきや素材との関わりを指摘している。『総覧 縄文土器』では、その成果を踏まえ、土器製作用敷物を主眼においた形で「敷物圧痕」を概観した（松永 2008b）。さらに『縄文文化の胎動』では、縄文時代草創期の編物圧痕などを手がかりに、該期の編物技術がある程度の水準に達していたことを推測した（松永 2008c）。

2009年、名久井文明氏は、「網代組み」の類（「網代組み」・「柵網代組み」・「連続柵網代組み」）を取り上げ、縄文時代から近現代までの技術的連続性を指摘している（名久井 2009）。この論考では、特に「網代」の定義づけに重点が置かれた。坪井正五郎以来、日本考古学で扱われてきた「網代」の問題点（概念・分類など）が指摘され、民具の技法名に基づいて技法を表現する必要性が説かれている。

2009年、黒沼保子氏は、縄文時代から近世までの編物資料を全国集成し、素材の視点から分析をおこなった（黒沼 2009）。特に木本割裂き材が重視され、草本や竹類と比較しながらその利用のあり方が検討されている。本論に関わる場所では、縄文時代・弥生時代に木本が多く使用されていることや、縄文時代に針葉樹類（日本海側）・広葉樹類（九州地方）が多いこと、弥生時代以降に広葉樹類が急減し竹類が増加すること、縄文時代と弥生時代の差は素材ではなく用途の変化に見られること、などが指摘されている。

2010年、筆者は、新潟県正面ヶ原A遺跡出土土器底部の編物圧痕の性格を理解するために、縄文時代後期～晩期の編物技術について検討した（松永 2010）。実物資料・圧痕資料両方から該期の編物を見たところ、様々な特徴が明らかになった。続いて2011年には、津南町教育委員会主催のシンポジウム「植物繊維を「編む」」の予稿集¹¹⁾において、縄文時代の編布を出発点として、日本列島先史時代の編物について主に技術的な視点からまとめている（松永 2011c）。

2011年、堀川久美子氏は、縄文時代から室町時代にかけてのカゴ類を集成し、素材や技法の時期差・地域差などについて分析した（堀川 2011）。分析の結果、東北地方や関東・甲信越地方付近にタケササ類のカゴ類が多く、西に向かうにつれそれ以外の素材が多用されることや、北陸地方を除き広義の網代編みが多いこと、地域ごとの素材にあった技法が定着するとともに技法に合った素材が選択されている可能性があること、などが指摘されている。また、タケ類・ワラ類の導入時期についての従来の説を出土資料から検証し、いずれも画期が明確ではないことを明らかにした。

そして、現在に至る。これら第3期後半の研究を、第3期前半における研究視点による分

類に当てはめれば、(1) カゴ類を中心とした実物資料の研究(野田氏・本間氏・佐々木氏・柳原氏・黒沼氏・堀川氏・筆者)、(2) 編布の研究(安藤氏・松浦氏・渡辺氏・尾関氏・筆者)、(3) 民俗考古学的研究(東京都立大学人類誌調査グループ・渡辺氏・名久井氏)、(4) 県など小地域に分析対象を絞った圧痕研究(東氏・前迫(岡元)氏・前迫氏・北田氏・平野氏)、(5) 上記以外の視点による編物圧痕研究(秋田氏・筆者)となろう。

問題の所在

これまで見てきたように、日本考古学における先史編物研究は約130年もの長い歴史を持ち、第1期が約90年、第2期が約10年、第3期が約30年(うち第3期前半は約25年)に分けることができた。このような時期幅に波があること自体、編物研究の特徴といえるかも知れない。特に、基礎作りを主とした第1期の長さは、編物の研究が進みにくいことを示しているのであろう。そしてある種の資料が蓄積した時に、それを分析対象とした画期的な論考が発表され、それに追随して研究が進むというパターンが繰り返されている。

さて、現状把握のために研究史を詳しく見たが、様々な研究視点があり、多くの成果が上げられていることが分かったことと思う。しかし、その一方で、二つの問題点が存在することも指摘できる。

一つは、カゴ類・編物圧痕・編布など、資料の種類別に研究が進められており、他の編物資料との比較が十分ではないことである。資料ごとには、ある程度の地域差・時期差を抽出したり、組織を復元したりできるほどに研究が深まってきているが、他の編物資料との関係はあまり触れられていない。しかし、編物技術は各器物に対して別個に発展したわけではなく、相互に影響しながら発展したはずである。編物技術の発展を体系的に捉えるためには、各種資料の情報を束ねた総合的な研究が必要であろう。

もう一つは、日本列島内の資料のみを扱ってばかりで、近隣地域の状況にほとんど目が向けられていないことが挙げられる。もちろん、これまでの研究の中に、海外の考古資料や民族資料に目を向けたものが全くなかったわけではない。しかし、参考資料程度にとどまるものがほとんどで、広域的な分析を試みた例は数少ないのである。筆者はこれまでに東アジアの「敷物圧痕」を対象として分析を試みたことがあるが(松永 2003・2004)、日本列島の資料と近隣地域の資料とを比較することに十分意義があることを感じた。もちろん、近隣諸国の中で先史編物研究が進んでいるのは日本考古学だと思うが、その成果を踏まえて東アジア全体を見てはどうだろうか。きっと、日本列島・中国大陸・朝鮮半島それ

ぞれの特色が浮き彫りになるはずである。

これらの問題点を踏まえ、次節で本論の研究の目的と方法を明示することにした。

第2節 研究の目的と方法

前節で、日本考古学における先史編物研究の成果と問題点を確認した。本研究の目的は、それらを踏まえた上で、「新石器文化段階を中心とした東アジア先史時代における編物の製作・使用の実態を明らかにすること」である。

冒頭でも述べたように編物は、衣食住その他、人間生活のあらゆる分野に関わる基本的な生活道具の一つである。現代では化学製品などの代替品が増えたために、若干影を潜めたような感があるが、自然素材に依存していた先史時代においてはその重要度はかなり高かったものと推測される。近年の調査・研究の成果に基づいて少し具体例を挙げれば、衣については編布による衣服（断片資料からの推測）があり、食については採集食物の運搬・貯蔵用の容器類（カゴ・編袋）や網・釜などの漁具、住については住居の敷物や壁材が良い例である。その他にも、土器製作用の敷物、漆漉し用の編布、石材収納用の容器など、多岐に渡る使用が想定され、まさに先史時代の生活必需品として位置づけられるのである。

このように、生活のあらゆる分野に渡って利用されている編物の実態を明らかにすることは、東アジア先史時代の生活復元に少なからず有意義な貢献ができるものと考えられる。考古学的研究の多角化・精密化により、近年はかなり実態に即した生活復元ができるようになってきたが、それでも未解明な部分は少なくない。そのような考古学的生活復元の空白を、編物研究を通じて少しでも補完したい。

東アジア先史時代における編物の研究は、近年動きがあるとはいえ、他の遺物よりも遅れ気味の感があった。考古学的研究の基本である型式分類や編年なども、未だに不十分な状況である。そんな中、低湿地遺跡などの調査の増加で資料がある程度蓄積・充実してきた今こそ、情報を整理し、編物利用の実態について考える良い機会ではないだろうか。

ところで、本論の分析対象地域および時代を「（新石器文化段階を中心とした）東アジア先史時代」に設定したのは明確な理由がある。

第一に地域設定の理由であるが、日本列島・中国大陸・朝鮮半島の編物には、現代においても共通ないし類似する部分が多いからである。各地の編物を見ると、東アジア圏内の差違は比較的小さく、編み方や素材に共通点・類似点がよく見られる¹²⁾。そのような共通性・類似性は、過去に遡っても同様に認められる可能性が高い。編物以外の文化的要素

においても、日本列島・中国大陸・朝鮮半島の東アジア地域には共通点が多く、先史時代の遺構・遺物の形態的特徴や組み合わせを見ても似たところが多い。そこで、東アジアという大きな括りの中で、小地域間の共通点と相違点を抽出することにより、東アジア各地の編物製作・使用の特徴と背景を明らかにすることができるのではないかと考えたのである。そのため、本論の分析対象地域を日本列島・中国大陸・朝鮮半島を合わせた東アジアに設定した。

第二に時代設定の理由であるが、先にも述べたように先史時代には代替品が少なく、現代よりも編物の重要度がかなり高かったことが推測されるからである。先史時代においては、生活のあらゆる場面において編物が多用されていたものと考えられ、編物研究の意義が最も大きい時代として位置づけられる。将来的には、近現代民具までを含めた通史的な研究をおこないたい、まずは編物が生活に最も密着して活用されていたと見られる時代の状況を明らかにすべきであると考えた。そのため、本論の分析対象時代を先史時代に設定した。ただし、金属器の登場により編物製作に変化がもたらされた可能性があるため、本論では先史時代の中でも新石器文化段階を中心に分析することとし、金属器出現以降の編物は主に比較資料または参考資料として扱うことにした。

以上の理由により、本論では、新石器文化段階を中心とした東アジア先史時代の編物を分析対象とし、その製作・使用の実態を明らかにすることを目的とする。

続いて、この研究の目的に対する方法について述べることにしたいが、その前に研究対象について明確にしておこう。すでに述べたように、研究対象は新石器文化段階を中心とした東アジア先史時代の編物である。ここでいう編物とは、「細長い植物素材を組んだり絡めたり巻き上げたりして平面的ないし立体的に形成した器物」のことを指す。具体的には、網代編みやもじり編みなどの技法によって製作されたカゴ・編袋・籃胎漆器・箆・箕・敷物・編布・網などのことである。先行研究をいくつか参照すれば、研究史第1期における額田巖氏の「Basketry」（額田 1966）や、第3期前半における小笠原好彦氏の「編物」（小笠原 1983a）、名久井文明氏や東京都立大学人類誌調査グループの「編組製品」（名久井 1999、佐々木・西山 2002、加藤・佐々木 2002ほか）、第3期後半における野田真弓氏の「編み物」（野田 2005）、などとほぼ同じものである。さらに考古学ではないが、『文化人類学事典』において吉本忍氏が「編物」（吉本 1987）としたものもほぼ同じである。ただし本論では、網・編布を含めることや織物・組紐を含めないこと（参考資料とすることはある）で、若干のずれ・違いはある。なお、様々な用語がある中で筆者が「編物」と

いう語を選んだのは、この語が（送り仮名付きの「編み物」も含め）古くから最もよく使われており、また当該資料が網代編みやもじり編みなどによって「編んだ物」だからである（筆者は「編む」の中に「組む」や「絡める」、「巻き上げる」などが含まれると認識している）。送り仮名を付さないのは、「織物」と対比的に用いるためである。さらに、中国の浙江省銭山漾遺跡（浙江省文物管理委員会 1960）の報告中で用いられている「竹編物」・「草編物」や、韓国の慶尚南道飛鳳里遺跡（任・李・金 2008）の報告中で用いられている「편물（編物）」のように、「編物」の語は日本以外の漢字文化圏においても通りが良いように思う。近年、日本考古学では「編組製品」という語を使用する例が増えてきているが、土製品・石製品・木製品・骨角製品・金属製品のように、考古学において「○○製品」という場合、○○の中には原則として素材名が入るのであり、その点で「編組」という技法名が入る「編組製品」は違和感があるため使用できない（総称的な「編む」と個別的な「組む」を並べた「編組」という語にも違和感がある）。筆者は、植物製品（あるいは木製品・繊維製品など）の中に、その一種として編物という遺物があるものと理解している。

これら編物の考古資料としては、カゴや敷物などの実物資料だけでなく、土器器面に残された圧痕資料も研究対象となろう。編物の実物が遺存しにくいため、足りない情報を間接資料で補う必要があるからである。そのため、土器底部の編物圧痕や、組織痕土器、カゴ型土器なども検討の対象に含まれてくる。しかし、約130年間、別個に研究が進められてきた各種編物資料を、筆者が一人で全て網羅することはきわめて困難である。そこで本論では、特に編物の実物資料と土器底部の編物圧痕資料を基本的な研究対象とし、それらに参考資料として組織痕土器やカゴ型土器などの情報を適宜加えることにしたい。

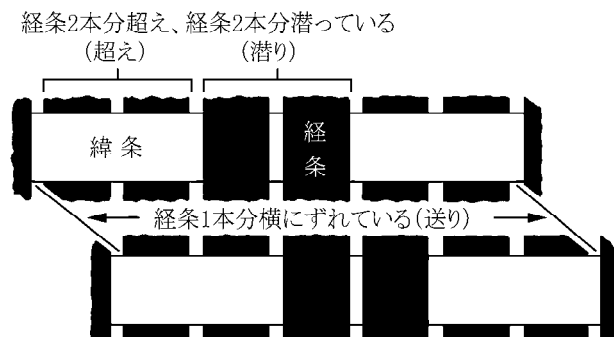
それでは、前置きが長くなってしまったが、具体的な研究方法について述べることにしよう。実物資料・圧痕資料それぞれ有する情報が異なるため、両方を一様に扱うことはできない。そのため、まずは実物資料の研究方法について述べ、続いて圧痕資料の研究方法について述べることにする。

実物資料については、編み方・器種（形態および機能）・素材の三つが最も基本的かつ重要な要素である。先行研究でもしばしば指摘されてきたように、編み方・器種・素材には相関関係があり、それが編物および編物技術のあり方に直接結びついているものと思われる。例えば、ある器種を製作するために適した編み方・素材が選択されるということも想定できるだろうし、生活圏内で入手できる素材の制約（植生）によってそれに合わせた

編み方・器種が生まれたということも想定できるだろう。そこで本論では、各遺跡出土資料の編み方・器種・素材を、地域・時期によって整理し、そこから抽出された情報をもとに三大要素の相関関係について検討するという方法を基本とする。そうすることによって、ある地域・ある時期の編物および編物技術のあり方が浮かび上がってくるはずである。もちろん三大要素だけでなく、資料の出土状況・共伴遺物などの諸情報も勘案し、さらに植物考古学や民俗考古学の成果なども取り入れながら、できる限り編物の実態に近づく努力をしたい。

ところで、編み方・器種・素材が三大要素だとはいったが、研究対象が「編」物である以上、最も重視されるのは編み方（技法）である。先行研究においても、編み方を扱わない研究はほとんどない。しかし、各種編み方の定義や表現については、研究者間の相違が少なからず見られる。このことは、しばしば指摘されているのだが、特に面を形成する編み方についての違いが大きい。そこで、本論における面形成の編み方の定義と表現について、明示しておきたい。先行研究を踏まえた上での筆者の考えでは、面を形成するための編み方は、「網代編み」・「もじり編み」・「巻き上げ編み」の3種類に大別できる。以下、各種の技法について解説する。

網代編み：条材を縦・横・斜めに単純交差させる編み方である（図8-1～15）。これをおこなう動作は「編む」だが、他の編み方と区別するのならば「組む・組み編む」と表現できる。縦方向の経条と横方向の緯条を単調に組み編むもの（図8-1～11・13）を基本とし、特に縦・横・斜めの三方向から条材を組み編んだものを「三方編み」（図8-14・15）と呼び、途中で調子を変えて菱形などの模様（文様）を編み出したものを「模様編み」（図8-12）と呼ぶ。一部を除き、その組織は「超え」・「潜り」・「送り」（図7）によって表現することができる。これは、すでに述べたように、研究史第1期において坪井正五郎氏が考案した分類・表現方法（坪井 1899）であり、各緯条が経条を何本超え、何本潜り、経条何本分横に送って（ずれて）いくかによって編み方を表現するというものである。具体的には、

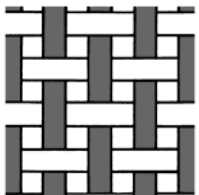
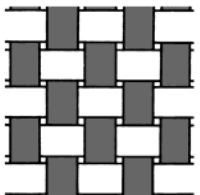
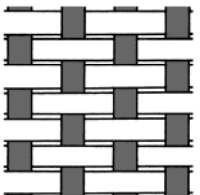
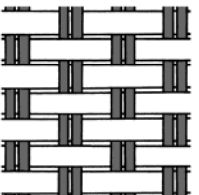
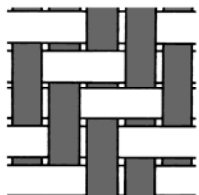
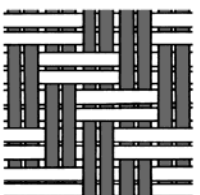
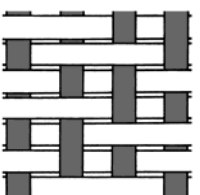
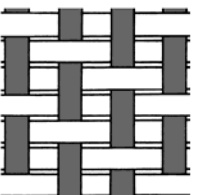
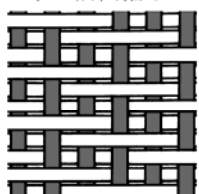
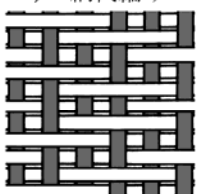


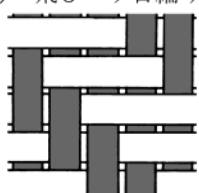
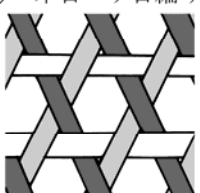



〈 2本超え2本潜り 1本送りの場合 〉

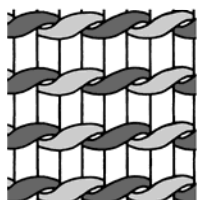
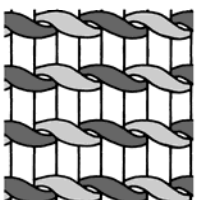
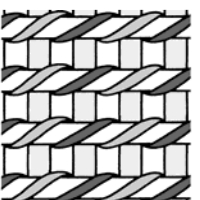
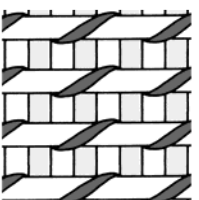
図7 超え・潜り・送りによる網代編み分類・表現方法（松永 2003を改変）

び、途中で調子を変えて菱形などの模様（文様）を編み出したものを「模様編み」（図8-12）と呼ぶ。一部を除き、その組織は「超え」・「潜り」・「送り」（図7）によって表現することができる。これは、すでに述べたように、研究史第1期において坪井正五郎氏が考案した分類・表現方法（坪井 1899）であり、各緯条が経条を何本超え、何本潜り、経条何本分横に送って（ずれて）いくかによって編み方を表現するというものである。具体的には、

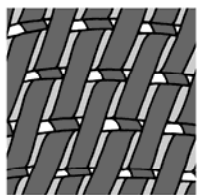
〈 広義の網代編み 〉

			
1 1本超え1本潜り1本送り ／ 四ツ目編み	2 1本超え1本潜り1本送り ／ 市松編み	3 1本超え1本潜り1本送り ／ ザル目編み	4 1本超え1本潜り1本送り (経条2本組) ／ ザル目編み
			
5 2本超え2本潜り1本送り ／ 網代編み	6 2本超え2本潜り1本送り (経条・緯条2本組) ／ 網代編み	7 2本超え2本潜り1本送り・2本送り交互 ／ 飛びゴザ目編み	8 1本超え2本潜り1本送り ／ 飛びゴザ目編み
			
9 3本超え3本潜り2本送り ／ 飛びゴザ目編み	10 3本超え3本潜り2本送り ／ 木目ゴザ目編み	11 3本超え3本潜り1本送り ／ 網代編み	12 3本超え3本潜り1本送りの模様編み ／ 樹網代編み
			※送りは、途中で変化 するものなどを除き、 右下がり＝左上がり になるように揃えて 図化した。当然、図 の逆方向に送る場合 もある。
13 3本超え2本潜り1本送り ／ 網代編み	14 三方編み ／ 六ツ目編み	15 三方編み ／ 麻ノ葉編み	

〈 広義のもじり編み 〉

			
16 もじり編み (左絡み) ／ 縄目編み	17 もじり編み (右絡み) ／ 縄目編み	18 ヨコ添えもじり編み (左絡み) ／ ラティス・トワイニング	19 1条絡め編み (左絡み) ／ ラップ・トワイニング?

〈 巻き上げ編み 〉

 20
巻き上げ編み
／ コイリング

※各模式図の下には、その編み方の「考古学表現 / 民具表現その他」を示した。また各模式図は、主にカゴ類を想定して作成したが、器種によっては90°回転させて経条・緯条を逆転させた方が図として適切な場合もある。

図8 主な編み方の模式図

「2本超え2本潜り1本送り」（図7・図8-5）や「1本超え1本潜り1本送り」（図8-1～3）のように表記する。これは、変則的で複雑な組織などには適用が難しいが、網代編みの構造を客観的な数値によって示すことができるという点では有効な分類・表現方法であり、本論でも適宜用いることにする。

なお経条・緯条の区別については、カゴなど方向が明確な場合は問題ないが、破片資料などは経条・緯条の区別が難しい。そのような場合は、原則として潜りの数値よりも超えの数値が多くなる方の条材を緯条と見なすことにする。ただし、潜りの数値よりも超えの数値が多くなる向きにすると、数値の表現が複雑かつ困難になってしまう一部の編み方については、数値を単純に表現できる方の条材を緯条とすることにする。また送りは、左右どちらの方向で捉えるかによって数値が変わるが、基本的により少ない方の数値で表すことにする。さらに同じ数値の送りを右送り・左送りに区別することも可能であるが、破片資料などは表・裏や縦・横を判別できず、どちらを表とするかあるいは縦とするかで左右は逆転してしまうため、送りの方向は無視することにする。

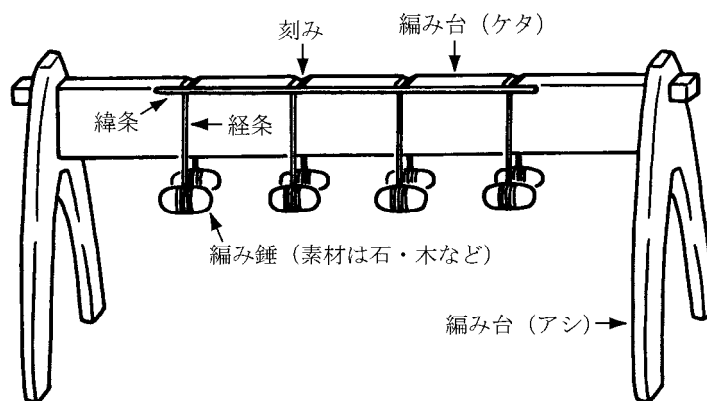
注意しなくてはならないのは、ここでいう網代編みは、近現代民具の網代編みとは内容を異にするということである。近現代民具でいう網代編みは、経条・緯条が数本ずつ超え潜りするものを指す（図8-5・6・11～13）。日本考古学でいう網代編みには、最も広い意味では、民具表現（大分県別府産業工芸試験所 1991・1992、名久井 2004）の「四ツ目編み」（経条・緯条が1本ずつ超え潜りするもの：図8-1）、「市松編み」（経条・緯条が1本ずつ超え潜りし、目が詰まるもの：図8-2）、「ザル目編み（ゴザ目編み）」（経条の間隔をあけて緯条が1本ずつ超え潜りするもの：図8-3・4）、「飛びゴザ目編み」（経条の間隔をあけて緯条が数本ずつ超え潜りするもの：図8-7～9）、「木目ゴザ目編み」（飛びゴザ目編みの変形で、送りの方向を変えてジグザグに編むもの：図8-10）、「六ツ目編み」（三方向の条材が交差して六角形の目を形成するもの：図8-14）、「麻ノ葉編み」（三方向の条材が交差して三角形の目を形成するもの：図8-15）なども含まれる¹³⁾。そこで、日本考古学の網代編みと民具の網代編みと区別する場合は、柳原梢子氏（柳原 2008）のように前者を「広義の網代編み」と呼び、後者を「狭義の網代編み」と呼ぶことにする。さらに広義の網代編みを系統的に見る場合は、「網代編み系統」の語を用いることにする。

なお、網代編みには、研究史第1期において触れた中国の「○経○緯人字紋」という分類・表現方法（図4）もあるが、これは一見すると坪井氏の「○本超え○本潜り○本送り」に似ている。しかし、中国の分類・表現方法は、網代の文様（人字紋・十字紋など）を構成

する経条・緯条が何本1組になっているかを数値で表すのであり、経条・緯条の交差構造を数値で表す「超え」・「潜り」・「送り」とは数値の意味が全く異なる。本論では基本的に坪井氏の考案した方法を用いるが、中国の分類・表現方法も該地の資料を理解する上では参考になる部分もあり、必要に応じて適宜使用することにする。

もじり編み：一方の条材に、別の条材を絡める編み方である（図8-16～19）。これをおこなう動作は「編む」だが、個別的には「絡める・絡め編む」と表現できる。民具では「縄目編み」・「双子編み」などとも呼ばれる。編み台・編み錘のセット（図9）を用いて編む場合と、手のみで編む場合とがある。なお近年、「ヨコ添えもじり編み」（経条・緯条を交差させ、それに別の条材を2本単位で絡める（絡め巻く）もの：図8-18）や「1条絡め編み」（経条・緯条を交差させ、それに別の条材を1本単位で絡める（絡め巻く）もの：図8-19）と呼ばれる、典型的なもじり編み（図16・17）とは異なる絡め技法（尾関清子氏のいう「絡み巻き」）の存在が指摘されているが（野田 2005、尾関 2007）¹⁴⁾、一方の条材に別の条材を絡めるという点では同一系統のものとして捉えるべきである。そのため本論では、これらの技法も「広義のもじり編み」と見なして、系統的に見る場合は「もじり編み系統」と呼ぶことにする。さらに、より粗雑な「経条・緯条を交差させ、それに別の条材を巻きつけるもの（以下、「巻きつけ」と呼ぶ）」もあるが、これは1条絡め編みをより粗くしたような構造を呈しており、やはり同系統に位置づけることにしたい¹⁵⁾。なお、これらの条材の絡め方（巻きつけ方）

については、縄の撚り方のように左右の別がある。その表現については、山本直人氏（山本 1986b）や野田真弓氏（野田 2005）の左右に合わせて、「左絡み（左巻き）」（図8-16・18・19）・「右絡み（右巻き）」（図8-17）¹⁶⁾と記すことにする。



※ケタの刻みに引っかけた経条を、編み錘ごと前後させて、ケタに沿わせた緯条に絡めていく。経条を一通り絡めたら、次の緯条をケタに沿わせ、また編み錘を前後させて経条を絡めていく。以後、目的の器物の大きさ（広さ）になるまで同様の動作を繰り返す。

図9 編み台・編み錘の基本構造

巻き上げ編み：渦巻状などの芯材を巻き材で巻き上げる編み方である（図8-20）。動作は他の編み方同様「編む」で、個別的には「巻き上げる・巻き編む」と表現できる。「コイリング」・「絡み巻き上げ」・「巻き編み」などとも呼ばれる。現状は、コイリングの語が用いられることが多いように思われる。しかし、他の編み方が語尾に「編み」の付く日本語表記であるのに対し、この編み方だけがカタカナ英語というのも不自然である。そこで、あくまで日本語表記としての「巻き上げ」に、語尾に「編み」の付く「巻き上げ編み」の語を用いることにする。

本論では、学史的な背景や考古学的視点の意義を重視し、原則として上記の考古学用語・表現を用いることにするが、近現代の民具用語・表現も必要に応じて適宜使用することにしたい。名久井文明氏が指摘するように（名久井 2004・2009）、民具表現にも重要な視点があるからである¹⁷⁾。

また、面形成以外の技法として、口縁部の処理方法（縁仕舞）があるが、これについては近年カゴ資料が増加するようになってから論じられるようになってきた。そのため、学史的に議論が浅く、考古学的な用語設定は特にない。これについては、今後十分に検討する必要があると思うが、本論ではひとまず現状に合わせて、近現代民具に基づく表現を用いることにしたい。主なものを列挙すると、「縦芯材折り込み縁」（余剰の経条を折り返し、下段の緯条の間に差し込んでおさめる方法：図10-1）、「縄目返し縁」（口縁部の手前にもじり編みを巡らせ、そこに余剰の経条を折り返して差し込む方法：図10-2）「巻き縁」（巻き材を巻きつけながら周回する方法：図10-3）、「返し巻き縁」（巻き縁をおこなった後、逆方向に巻き材を巻きかぶせて周回する方法：図10-4）、「矢筈巻き縁」（数本飛んでは数本巻き戻り、8字状に巻きながら周回する方法：図10-5）、「当て縁」（口縁部の内側・外側両方に縁材を当てて挟み、その上から巻き材を巻きつける方法：図10-6）などがある（大分県別府産業工芸試験所 1991・1992、名久井 2004）。

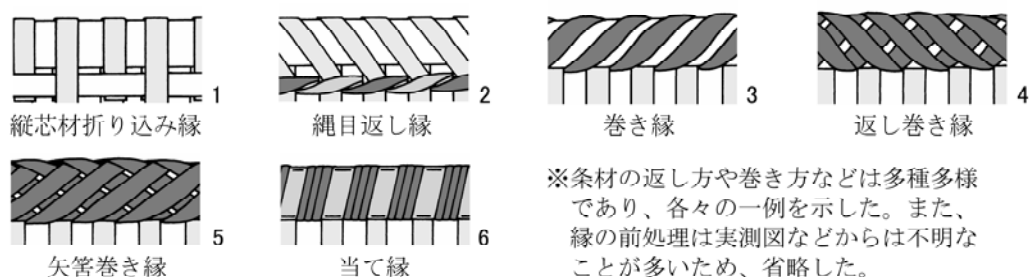


図10 主な口縁部処理方法（縁仕舞）の模式図

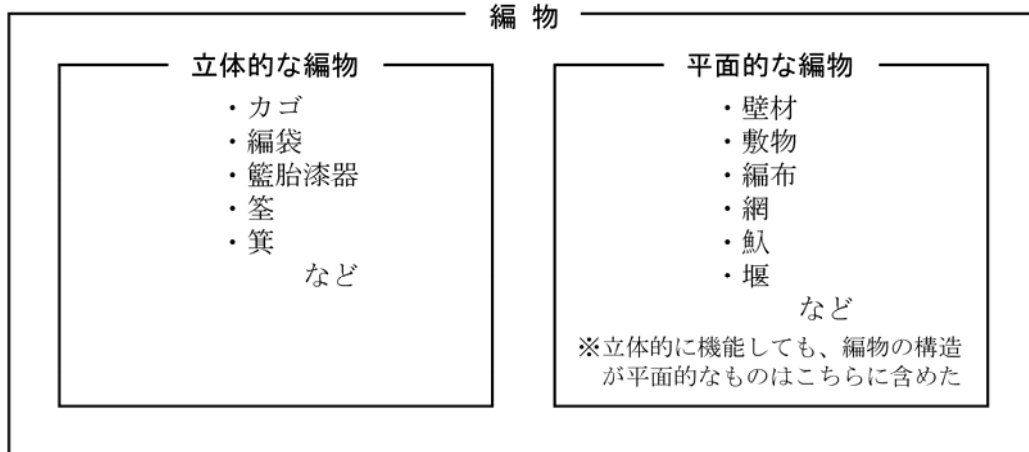


図11 編物の主な器種

なお、これら以外にも、編み方の用語・表現は数多く存在し、必要に応じて適切なものを選択・使用することにする。

編み方以外の重要要素である器種については、個々の形態的特徴や出土状況などを参考に、カゴ（立体的な編物容器）¹⁸⁾・編袋（立体的な編物容器のうち、比較的柔軟なもの）・籃胎漆器（カゴに漆を塗布したもの）・筥（円筒形を呈する漁労用編物）・箕（穀物の選別などに用いるための浅い編物）・壁材（直立して壁を形成する編物）・敷物（下に敷くための平面的な編物）・編布（もじり編みで編んだ布）・網（魚を捕るための網）・魴（魚を捕るための柵状の編物）・堰（水の流れをせき止めるための柵状の編物）など¹⁹⁾に分類する（図11）。

残る一つの重要要素である素材については、原則として発掘報告などに示された植物学的な素材同定の結果に従い、どの種の植物が用いられているかを見る。特に部位が分かる場合は、どの部位にどの種の植物が用いられているか（部位による素材の使い分け）に注目する。さらに、植物学的な素材同定まではおこなわれていなくても、筆者が実見した上での所見や、調査者の所見なども少なからず意味があるものと考え、それらも含めて素材の用いられ方を検討する。

そして、これらの基準に基づいて東アジア先史時代に属する各種実物資料の編み方・器種・素材の諸情報を分類・整理し、三大要素の相関関係について検討するのである。こうすることによって、実物資料から広域的かつ総合的に、東アジア先史時代における編物の製作・使用の実態に迫ることができるものとする。研究史から浮かび上がった二つの問題（個別研究への特化と汎東アジア的視点の欠如）も、これでかなり解消できよう。

続いて、土器底部の編物圧痕資料（「敷物圧痕」の類）についてであるが、あくまで間

接資料であるため、実物資料よりも情報が少ない。先に述べた三大要素についていえば、編み方は十分検討可能であるが、素材はある程度の質感などは分かるものの植物の種類を植物学的に同定するまでには至らない。また器種は基本的に土器製作用の敷物で、カゴなどの転用品を除き他の用途は考えられない²⁰⁾。従って、この種の資料については、編み方を中心に分類・整理し、素材は大まかに、そして器種については土器製作用敷物の中での各種編物のあり方を検討することになる。

なお、この土器底部の編物圧痕資料については、研究史でも触れたように筆者が以前から継続的に研究をおこなっている。そこで本論では、筆者が2004年に発表した分類案（松永 2004）を、一部修正した上で適用する（図12）。そして、どの種類の圧痕が、各時期・各地域にどのように分布するのかを明らかにし、その背景について検討する。筆者の考えでは、土器底部の「敷物圧痕」は編織物圧痕・自然物圧痕・その他の三種類に大別でき、本論の研究対象となる編物圧痕は編織物圧痕の中に含まれる。編物圧痕以外の編織物圧痕としては、織布を原体とする織物圧痕があるが、これは編織技術的にも土器製作技術的にも編物圧痕のあり方を考える上で非常に重要な存在である。そのため、織物圧痕も含めた編織物圧痕の分類基準について、以下に詳しく述べておきたい。

A類：いわゆる網代圧痕の類である。条材を縦・横・斜めに単純交差させる広義の網代編みの編物を原体とする。最も種類が豊富な「敷物圧痕」・編物圧痕で、必要に応じて編み方分類（超え・潜り・送り）と素材分類（a～e類および硬軟）を組み合わせる。

網代圧痕の編み方による分類は、学史的背景や客観性を重視して坪井正五郎氏の分類・表現方法（坪井1899）に基づき、条材の交差の仕方を超え・潜り・送りの数値で表すこと

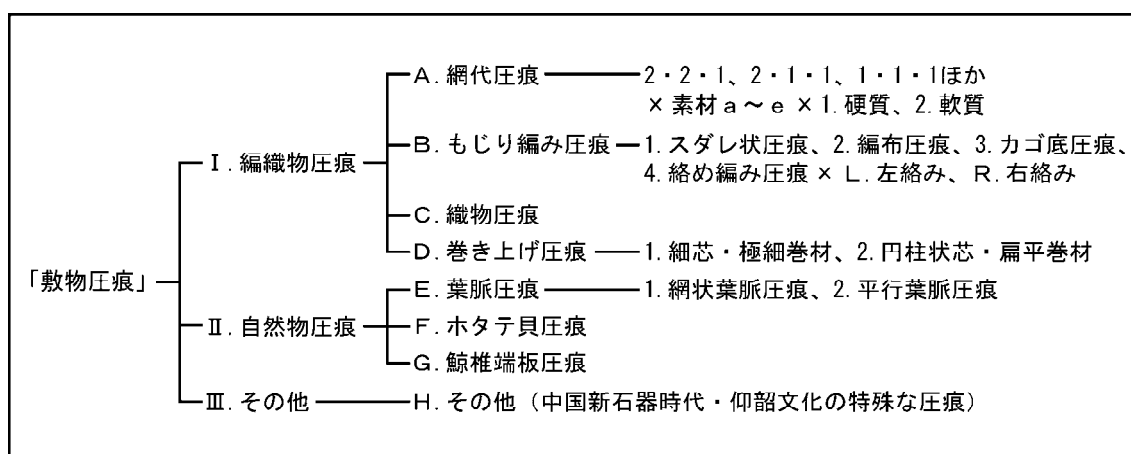


図12 東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類概念図（松永 2004を改変）

にする。この種の圧痕の経条・緯条の区別は難しいため、実物の破片資料同様に、原則として潜りの数値よりも超えの数値が多くなる方の条材を緯条と見なし、それが逆に困難な資料は数値を単純に表現できる方の条材を緯条とみなすことにする。ただし、柱状の材と扁平で太い材を組み合わせる場合（後述するb類）は、当該編物の一般的傾向から考えて、原則として柱状の方を経条とし、扁平で太い材を緯条とすることにする。送りについても、実物の破片資料同様、より少ない方の数値で表し、送りの方向（左右）は無視することにする。この種の圧痕は、編み方だけでも非常に多種多様であり、主なもののみ以下に挙げることにする。

2・2・1：2本超え2本潜り1本送り（図13-1～3）

2・2・1×x²¹⁾：2本超え2本潜り1本送りで、経条・緯条の片方ないし両方を2本以上1組にするもの（図13-4）。

2・2・1/2：2本超え2本潜りで、1本送りと2本送りを繰り返すもの（図13-5・6）。

1・1・1：1本超え1本潜り1本送り（図13-7～9）。

1・1・1×x：1本超え1本潜り1本送りで、経条・緯条の片方ないし両方を2本以上1組にするもの（図13-10・11）。

2・1・1：2本超え1本潜り1本送り（図13-13・14）および1本超え2本潜り1本送り（図13-12）²²⁾。

3・3・2：3本超え3本潜り2本送り（図13-15）。2本超え1本潜り1本送りを90°回転させて1本超え2本潜り1本送りと見た場合の各経条間に、1本ずつ経条を足したような組織を呈する。送りの方向を変えて木目ゴザ目編みになるものもある。

3・3・1：3本超え3本潜り1本送り（図13-16）。

3・3・1×x：3本超え3本潜り1本送りで、経条・緯条の片方ないし両方を2本以上1組にするもの（図13-17）

3・2・1：3本超え2本潜り1本送り（図13-18）。

3・2・2：3本超え2本潜り2本送り（図13-19）および2本超え3本潜り2本送り（図13-20）。

3・2/3・4・5：3本超え2本潜りと3本超え4本潜りを繰り返し、5本送るもの（図14-1）。

中国でいう「2経2緯人字紋」であり、2本超え2本潜り1本送りで経条・緯条を2本1組にするもの（図13-4）に酷似するが別種である。

4・2・3：4本超え2本潜り3本送り（図14-2）および2本超え4本潜り3本送り（図14-

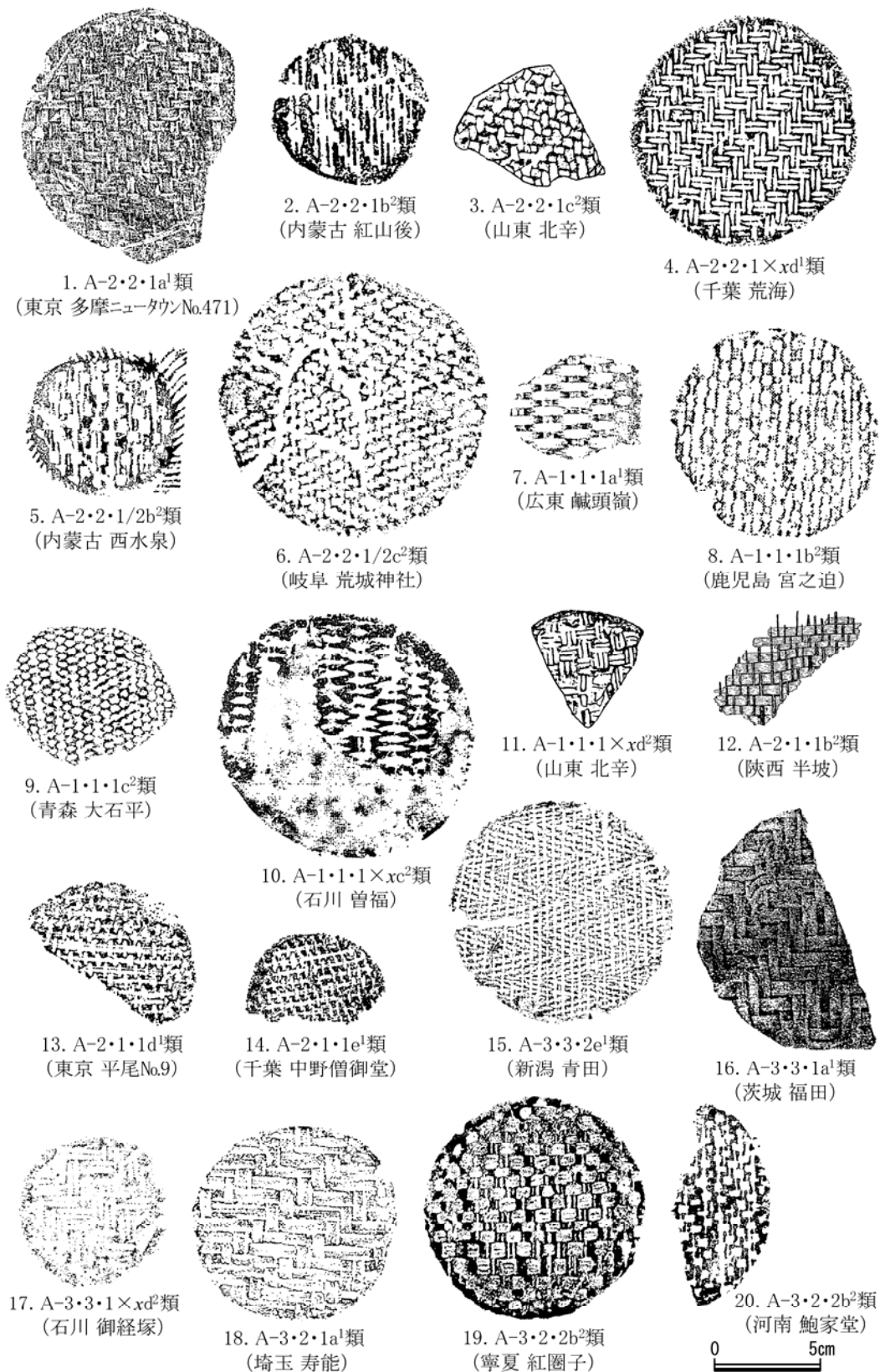


図13 東アジア先史土器の「敷物圧痕」1 (編織物圧痕)

(拓影は各報告より転載、S=1/3)

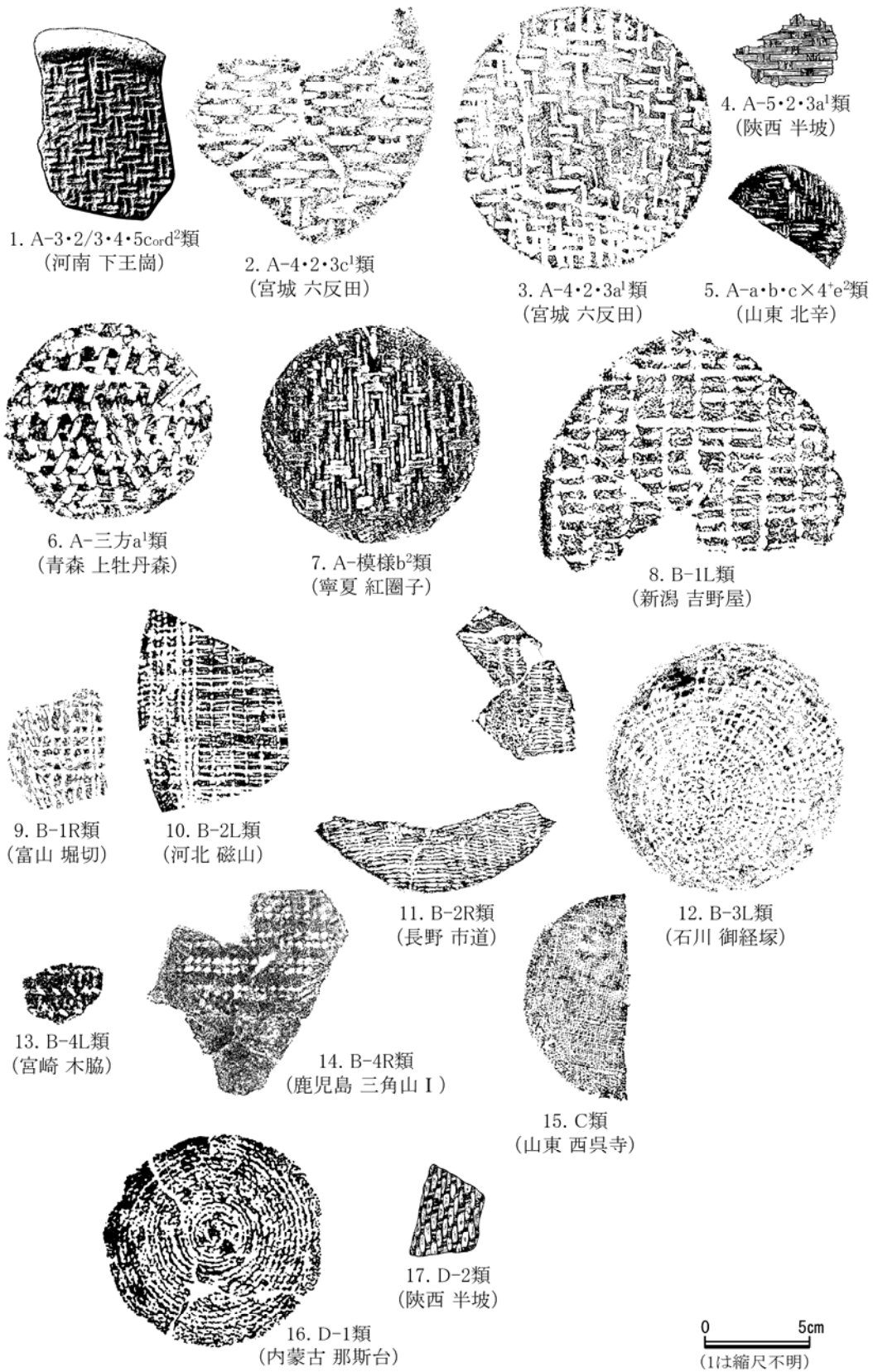


図14 東アジア先史土器の「敷物圧痕」2 (編織物圧痕)

(拓影・写真は各報告より転載、1以外はS=1/3)

3) ²³⁾。

5・2・3 : 5本超え2本潜り3本送り (図14-4)。

a・b・c×4⁺ : 超え・潜り・送りは一定しないが、経条・緯条ともに4本以上を1組とするもの (図14-5)。中国でいう「多経多緯式」の一種である。

三方 : 三方編み (図14-6)。三方向の条が交差するもの。理論的には六ツ目編みと麻ノ葉編みの類が含まれるが、現時点で確認できるものは後者のみである。

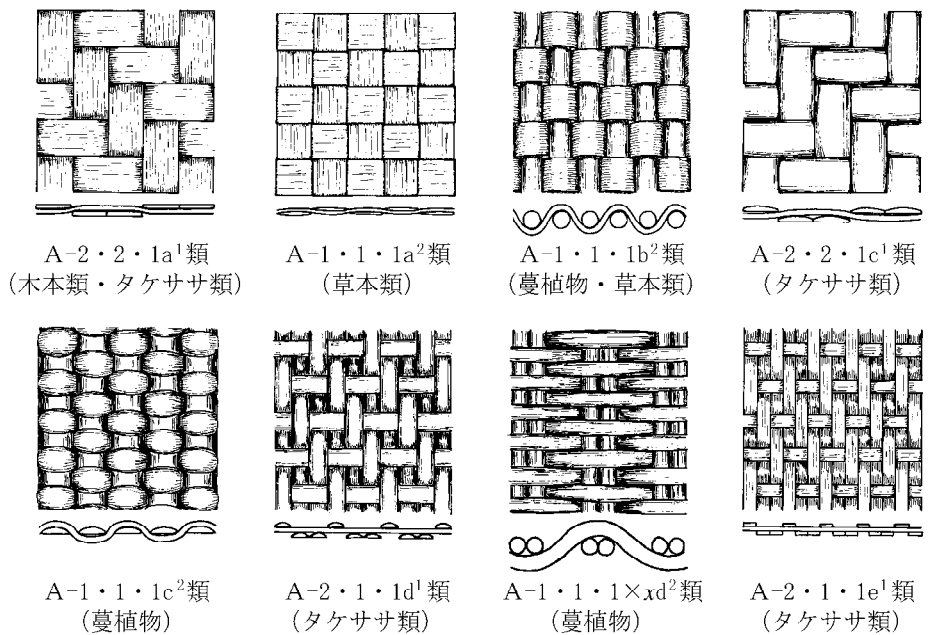
模様 : 模様編み (図14-7)。意図的に複雑な模様を編み出しているもの²⁴⁾。

網代圧痕の素材による分類は、あくまで圧痕から想定できる範囲の形体的分類であるが、以下の5種類に分類する。さらに、それぞれ1:硬質材(木本類・タケササ類など)と2:軟質材(蔓植物・草本類など)の区別があり、どちらか特定できる場合には「a¹類(形体はa類で硬質材を用いるもの)」や「b²類(形体はb類で軟質材を用いるもの)」のように表記する(図15)²⁵⁾。

a : 経条・緯条に扁平で太い材²⁶⁾を用いるもの(図13-1・7・16・18、図14-3・4・6)。

b : 経条に柱状の材、緯条に扁平で太い材を用いるもの(図13-2・5・8・12・19・20、図14-7)。

c : 経条・緯条に太い材を用い、片方ないし両方の条が丸みを帯びるもの(図13-3・6・9・10、図14-1?・2)。




※縮尺はあくまで目安  0 2.5 5 10mm

図15 網代圧痕から推測される主な素材原体 (松永 2004を改変)

d : 経条・緯条に細い材を用い、片方ないし両方の条が丸みを帯びるもの（図13-4・11・13・17、図14-1?）。

e : 経条・緯条に扁平で細い材を用いるもの（図13-14・15、図14-5）。

そして、上述した網代圧痕の編み方分類と素材分類を組み合わせる場合、例えば「2本超え2本潜り1本送り」で「経条・緯条に扁平で太い硬質材を用いるもの」は「A-2・2・1a¹類」と表記する。これを必要に応じて、編み方のみで表現する場合は「A-2・2・1類」、素材のみで表現する場合は「a¹類」または「A-a¹類」と表記する。

B類 : もじり編み圧痕の類である。一方の条材に、別の条材を絡める広義のもじり編みの編物を原体とする。素材・形態の違いによって4種類（1～4）に分類でき、さらに条材の絡め方による分類（L・R）も組み合わせる。

もじり編み圧痕の素材・形態による分類は、以下の通りである。筆者の2004年分類では3種類であったが、近年の研究で発見されたものを追加して4種類に変更した。

1 : スダレ状圧痕（図14-8・9）。棒状や束状の植物素材に、軟質な条材を絡め編んだもの。編布圧痕・カゴ底圧痕・絡め編み圧痕以外のもじり編み圧痕を一括する²⁷⁾。

2 : 編布圧痕（図14-10・11）。経条・緯条に糸材を用いるもの。

3 : カゴ底圧痕（図14-12）。放射状に広がる条材に、軟質な条材を絡め編んだもの。原体がカゴの底部と判断できるものを本類とする。

4 : 絡め編み圧痕。経条・緯条を交差させ、それに別の条材を絡め巻くもの。近年発見されたヨコ添えもじり編みと1条絡め編みの圧痕を一括する（図14-13・14）。

もじり編み圧痕の条材の絡め方による分類は、実物資料と同様、左右を山本直人氏（山本 1986b）や野田真弓氏（野田 2005）に合わせた上で、L: 左絡み（図14-8・10・12・13）、R: 右絡み（図14-9・11・14）に分類する²⁸⁾。

そして、上述したもじり編み圧痕の素材・形態による分類と絡め方による分類を組み合わせる場合、例えば「スダレ状圧痕」で「左絡み」のものは「B-1L類」と表記する。必要に応じて、素材や形態の違いによる分類のみで表現する場合は「B-1類」、絡め方による分類で表現する場合は「L類」または「B-L類」と表記する。

C類 : 編物圧痕以外の編織物圧痕、すなわち織物圧痕の類である（図14-15）。織機を用いて織られた布を原体とする。経糸・緯糸が単純交差して、広義の網代編みと同様の組織を呈する。現時点で確認できるものは、いずれも平織（網代編みでいうところの1本超え1本潜り1本送り）の類である。中には、経糸ないし緯糸のいずれか一方しか見えない畝織状

のものも含まれるが、構造的な違いはないため一括する。

D類：巻き上げ圧痕の類である。渦巻状などの芯材を巻き材で巻き上げる、巻き上げ編みの編物を原体とする。素材の違いによって、以下の2種類に分類できる。

1：細い芯材を極細の巻き材で巻き上げるもの（図14-16）²⁹⁾。

2：柱状の芯材を扁平な巻き材で巻き上げるもの（図14-17）。

なお、編織物圧痕以外の「敷物圧痕」（自然物圧痕・その他）も、土器製作用敷物としての編物のあり方を考える上では参考となる資料である。そこで、これらについても筆者の2004年分類に基づいて簡単に紹介しておく。

E類：葉脈圧痕の類である。植物の葉を原体とする。葉脈の違いによって、1：網状葉脈圧痕（主にカシワやホオノキなど広葉樹の葉を敷いたもの、図16-1）と、2：平行葉脈圧痕（主にチマキザサなどササ類の葉を敷いたもの、図16-2）³⁰⁾の2種類に細分できる。

F類：ホタテ貝圧痕の類である（図16-3）。ホタテ貝の貝殻を原体とし、放射状の肋節痕が残される。

G類：鯨椎端板圧痕の類である（図16-4）。鯨の椎骨椎端板を原体とし、アバタ状の凹

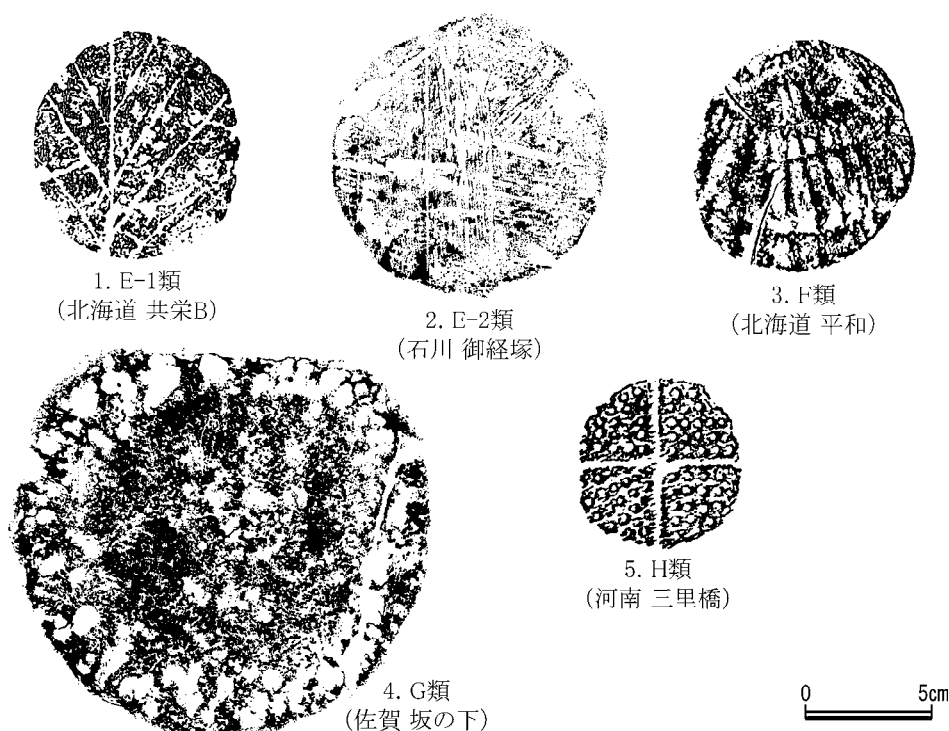


図16 東アジア先史土器の「敷物圧痕」3（自然物圧痕・その他）

（拓影は各報告より転載、S=1/3）

凸痕が残される。

H類：その他。中央を走る十字溝と無数の凹凸によって構成される圧痕（図16-5）で、中国新石器時代中期仰韶文化に類例がある。

そして、これらの基準に基づいて東アジア先史時代に属する編物圧痕に見る土器製作用敷物の編み方・素材などを分類・整理し、圧痕原体となった編物のあり方について検討するのである。こうすることによって、圧痕資料から広域的に、東アジア先史時代における土器製作用敷物となった編物の製作・使用の実態に迫ることができるものとする。先に述べた実物資料の研究方法によっても、先史編物研究の問題をかなり解消できると述べたが、実物資料よりもはるかに資料数が多く、また土器製作用敷物という性格が明確な編物圧痕資料を扱うことにより、さらに研究の精度が高まるはずである。

以上のように、東アジア先史時代の編物の実物資料・圧痕資料をそれぞれ分析した上で、両者の分析結果を総合する。そして、相関関係があったことが見込まれる編み方・器種・素材の三大要素の検討を中心に、編物および編物技術のあり方について考えたい。さらに、組織痕土器やカゴ型土器など他の編物関連資料の情報も加えて、東アジア先史時代の編物文化を具体的に浮き彫りにする。このような方法により、個別研究に特化し、汎東アジア的視点に欠けている先史編物研究の現状を打破できるものとする。そして、「新石器文化段階を中心とした東アジア先史時代における編物の製作・使用の実態を明らかにする」という本論の目的を果たしたい。

第1章 日本列島の編物実物資料

それでは、前章で述べた研究史・研究目的・研究方法を踏まえて、東アジア先史時代に属する編物資料を具体的に見ていくことにしよう。東アジアの先史時代遺跡からは様々な編物資料が見つかるが、まずは日本列島先史時代の実物資料から見ていくことにしたい。縄文時代および弥生時代の各遺跡から出土した編物の実物資料を、編み方・器種・素材³¹⁾の三大要素を中心に概観する。日本列島先史時代の各時期・各地域において、どのような編物が製作・使用されていたのか、情報量が最も多い実物資料から把握したい。なお、本章・本論の分析対象とした各遺跡・各資料の詳細データについては、付表1：縄文時代の編物実物資料一覧表、付表2：弥生時代の編物実物資料一覧表を参照されたい。

第1節 縄文時代の編物実物資料

詳細は後で述べるが、日本列島では縄文時代草創期から編物圧痕の存在が知られている（松永 2008c）。おそらく編物の出現は、後期旧石器時代にまで遡るのであろう。さすがに、後期旧石器時代～縄文時代草創期に属する編物の実物が遺存かつ出土することは難しいかも知れないが、少なくとも現時点で縄文時代早期前葉にまで遡る実物資料が見つまっている。

以下では、縄文時代の各遺跡（図17）から出土した編物実物資料を、早期から晩期まで時期別³²⁾に見ていく。各遺跡の資料を、順を追って整理することにより、各時期・各地域の編物の諸特徴を把握したい。

1) 縄文時代早期（図18）

日本列島最古の編物実物資料は、滋賀県粟津湖底遺跡から出土した、縄文時代早期前葉の編物破片である（中川 2000）。破片資料のため、いずれも詳細は不明であるが、網代編みの類と見られるもの（図18-2・3）と、カゴ類の口縁部（巻き縁？）の可能性のあるもの（図18-4～6）とが確認できる。前者の素材については不明（扁平な材）だが、後者の一部は草本単子葉類と広葉樹であるという（植田 2000）。縄文時代早期前半に属する編物実物資料は、今のところこの遺跡例のみで、これ以上のことは分からない。

早期後半になると、福島県新田B遺跡（渡辺 2000）、佐賀県東名遺跡（西田 2008、西田・山田・佐々木 2009）、大分県横尾貝塚（塩地ほか 2008）の各遺跡から、より良好な

地点番号 遺跡名(所属時期または土器型式)

1. 朱円(栗沢) 2. 石狩紅葉山49(中期後半～後期初頭)
3. 忍路土場(後期初頭～中葉) 4. キウス5(柏木川) 5. 柏木川4(堂林)
6. 社台I(晩期中葉) 7. 是川中居(晩期) 8. 三内丸山(円筒下層a)
9. 亀ヶ岡(晩期) 10. 石郷(大洞C1) 11. 八幡崎(晩期初頭～前葉)
12. 土井I号(晩期前葉～中葉) 13. 蔭内(後期中葉～晩期初頭)
14. 中山(後期末～晩期前半) 15. 戸平川(晩期中葉)
16. 山王圃(晩期中葉～後葉) 17. 根岸(大洞A) 18. 押出(大木4)
19. 久世原館・番匠地(後期) 20. 新田B(早期後半)
21. 荒屋敷(大洞A'併行主体) 22. 明神前(後期初頭～前葉)
23. 寺野東(後期前半～晩期中葉) 24. 下田(中期後半～後期前葉)
25. 神門(前期初頭～中葉主体) 26. 石神(晩期前葉)
27. 寿能(中期後半～晩期初頭) 28. 後谷(後期～晩期)
29. 北江古田(中期～後期前半) 30. 弁天池(堀之内2主体)
31. 下宅部(後期前葉～晩期前葉) 32. 多摩区No.61(堀之内1)
33. 平沢同明(後期) 34. 羽根尾(前期前半)
35. 野地(後期後葉～晩期前葉) 36. 青田(鳥屋2)
37. 根立(後期初頭～前葉) 38. 寺地(晩期前葉～中葉)
39. 小竹(前期末) 40. 桜町(中期末～後期初頭) 41. 真脇(福浦上層)
42. 鹿首モリガフチ(大洞C1) 43. 中屋サワ(晩期前葉～後葉)
44. 米泉(後期～晩期) 45. 四方谷岩伏(後期後葉) 46. 鳥浜(前期)
47. 北寺(後期前葉) 48. メト(後期末) 49. 神郷下(晩期前葉～中葉)
50. 筑摩佃(中期前半) 51. 粟津湖底(早期前葉・中期前葉)
52. 滋賀里(滋賀里I主体) 53. 本郷大田下(後期後葉～晩期前半)
54. 佃(一乗寺K I) 55. 栗谷(後期初頭～前葉) 56. 布勢(後期前葉)
57. 桂見(後期～晩期) 58. 南方前池(前池) 59. 岩田(晩期)
60. 永井(津雲A併行) 61. 奥谷南(中期末) 62. 船ヶ谷(船ヶ谷)
63. 龍頭(降神松) 64. 横尾(轟I・II) 65. 正福寺(後期初頭～中葉)
66. 東名(塞ノ神B主体) 67. 坂の下(坂の下) 68. 名切(阿高)
69. 伊木力(轟B) 70. 曾畑(曾畑・後期～晩期)
71. 椎ノ木崎(阿高主体) 72. 前原(中期末～後期前葉)
73. 伊礼原C(曾畑)



図17 縄文時代の編物実物資料が出土した遺跡の分布

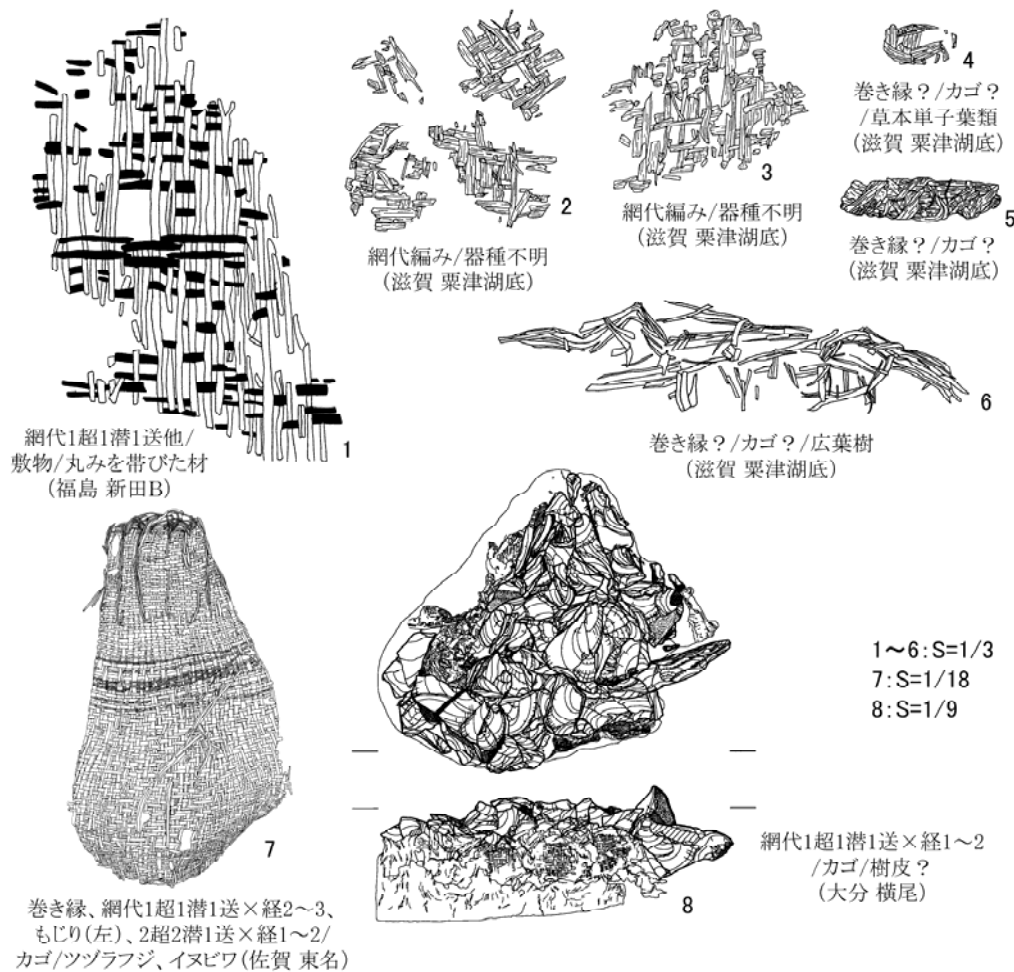


図18 縄文時代早期の編物実物資料 (実測図は各報告より転載、一部改変)

資料が出土している。

中でも、東名遺跡は資料数・出土状態など別格で、早期後葉（塞ノ神B式主体）に属する編物が700点以上出土している（うち2割強が貯蔵穴からの出土）³³⁾。この遺跡では、スダレ状編物が7点ほどで、大半はカゴ類であるという。カゴ類には、大型のもの（図18-7）と小型のものがあり、素材は木本植物（イヌビワ、ムクロジ）や蔓植物（ツヅラフジ）が使用されている。編み方は、経条・緯条複数本1組を含む2本超え2本潜り1本送り、1本超え1本潜り1本送り、三方編み（六ツ目編み）など広義の網代編みや、もじり編みなどが確認でき（図18-7）、編み方や素材の組み合わせで装飾・文様効果を出しているものも多い。

新田B遺跡のもの（図18-1）は、貯蔵穴から出土した敷物の類である。素材は丸みを帯びた材を用いており、1本超え1本潜り1送り基調で編まれている。この資料は、一部を4本超え4本潜りに変えており、一種の文様効果を出している。

横尾貝塚のもの（図18-8）は、1本超え1本潜り1送りで編まれたカゴで、素材は樹皮とされている。このカゴの中には姫島産の黒曜石が詰まっており、石器石材の収納にカゴ類が使用されていたことを示す貴重な資料である。

このように該期の編物実物資料は、遺跡数は少ないが、東名遺跡例に代表されるように、すでに立体的な編物容器（カゴ類）が高い完成度をもって製作・使用されていたことが明らかである。編み方も、網代編み系統・もじり編み系統の二大系統がともに確認でき、基本的な技法の多くがすでに出揃っていたことが分かる。東名遺跡や新田B遺跡の資料の中には、装飾・文様効果のあるものも認められ、早期段階でもかなりの技術水準に達している。素材も、木本類を扁平に割り割いたものや、丸みを帯びた蔓植物などを、適宜選択して使用していたようである。

2) 縄文時代前期

縄文時代前期になると、早期よりも出土遺跡数は増える。青森県三内丸山遺跡（岡田・中村・齋藤・小笠原ほか 1998）の「縄文ポシェット」（図19-1）が全国的に有名であるが、山形県押出遺跡（佐々木・佐藤ほか 1990）、千葉県神門遺跡（金丸ほか 1989、寺門ほか 1991）、神奈川県羽根尾貝塚（戸田ほか 2003）、富山県小竹貝塚（町田 2011）³⁴⁾、石川県真脇遺跡（山本 1986b）、福井県鳥浜貝塚（鳥浜貝塚研究グループ 1979・1981・1983・1984・1985・1987）、熊本県曾畑貝塚（丸山 1988）、長崎県伊木力遺跡（福田・古門ほか 2006）、沖縄県伊礼原C遺跡（盛本・知名・東門 2006b）から各種編物実物資料が出土している。

該期には、早期に引き続き、経条・緯条複数本1組を含む2本超え2本潜り1本送り、1本超え1本潜り1本送りなどの広義の網代編み（図19-1・4～6・8～15）や、もじり編み（図19-2・3・7）による編物が製作されている。器種は、各種カゴ類（図19-1・4・6？・7・10？・11？・12・14・15）のほか、編布（図19-2・3）がある。カゴ類の中には、口縁部処理方法が分かるものもあり、縦芯材折り込み縁や巻き縁（図19-14）が確認できる。素材は、ヒノキ科（青森県教育庁文化財保護課 2011）、ヒノキ（藤 1986）、カシ類（大迫 1988）、イヌビワ（大迫 1988）、ケヤキ（大迫 1988）、アケビ（大迫 1988）、樹皮（大迫 1988）、リュウキュウチク（盛本2006）、アカソ（布目 1984）、アサ（大麻）（布目 1984・1990）が同定されている。

縄文時代前期の編物の諸要素のうち、特徴的なものをいくつか挙げておこう。まずは、北陸地方のもじり編みのカゴ類にヒノキが使用されていることである。真脇遺跡（図19-7）

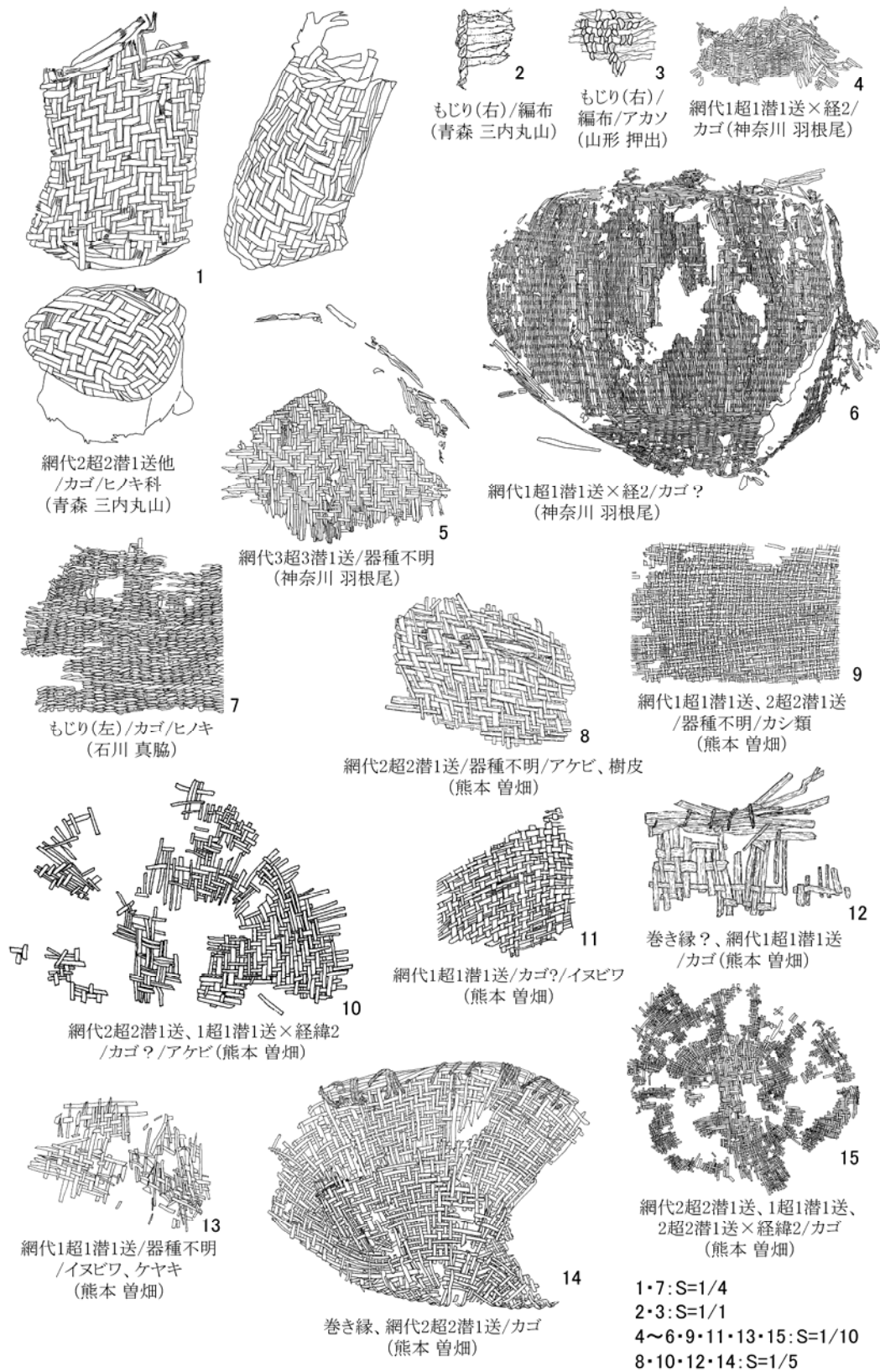


図19 縄文時代前期の編物実物資料 (実測図は各報告より転載)

・鳥浜貝塚で、その例が確認できる。後の時期においても、北陸地方から山陰地方にかけてヒノキなど針葉樹材を用いたもじり編みの編物がよく見られることから、現時点でそれが確認できる最古の資料ということになるだろうか。

さらに南の方に目を向けると、曾畑貝塚で網代編みの編物にイヌビワ（図19-11・13）が使用されているが、これは前後の時期の九州地方や四国地方と共通している。

また、この時期に、編布が見られるようになることが特筆される。このもじり編みの布は、破片資料ながら三内丸山遺跡（図19-2）・押出遺跡（図19-3）・鳥浜貝塚の各遺跡から出土しており、いずれも右絡みである。編み台・編み錘のセットを用いたもじり編みが、前期には確実に布製作の手段として用いられるようになったことがうかがわれる。なお、押出遺跡・鳥浜貝塚ともに、編布の素材にはアカソが使用されている。

その他、羽根尾貝塚で装飾・文様効果のある模様編み（3本超え3本潜り1本送り基調の連続柵網代編み）の編物（図19-5）が出土していることや、伊木力遺跡・曾畑貝塚・伊礼原C遺跡で貯蔵穴から編物（図19-8～15）が出土していることなども、当時の編物のあり方を考える上で注目される。

以上のように縄文時代前期は、早期に認められた各技法を用いて、引き続き様々なカゴ類などの編物を製作・使用しながらも、編布という新器種が出現した時期である。そして、出土遺跡の増加によって、編み方・器種・素材の相関関係や地域性などが見えてくる時期ということになる。

3) 縄文時代中期

縄文時代中期になると、より広い地域で資料が認められるようになる。一部後期に下る可能性があるが³⁵⁾、北海道キウス5遺跡（皆川・西脇ほか 1995）、北海道石狩紅葉山49号遺跡（石橋ほか 2005）、群馬県下田遺跡（小宮・小宮 1994）、埼玉県寿能遺跡（山田 1984）、東京都北江古田遺跡（新井 1987）、東京都下宅部遺跡（佐々木 2006a）、富山県桜町遺跡（中井 2007）、滋賀県粟津湖底遺跡（伊庭・瀬口ほか 1997）、滋賀県筑摩佃遺跡（植田 1995）、高知県奥谷南遺跡（松村・山本 1999）、佐賀県坂の下遺跡（大園 1975）、長崎県名切遺跡（安楽・藤田 1985）、熊本県椎ノ木崎遺跡（富田ほか 1989）、沖縄県前原遺跡（盛本・知名・東門 2006a）の各遺跡から様々な編物実物資料が出土している。

該期も縄文時代前期以前とほぼ同様に、経条・緯条複数本1組を含む2本超え2本潜り1本送り、1本超え1本潜り1本送りなどの広義の網代編み（図20-4～6・15～19）や、ヨコ添え



図20 縄文時代中期の編物実物資料 (実測図は各報告より転載、一部改変)

もじり編みや巻きつけを含む広義のもじり編み（図20-1～4・7～14・20）による各種編物が製作されている。器種は、各種カゴ類（図20-1?・4・5・7～10・11?・12?・13?・14?・15・16・18・20）のほか、魾（図20-2・3）があり、カゴ類の口縁部処理方法として縦芯材折り込み縁（図20-5）や巻き縁（図20-7～10・15）など³⁶⁾が確認できる。素材も多種多様で、タケササ類（タケ亜科）（井上・鈴木 2007、鈴木・能城 1987、盛本・知名・東門 2006a）、ヤダケ属（大越 1984）、ヒノキ亜科（井上・鈴木 2007）、カヤ（井上・鈴木 2007）、マツ属（井上・鈴木 2007）、広葉樹（井上・鈴木 2007）、カエデ属（井上・鈴木 2007、平川・西脇 1998）、トネリコ属（石橋ほか 2005、井上・鈴木 2007）、ヤナギ属（石橋ほか 2005）、ニレ属（井上・鈴木 2007）、ケンポナシ属（井上・鈴木 2007）、コナラ節（井上・鈴木 2007）、ムクロジ（井上・鈴木 2007）、イヌビワ属（パリノ・サーヴェイ 1999a）、樹皮（井上・鈴木 2007）、ブドウ科（石橋ほか 2005）、マタタビ属（井上・鈴木 2007）、カズラ類（大園 1975）、シダ類（大園 1975）などがある。

縄文時代中期の編物の諸要素のうち、特徴的なものとして、まずは魚を捕るための柵状の編物である魾の存在が挙げられる。石狩紅葉山49号遺跡から出土したもの（図20-2・3）で、もじり編みや巻きつけが巨大な構造物の製作にも適用されていたことが分かる。

また、前後の時期に通じるような、編み方・器種・素材の相関関係がうかがえることも、該期の特徴である。具体的には、北海道地方（キウス5遺跡）・北陸地方（桜町遺跡）のもじり編みのカゴ類などにカエデ属が使用されていること（図20-1）、関東地方（寿能遺跡、北江古田遺跡）や沖縄地方（前原遺跡）の網代編みのカゴ類などにタケササ類が使用されていること（図20-6）、北陸地方（桜町遺跡）の網代編みおよびもじり編みのカゴ類などにマタタビ属が使用されていること（図20-7～10・12・14・15）、北陸地方（桜町遺跡）のもじり編みの編物（カゴ?）に針葉樹（ヒノキ亜科）が使用されていること（図20-11）、四国地方（奥谷南遺跡）の網代編みの編物にイヌビワ属（図20-19）が使用されていること、九州地方（坂の下遺跡、名切遺跡）のもじり編みのカゴ類にカズラ類のような蔓植物が使用されていること（図20-20）が挙げられる。

出土状況については、遺物包含層や河道・流路を除けば、貯蔵穴（北江古田遺跡、奥谷南遺跡、坂の下遺跡、名切遺跡、前原遺跡）や水場遺構（桜町遺跡）などからの出土が確認できることが指摘できよう。

ところで、縄文時代前期に見られた編布は、該期には出土していない。しかし、前期および後期・晩期に見られる編布の連続性を考えるならば、現時点で中期のものが見つかつ

ていないだけであろう。実際は、縄文時代中期においても少なからず同様の布が製作・使用されていたものと思われる。

以上のように資料不足なところも若干感じられるが、縄文時代中期は、早期・前期に認められた各技法をより広範に応用しながら、各種編物を製作・使用していた時期であることが分かる。そして、編み方・器種・素材の相関関係や地域性などが、より一層浮かび上がってくる時期として位置づけられる。

4) 縄文時代後期

縄文時代後期に入って、編物実物資料の出土遺跡数は大幅に増える。一部晩期に下る可能性があるが³⁷⁾、中期～後期にまたがる資料を除いても、北海道忍路土場遺跡（三浦・中田 1989）、北海道柏木川遺跡（佐藤 2010）、北海道朱円遺跡（伊東 1966）、岩手県葦内遺跡（工藤 1982）、秋田県中山遺跡（高橋ほか 1984）、福島県久世原館・番匠地遺跡（高島・木幡ほか 1993）、栃木県明神前遺跡（永岡 2002）、栃木県寺野東遺跡（江原ほか 1998）、埼玉県寿能遺跡（山田 1984）、埼玉県後谷遺跡（吉川・橋本ほか 1990）、東京都下宅部遺跡（佐々木 2006a、千葉・石川・小川・秋本ほか 2006）、東京都弁天池遺跡（川本ほか 1989）、神奈川県多摩区No.61遺跡（戸田 1998）、神奈川県平沢同明遺跡（渡辺 1983）、新潟県野地遺跡（渡邊・坂上ほか 2009）、石川県米泉遺跡（西野・岡本ほか 1989）、福井県北寺遺跡（田辺ほか 1992）、福井県四方谷岩伏遺跡（鈴木 2003）、静岡県メノト遺跡（大熊 2002、大熊ほか 2006）、滋賀県滋賀里遺跡（田中・加藤・高谷ほか 1973）、兵庫県佃遺跡（渡辺 1998）、奈良県本郷大田下遺跡（岡林ほか 2000）、鳥取県桂見遺跡（牧本・小谷・高垣ほか 1996）、鳥取県栗谷遺跡（谷岡・中原・瀧川 1989・1990）、鳥取県布勢遺跡（渡辺・植松 1981）、香川県永井遺跡（渡部ほか 1990）、福岡県正福寺遺跡（熊代 2006）、熊本県曾畑貝塚（丸山 1988）、大分県龍頭遺跡（吉田 1999）の諸例がある。

該期には、縄文時代中期以前と多くの共通点を持ちながらも、より多様な編み方の編物が認められる。具体的には、経条・緯条複数本1組を含む2本超え2本潜り1本送り、1本超え1本潜り1本送り、1本超え2本潜り1本送り、三方編み（六ツ目編み・麻ノ葉編み）などの広義の網代編み（図21-1・3～16、図22-1・3・4、図23-3・4）や、ヨコ添えもじり編み・1条絡め編み・巻きつけを含む広義のもじり編み（図21-1?・2・8・11、図22-5～13、図23-1・2）による各種編物が製作されている。カゴ類の口縁部処理法も、縦芯材折り込み縁（図22-1）、縄目返し縁（図21-11・15、図22-5?）、巻き縁（図21-3?、図22-2・4・10・13）、

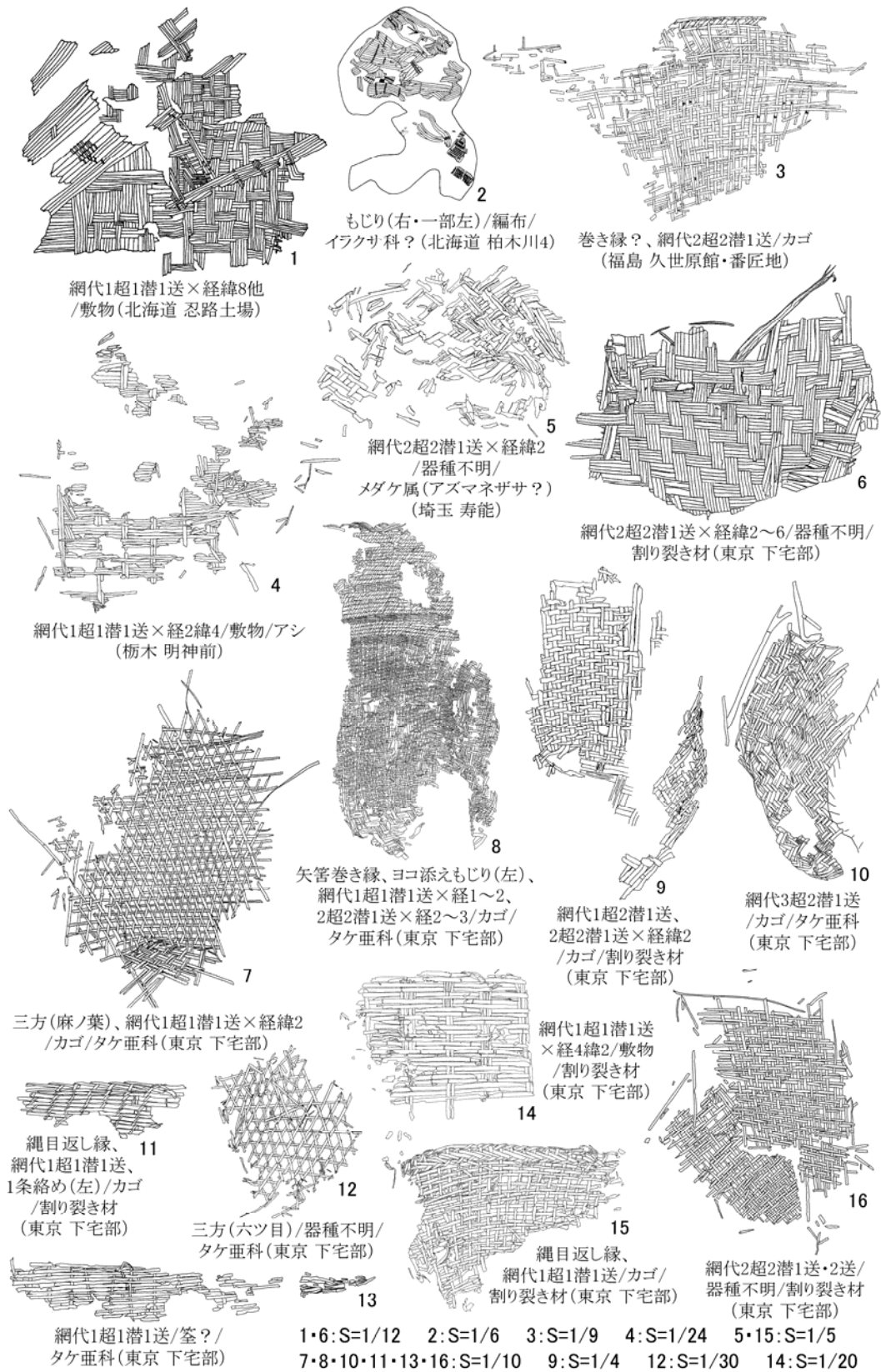


図21 縄文時代後期の編物実物資料1 (実測図は各報告より転載、一部改変)

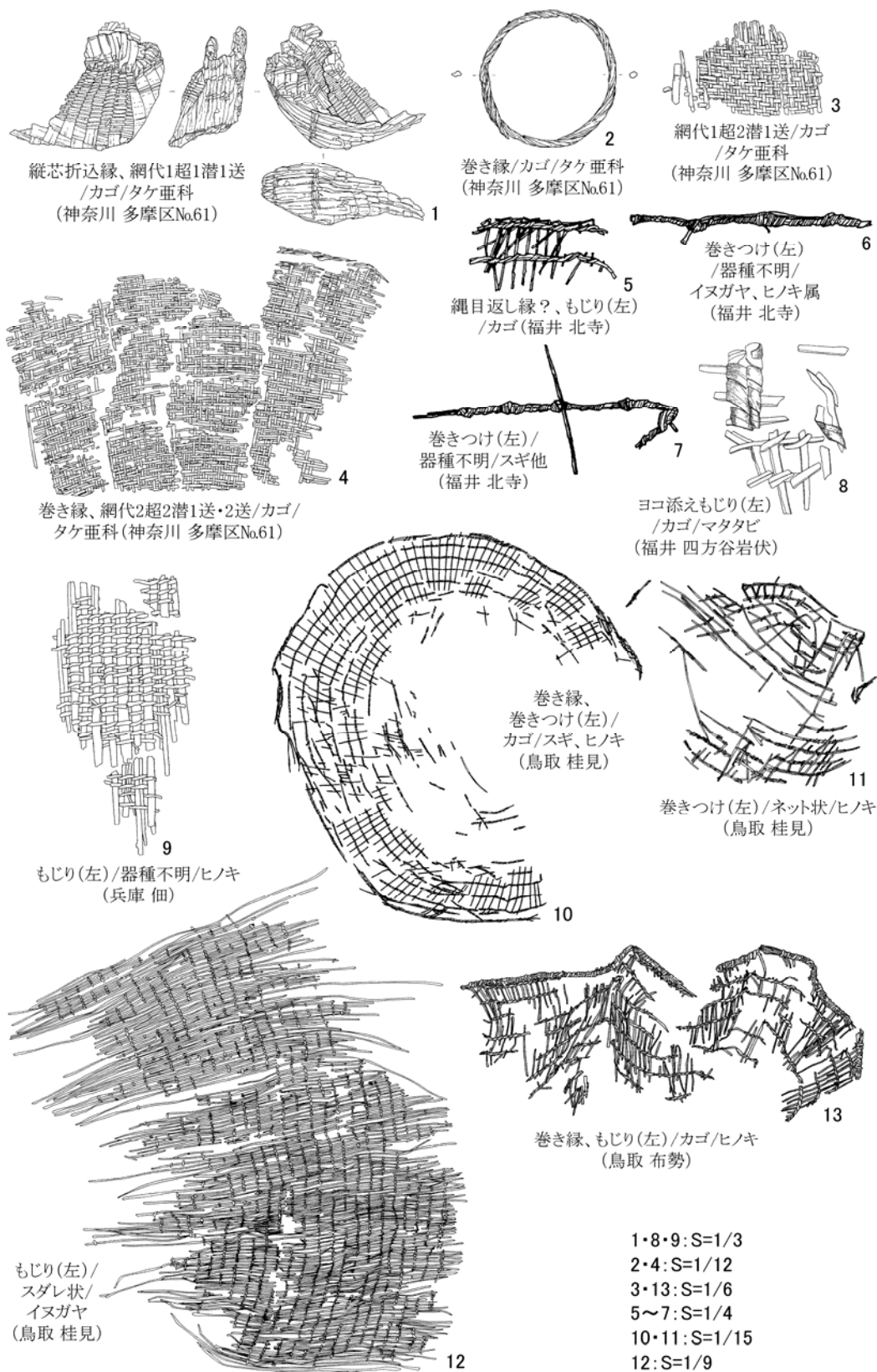


図22 縄文時代後期の編物実物資料2 (実測図は各報告より転載、一部改変)

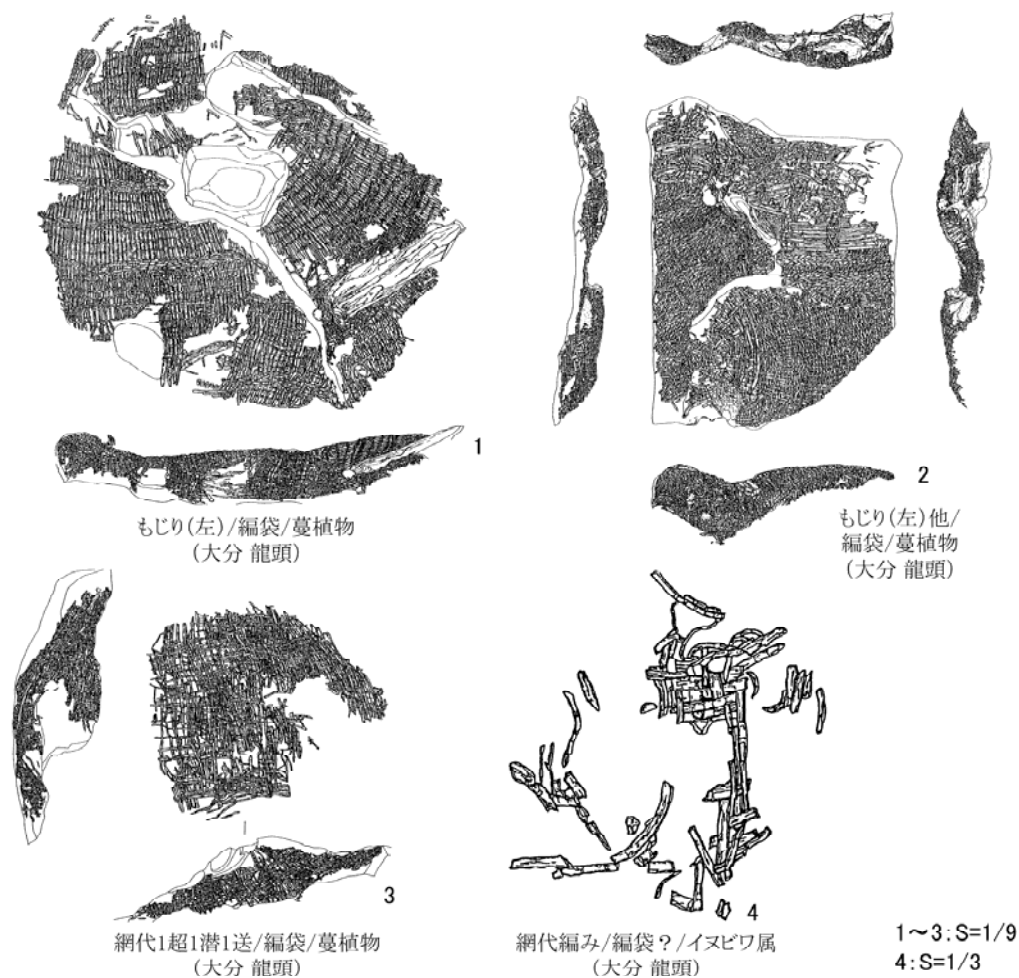


図23 縄文時代後期の編物実物資料3 (実測図は各報告より転載)

返し巻き縁、矢筈巻き縁(図21-8)の各種が確認できる。器種も実に豊富で、カゴ(図21-3・7~11・15、図22-1~5・8・10・13)、編袋(図23-1~3・4?)、籃胎漆器、釜?(図21-13)、敷物(図21-1・4・14)、ネット状編物(図22-11)、スダレ状編物(図22-12)、編布(図21-2)などがある。ただし籃胎漆器は、晩期の東日本に多く見られることから(詳細は後述)、特に中山遺跡や寺野東遺跡の資料は後期よりも晩期に位置づけた方が妥当なように思われる。また素材は、タケササ類(鈴木・能城 1989、戸田 1998、大熊ほか2006、鈴木・佐々木 2006)、メダケ属(大越 1984)、スギ(植田・辻 1992、古川ほか 1996)、ヒノキ(嶋倉 1981、谷岡・中原・瀧川 1989、古川ほか 1996、渡辺 1983・1998b)、ヒノキ属(植田・辻 1992)、アスナロ(植田 2003)、イヌガヤ(植田・辻 1992、古川ほか 1996)、カヤ(谷岡・中原・瀧川 1989)、不明針葉樹(植田・辻 1992)、広葉樹(パリノ・サーヴェイ 1999b)、オヒョウ(布目 1989a)、ノリウツギ(鈴木 2009)、イヌビワ属(パリ

ノ・サーヴェイ 1999b)、樹皮(植田 2003、谷岡・中原・瀧川 1989)、蔓植物(パリノ・サーヴェイ 1999b)、マタタビ(植田 2003)、テイカカズラ属(熊代 2006)、ウドカズラ(熊代 2006)、草本単子葉類(谷岡・中原・瀧川 1989・1990)、草本双子葉類(大熊ほか2006)、イラクサ科?(吉本 2010)、アカソ(布目 1989a)、アシ(永岡 2002、渡部ほか 1990)が同定されている。

縄文時代後期は、資料の豊富さに起因する情報量の多さこそが、ある意味最大の特徴である。そのため、編み方・器種・素材の相関関係が、かなり明確になる。具体的には、関東地方を中心とする東日本(寿能遺跡、下宅部遺跡、弁天池遺跡、多摩区No.61遺跡、メノト遺跡)で広義の網代編みのカゴ類などにタケササ類が使用されていること(図21-5・8・10・12・13、図22-1・3・4)や、北陸地方から山陰地方(北寺遺跡、四方谷岩伏遺跡、佃遺跡、桂見遺跡、栗谷遺跡、布勢遺跡)にかけて広義のもじり編みのカゴ類などにスギ・ヒノキ・アスナロ・イヌガヤ・カヤといった針葉樹が使用されていること(図22-6・7・9~13)、北陸地方(四方谷岩伏遺跡)のヨコ添えもじり編みのカゴにマタタビが使用されていること(図22-8)、九州地方(正福寺遺跡、龍頭遺跡)のもじり編みのカゴ類・編袋にテイカカズラ属・ウドカズラを含む蔓植物が使用されていること(図23-1・2)、九州地方(龍頭遺跡)の網代編みの編袋?にイヌビワ属が使用されていること(図23-4)、忍路土場遺跡の網代編みの敷物に経条・緯条4~8本1組にした条材(種類不明)が使用されていること(図21-1)、米泉遺跡の編布にアカソが使用されていることなどが挙げられる。

出土状況については、遺物包含層や河道・流路を除けば、貯蔵穴(弁天池遺跡、四方谷岩伏遺跡、メノト遺跡、本郷大田下遺跡、栗谷遺跡、正福寺遺跡、曾畑貝塚、龍頭遺跡)、水場遺構(明神前遺跡)、墓坑(朱円遺跡)、作業場(忍路土場遺跡)などからの出土が確認できる。

以上のように縄文時代後期には、編み方・器種・素材の三大要素が地域ごとに相関関係を持っていたことや、編物が様々な場所・用途に使用されていたことが明らかである。これは、先史時代の編物のあり方を考える上できわめて重要であり、大いに注目される。

5) 縄文時代晩期

縄文時代晩期においても、全国各地の遺跡から編物実物資料が出土している。後期~晩期にまたがる資料を除いても、北海道社台1遺跡((財)北海道埋蔵文化財センター 1981)、青森県亀ヶ岡遺跡(清水ほか 1959、鈴木ほか 1984)、青森県是川中居遺跡(尾関 2002、



図24 縄文時代晩期の編物実物資料1 (実測図は各報告より転載、一部改変)

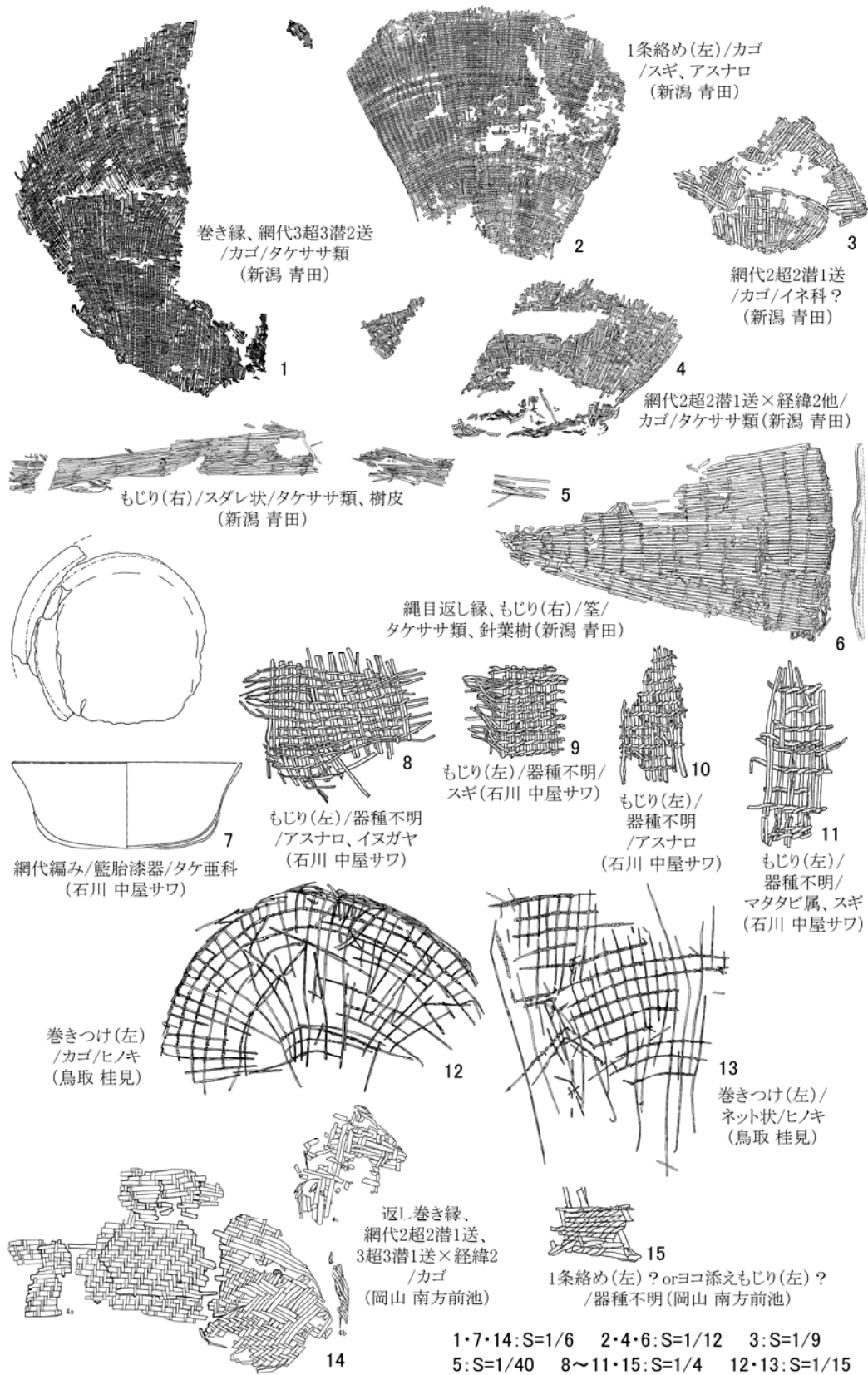


図25 縄文時代晩期の編物実物資料2 (実測図は各報告より転載、一部改変)

杉山 1942a、村木・小久保・杉山 2005)、青森県八幡崎遺跡(工藤 1979)、青森県土井 I 号遺跡(工藤 1993)、青森県石郷遺跡(村越・葛西ほか 1979)、宮城県山王岡遺跡(伊東・須藤 1985)、宮城県根岸遺跡(澁谷 1981)、秋田県中山遺跡(高橋ほか 1984)、秋田県戸平川遺跡(山田 2000)、福島県荒屋敷遺跡(小柴ほか 1990、渡辺1990)、埼玉県石神貝塚(金箱ほか 2003)、新潟県野地遺跡(渡邊・坂上ほか 2009)、新潟県寺地遺跡(寺村・青木・関ほか 1987)、新潟県青田遺跡(荒川・石丸ほか 2004)、石川県米泉遺跡(西野・岡本ほか 1989)、石川県中屋サワ遺跡(楠・谷口・前田・向井 2009)、石川県鹿首モリガフチ遺跡(山本 1989)、愛知県神郷下遺跡(田端ほか 1975)、鳥取県桂見遺跡(牧本・小谷・高垣ほか 1996)、岡山県南方前池遺跡(近藤ほか 1995)、山口県岩田遺跡(潮見ほか 1974)、愛媛県船ヶ谷遺跡(長井・米倉・八木 1975)の諸例がある。

該期においても、先の縄文時代後期までと多くの共通点を持ちながら、様々な編み方の編物が認められる。具体的には、経条・緯条複数本1組を含む2本超え2本潜り1本送り、1本超え1本潜り1本送り、3本超え3本潜り2本送りなどの広義の網代編み(図24-1・3・8・10~16、図25-1・3・4・7・14)や、ヨコ添えもじり編み・1条絡め編み・巻きつけを含む広義のもじり編み(図24-4・7・9・14・17、図25-2・5・6・8~13・15)による各種編物が製作されている。カゴ類などの口縁部処理方法は、縦芯材折り込み縁(図24-10)、縄目返し縁(図24-12、図25-6)、巻き縁(図24-14、図25-1)、返し巻き縁(図25-14)が確認できる。器種は、カゴ(図24-7・10~14、図25-1~4・12・14)、籃胎漆器(図24-1~3・5・6・8・15・16、図25-7)、釜(図25-6)、ネット状編物(図25-13)、スタレ状編物(図25-5)、編布(図24-4・17)、網³⁸⁾などがある。素材は、タケササ類(金箱ほか 2003、嶋倉1990、鈴木・小川・能城 2004、楠・谷口・前田・向井 2009)、クマザサ類(清水ほか 1959)、針葉樹(鈴木・小川・能城 2004)、スギ(鈴木・小川・能城 2004、能城・佐々木・山本 2009)、ヒノキ(牧本・小谷・高垣ほか 1996)、アスナロ(鈴木・小川・能城 2004、能城・佐々木・山本 2009)、イヌガヤ(能城・佐々木・山本 2009)、樹皮(鈴木・小川・能城 2004)、マタタビ属(能城・佐々木・山本 2009)、草本単子葉類(鈴木・小川・能城 2004)、イネ科?(鈴木・小川・能城 2004)、カラムシ(布目 1989a)、アカソ(布目 1989b)が同定されている。

該期の編物の最大の特徴は、漆工芸との関係である。一部縄文時代後期に遡る可能性があるが、それらを除いても、東北地方・亀ヶ岡文化圏を中心に、北は北海道地方、南は北陸・東海地方まで(社台1遺跡、亀ヶ岡遺跡、是川中居遺跡、八幡崎遺跡、土井 I 号遺跡、

石郷遺跡、山王冢遺跡、根岸遺跡、戸平川遺跡、石神貝塚、野地遺跡、寺地遺跡、米泉遺跡、石川県中屋サワ遺跡、石川県鹿首モリガフチ遺跡、愛知県神郷下遺跡)、カゴに漆を塗布した籃胎漆器が多数出土している。これらの籃胎漆器には、かなり高度な漆工技術が用いられており、彩文を施すものも少なくない。出土状況などからも日常生活用品としての可能性は低く、おそらく祭祀的な性格の強い編物と思われる。なお、籃胎漆器の編み方は、確認できるものは全て広義の網代編み(体部：ザル目編みの類、底部：狭義の網代編み)であり、素材はタケササ類のようである。また、籃胎漆器以外の漆工芸関連資料として、漆漉し布に使用された編布も(縄文時代後期のものもあるが)この時期に目立つ(亀ヶ岡遺跡、是川中居遺跡、山王冢遺跡、中山遺跡、石神貝塚、野地遺跡、米泉遺跡)。該期における漆工芸の卓越に、編物が関わっていたことを示す資料として注目される。

籃胎漆器以外の編物についても、編み方・器種・素材の相関関係が確認できる。具体的には、東日本(荒屋敷遺跡、青田遺跡)の広義の網代編みのカゴ類にタケササ類が使用されていること(図24-10~13、図25-1・4)、概ね北陸地方から山陰地方(青田遺跡、中屋サワ遺跡、桂見遺跡)のもじり編みのカゴ類などにスギ・ヒノキ・アスナロ・イヌガヤといった針葉樹が使用されていること(図25-2・8~13)、北陸地方(中屋サワ遺跡)のもじり編みの編物にマタタビ属(能城・佐々木・山本 2009)が使用されていること(図25-11)、中山遺跡や米泉遺跡の編布にカラムシ(布目 1989a)やアカソ(布目 1989b)といったイラクサ科の植物が使用されていることなどが挙げられる。

出土状況については、遺物包含層や河道・流路を除けば、貯蔵穴(南方前池遺跡)、水場遺構(石神貝塚)、墓坑(社台1遺跡)、積石環状配石(寺地遺跡)、捨て場(是川中居遺跡)などからの出土が確認できる。

このように縄文時代晩期には、それまでと同様に、編み方・器種・素材の三大要素が地域ごとに相関関係を持ち、編物が様々な場所・用途に使用されていたようである。しかし、それだけではなく、該期に卓越した漆工芸との融合によって、編物がさらなる発展を見せた時期として位置づけられる。

第2節 弥生時代の編物実物資料

弥生時代に入っても、日本列島各地で各種編物が製作・使用されている。縄文時代ほど多くはないが、西日本を中心とする弥生時代遺跡(図26)から編物の実物資料が出土しており、当時の編物について編み方・器種・素材などの情報を得ることが可能である。

地点番号 遺跡名(所属時期または土器型式)

1. 国府関(後期末～古墳前期初頭) 2. 常代(中期主体)
3. 北島(中期後葉) 4. 池子(宮ノ台) 5. 千種(後期)
6. 江上A(後期) 7. 惣領浦之前(後期後半～末)
8. 江尻(後期末) 9. 萩市(後期後半～古墳前期)
10. 戸水C(後期後半) 11. 西念・南新保(後期)
12. 藤江B(中期後葉～後期) 13. 白江梯川(後期)
14. 八日市地方(中期前葉～後葉) 15. 有東(中期中葉～後葉)
16. 登呂(後期) 17. 松河戸(前期中葉) 18. 朝日(中期～後期)
19. 納所(前期) 20. 赤野井湾(中期～古墳前期主体)
21. 唐古・鍵(前期～中期) 22. 高宮八丁(前期中葉～中期中葉)
23. 鬼虎川(前期後半～中期後葉) 24. 恩智(中期)
25. 山賀(前期中葉・後期) 26. 亀井(中期後半)
27. 池上(中期中葉～後葉) 28. 井辺(後期～古墳前期)
29. 玉津田中(中期) 30. 丁・柳ヶ瀬(前期後半～中期初頭)
31. 青谷上寺地(前期末～古墳前期) 32. 福岡(前期)
33. 池ノ内(後期) 34. 上小紋(中期～古墳前期初頭)
35. 西川津(中期) 36. 津島(中期後葉～古墳前期初頭)
37. 南方(済生会)(中期) 38. 多肥松林(中期)
39. 釜ノ口(後期後葉) 40. 比恵(後期前葉)
41. 辻田(中期・後期後半) 42. 里田原(前期後半～中期初頭)

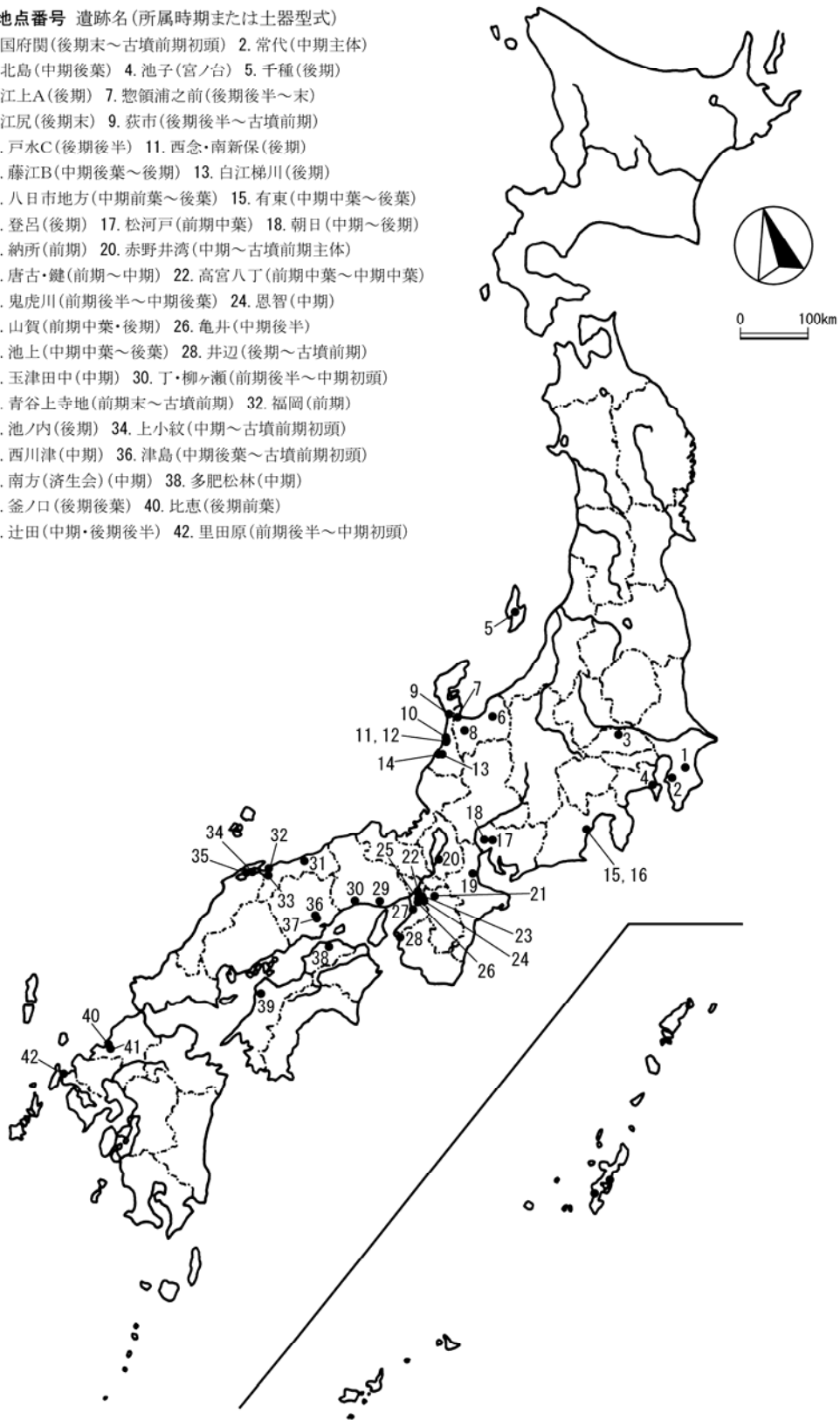


図26 弥生時代の編物実物資料が出土した遺跡の分布

それでは以下、縄文時代と同様に、弥生時代の各遺跡から出土した編物実物資料資料を、前期から後期まで時期別³⁹⁾に見ていきたい。

1) 弥生時代前期

弥生時代前期の編物実物資料は、ほとんどが西日本のものである。一部中期に下る可能性があるが⁴⁰⁾、愛知県松河戸遺跡(村松 2001)、三重県納所遺跡(伊藤 1980)、大阪府高宮八丁遺跡(塩山ほか 1989)、大阪府亀虎川遺跡(芋本ほか 1987)、大阪府山賀遺跡(西口・宮野・上西 1984)、兵庫県丁・柳ヶ瀬遺跡(渡辺 1985b)、奈良県唐古・鍵遺跡(小林・末永・藤岡 1976、渡辺 1994)、鳥取県福岡遺跡(渡辺 1993)、鳥取県青谷上寺地遺跡(野田 2005)、長崎県里田原遺跡(安楽・藤田 1975)の諸例がある。

編み方は、縄文時代以来の、経条・緯条複数本1組を含む2本超え2本潜り1本送り、1本超え1本潜り1本送りなどの広義の網代編み(図27-1)や、ヨコ添えもじり編み・1条絡め編みを含む広義のもじり編み(図27-2)に加え、巻き上げ編み(図27-3)が加わる。口縁部処理方法は、巻き縁(図27-2)などが確認できる。器種は、カゴ(図27-3)、笥(図27-2)、箕、敷物がある。素材は、タケササ類(小林・末永・藤岡 1976、村松 2001)、カヤ(カヤノキ)(西口・宮野・上西 1984)、マタタビ(金原 2005)、アケビ属(嶋倉 1993)、アケビ属またはアオツヅラフジ(嶋倉 1985)、イネ科またはカヤツリグサ科(嶋倉 1985)

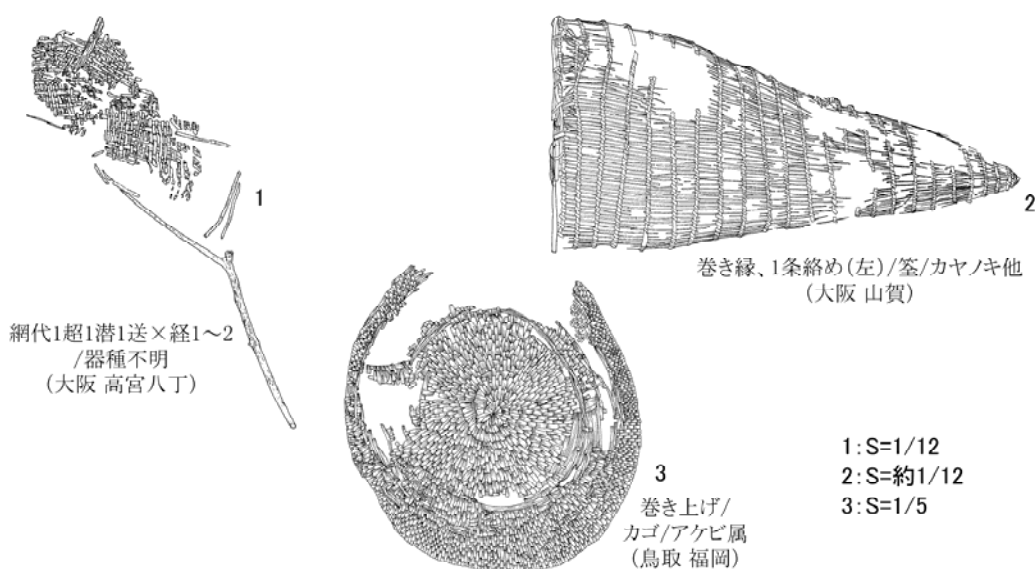


図27 弥生時代前期の編物実物資料 (実測図は各報告より転載)

が同定されている。

弥生時代前期に入って、縄文時代にあったものが見られなくなる一方、縄文時代になかったものが見られるようになる。該期に入って特徴的に見られなくなるものは、籃胎漆器と編布であり、逆に見られるようになるものは、巻き上げ編みの編物と箕である。

縄文時代晩期における漆工芸の卓越に関連して目立つ存在であった籃胎漆器および編布は、弥生時代前期以降ほとんど見られなくなる。前者の籃胎漆器は、弥生時代の確実な資料を確認できず⁴¹⁾、古墳時代以降も特殊な例があるくらいで⁴²⁾、縄文時代晩期の状況から一転して明らかに衰退している。後者の編布は、弥生時代中期に属する圧痕資料が存在し（渡辺 1985a）、さらに伝世品や民具の存在から、一部の地域で近現代まで残ったことが知られるが、実物資料・圧痕資料ともに確認できた縄文時代から見れば一気に激減したことがうかがえる。籃胎漆器が衰退した理由は、弥生時代における漆工文化そのものの衰退が関わっているものと推測され、編布が激減した理由は、機織技術の導入（編布から織布への移行）が関わっているものと推測される。

一方、弥生時代前期になって出現する巻き上げ編みの編物（図27-3）は、該期に属する資料が丁・柳ヶ瀬遺跡と福岡遺跡から出土している。これにより、網代編み系統・もじり編み系統・巻き上げ編み系統の三つが日本列島において出揃ったことになる。この巻き上げ編みの編物は、近現代においては稲ワラで製作されることが多く、弥生時代における稲作の伝来に関係して出現することが以前から指摘されていた（渡辺 1985b・1994）。現時点で遺跡から出土した編物実物資料を見ても、巻き上げ編みは弥生時代からの技法のようである。ただし、該期に属する巻き上げ編みの実物資料の素材は、アケビ属などが使用されており、稲ワラの使用は確認できていない。

また唐古・鍵遺跡や亀虎川遺跡から出土している箕は、弥生時代以降に特徴的な器種である。編み方は、ザル目編みの類が基本のようである。この箕は、穀物の選別などに用いるものであり、巻き上げ編みと同様、稲作の伝来との関係が推測される（渡辺 1994）。

なお、編み方・器種・素材の相関関係については、縄文時代ほどはっきりしないが、上述した巻き上げ編みの編物にアケビ属が使用されていることのほか、東海地方（松河戸遺跡）の広義の網代編みおよびヨコ添えもじり編みのカゴ類にタケササ類が使用されていることや、山陰地方（青谷上寺地遺跡）の広義の網代編みおよびヨコ添えもじり編みのカゴ類にマタタビが使用されていること、高宮八丁遺跡や唐古・鍵遺跡の網代編みの敷物に経条・緯条4本以上1組にした条材（種類不明）が使用されていることなどが指摘できよう。

出土状況については、遺物包含層や河道・流路からの出土が基本となる中、縄文時代に多く見られた貯蔵穴からの出土例が一部（高宮八丁遺跡）を除き、ほとんど見られなくなることが特徴的である。これは、縄文時代と弥生時代の生活文化の違い（貯蔵対象の食物の変化）が反映されているものと思われる。

以上のように弥生時代前期は、縄文時代以来の要素を受け継ぎつつも、生活文化の変化や技術革新によって一部の器種や用途が衰退・減少するとともに、新たな技法や器種が出現した時期なのである。それに伴い、新たな編み方・器種・素材の相関関係も生まれたようである。

2) 弥生時代中期

弥生時代中期の編物実物資料は、前期よりもかなり増える。一部後期以降に下る可能性がある⁴³⁾、前期～中期にまたがる資料を除いても、埼玉県北島遺跡（吉田 2003）、千葉県常代遺跡群（甲斐ほか 1996）、神奈川県池子遺跡群（山本・谷口 1999）、石川県八日市地方遺跡（橋本・福海・宮田 2003）、石川県藤江B遺跡（松山・三浦 2001）、静岡県有東遺跡（平野ほか 1983）、愛知県朝日遺跡（加藤・高橋・中川ほか 1982）、滋賀県赤野井湾遺跡（濱・芝池・田井中ほか 1998）、大阪府亀虎川遺跡（芋本ほか 1987）、大阪府恩智遺跡（毛利ほか 1980）、大阪府亀井遺跡（寺川・尾谷ほか 1980）、大阪府池上遺跡（小野・奥野 1978）、兵庫県玉津田中遺跡（別府・甲斐・鈴木ほか 1996）、奈良県唐古・鍵遺跡（小林・末永・藤岡 1976）、鳥取県青谷上寺地遺跡（野田 2005）、島根県西川津遺跡（内田 1988）、島根県上小紋遺跡（三宅・広江ほか 1987）、岡山県南方（済生会）遺跡（扇崎・安川 1997）、岡山県津島遺跡（金田ほか 2003）、香川県多肥松林遺跡（山下 1999）、福岡県辻田遺跡（小池ほか 1979）の諸例がある。

該期には、経条・緯条複数本1組を含む2本超え2本潜り1本送り、1本超え1本潜り1本送り、三方編み（六ツ目編み）などの広義の網代編み（図28-1～7・9・12・13、図29-1・3～6・8～14）や、ヨコ添えもじり編み・1条絡め編みを含む広義のもじり編み（図28-4・7～10・12、図29-2～4・6～10・13）による各種編物が製作されている。なお、確実に弥生時代中期に位置づけられる巻き上げ編みの資料は管見の限り見られないが、前期・後期とも存在が確認できることから、現時点で該期のものが出土していないだけであろう。カゴ類の口縁部処理法は、縄目返し縁（図28-4）、巻き縁（図28-2・3・7・9・12、図29-3・13）、矢筈巻き縁（図29-4・6～8・10）、当て縁（図28-11・13）の各種が確認できる。器種は、カ

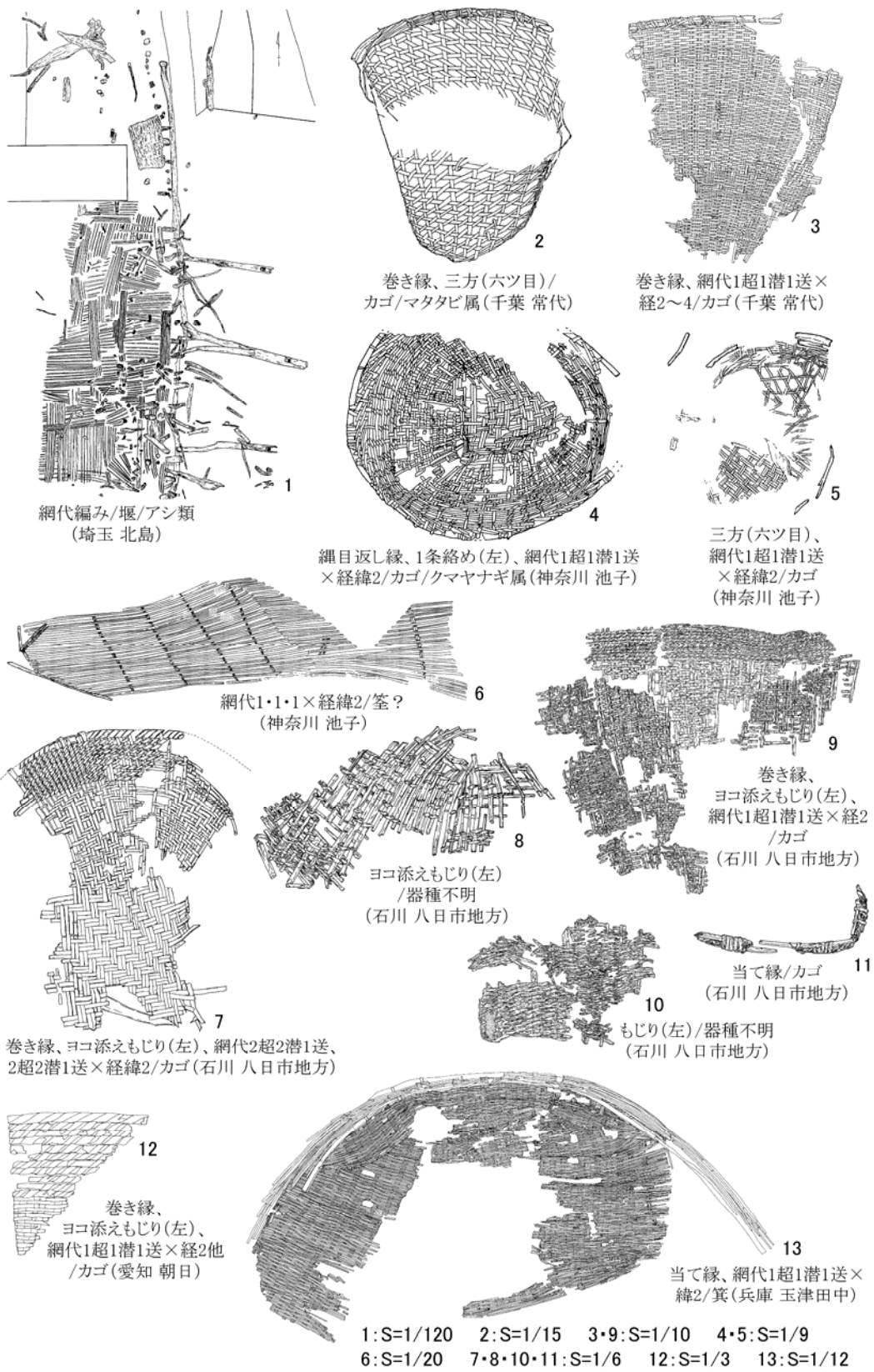


図28 弥生時代中期の編物実物資料1 (実測図は各報告より転載、一部改変)

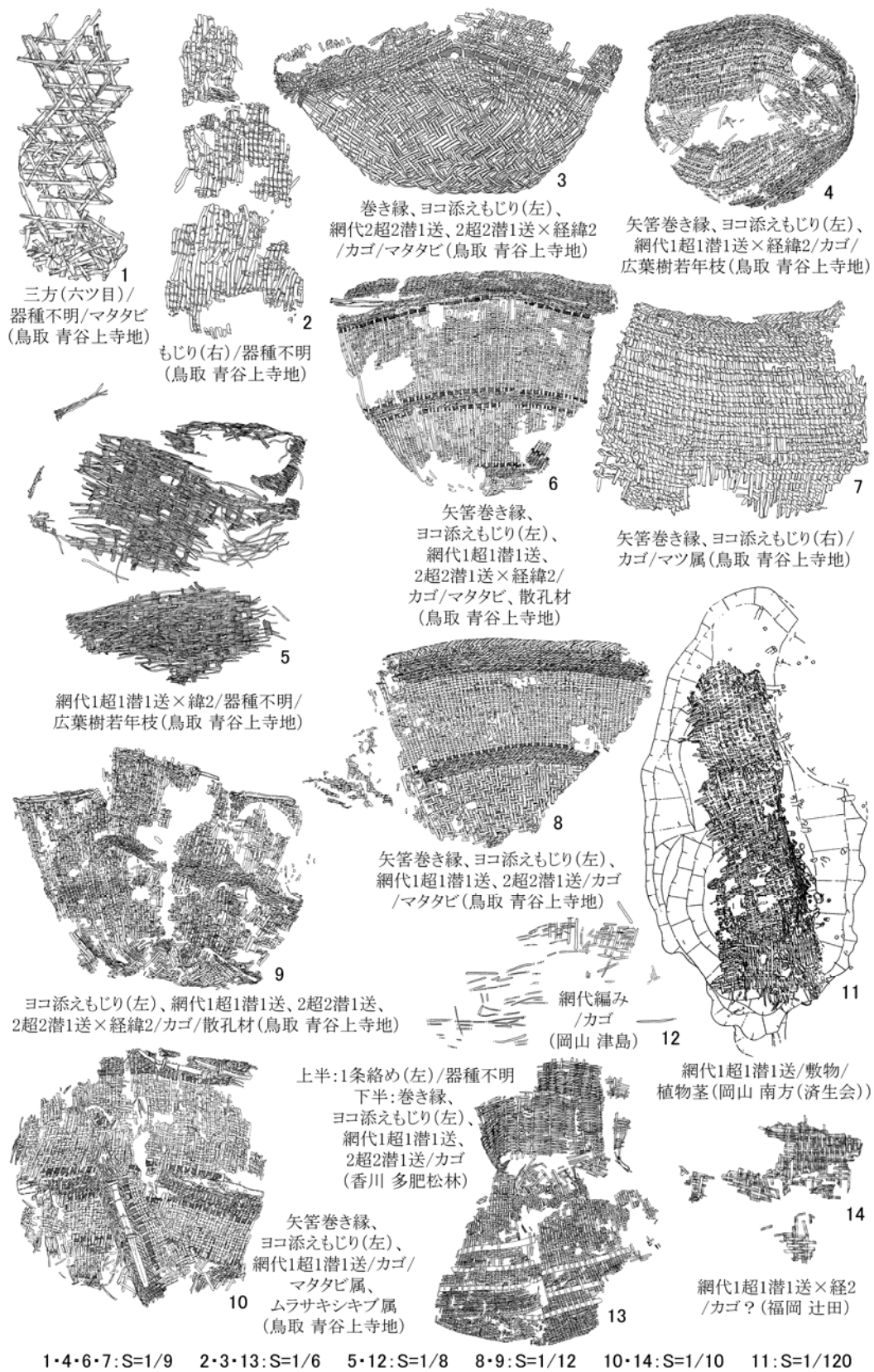


図29 弥生時代中期の編物実物資料2 (実測図は各報告より転載)

ゴ（図28-2～5・7・9・11・12、図29-3・4・6～10・12・13・14?）、箕（図28-13）、筥（図28-6?）、敷物（図29-11）、堰（図28-1）がある。素材は、タケササ類（加藤・高橋・中川ほか 1982）、マツ属（野田 2005）、広葉樹（金原 2005、野田 2005）、散孔材（金原 2005、野田 2005）、カエデ属（金原 2005）、ムクロジ?（金原 2005）、アラカシ（加藤・高橋・中川ほか 1982）、ムラサキシキブ属（野田 2005）、クマヤナギ属（鈴木・能城 1999）、マタタビ（属）（能城・鈴木 1996、金原 2005、野田 2005）などがある。

弥生時代中期の特徴として第一に挙げられるのが、カゴの定型化が明らかに進むことである。編み方のパターンや補強材（親骨）の入れ方、サイズの大小などに個体差はあるが、概ね口縁部を巻き縁または矢筈巻き縁とし、口縁部付近や体部中央などをヨコ添えもじり編み、体部を1本超え1本潜り1本送り（ザル目編み）や2本超え2本潜り1本送り（網代編み・飛びゴザ目編み・木目ゴザ目編み）で構成、底部を経条・緯条2本1組の2本超え2本潜り1本送らないし1本超え1本潜り1本送りとする鉢形のカゴ類が、西日本を中心とする各地（八日市地方遺跡、朝日遺跡、青谷上寺地遺跡、多肥松林遺跡など）で認められるのである（図28-7・9・12、図29-3・6・8～10・13）。弥生時代前期からそのような傾向がうかがえるが、資料の増加もあり、中期にはかなりはっきりしてくる。縄文時代のカゴ類も地域ごとにある程度の共通性を持っていたが、弥生時代のカゴ類はそれ以上に広範囲に渡って基本構成が共通するのである。もちろん、三方編み（六ツ目編み）（図28-2・5）など別種のカゴも製作されているが、この種の共通点の多いカゴの方が目立ち、当時のカゴ製作に関して一種の共通規範・共通理解のようなものがあったことが推測される。なお、これらのカゴの素材については、青谷上寺地遺跡では明らかにマタタビで占められているが、他の遺跡での傾向は不明である。

また、該期には、北島遺跡や常代遺跡群において網代編みの編物を配した堰が確認できる。縄文時代には巨大な構造物としてもじり編み・巻きつけによる魴が見られたが、弥生時代にも編物が巨大な構造物を構成するために用いられていたことが分かる。なお、これらの素材は、いずれもアシの類とされている。

該期における編み方・器種・素材の相関関係については、あまり明確ではないが、上述した青谷上寺地遺跡の定型化したカゴにマタタビが使用されていることのほかは、東海地方（朝日遺跡）の網代編みのカゴにタケササ類と推定される素材が使用されていることが、弥生時代前期の松河戸遺跡と共通して指摘できようか。また、素材の種類が断定できないが、各地（池子遺跡群、有東遺跡、唐古・鍵遺跡）の網代編みの敷物（の可能性のある編

物)に経条・緯条4本以上1組にした条材が使用されていることも、ある意味で編み方・器種・素材が相関的に決まっている例として見なすことができよう。

出土状況については、遺物包含層や河道・流路、溝を除けば、土坑(亀虎川遺跡、亀井遺跡、南方(済生会)遺跡)、竪穴住居跡(朝日遺跡)や池(津島遺跡)、木器溜まり・杭列(青谷上寺地遺跡)からの出土が確認できる。

以上のように弥生時代中期は、カゴの定型化が進むことに代表されるように、弥生時代の編物の特徴がより顕著になる時期として位置づけられる。

3) 弥生時代後期

弥生時代後期においても、各地の遺跡から編物実物資料が出土している。一部古墳時代に下る可能性があるが⁴⁴⁾、中期～後期にまたがる資料を除いても、千葉県国府関遺跡群(小久貫・菅谷ほか 1993)、新潟県千種遺跡(大場ほか 1953)、富山県江上A遺跡(久々ほか 1984)、富山県惣領浦之前遺跡(島田・新宅・朝田 2010)、富山県江尻遺跡(木下 2010)⁴⁵⁾、石川県西念・南新保遺跡(楠ほか 1989)、石川県白江梯川遺跡(久田・中川・本田・佐々木 2008)、石川県戸水C遺跡(山本 1987)、石川県荻市遺跡(川畑・沢辺 1998)、静岡県登呂遺跡(後藤・曾野ほか 1954)、愛知県朝日遺跡(加藤・高橋・中川ほか 1982)、滋賀県赤野井湾遺跡(濱・芝池・田井中ほか 1998)、大阪府山賀遺跡(杉本ほか 1983)、和歌山県井辺遺跡(井藤・末永・藤岡 1976)、鳥取県青谷上寺地遺跡(野田 2005)、鳥取県池ノ内遺跡(北浦ほか 1986)、岡山県津島遺跡(金田ほか 2003)、愛媛県釜ノ口遺跡(相原・山本・宮内ほか 1997)、福岡県辻田遺跡(小池ほか 1979)、福岡県比恵遺跡群(山口・牟田ほか 1990)の諸例がある。

該期には、経条・緯条複数本1組を含む2本超え2本潜り1本送り、1本超え1本潜り1本送り、三方編み(六ツ目編み)などの広義の網代編み(図30-1~9・12・13・15)や、ヨコ添えもじり編み・1条絡め編みを含む広義のもじり編み(図30-3~6・9・11・14・16)、巻き上げ編み(図30-10)による各種編物が製作されている。カゴ類の口縁部処理法は、巻き縁(図30-4・5・8?)、矢筈巻き縁(図30-9)、当て縁(図30-2)が確認できる。器種は、カゴ(図30-1・3~6・8~10・12・15)、箕(図30-2?・14?)、釜(図30-16)、敷物(図30-7?)がある。素材は、スギ(久田・中川・本田・佐々木 2008)、アスナロ(久田・中川・本田・佐々木 2008)、広葉樹(金原 2005、松本・林 1979)、ムクロジ(金原 2005)、マタタビ(属)(金原 2005、島田・新宅・朝田 2010)が同定されている。

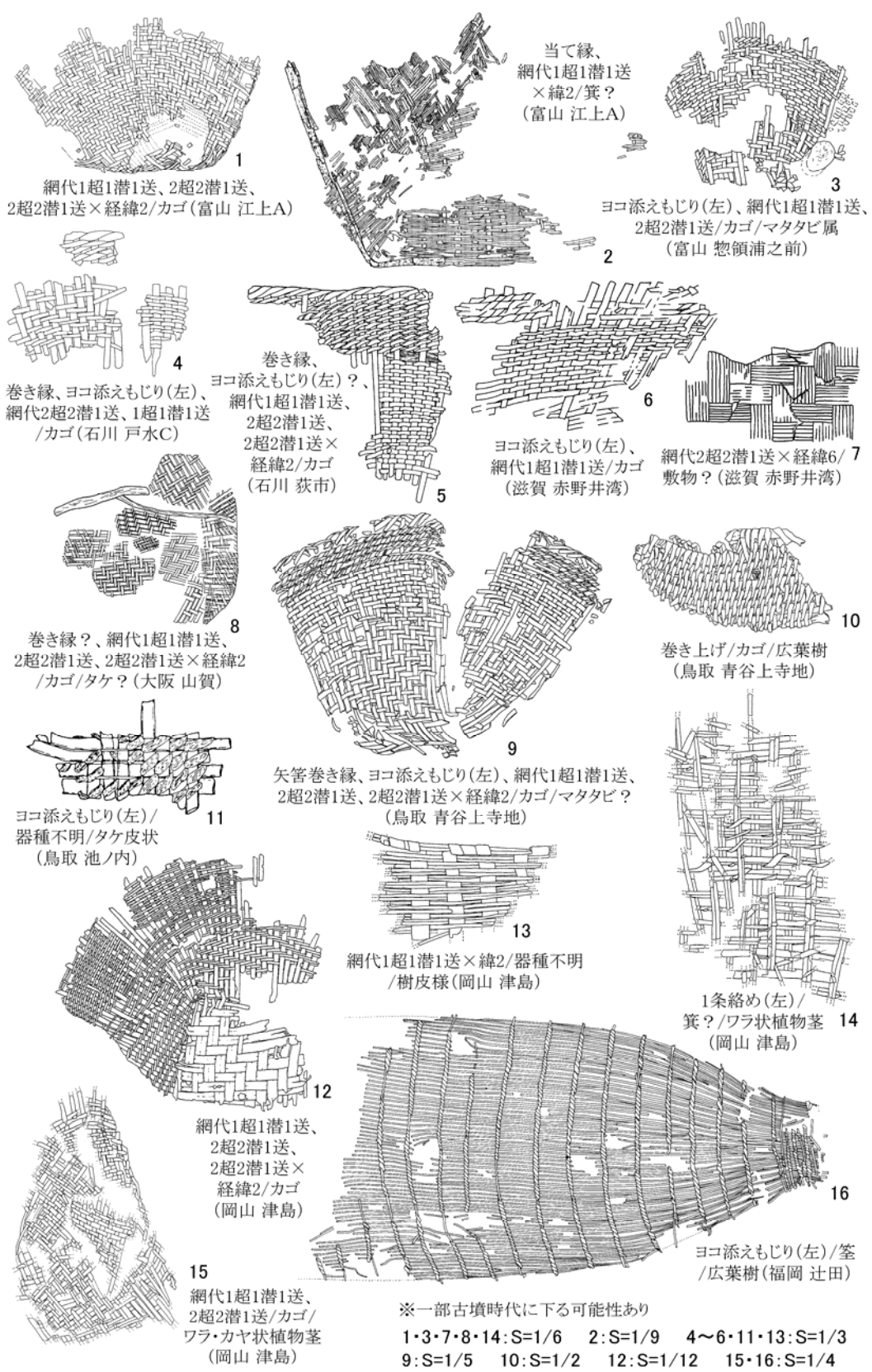


図30 弥生時代後期の編物実物資料 (実測図は各報告より転載)

該期においても、前期や中期に認められた弥生時代の編物の特徴（巻き上げ編み、箕？、カゴ）が引き続き認められる。中でも注目されるのが、各地（江上A遺跡、惣領浦之前遺跡、白江梯川遺跡、戸水C遺跡、荻市遺跡、赤野井湾遺跡、山賀遺跡、青谷上寺地遺跡、津島遺跡）で共通点の多いカゴ（図30-1・3～6、8・9・12・15?）が作られることで、該期にはより顕著に定型化している。やはりその基本構成は、口縁部が巻き縁または矢筈巻き縁、口縁部付近や体部中央などがヨコ添えもじり編み、体部が1本超え1本潜り1本送り（ザル目編み）や2本超え2本潜り1本送り（網代編み・飛びゴザ目編み・木目ゴザ目編み）で、底部が経条・緯条2本1組の2本超え2本潜り1本送りないし1本超え1本潜り1本送りとなっている。この種のカゴは、古墳時代に入っても使用されていたようで、弥生時代後期末～古墳時代後期に見られるカゴ型土器の圧痕原体（型取り技法の型に用いられたカゴ）も、同様の基本構成を持つ浅鉢形のカゴである。

該期においても、編み方・器種・素材の相関関係については、北陸地方（惣領浦之前遺跡）および山陰地方（青谷上寺地遺跡）の定型化したカゴにマタタビ（属）が使用されていることのほかは、素材の同定例が少ないこともあって分からないことが多い。ただし、同じく北陸地方の白江梯川遺跡から出土した同種のカゴは、スギ・アスナロといった針葉樹を素材としていることから、編み方などの基本構成が定型化しても、素材は必ずしも決まっていなかった可能性があることは指摘しておきたい。また、各地（国府関遺跡群、登呂遺跡、赤野井湾遺跡）の網代編みの敷物（の可能性がある編物）に経条・緯条5本以上1組の条材が使用されていること（図30-7）も、他時期と同様に素材が断定できないが、編み方・器種・素材の一種の相関関係を示すものとするべきであろう。

出土状況については、遺物包含層や河道・流路、溝を除けば、貯蔵穴（釜ノ口遺跡）、土坑（津島遺跡）、井戸（井辺遺跡、比恵遺跡群）などからの出土が確認できる。

以上のように弥生時代後期は、素材などに不明な点も未だあるが、概ね前期・中期に見られた編物の特徴を受け継ぎ、それが顕著になって、さらに古墳時代へとつながる時期ということになる。

第3節 小結

本章第1節・第2節において、日本列島先史時代（縄文時代・弥生時代）の編物実物資料を概観した。その中で得た知見を、ここで簡単にまとめておきたい。

まず、日本列島における編物実物資料は、古くは縄文時代早期から見られる。特に早期

後半には、いくつかの遺跡から良好な資料が見つかっており、当時すでに立体的なカゴ類が高い完成度で製作されていたことや、網代編み・もじり編みといった基本的な技法がほとんど出揃っていたこと、装飾・文様効果のある編物が製作されていたことなどが分かる。

次の縄文時代前期にも、早期に認められた網代編み・もじり編みの各技法を用いて、様々なカゴ類などが製作・使用されている。しかし、それだけではなく、新器種としてもじり編みの布である編布が出現している。また、出土遺跡の増加によって、この頃から編み方・器種・素材の三大要素の相関関係や地域性が少し見えてくるようになる。

縄文時代中期には、各技法をより広範に応用しながら、カゴや甕といった各種編物が製作・使用されている。三大要素の相関関係や地域性もより一層はっきりして、その多くが後期へとつながっていく。

資料が最も豊富な縄文時代後期には、中期以前よりも多くの編み方・器種・素材が認められ、それらが地域ごとに相関関係を持っていたことが明らかである。出土状況も多様で、各種編物が様々な場所・用途に使用されていたことが分かる。

縄文時代晩期にも、三大要素が地域ごとに相関関係を持ち、編物が様々な場所・用途に使用されていたことに変わらない。しかし該期には、当時の卓越した漆工芸を背景として、籃胎漆器と漆漉し布が特徴的に見られる。

弥生時代に入って、日本列島の編物に大きな変化が起きる。縄文時代以来の要素も少なからず受け継がれるが、弥生時代前期以降、籃胎漆器や編布がほとんど見られなくなり、逆に巻き上げ編みの編物と箕が見られるようになる。さらに編物の出土状況も変わり、縄文時代には多く見られた貯蔵穴からの出土例が一気に減少する。これらの変化は、弥生時代への移行に伴う生活文化の変化や技術革新に起因するものと見られ、新たな編み方・器種・素材の相関関係も生まれている。

続く弥生時代中期には、カゴの定型化が特徴的に進む。前期からそのような傾向があるが、特に該期以降は西日本を中心とする各地で基本構成が共通するカゴ類が目立つようになる。このことから、当時のカゴの製作には、何らかの共通規範・共通理解があった可能性が高い。

弥生時代後期においても、前期や中期に認められた弥生時代の編物の特徴が引き続き認められ、特にカゴの定型化はより顕著になっている。そして定型化したカゴなどの諸要素は、さらに古墳時代へと受け継がれていく。

このように日本列島先史時代の編物実物資料については、最古の資料が確認できる縄文

時代早期以来、多くの要素が連綿と受け継がれる一方で、ある時期に新たな要素が加わり、またある時期に一部の要素が衰退するという変遷をたどってきたことが分かる。その中で、いずれの時期においても編み方・器種・素材の特徴的な組み合わせが認められ、これら三大要素が少なからず相関関係を持っていたことが見て取れる。

第2章 中国大陸・朝鮮半島の編物実物資料

第1章では、日本列島における先史時代（縄文時代・弥生時代）の編物実物資料を、編み方・器種・素材の三大要素を中心に見た。東アジアの他地域においても、先史時代の低湿地遺跡から編物の実物が出土した例が知られる。そこで以下では、中国大陸・朝鮮半島の先史時代（主に新石器文化段階）に属する編物実物資料を、同様の視点から時期別⁴⁶⁾に見ていきたい。なお、本章・本論の分析対象とした各遺跡・各資料の詳細データについては、付表3：中国新石器時代の編物実物資料一覧表、付表4：中国初期青銅器時代の編物実物資料一覧表、付表5：朝鮮新石器時代の編物実物資料一覧表を参照されたい。

第1節 中国新石器時代・初期青銅器時代の編物実物資料

中国大陸における先史時代の編物実物資料は、どの地域の遺跡からでも出土しているわけではない。資料の分布は、明らかに長江下流域に集中する（図31）。これは、低湿地遺跡の調査が該地に集中しているためである。中国大陸の資料を見る上では、このような地域的な偏りを考慮する必要があるが、逆に長江下流域に限れば新石器時代前期から後期、さらに初期青銅器時代まで各時期の編物実物資料が出土しており、ある程度の変遷を追うことが可能である。

1) 中国新石器時代前期

管見の限り、中国大陸における最古の編物実物資料は、新石器時代前期後半のものである。長江下流域の跨湖橋文化に属する浙江省跨湖橋遺跡（浙江省文物考古研究所・蕭山博物館 2004）と、長江中流域の彭頭山文化に属する湖南省八十垱遺跡（湖南省文物考古研究所 2006）から、それぞれ編物実物資料が出土している。

いずれも編み方は、広義の網代編みの類である。もう少し詳しくいえば、跨湖橋遺跡・八十垱遺跡では2本超え2本潜り1本送り（中国でいう1経1緯人字紋、狭義の網代編み）がともに確認でき（図32-1・2・4）⁴⁷⁾、さらに八十垱遺跡では1本超え1本潜り1本送り（中国でいう密緯疎経十字紋、ザル目編み）が確認できる（図32-3）。器種は跨湖橋遺跡・八十垱遺跡ともに敷物（図32-1?・3・4）とされるものがあり、跨湖橋遺跡では一端が立ち上がって箕の可能性のあるもの（図32-3）も見つかっている。素材については、跨湖橋遺跡ではタケに似た素材との指摘があり、八十垱遺跡ではアシとされているが、いずれも植物

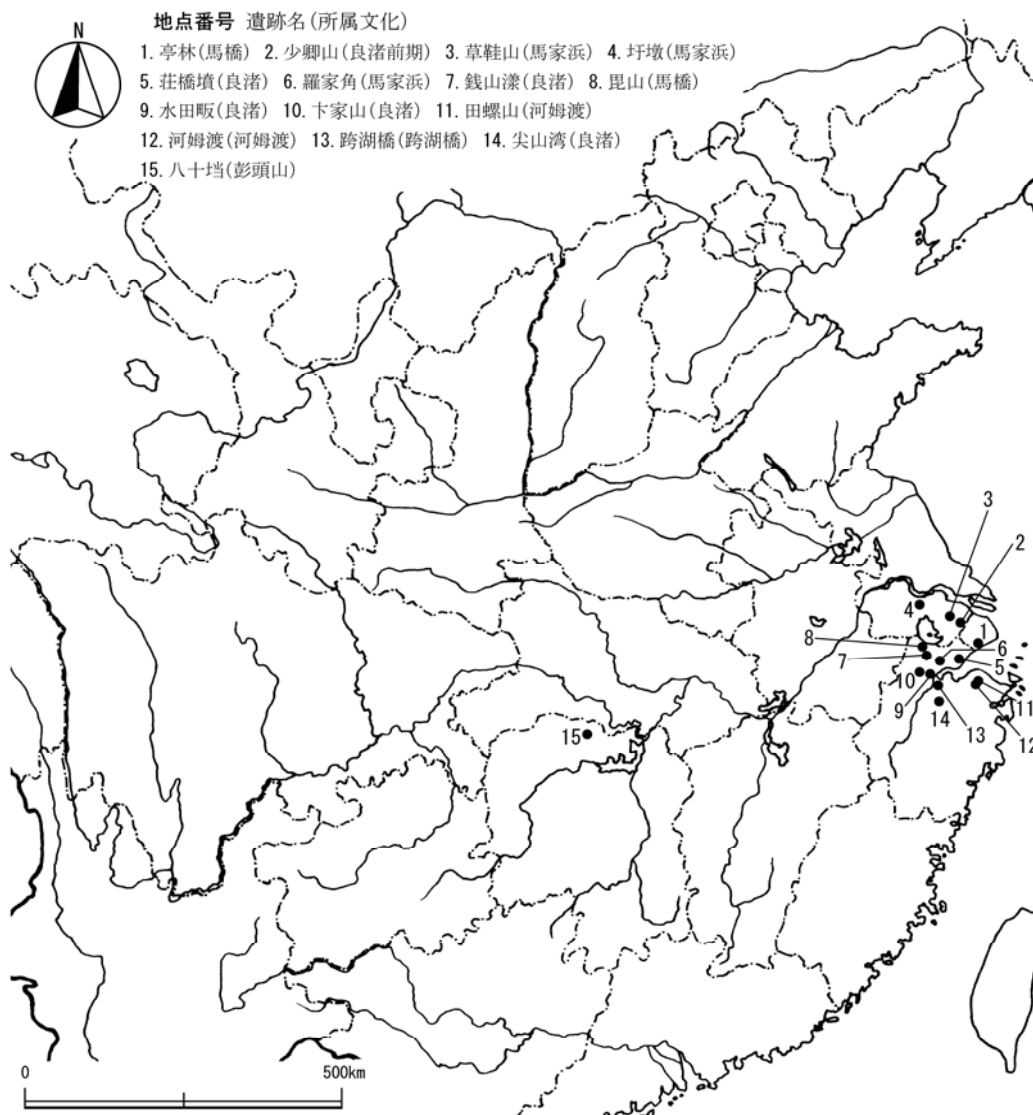


図31 中国新石器時代・初期青銅器時代の編物実物資料が出土した遺跡の分布

学的に同定されたものではないことに注意する必要がある。

出土状況については、跨湖橋遺跡において敷物の可能性がある編物（図32-1）が丸木舟関連遺構から出土していることが特殊な例として挙げられよう。

以上のように中国新石器時代前期においては、広義の網代編みを用いて平面的な編物・立体的な編物の両方が製作・使用されていたことが明らかである。しかし現時点では、長江下流域・中流域それぞれ1遺跡ずつの情報が得られるに過ぎず、該期の中国大陸における編物の実態に迫るには手がかりが足りない状況である。

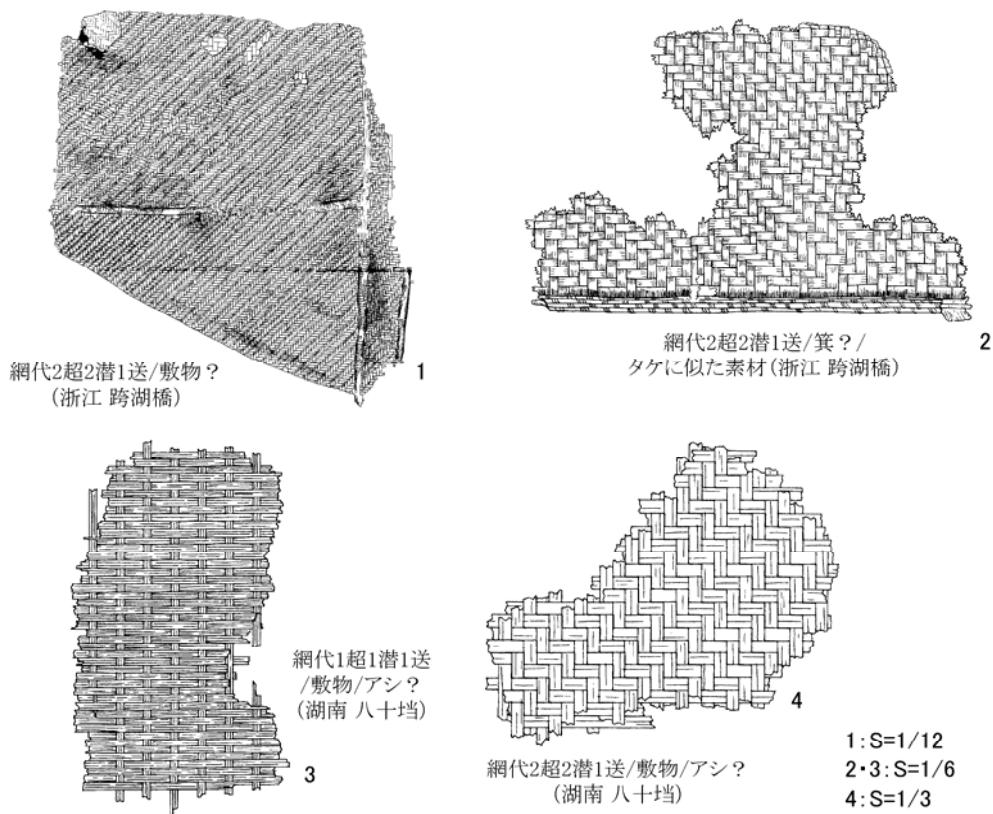


図32 中国新石器時代前期の編物実物資料 (実測図は各報告より転載)

2) 中国新石器時代中期

新石器時代中期になると、長江下流域の馬家浜文化および河姆渡文化に属する各遺跡から各種編物実物資料が出土している。馬家浜文化に属する遺跡としては江蘇省圩墩遺跡(常州市博物館 2001)、江蘇省草鞋山遺跡(南京博物院 1980)、浙江省羅家角遺跡(羅家角考古隊 1981)が挙げられ、一方河姆渡文化に属する遺跡としては浙江省田螺山遺跡(孫 2010)、浙江省河姆渡遺跡(浙江省文物考古研究所 2003)が挙げられる。これらのうち草鞋山遺跡では、編物だけでなくクズ⁴⁸⁾の織物も出土している。

該期には、経条・緯条4~8本1組の網代編み(中国でいう多経多緯式)や、3本超え2本潜りと3本超え4本潜りを繰り返して5本送る網代編み(中国でいう2経2緯人字紋)による各種編物が製作されている。器種は、敷物や壁材の可能性のあるものが各遺跡で認められる。素材は、草鞋山遺跡の資料についてタケとされているが、それ以外の遺跡の資料は全てアシとされている。ただし、これらの素材に関する所見も、前期の資料と同様に植物学的な同定を経たものではない。

該期には、編み方・器種・素材の相関関係もある程度うかがえる。具体的には、経条・緯条4～8本1組の網代編みが、馬家浜・河姆渡両文化（圩墩遺跡、草鞋山遺跡、田螺山遺跡、河姆渡遺跡）の敷物または壁材の可能性のある編物に用いられ、それらのほとんどが未同定ながらアシとされるような似た植物を素材としているのである。日本列島においても、素材は不明ながら経条・緯条4本以上1組の網代編みによる敷物（の可能性のあるもの）がしばしば見られる。このことから、面積の広い平面的な編物を製作するには、経条・緯条4本以上1組の網代編みが適していることがうかがわれる。

出土状況については、遺構に伴うものとして、建物跡（河姆渡遺跡）や灰坑（羅家角遺跡）からの出土が確認できる。

以上のように中国新石器時代中期については、不明な点も多いが、長江下流域の馬家浜文化・河姆渡文化において編み方・器種・素材の三大要素がある程度の相関関係を持っていたことは確かである。また該期には、同じ頃（編布が出現した縄文時代前期）の日本列島とは違って、すでに織物も存在しており、中国大陸（特に長江下流域）の編物のあり方を考える上で重要である。

3) 中国新石器時代後期

新石器時代後期になると、前期・中期よりも編物実物資料の数がかなり多くなる。いずれも良渚文化に属するもので、具体的には江蘇省少卿山遺跡（蘇州博物館・昆山市文化局ほか 2000）、浙江省莊橋墳遺跡（浙江省文物考古研究所・平湖市博物館 2005）、浙江省銭山漾遺跡（浙江省文物管理委員会 1960a）、浙江省水田畝遺跡（浙江省文物管理委員会 1960b）、浙江省卞家山遺跡⁴⁹⁾、浙江省尖山湾遺跡⁵⁰⁾の諸例がある。中でも、銭山漾遺跡は別格で、200点以上の編物が出土し、さらに絹を含む織物⁵¹⁾も出土している。

該期には多様な編み方が認められ、経条・緯条複数本1組を含む1本超え1本潜り1本送り（密緯疏経十字紋、ザル目編みの類）や、2本超え2本潜り1本送り（1経1緯人字紋）、3本超え3本潜り1本送り（1経1緯人字紋）、3本超え2本潜りと3本超え4本潜りを繰り返す5本送るもの（2経2緯人字紋）、三方編みの類（菱形紋・菱形花格・梅花眼）といった広義の網代編み（図33-1）など⁵²⁾による各種編物が製作されている。器種は、覆いや扉、帽子など様々な可能性が想定されているが、確実なところではカゴや壁材がある。素材は、未同定ながらタケやアシのほか、草本とされるものがある。なお、尖山湾遺跡の実物資料を筆者が実見した限りでは、ほとんどが節のある植物の割り裂き材であった。

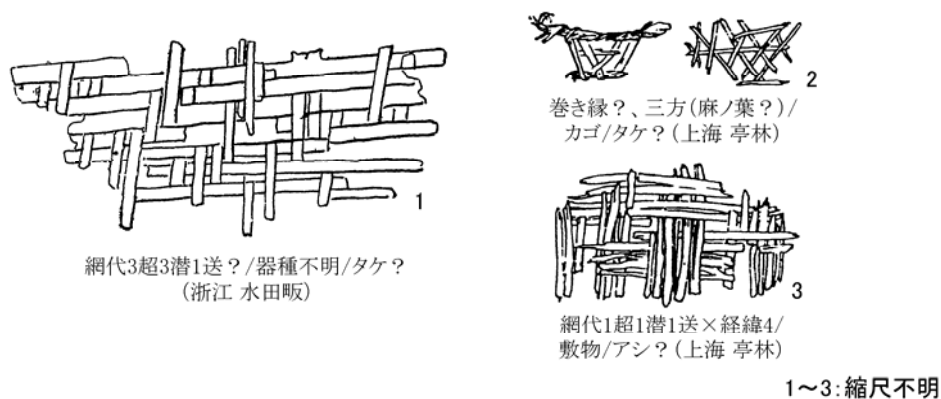


図33 中国新石器時代後期・初期青銅器時代の編物実物資料 (実測図は各報告より転載)

編み方・器種・素材の相関関係については、広義の網代編みのカゴにタケのような植物が使用されていることが指摘できる。

出土状況については、遺構に伴うものとして、住居跡（少卿山遺跡）や灰坑（莊橋墳遺跡）からの出土が確認できる。

以上のように中国新石器時代後期には、素材に不明な点が多いものの、長江下流域の良渚文化において多様な編み方が認められ、器種も様々なものが想定できるようになる。

4) 中国初期青銅器時代

初期青銅器時代の資料は、長江下流域の馬橋文化に属するものである。具体的には、上海市亭林遺跡（孫 1997）と浙江省昆山遺跡（浙江省文物考古研究所・湖州市博物館 2006）から各種編物実物資料が出土している。

編み方は、いずれも広義の網代編みであり、亭林遺跡では経条・緯条4本1組の1本超え1本潜り1本送りと三方編み（麻ノ葉編み?）が確認でき、昆山遺跡では2本超え2本潜り1本送りが確認できる。器種は、亭林遺跡・昆山遺跡ともにカゴ（図33-2）があり、亭林遺跡では敷物（図33-3）も見られる。カゴの口縁部処理方法については、亭林遺跡のものが巻き縁の可能性があり、昆山遺跡のものは縦芯材折り込み縁の類である。素材は、亭林遺跡で未同定ながらタケまたはアシとされ、昆山遺跡でもアシに似た植物とされている。

編み方・器種・素材の相関関係については、新石器時代にも見られたように、広義の網代編みのカゴ類にタケのような植物が使用されていることと、経条・緯条4本1組の網代編みの敷物にアシのような植物が使用されていることが挙げられよう。

なお、これらの資料はいずれも灰坑からの出土であるが、毘山遺跡の灰坑は単なる土坑の類ではなく井戸である。

以上のように初期青銅器時代には、資料不足で断言できないところもあるが、長江下流域において基本的に新石器時代と変わらない編物が製作・使用されていたようである。

第2節 朝鮮新石器時代の編物実物資料

朝鮮半島における新石器時代の編物実物資料としては、管見の限り、慶尚南道飛鳳里遺跡（任・李・金 2008）のものが知られる程度である。具体的には、新石器時代前期後半に属する貯蔵穴から出土した編袋（図34）で、編み方はもじり編みである。素材は、アシと推定されている。本資料を東アジアの他地域から出土した編物実物資料と見比べてみると、ほとんど広義の網代編みで占められる新石器時代の中国大陆には似た例が確認できないが、しいていえば縄文時代の九州地方に見られるもじり編みのカゴ・編袋に共通点が見出せようか。しかし、九州地方のもじり編みの編物は、主に蔓植物を素材としているようであり、飛鳳里遺跡の資料と全く同じとはいえない。ともかく、新石器時代の朝鮮半島にもじり編みが存在し、それによって編物が製作・使用されていたことだけは確かである。

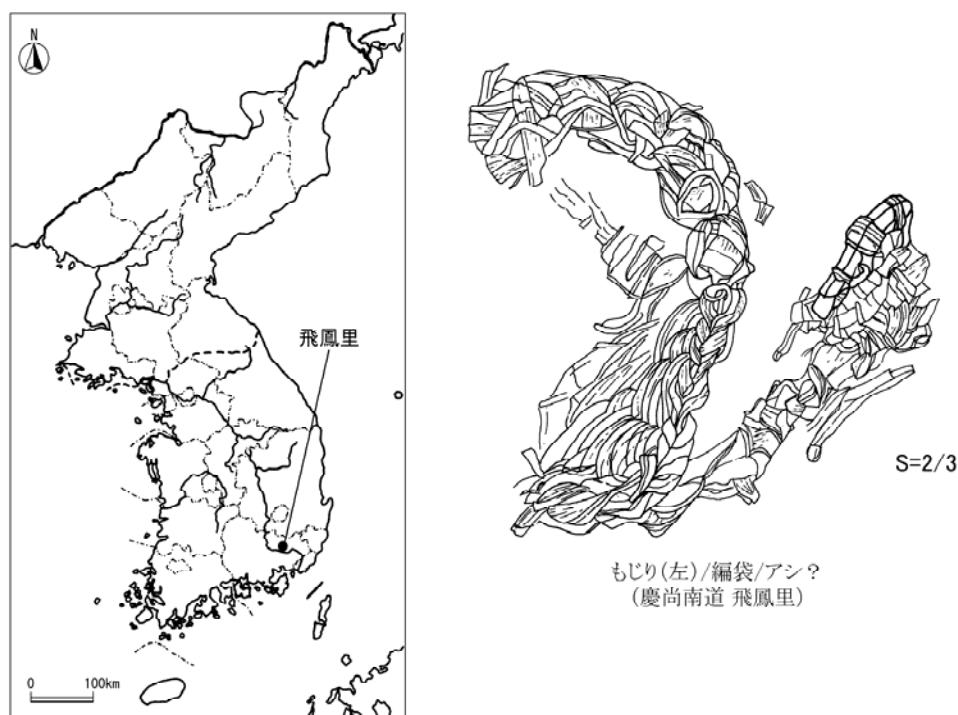


図34 朝鮮新石器時代の編物実物資料と出土遺跡の位置（実測図は原報告より転載）

第3節 小結

本章第1節・第2節において、新石器文化段階を中心とした中国大陸・朝鮮半島の先史時代の編物実物資料を概観した。その中で得た知見を以下にまとめておきたい。

中国大陸では、資料が長江流域に偏るものの、新石器時代前期前半から編物実物資料が見られる。長江下流域の跨湖橋文化と、長江中流域の彭頭山文化に属するもので、いずれも編み方は広義の網代編みである。該期・該地では、その広義の網代編みを用いて、平面的な編物・立体的な編物の両方が製作・使用されていたことが知られる。

続く新石器時代中期には、長江下流域で馬家浜文化および河姆渡文化に属する編物実物資料が見られる。該期・該地においても、（細かい編み方は前期と違えど）広義の網代編みによる編物が製作・使用されている。中には馬家浜・河姆渡両文化に共通して見られる編物もあり、編み方・器種・素材の相関関係もある程度うかがえる。なお、該期の中国大陸には編物だけでなく、すでに織物も存在している。

中国新石器時代後期については、長江下流域で良渚文化に属する諸遺跡から編物実物資料が多数出土している。該期・該地では、資料の豊富さを背景として、確認または想定できる編み方・器種のヴァリエーションが一気に増える。ただし、編み方は中期以前と同様に、広義の網代編みを基本とするようである。また該期には、中期とは異なる編み方・器種・素材の相関関係もうかがえる。さらに織物には絹も認められるようになり、編物・織物ともに発展傾向にあるような印象を受ける。

初期青銅器時代には、長江下流域の馬橋文化に属する遺跡で新石器時代とほぼ同様の資料が認められ、編物の基本は該期に入っても変わらないものと見られる。

このように中国大陸先史時代の編物については、特に長江下流域の新石器時代前期から同後期まで、広義の網代編みを軸に、編み方・器種の種類を増やしながらかつて諸要素が受け継がれていくように見える。そして、それが初期青銅器時代の編物にもつながっていくようである。素材については、新石器時代前期以来、タケやアシとされるものがあり、後期にはさらに草本とされるものも加わるが、いずれも植物学的な同定を待たず詳細は不明である。しかし、各地で似た植物を素材としていることも一つの所見であり、それも含めて中国大陸では編み方・器種・素材の三大要素が相関関係を持っていたものと見られる。

朝鮮半島先史時代の編物については、資料がきわめて少なく、新石器時代前期後半にもじり編みの立体的な編物が存在していたことが分かる程度である。

第3章 日本列島の編物圧痕資料

第1章・第2章で、東アジア先史時代の編物実物資料を見た。しかし、考古学における編物資料はそれだけではない。先史時代の土器には、器面に編物の圧痕が残されることがあり、そこから当時の編物の情報を得ることができるのである。本章では、縄文土器・弥生土器の底部に残された「敷物圧痕」（土器製作用敷物の圧痕）としての編物圧痕資料を、時期を追って見ていくことにしたい。加えて、日本列島の「敷物圧痕」には、編物以外の敷物（織布、植物の葉、ホタテ貝、鯨椎骨椎端板）の圧痕も存在する。ここでは、編物が土器製作用敷物の中でどのようなあり方をしていたのかを考えるために、これらの「敷物圧痕」も一緒に概観したい。各種圧痕については、基本的に序章第3節に示した分類（A～H類）に合わせて表記する。本章・本論の分析対象とした各遺跡・各資料の詳細データについては、付表6：日本列島先史時代の「敷物圧痕」資料一覧表、付表7：日本列島先史時代の網代圧痕素材一覧表を参照されたい⁵³⁾。なお、本章のうち特に縄文時代に関する部分は、過去の拙稿「縄文土器底部の「敷物圧痕」について」（松永 2008a）の一部に、資料を追加した上で加筆・修正をおこない再構成したものであることを断っておく。

第1節 縄文時代の「敷物圧痕」

日本列島では、縄文時代草創期から晩期までの全時期に、何らかの「敷物圧痕」の存在が確認できる。特に中期から後期には資料がきわめて多く、編物に関して実物資料よりも詳細な地域的・時期的特徴が抽出できるほどである。中期・後期以外の時期においても、編物圧痕をはじめとした様々な圧痕が認められ、日本列島各地で多様な土器製作用敷物が使用されていたことがうかがわれる。

1) 縄文時代草創期 (図35)

日本列島における最古の「敷物圧痕」資料は、縄文時代草創期前半にまで遡る。具体的には、鹿児島県三角山Ⅰ遺跡（藤崎・中村 2006）の隆帯文土器底部に、B-4R類の絡め編み圧痕が確認できる。きわめて珍しい資料であるが、これにより縄文時代のかかなり早い段階から広義のもじり編みが存在し、それを用いて作った敷物を土器製作時に敷いていたことが分かる。

草創期後半には、埼玉県打越遺跡（木村・中島 1988）の爪形文土器の底部にA-2・2・1



0 100km

地点番号 遺跡名(所属時期または土器型式)

- 1. 平和(下頃辺下層) 2. 共栄B(浦幌) 3. 暁(暁・沼尻)
- 4. 八千代A(暁) 5. 白座(白座) 6. 沢部Ⅱ(円筒下層a)
- 7. 経塚森(前期初頭～前葉) 8. 蟹子沢(前期末～中期前葉主体)
- 9. 大木(大木1・2) 10. 西林山(大木2a)
- 11. ムジナ岩(ムジナ岩Ⅰ) 12. 押出(大木4)
- 13. 羽白D(前期中葉～後葉) 14. 仲ノ縄B(大木4系)
- 15. 曹宮西(前期中葉～後葉主体) 16. 有馬崎(前期後葉)
- 17. 野中(花積下層) 18. 糸井宮前(前期後半)
- 19. 在家(前期後葉) 20. 打越(爪形文) 21. 塚屋(諸磯b)
- 22. 丸山東(前期前半) 23. 多摩ニュータウンNo.4(前期後半)
- 24. 多摩ニュータウンNo.424(前期後半) 25. 吉岡(花積下層)
- 26. 羽根尾(釈迦堂Z3) 27. 釈迦堂(塚越北A)(黒浜)
- 28. 金の尾(十三菩提) 29. 市道(諸磯b・c) 30. 松原(前期中葉)
- 31. 巾田(諸磯b) 32. 扇平(前期後葉～末) 33. 向原(黒浜)
- 34. 真脇XⅠ層(前期後葉～中期初頭) 35. 堂之上(神ノ木)
- 36. 仲道A(多縄文系) 37. 小路(川原田) 38. 庵ノ前(押型文)
- 39. 御領(出水下層) 40. 轟(轟B) 41. 弘法原(押型文)
- 42. 木脇(早期) 43. 跡江(出水下層)
- 44. 東原(貝殻条痕文) 45. 三角山Ⅰ(隆帯文)

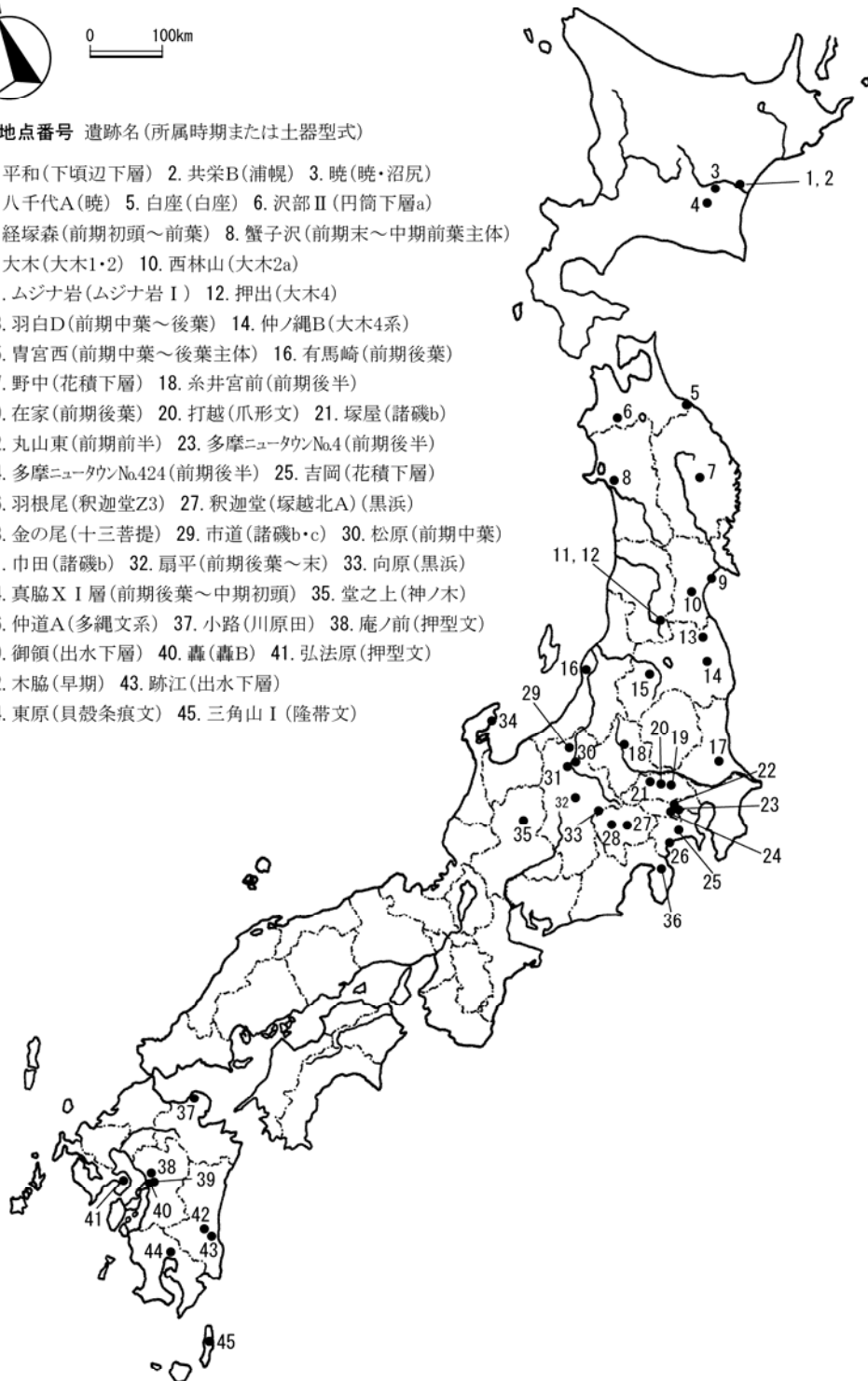


図35 縄文時代草創期～前期の主な「敷物圧痕」分析対象遺跡 (松永 2008aを改変)

×x類（素材はd²類か）と見られる網代圧痕が認められ、静岡県仲道A遺跡（漆畑・澁谷ほか 1986）では多縄文系土器の底部にA-1・1・1c¹類やA-1・1・1d²類、A-3・3・1a¹類などの網代圧痕が認められる。このことから、草創期後半には広義の網代編みも存在していたことが分かる。

このように縄文時代草創期には、すでに広義の網代編み・もじり編みが存在し、それらによる平面的な編物が土器製作用敷物として敷かれていたことが確実である。該期でもそれなりの技術水準であることから、編物の初源は後期旧石器時代まで遡ると考えた方が妥当であろう。残念ながら草創期の資料はきわめて少なく、今のところ上述した以上の情報が抽出できる状況にない。編物圧痕以外にも含めた各種「敷物圧痕」が各地で散見され、ある程度の地域的・時期的特徴が見出せるようになるのは、縄文時代早期以降である。

2) 縄文時代早期（図35）

縄文時代早期になると、資料が若干増え、草創期よりも広い範囲で「敷物圧痕」が見られるようになる。特に北海道地方や九州地方にある程度のまとまりがあり、局地的にはあるが地域的・時期的特徴も浮かび上がってくる。

該期の「敷物圧痕」で最も特徴的なのは、本論の主題である編物圧痕の類ではなく、F類のホタテ貝圧痕である。北海道暁遺跡（佐藤・北沢 1986、北沢 1988）や北海道八千代A遺跡（北沢ほか 1990）、北海道平和遺跡（大場・明石 1968）に代表されるように、北海道地方東部の早期中葉暁式土器とその系列土器にのみ見られる圧痕で、地域・時期ともに範囲の限定される独特の圧痕である。ホタテ貝は、東北地方以北の浅海に棲息するイタヤガイ科の二枚貝であるが、管見の限り東北地方では他時期も含め、F類の「敷物圧痕」は見られない。この種の圧痕が特定型式に伴うという点を重視すれば、暁式土器文化圏における一種の規範として土器製作時にはホタテ貝を敷くという共通認識があったことも推測できよう。また北海道共栄B遺跡（後藤ほか 1976）では、暁式に後続する早期後葉浦幌式土器の底部に、カシワと見られる木の葉を原体とするE-1類と、それを模して底部に葉脈状の沈線を刻む例が見られ、東北アジアに広く分布する「葉脈紋」の起源を示唆する資料として注目される⁵⁴。

早期の北海道地方には、八千代A遺跡のA-1・1・1×x類（素材はd²類か）や共栄B遺跡のA類（編み方など詳細不明）を除き、編物による圧痕がほとんどない。明確な理由は分からないが、該期・該地では自然物をそのまま土器製作時の敷物に使うことが多かったよう

である。

一方、九州地方でも、押型文土器および貝殻文土器の底部に「敷物圧痕」を残す例が認められる。ただし、こちらは北海道地方とは違い、A類の網代圧痕が多い。例えば長崎県弘法原遺跡⁵⁵⁾（高野ほか 1983）や熊本県庵ノ前遺跡（濱田 1997）、熊本県御領貝塚（下村 1976）、宮崎県木脇遺跡（倉永 2001）ではA-2・2・1×x類（素材はa¹・d²・e¹類）が認められ、鹿児島県東原遺跡（諏訪ほか 1978）ではA-1・1・1d²類⁵⁶⁾が認められる。さらに、弘法原遺跡、庵ノ前遺跡、木脇遺跡では、A類に加えてB類（B-1類？、B-3類？、B-4類）と見られる圧痕もあり、広義の網代編み・もじり編みがともに確認できる。その他の圧痕としてはE-1類の網状葉脈圧痕があり、弘法原遺跡や大分県小路遺跡（後藤 1995）、宮崎県跡江貝塚（岡元 1986）に類例がある。

該期の本州では、山形県ムジナ岩岩陰遺跡で早期前葉に属するA類（編み方など詳細不明）が1点見られる程度である（佐々木 1971）。しかし、これは本州の土器製作において敷物がほとんど使用されなかったことを示すものではない。丸底・尖底を基本とする早期段階の本州では、敷物を使用していたとしても圧痕として残る可能性はきわめて少なく、この状況は資料の性格上やむを得ない結果として理解されるべきであろう⁵⁷⁾。

以上のように縄文時代早期の「敷物圧痕」からは、量の多寡はともかく、自然物とともに広義の網代編み・もじり編みの編物が土器製作用敷物として使用されていたことが分かる。特に網代編みの敷物は、北海道地方から九州地方まで圧痕（A類）が散見され、日本列島各地の土器製作に使用されていたようである。

3) 縄文時代前期（図35）

縄文時代前期は、特に前半において「敷物圧痕」と呼べる資料が少ない。これは、早期に引き続き丸底・尖底の底部形態が多い上、東日本を中心として底部に連続刺突文や縄文を施す例も多く、底面に敷物の圧痕が残る余地がきわめて少ないためである。早期に資料が集中した北海道および九州地方でも、丸底・尖底が支配的となり、「敷物圧痕」はほとんど見られなくなる。しかし、本州では時期が下るにつれ、平底化が進むことにより資料は増加し、前期後葉にはある程度の地域性も確認することができる。

東北地方では、底部形態の平底化とほぼ連動して、A類の網代圧痕を中心に「敷物圧痕」が見られるようになる。古くは、前期前半の大木1⁵⁸⁾・2a式や円筒下層a式の頃から類例が知られ、以後各県で資料が散見される。主な遺跡としては、青森県白座遺跡（杉山・奥山

・滝沢ほか 1989)、青森県沢部Ⅱ号遺跡(村越ほか 1974)、岩手県経塚森遺跡(金子・藤村 1992)、宮城県大木貝塚(小笠原 1983a)、宮城県西林山遺跡(宮城県教育委員会 1987)、秋田県蟹子沢遺跡(栗澤・藤澤 1996)、山形県押出遺跡(佐々木・佐藤ほか 1990)、福島県羽白D遺跡(鈴鹿ほか 1987)、福島県仲ノ縄B遺跡(山岸・松本・七海・高橋 1993)、福島県冨宮西遺跡(芳賀・丹野 1990)などが挙げられる。

該期の東北地方には、A類・B類・E類の各種圧痕が認められるが、中には縄文時代中期以降に引き継がれるような強い地域性を持った「敷物圧痕」も少なくない。沢部Ⅱ号遺跡では、前期中葉円筒下層a式に属するA-1・1・1c²類が見られるが、これは植松なおみ氏が集成した「東北型網代圧痕」のうち最も古いものである(植松 1981)⁵⁹⁾。この種の圧痕は、縄文時代中期以降、東北地方北部を中心とした多雪地帯に分布するものであり、その初現的資料として注目される。白座遺跡や押出遺跡に見られるE-2類の平行葉脈圧痕も、以後多雪・寒冷地帯に分布する圧痕である。また、白座遺跡や蟹子沢遺跡で主体をなし、冨宮西遺跡でも1例見られるB-1類(ほとんどがL類)は、特に中期前半の東北地方から北陸地方にかけて多い「敷物圧痕」の古いものとして位置づけられる。

筆者が比較的まとまった資料の存在を知り得た福島県下の遺跡では、A-2・2・1類(素材はa¹類)、A-2・2・1×x類(素材はa¹・d²・e¹類)、A-1・1・1類(素材はa¹・c²類)、A-2・1・1類(素材はc¹・c²類)、E-1類などといった様々な「敷物圧痕」が見られる。A-2・2・1類・A-2・2・1×x類・A-1・1・1類・E-1類については、他地域・他時期にもよく見られるため、特別な地域性などを持つものではないようであるが⁶⁰⁾、A-2・1・1類は、従来東日本の基本的編み方とされてきたものである。縄文時代前期のA-2・1・1類は、この種の圧痕の中でも特に古いものということになるが、福島県のそれは、中期以降の東日本で主流となるA-2・1・1類とは素材(太さ・質感)が多少異なるような印象を受ける。また、北田勲氏・平野祐氏による集成・分析によれば(北田・平野 2007)、岩手県では前期初頭からこのA-2・1・1類の網代圧痕が認められるというが、具体的にどの遺跡のどの資料のことかは示されておらず詳細は不明である。

関東・甲信越地方では、古くは茨城県野中貝塚(江坂 1954)のA類(編み方など詳細不明)や神奈川県吉岡遺跡群(小宮山・阪本・砂田ほか 1997)のE-1類といった前期初頭花積下層式に属する資料が知られ、東京都丸山東遺跡(荻澤・鶴沢・安達 1995)では前期前半に属するA-1・1・1a¹類が確認できる。しかし、資料が充実してくるのは、中葉以降である。前期中葉以降・後半の主な遺跡には、群馬県糸井宮前遺跡(谷藤・関根ほか 1987)、

埼玉県在家遺跡（細田ほか 1991）、埼玉県塚屋遺跡（市川ほか 1983）、東京都多摩ニュータウンNo.4遺跡（川崎・小坂井・千野・小藁 1981）、東京都多摩ニュータウンNo.424遺跡（田中ほか 1984）、神奈川県羽根尾貝塚（戸田ほか 2003）、山梨県釈迦堂遺跡群塚越北A地区（小野ほか 1986）、山梨県金の尾遺跡（末木ほか 1987）、長野県市道遺跡（中村 2001）、長野県松原遺跡（上田ほか 1998）、長野県巾田遺跡（森島・笹沢 1966）、長野県向原遺跡（武藤・小林ほか 1988）、新潟県有馬崎遺跡（前山 1997）がある。

圧痕の種類としては、東北地方同様A類・B類・E類の各種が認められるが、基本的にA類が最も多く、E-1類がそれに次ぐ。ただし羽根尾貝塚や釈迦堂遺跡群塚越北A地区のように、明らかにE-1類のみで占められる遺跡もある。B類は全体としてはきわめて少なく、太平洋側の関東地方には皆無である。唯一、有馬崎遺跡では該期の「敷物圧痕」がB-1類（絡め方が分かるものは全てL類）で占められるが、これは関東・甲信越地方というよりも、むしろ東北地方から北陸地方にかけての日本海側地域という枠組みの中で捉えられるべき資料であろう。また市道遺跡では、前期後葉諸磯b式に属するB-2R類の編布圧痕が1点認められ、土器製作用敷物としての編布の存在も確認できる。

縄文時代前期の関東・甲信越地方における網代圧痕は不明瞭なものが多いが、例えば糸井宮前遺跡や在家遺跡、松原遺跡でA-2・2・1a¹類が、糸井宮前遺跡および金の尾遺跡⁶¹⁾でA-2・1・1類（素材はd¹類・d²類）が、巾田遺跡でA-1・1・1c²類が、松原遺跡でA-1・1・1d²類が確認できる。特に糸井宮前遺跡や金の尾遺跡のA-2・1・1類は、福島県下前期のそれとは異なり、縄文時代中期以降の東日本における典型的網代圧痕と同じかそれに近いものであるという点で注目される。

北陸・東海地方でも、岐阜県堂之上遺跡（戸田ほか 1997）で前期前葉の神ノ木式に属するE-1類が発見されており、この頃からすでに敷物の使用があったことは確実である。前期後半に属する「敷物圧痕」としては、石川県真脇遺跡X I層（前期後葉～中期初頭）⁶²⁾のB-1類・E-1類があり（山本 1986b）、中期への移行過程を示す資料として注目される。真脇遺跡X I層はさらに第19～23層の5層に細分されるが、下位の第22・23層（福浦上層式～真脇式主体）ではE-1類のみが見られるのに対し、上位の第19・20層（真脇式～新保式主体）ではB-1類が出現、E-1類を凌駕するのである⁶³⁾。この変移は、そのまま縄文時代中期前半の日本海側地域におけるB-1類の卓越へとつながっていく。

九州地方では縄文時代早期とは一変し、前期を通じて丸底土器（轟式・曾畑式）が主体となるため、圧痕が残る可能性がきわめて低くなる。しかし、熊本県轟貝塚で前期前葉轟

B式に属するB-1R類が確認されており（濱田・榊原1920）、土器製作用敷物としての編物の使用は引き続きおこなわれていたようである。

このように縄文時代前期には、特に後半を中心として、広義の網代編み・もじり編みによる各種編物圧痕（A類・B類）をはじめとした「敷物圧痕」が各地で認められる。そして資料の増加に伴って、縄文時代中期につながる地域の特徴も認められるようになる。加えて、実物資料と同様に該期から編布の存在（B-2R類）が確認できることも重要である。

4) 縄文時代中期～後期（図36・37）

縄文時代中期と後期については、両時期（特に中期後葉～後期前半）にまたがる資料が非常に多いので、一括して見ていくことにしたい。縄文時代中期に入って、底部に「敷物圧痕」を有する土器の数は急増する。平底の定着が最大の要因であると思われるが、一部の地方を除きほぼ全国的に資料が見られるようになり、地域差も明確になる。さらに中期前半と後半で圧痕の種類と分布に違いが認められ、概して中期後半の状況が、後期に至って資料数・分布域ともにより顕著になるという変遷をたどる。その後、後期後半になると、資料は再び減少傾向を見せ始める。

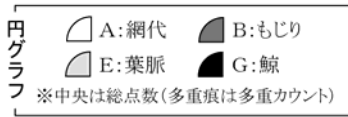
北海道地方では、中期前半の資料として、円筒上層b式に属するサイベ沢遺跡（児玉・大場・武内 1958）のB-1L類がある。続く中期後半では小岱遺跡（鬼柳ほか 1986）、後期前半では新道4遺跡（葛西ほか 1986）や原歌遺跡（松崎・長内・福田 1998）、大津遺跡（斉藤 1974）などがあり、これらの遺跡ではA-1・1・1c²類やB-1L類、あるいはさらにE-1類が見られる。これらのうちA-1・1・1c²類はいわゆる東北型網代圧痕であり、B-1類も東北地方から北陸地方に多い「敷物圧痕」である。上記の遺跡の位置が北海道地方南西部に集中している点から見ても、縄文時代中期から後期の北海道における「敷物圧痕」の背景に、円筒土器文化圏形成以来より続く東北地方北部からの影響があることは間違いない。

東北地方では、中期前半にB-1類のスタレ状圧痕が特徴的に見られる。A類やE類も少ないが、前期を継承した特色として、東北地方から北陸地方にかけての広範囲に共通するB-1類の卓越が最も注目される。該期にB-1類（ほとんどがL類）が見られた主な遺跡を挙げると、青森県三内丸山遺跡（岡田・阿部・齋藤・小笠原 1997）、岩手県上八木田V遺跡（平井 1992）、宮城県中ノ内A遺跡（宮城県教育委員会 1987）、秋田県宝竜堂遺跡（柴田・桜田・高橋 1991）、山形県原の内A遺跡（佐藤・長橋 1983）などがある。ちょうど縄文時代前期後葉から中期前葉は、様々な文化的要素において東北地方と北陸地方の関係

地点番号 遺跡名(所属時期または土器型式)



図36 縄文時代中期~後期の主な「敷物圧痕」分析対象遺跡 (松永 2008aを改変)



※図36の続き

- 108. 蛭塚(後期中葉～晩期前葉)
- 109. 内田町(中期後葉～後期中葉)
- 110. 権現山(山の神・後期初頭～前葉) 111. 朝日(後期初頭)
- 112. 権現坂(後期中葉) 113. 宮山(中津)
- 114. 垂水A(中期後葉～後期初頭) 115. 新徳寺(後期初頭～前葉)
- 116. 正楽寺(後期前葉～中葉) 117. 林・石田(後期初頭～前葉)
- 118. 赤野井湾(後期) 119. 栗津湖底(中期前葉)
- 120. 北白川御倉町(北白川上層) 121. 桑飼下(桑飼下)
- 122. 平(新保) 123. 大川(中期末～後期末)
- 124. 宮滝(後期後半～晩期末) 125. 春木八幡山(宮滝)
- 126. 下尾井(後期前葉～中葉主体) 127. 溝の口(後期)
- 128. 佃(後期中葉～後葉) 129. 栗谷(中津主体)
- 130. 布勢(後期前葉) 131. 桂見(後期初頭～中葉)
- 132. 神原I(後期～晩期) 133. 永井(後期中葉)
- 134. 松ノ木(松ノ木) 135. 田村(彦崎K1主体) 136. 船戸(西平)
- 137. 下原(後期初頭～前葉) 138. 飯田二反田(後期前葉～中葉)
- 139. 宇野代(後期前葉～中葉) 140. 中村石丸(後期)
- 141. 山崎(後期) 142. 飛櫛(後期前半) 143. 矢風(阿高)
- 144. 竜王(阿高) 145. 徳藏谷(中期末～後期前半)
- 146. 坂の下(坂の下) 147. 黒橋(中期後半～後期前葉)
- 148. 阿高(阿高) 149. 轟(阿高) 150. 小浜(中期～後期)
- 151. 南福寺(南福寺) 152. 伊木力(中期後半～後期前半)
- 153. 有喜(阿高) 154. 丸野第2(後期前葉～中葉)
- 155. 崩野(後期前葉～中葉)
- 156. 宮之迫(中期後半～後期前葉)
- 157. 武(中期末～後期中葉)
- 158. 成川(指宿)
- 159. 帖地(後期前葉～中葉)
- 160. 出水(中期～後期中葉)

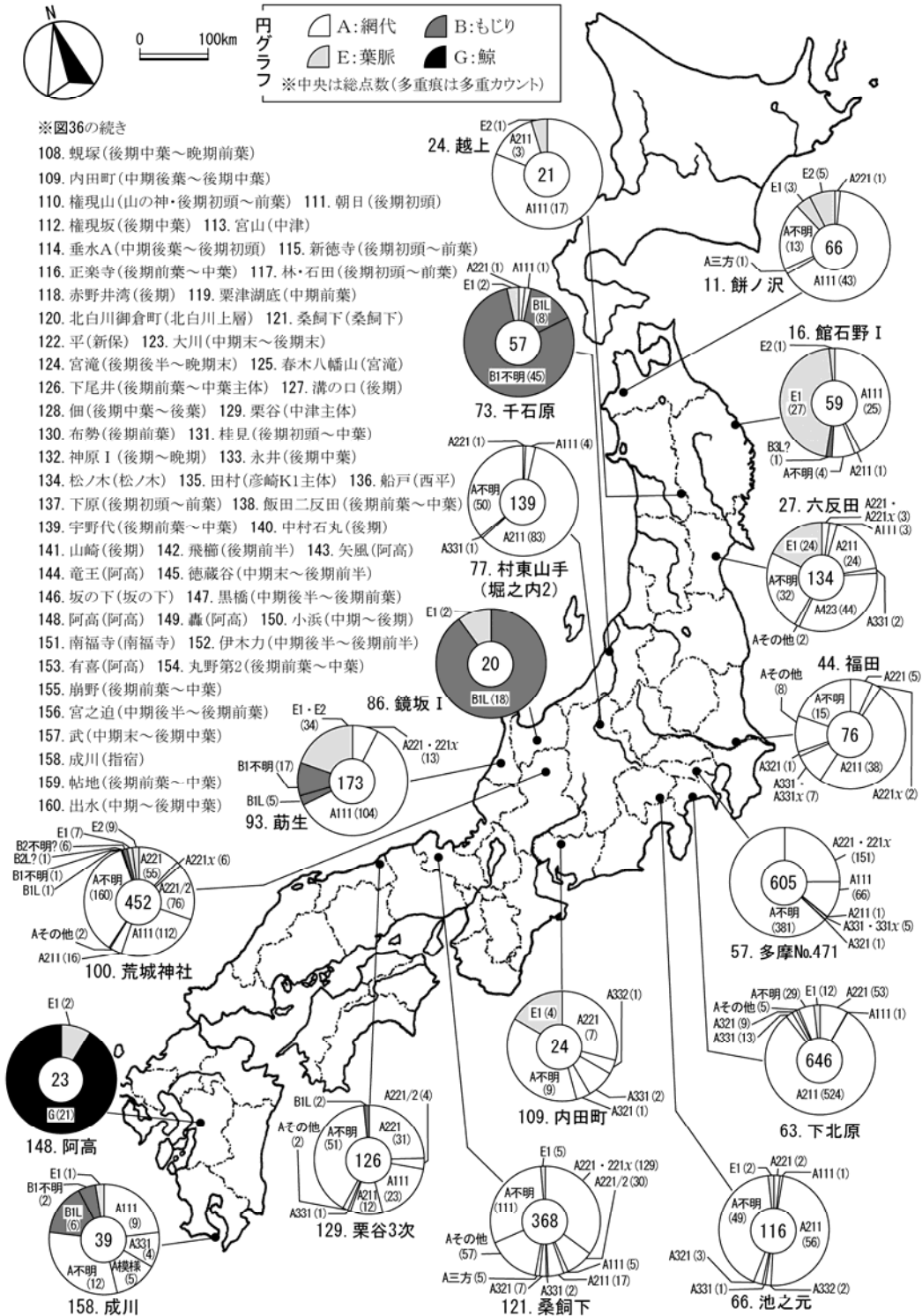


図37 縄文時代中期～後期の主な「敷物圧痕」圧痕比率 (松永 2008aを改変)

が密接な時期であり、日本海を中心とした交流の中でもじり編みによる敷物の利用が盛行したのではないだろうか。ただし中期後半以降も、本州のB類は日本海側に偏って分布することから、もじり編みの発達には植生などの環境的要因も少なからず関わっているものと思われる。

中期前半におけるB-1類以外の圧痕では、A類が多く、B-1類の数量を上回る遺跡も少ない。例えば岩手県本郷遺跡（酒井・小田野 1992）ではA-1・1・1c²類、A-2・1・1a¹類、A-2・1・1b²類などが、中ノ内A遺跡ではA-2・2・1/2a¹類、A-1・1・1c²類、A-2・1・1a¹類、A-4・2・3a¹類が、原の内A遺跡ではA-1・1・1c²類が確認できる。その他、E-1類やE-2類が伴うこともしばしばあり、特に後者は宮城県西林山遺跡（宮城県教育委員会 1987）に類例が見られるが、多雪・寒冷地帯特有の「敷物圧痕」として注目される。

中期後半に入って、東北地方の「敷物圧痕」は一変し、A類の網代圧痕が圧倒的に多くなる。そして以後、A類主体が基本となり、中期後葉から後期前葉にかけて資料数的に最大のピークを迎える。資料が減少傾向に向かう後期中葉以降も、A類が最もよく見られること自体は原則として変わらない。ただし一口にA類主体といっても、東北地方全体で単一の様相を示すわけではなく、地域によって網代の編み方や素材などに違いが認められる。

東北地方北部の特徴としては、筆者分類A-1・1・1c²類にほぼ相当する東北型網代圧痕⁶⁴⁾の卓越が挙げられる。この種の圧痕は、ちょうど縄文時代中期から後期を主たる時期として、北は北海道、南は鳥取県までの多雪地帯に見られるが、分布の中心は明らかに東北地方北部である。特に中期後葉から後期前葉にかけては圧倒的にこの種の圧痕が多く、他種のA類やB類は数少ない（E類については多い遺跡もある）。時期的な背景を考慮するなら、中期中葉に円筒式土器が終焉を迎え、新たに大木系土器文化圏を形成するに至って、土器製作用の敷物に一種の規範が確立したのだろうか。東北型網代圧痕が特徴的に見られた遺跡としては、青森県大石平遺跡（北林 1975）、青森県富ノ沢(1)遺跡（成田・奈良ほか 1991）、青森県富ノ沢(2)遺跡（北林 1975、成田・奈良ほか 1991、三宅・天間・鈴木ほか 1991）、青森県三内丸山遺跡（小笠原ほか 2000、岡田・中村・齋藤・小笠原 2002）、青森県餅ノ沢遺跡（太田原・野村 2000）、岩手県馬立Ⅰ・太田遺跡（田鎖 1988）、岩手県馬立Ⅱ遺跡（菊池・酒井・高橋 1988）、岩手県倍田Ⅳ遺跡（神・斎藤・藤村 1994）、岩手県館石野Ⅰ遺跡（菊池・岡内・高橋・山本ほか 1997）⁶⁵⁾、秋田県大湯遺跡（秋田県教育委員会1975）、秋田県越上遺跡（工藤ほか 1993）などがある。

東北地方南部では、A-2・1・1類主体が基本となり、従来でいうところの東日本的な特

徴を示す。素材はa¹類、b²類、c¹類、c²類、d¹類、d²類、e¹類と様々であるが、特にd¹類やe¹類が多く、後述する関東・甲信越地方と同様の規範が存在していたことが推測される。また別の見方をすれば、該地が東北地方北部と異なった様相を示すことを、縄文時代前期以来の土器文化圏などに見る南北差（大木式土器文化圏と円筒式土器・大木系土器文化圏など）に対応する文化現象として理解することもできよう。該期にA-2・1・1類が多数を占める遺跡には、岩手県下館銅屋遺跡（松本 1999）、宮城県西林山遺跡、宮城県二屋敷遺跡（加藤・阿部・小徳 1984）、山形県山居遺跡（氏家・志田 1998）、福島県獅子内遺跡（鈴鹿ほか 1996・1997・1998）、福島県弓手原A遺跡（山内・阿部・佐藤ほか1996、山内・鹿目・土井ほか 1997、山内・土井・佐藤 1998）などがある。ただし、下館銅屋遺跡や二屋敷遺跡ではE類（特にE-1類）の占める割合がかなり多く、山居遺跡では東北型網代圧痕を含むA-1・1・1類の占める割合が比較的多いなど、必ずしも東北地方南部が一様にA-2・1・1類主体というわけではないようである。

中期末から後期前葉を主とする宮城県および福島県の一部では、宮城県六反田遺跡（松岡 1981）に代表されるようにA-4・2・3類（素材はa¹類・c¹類・c²類）の存在が目立つ。宮城県では中ノ内A遺跡に中期前葉大木7式に属する資料が、福島県では八方塚A遺跡（山内・佐藤ほか 1999）に中期中葉大木8式に属する資料が確認できるが、中期末から後期前葉にかけての資料が多い（特に宮城県）。中でも六反田遺跡では、この種の圧痕が他種の圧痕を凌駕して主体となるほどである。しかし、該期の資料はA-4・2・3類を除けばA-2・1・1類やE-1類が多く、基本的には東北地方南部の枠組みの中で捉えて良いものと思われる。

さらに、主体にはならないが、中期前半に引き続いてB-1類やE-2類といった地域性の強い「敷物圧痕」も各県において少なからず見られる。これは、多雪・寒冷地帯といった環境的特徴をはじめとする東北地方の特色が、「敷物圧痕」の原体に大きく影響を及ぼしているためであろう。特に、E-2類の平行葉脈圧痕は、主として多雪・寒冷地帯に分布する葉の大きなチマキザサやチシマザサ（図38）が圧痕原体であると見られ、環境的要因を背景とした「敷物圧痕」であることは間違いない。B-1類の具体例としては、富ノ沢（2）遺

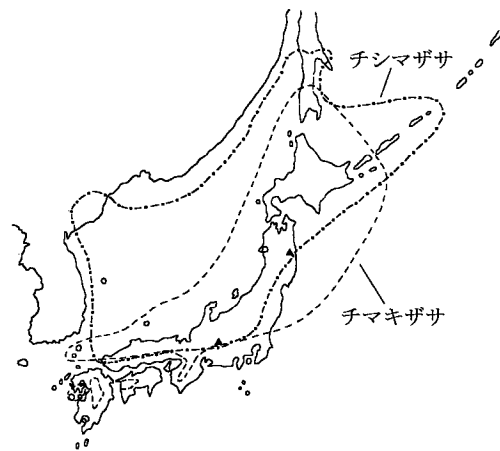


図38 チマキザサ・チシマザサの分布域
（杉本 1960よりトレースして合成・改変）

跡、山居遺跡などが挙げられ、E-2類の具体例としては、大石平遺跡、富ノ沢（1）遺跡、富ノ沢（2）遺跡、三内丸山遺跡、餅ノ沢遺跡、馬立Ⅰ・太田遺跡、馬立Ⅱ遺跡、館石野Ⅰ遺跡、下館銅屋遺跡、大湯遺跡、越上遺跡などが挙げられる。

関東・甲信越地方では中期前半に、新潟県を除きA類ないしE-1類が一般的となる。特に関東地方を中心に前者が多く、A-2・2・1類やA-2・2・1×x類、A-1・1・1類、A-2・1・1類、A-3・3・1類といった各種（素材はa¹類・d¹類・e¹類など）が認められる。該期の主な遺跡としては、茨城県前谷遺跡群（関口ほか 1998）、栃木県品川台遺跡（塚本 1992）、群馬県白井大宮Ⅱ遺跡（山口ほか 2002）、千葉県新橋遺跡（戸田ほか 1978）、千葉県栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡（山口・上守・田島 1991）、東京都下野谷遺跡（柳谷ほか 1998）、東京都木曾中学校遺跡（渡辺・川口・池田・大森ほか 1983）、東京都多摩ニュータウンNo.471遺跡（小葉ほか 1993）、神奈川県金沢文庫遺跡（山本・服部・谷口 1988）、神奈川県鶴巻上ノ窪遺跡（木村・柏木 1998）、山梨県日影田遺跡（山本・三田村ほか 1995）、山梨県上平出遺跡（長沢 1988）、長野県扇平遺跡（会田ほか 1974）などがある。

東日本の網代圧痕といえ、従来A-2・1・1類が基本となるといわれてきたが、この頃はまだ明確な規範がなかったのか、必ずしもこの種の圧痕が主体とはならない。木曾中学校遺跡や多摩ニュータウンNo.471遺跡などでは、A-2・2・1類やA-1・1・1類（素材は主にa¹類）の方がはるかに多く、明らかに異なった様相を示しているのである。しかし、他地方に比べてA-2・1・1類（素材はa¹類・d¹類・e¹類など）がよく見られることは紛れもない事実であり、中期中葉に向かうにつれてその割合を増していく。

唯一新潟県では、該期にB-1類（特にL類）のスタレ状圧痕が多く見られ、東北地方や北陸地方と同様の傾向を示す。吉野屋遺跡（新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1974）や千石原遺跡（中村・竹田・小林 1973）が好例であるが、A類やE類に比べて圧倒的にこの種の圧痕が多く、A類主体となる関東地方各都県とは対照的である。中期前半の新潟県には、関東・甲信越地方という概念は当てはまらず、縄文時代前期後葉に引き続き日本海側地域として理解した方が良いでしょう。ところでこのB-1類は、群馬県白井大宮Ⅱ遺跡でも1点（B-1L類）見られるが、北陸系浅鉢の底部に残された資料であり、やはり日本海側の所産という性格が強い。

中期後半に入って、新潟県を含めた関東・甲信越地方全体がA-2・1・1類（素材はd¹類・e¹類など⁶⁶⁾）主体に移行する⁶⁷⁾。後期にはさらにその傾向が強くなり、以前から指摘されていた東日本的な圧痕傾向にほぼ統一される。特に、資料が多い後期前葉の堀之内式から

中葉の加曾利B式の段階には顕著で、該期における土器製作用の敷物に、この種の網代編み製品を使用するという明確な規範が存在していた可能性が高い。それは、すでに述べたように同時期の東北地方南部とも共通する特徴である。このような中期後半から後期にかけての遺跡としては、茨城県福田貝塚（渡辺 1991a）、栃木県寺野東遺跡（江原ほか 1997・1999）、群馬県内匠上之宿遺跡（新井 1993）、群馬県行田梅木平遺跡（間宮 1997）、埼玉県寿能遺跡（吉川 1984）、埼玉県赤城遺跡（新屋 1988）、千葉県中野僧御堂遺跡（中村・齋木ほか 1977）、東京都平尾No.9遺跡（安孫子 1971）、神奈川県東正院遺跡（鈴木ほか 1972）、神奈川県下北原遺跡（鈴木ほか 1977）、神奈川県中里遺跡（村上・吉垣・谷口 1997）、山梨県池之元遺跡（須賀 1997）、長野県村東山手遺跡（鶴田・石原ほか 1999）、長野県尾越遺跡（大沢・今村・神村ほか 1972a）、新潟県多賀屋敷遺跡（駒形・松井・渡辺 1983）、新潟県三仏生遺跡（中村・寺村・松崎 1957）、新潟県兼俣遺跡（本間・室岡 1976）などが挙げられる。

もちろん、該期にA-2・1・1類以外の圧痕がないわけではなく、各種A類（編み方はA-2・2・1類、A-2・2・1×x類、A-1・1・1類、A-3・3・1類、A-3・2・1類など、素材はa¹類・c¹類・c²類・d²類・e¹類など）やE-1類は主体にはならないがよく見られる。また新潟県などではA-1・1・1c²類、E-2類といった多雪・寒冷地帯特有の圧痕も確認できる⁶⁸⁾。当時の土器製作用敷物にかなり明確な規範があったとしても、絶対的とまではいかない程度のものだったのであろう。

北陸・東海地方では、日本海側と太平洋側、東日本側と西日本側といった地域性が交錯し、複雑な分布状況を示す。また中期前半・中期後半・後期といった時期的な違いも認められ、多彩な「敷物圧痕」の様相が見て取れる。

中期前半の資料は、日本海側の北陸地方に集中する。もちろん、北陸地方が圧痕研究の先進地（川端 1983）であることも考慮しなければならないが、それにしても非常に多くの「敷物圧痕」が該地で見つかっている。圧痕の種類としてはA類・B類・E類の各種があるが、中でも注目されるのは、すでに述べてきたように新潟県を経て東北地方まで共通するB-1類（特にL類）の卓越である。富山県馬場山D遺跡（山本・狩野・酒井・橋本ほか 1987）、富山県馬場山G遺跡（山本・狩野・酒井・橋本ほか 1987）、富山県馬場山H遺跡（山本・狩野・酒井・橋本ほか 1987）、富山県鏡坂I遺跡（堀内・有山ほか 2000）、石川県真脇遺跡X（17・18）層（山本 1986b）が好例であるが、新保・新崎式土器などにはこの種の圧痕がよく見られる。しかしその一方で、主にA類（編み方はA-2・2・1類、A-1・1・1類、

A-2・1・1類など、素材はc²類・d²類など)で構成される遺跡もあり、石川県念仏林遺跡(望月ほか 1988)や福井県古宮遺跡(渡辺ほか 1978)がその例として挙げられる。やはり、この時期にB-1類が東北地方から北陸地方まで共通して発達したといっても、絶対にもじり編みの敷物を使用しなければならないほどの厳格な規範はなかったのであろう。

中期後半以降になると、北陸地方はもちろんのこと、東海地方でも明確な資料が認められるようになる。中期後半から後期にかけての遺跡⁶⁹⁾としては、富山県境A遺跡(布目 1992a)、富山県本江遺跡(小島ほか 1979)、富山県小竹藪遺跡(小島 1964)、富山県五百歩遺跡(山本・林 1990)、石川県真脇遺跡Ⅱ～Ⅷ層、石川県宇出津崎山遺跡(川端 1983)、石川県馬替遺跡(南ほか 1993)、石川県筋生遺跡(辰口町教育委員会 1978)、石川県中海遺跡(湯尻・山本ほか 1987)、福井県鳴鹿手島遺跡(工藤ほか 1988)、岐阜県牛垣内遺跡(谷口ほか 1998)、岐阜県西田遺跡(谷口ほか 1997)、岐阜県岡前遺跡(谷口ほか 1995)、岐阜県荒城神社遺跡(谷口ほか 1993)、岐阜県堂之上遺跡(戸田ほか 1997)、岐阜県中村遺跡(市原・住田ほか 1979)、静岡県平野山遺跡(山下・金子・外岡・高橋 1983)、静岡県半場遺跡(向坂・栗野・平賀 1982)、静岡県蜷塚遺跡(後藤ほか 1957・1958・1960・1961)、愛知県内田町遺跡(岡本・佐野・河合 2002)、三重県権現坂遺跡(清水・森川ほか 2002)、三重県垂水A遺跡(米山 2000)、三重県新徳寺遺跡(小濱・松本ほか 1997)などが挙げられる。

北陸地方では、中期前半に引き続いてA類・B類・E類の各種が認められるが、全体的にB-1類の占める割合が減少傾向を見せ、A類の網代圧痕主体へと移行していく。中には、境A遺跡や真脇遺跡Vb(11)層(中期後葉串田新Ⅱ式主体)、宇出津崎山遺跡のように、B-1類をはじめとしたもじり編み圧痕が多数を占める遺跡も少なからず見られるが、それでも大きな流れとしてA類主体に向かっていくことは間違いない。

さらにA類を細かく見ると、大抵の場合、A-1・1・1類(素材はc²類・d²類など)が最も多い遺跡かA-2・2・1類(素材はa¹類・c²類など)が最も多い遺跡のいずれかである。前者の例としては筋生遺跡や中海遺跡が、後者の例としては本江遺跡、小竹藪遺跡、五百歩遺跡、真脇遺跡Ⅲ(6)層⁷⁰⁾、馬替遺跡、鳴鹿手島遺跡が挙げられる。例外的に境A遺跡では、東日本的なA-2・1・1類(素材はa¹類・c²類・d¹類・d²類)が網代圧痕の中で最も多くなるが、かなりの時期幅の資料を含んでおり、再検討の余地がある。ただし、それでもこの遺跡におけるA-2・1・1類の比率は特殊であり、網代圧痕の東西差を考える上で注目される。

また視点を変えて、A-1・1・1c²類、B-1類(特にL類)、E-2類といった日本海側地域的

な「敷物圧痕」が、数量的な変動こそあれ引き続き多くの遺跡で認められることも忘れてはならない。小竹藪遺跡・萌生遺跡・馬替遺跡などでは、これらがセットで確認できる。

東海地方では、岐阜県の一部（飛騨地域を中心とした北側の山地部）を除き、各種A類（編み方はA-2・2・1類、A-2・2・1/2類、A-1・1・1類、A-2・1・1類、A-3・3・1類など、素材はa¹類・c²類・d¹類・d²類・e¹類など）とE-1類によって構成される。概して前者の方が多く、網代編みの敷物が最も一般的であったことがうかがわれる。

このA類の編み方を詳細に見ると、中村遺跡ではA-2・1・1類（素材はd²類など）が主体となり、蜷塚遺跡や内田町遺跡ではA-2・2・1類（素材はa¹類・c²類・d²類など）が最も多い。さらに、A-2・1・1類は平野山遺跡や半場遺跡などで、A-2・2・1類は半場遺跡・新徳寺遺跡・権現坂遺跡などで確認できる。これらを総合的に判断すると、まっすぐ線引きができるわけではないが、東から西に向かうにつれて網代の編み方の主流がA-2・1・1類からA-2・2・1類に移ることが見て取れる⁷¹⁾。この状況は、東日本の網代圧痕がA-2・1・1類を基本とし、西日本ではA-2・2・1類を基本とするという通説に合致するものであるが、岐阜県北部に目を向けると状況は複雑である。

飛騨地域を中心とした岐阜県北側の山地部では、B類やE-2類が加わり、東海地方というよりもむしろ北陸地方に近い様相を示す。やはり最も多いのはA類であるが、中期後半から後期前半の間に位置づけられる堂之上遺跡・牛垣内遺跡・岡前遺跡・荒城神社遺跡では東北型網代圧痕を含むA-1・1・1類（素材はc²類・d²類など）が最も多く、それに次いでA-2・2・1類（素材はa¹類・c²類など）が多い。一方、後期後半の西田遺跡ではA-2・1・1類（素材はd²類・e¹類など）が主体となっており、徐々に東日本的な土器製作の規範が浸透していく様子うかがわれる。またこの地域の特色として、中期後半から後期前半にかけてのA-2・2・1/2類（素材はc²類・d²類など）の卓越が挙げられるが、これはA-2・2・1類の応用例であると考えられる。そう見た場合、荒城神社遺跡ではA-2・2・1類の仲間（A-2・2・1×x類含む）がA-1・1・1類を凌いで最も多いということになる。しかし、明らかに送りを1本・2本と規則的に繰り返すことには、一種の文様効果を含め、何か特別な意味があったのかも知れない。

中期後半以降の北陸・東海地方では、従来いわれてきた東日本の網代圧痕と西日本の網代圧痕の境界が最も重要な問題として注目される。安孫子昭二氏（安孫子 1971）が指摘して以来、前者はA-2・1・1類が、後者はA-2・2・1類が主体になるとされてきた。確かに、その後の発掘調査においても、この仮説を補強するような結果が東日本・西日本両方で数

多く報告されている。

しかし筆者の分析の結果、北陸地方や岐阜県山地部ではA-1・1・1類が主体となる遺跡も多数あることが確認でき、単純な網代編みの敷物を基本とするという以上の共通性は見出せなかった。網代圧痕に見る東日本と西日本の違いというのは、A-2・1・1類を基本とする東日本的規範が浸透した地域とそうでない地域の違いとして認識すべきではないだろうか。そう考えた方が、岐阜県山地部などに見る網代圧痕の変遷を捉える際に、無理のない流れとして現象を理解することができよう。

近畿地方は、全国的に見ると資料の少ない地方であるが、それでも中期以降、「敷物圧痕」の類例が見られるようになる。ただし、滋賀県粟津湖底遺跡（滋賀県教育委員会ほか 2000）のA-1・1・1d²類や、京都府平遺跡（河野ほか 1997）のA類（A-2・2・1/2c²類か）・E-1類といった中期前葉の圧痕は、特殊な資料といわざるを得ない。これらはいずれも北陸系（新保・新崎式系）の土器底部に残された圧痕で、在地系の土器には圧痕が残されていないのである。

奈良県大川遺跡（松田ほか 1989）のA類・E-1類が中期末に属する可能性があるものの、確実に「敷物圧痕」が見られるようになるのは後期に入ってからであり、特に前葉から中葉にかけての資料がほとんどである。後期に属する主な遺跡には、滋賀県正楽寺遺跡（植田 1996）、滋賀県林・石田遺跡（西 1995）、京都府北白川小倉町遺跡（梅原・小林 1935）、京都府桑飼下遺跡（渡辺 1975）、大阪府春木八幡山遺跡（堅田 1965）、兵庫県佃遺跡（吉田ほか 1998）、奈良県宮滝遺跡（末永 1986）、和歌山県下尾井遺跡（清水ほか 1979）、和歌山県溝の口遺跡（武内 1997）などがある。ただし、確実な資料が見られるようになるといっても、相当数の良好な資料を伴う遺跡は滋賀県と京都府に集中し、それ以外の府県ではA-2・2・1類（素材はa¹類やc²類）やE-1類が数点確認できる程度の遺跡が多い。逆に、滋賀県や京都府下の遺跡でも、A類に様々な種類（編み方はA-2・2・1類、A-2・2・1×x類、A-2・2・1/2類、A-1・1・1類、A-2・1・1類、A-3・3・1類、A-3・2・1類など、素材はa¹類やc²類など）が見られる一方で、A-2・2・1類が最も多いことやA類にE-1類が伴うことは他府県と共通しており、近畿地方全体としては、A-2・2・1類をはじめとしたA類と少量のE-1類による組み合わせが基本であるといえよう⁷²⁾。これは、明確な規範の存在というよりもむしろ、単純で普遍的な敷物が好んで使用されていたような印象を受ける。いずれにせよ、この地方でも土器製作時に敷物を使っていたことに変わりはないようである。

中国・四国地方は、近畿地方以上に資料が少なく、管見の及ぶ限りでは、後期以降（主

に後期前葉～中葉)のものしか見つかっていない。ただし唯一鳥取県では、資料数が比較的充実しており、ある程度の傾向を見出すことができる。

鳥取県で「敷物圧痕」が確認された遺跡としては、栗谷遺跡(谷岡・中原・瀧川 1989・1990、渡辺1989)や布勢遺跡(中野ほか 1981)、桂見遺跡(植松 1981、牧本・小谷・高垣ほか 1996)などが代表的である。基本的には、A-2・2・1類やA-1・1・1類をはじめとするA類(編み方は他にA-2・2・1×x類、A-2・2・1/2類、A-2・1・1類、A-3・3・1類など、素材はa¹類やc²類など)が大半を占め、それにB類やE-1類が少量伴う形となる。しかし、桂見遺跡A地区(植松 1981)ではA-2・1・1類(素材はa¹類・e¹類)が最も多いという結果が出ており、単純に同一の傾向を示すわけでもないようである。

A-2・1・1類といえば、東北地方南部や関東・甲信越地方に多い編み方であるが、桂見遺跡のA-2・1・1類は、特に東日本の影響を受けたものではない可能性が高い。そもそも、中期以降西日本にもA-2・1・1類は存在しており、桂見遺跡では例外的にそれが好まれただけではないだろうか。すでに述べた北陸・東海地方や近畿地方も含め西日本では、A-2・2・1類やA-1・1・1類、E-1類といった全国的に見られる圧痕が基本となる一方で、構成比率などにはかなり遺跡差があり、土器製作用の敷物に関して東日本ほど明確な規範がなかったことが推測されるのである。またその一方で、桂見遺跡などに見るA-1・1・1c²類(東北型網代圧痕)や栗谷遺跡の各種B類など、日本海側地域的な特徴も少なからず認められることも重要である。

その他の県では、一部晩期に属する可能性もあるが、島根県神原I遺跡(鳥谷・錦織ほか 2000)、香川県永井遺跡(渡部ほか 1990)、高知県松ノ木遺跡(出原 1992)、高知県田村遺跡群(森田ほか 1986)、高知県船戸遺跡(出原・松田・曾我ほか 1996)などの例が挙げられる。ただし、いずれの遺跡においても、最も普遍的なA-2・2・1類(素材はa¹類やc²類)やE-1類が1～2点見られる程度に過ぎない。近畿地方にもいえることであるが、このような資料の少なさに関しては、敷物を使用することが稀であったと考えるよりも、「敷物圧痕」が残りにくくなるような背景があったと考えた方が妥当である。その一つとして、上げ底の卓越を挙げておきたい。

九州地方では、中期の阿高式土器とそれに後続する阿高式系土器(南福寺式、出水式など)に見るG類の鯨椎端板圧痕が最大の特徴である。いわゆる「鯨底」であるが、この圧痕は該期の九州地方各地(壱岐・対馬・五島列島など島嶼部含む)に類例が多数認められる一方(東部は除く)、他の地方には一切見られない⁷³⁾。地域・時期ともに一定の範囲に

限定されるこの種の圧痕は、阿高式系土器文化圏においても一種の土器製作上の規範が存在した可能性を示す資料として注目されよう。G類が見つかった主な遺跡としては、福岡県飛櫛貝塚（井澤 1996）、福岡県矢風遺跡（古川 1997）、佐賀県竜王遺跡（三島 1961）、佐賀県徳蔵谷遺跡（田島ほか 1996a）、佐賀県坂の下遺跡（大園 1975）、長崎県伊木力遺跡（福田・古門 1997、松藤・西脇ほか 1990）、長崎県有喜貝塚（三島 1961）、熊本県黒橋貝塚（高木・村崎ほか 1998）、熊本県阿高貝塚（三島 1961）、熊本県轟貝塚（三島 1961）、熊本県南福寺貝塚（三島 1961）、熊本県小浜遺跡（福原 1998）、大分県下原遺跡（吉田・坂本 1997）、鹿児島県宮之迫遺跡（長野・井ノ上 1981）、鹿児島県出水貝塚（岡元 1986）などが挙げられる。

ところで、このG類が九州地方の大部分に分布するという事は、この地方における鯨骨の流通、ひいては積極的な捕鯨の存在を考えざるを得ない。これほど広範囲に鯨骨製敷物の圧痕が分布するためには、漂着鯨類の利用だけでは量的に賄いきれるはずがなく、当時の九州地方（特に西北部）の縄文人たちが意識的に捕鯨をおこなっていた可能性が高い。

このように、中期から後期にかけての九州地方ではG類が一際目立つ存在であるが、もちろんA類・B類・E類といった他種の圧痕も各県で発見されている。特に九州地方南部では、阿高式土器本流から分離して別個の阿高式系土器文化圏（岩崎下層式～指宿式）を形成するようになると、「敷物圧痕」の主体がA-1・1・1b²類をはじめとした網代圧痕に移行してしまう。中期から後期の土器が混在する鹿児島県宮之迫遺跡では、その過渡的様相を示しており、A類（A-1・1・1a²類、A-1・1・1b²類、A-2・2・1b²類など）、B類（B-1・2・4類）、E-1類、G類の各種が認められる。南部における圧痕の主体がG類からA類に変わる背景には、岡元満子氏が指摘するように（岡元 1986）、阿高式全盛期に九州地方の大半を覆い尽くしていた交流圏が、分裂・縮小するにつれ鯨骨が入手しにくくなったことが関係しているのかも知れない。

後期前半の九州地方南部では、A-1・1・1類やA-2・2・1類などのA類を主体として、各種B類やE-1類がそれに伴うという組み合わせが典型的となる。宮崎県丸野第2遺跡（後藤・長津・菅付 1990）、宮崎県崩野遺跡（長津 1991）、鹿児島県武貝塚（廣田 1998）、鹿児島県成川遺跡（出口ほか 1983）、鹿児島県帖地遺跡（永野・成尾 1999）などがその好例である。該期・該地のA類は、A-1・1・1b²類が最も特徴的であるが、A-1・1・1a²類やA-2・2・1a¹類、A-2・2・1a²類、A-2・2・1b²類などもよく見られ、それらが複数種組み合わせあって模様編みとなる例も少なくない。

一方、九州地方北部では、中期だけでなく後期に入っても鯨底の伝統を受け継いだため、南部に比べてG類以外の資料がきわめて少ない。特に阿高式全盛期には、せいぜいG類にE-1類が少量伴う程度である。しかし後期には、不明瞭ではあるがA類やB類といった編物の圧痕も若干量見られるようになる。A類の網代圧痕は、編み方などの詳細が分かるような良好な資料はほとんどないが、福岡県宇野代遺跡（柳田・小川 1995）や福岡県中村石丸遺跡（水ノ江 1996）、大分県飯田二反田遺跡（松本ほか 1993）でA-1・1・1d²類と思われる資料が確認できる。中村石丸遺跡や飯田二反田遺跡ではB-1類⁷⁴も見られ、さらに福岡県山崎遺跡（小池ほか 1992）ではA類・B-1類に加えてB-2類の可能性のある資料も1点認められた⁷⁵。いずれにせよ、該期の九州地方北部でも編物を土器製作用敷物として使っていたことは間違いない。

九州地方の後期後半については、確実な資料を知らないため詳細は不明である。

以上のように縄文時代中期から後期にかけての「敷物圧痕」からは、土器製作用敷物に様々な地域の特徴があったことが見て取れる。本論の主題である編物圧痕についても、A類の網代圧痕をはじめとして、編み方や素材に明確な地域差が認められた。このことから該期の日本列島では、それぞれの地域における植物素材を生かしながら、土器製作用敷物に適した編み方の編物が使用されていたことがうかがわれる。

5) 縄文時代晩期 (図39)

縄文時代晩期は、全国的に見ると資料数が減少するが、東北地方から北陸・東海地方にかけての地域では依然として「敷物圧痕」が残される例が少なくない。やはり該期に至っても、土器製作時に何らかの敷物を敷いて作業することは変わりなかったのであろう。ただし、圧痕の種類や比率などについては、縄文時代後期の状況を継承する部分もある一方で、晩期独自の特徴を示す部分も認められる。

東北地方では、南部でA-2・1・1類をはじめとした網代圧痕が引き続き見られるが、数量・比率ともに減少し、代わってE類（特にE-1類）が増加傾向を見せる。

A-2・1・1類（素材はd¹類・d²類・e¹類など）は、岩手県本内Ⅱ遺跡（星・阿部・高橋 1998）、宮城県里浜貝塚（小井川ほか 1983）、福島県獅子内遺跡（鈴鹿ほか1996・1997・1998）などで見られる。中期から後期にかけて顕著であった東日本的規範は、晩期に至っても何らかの形で生き続けていたのであろう。その他にも、例えば本内Ⅱ遺跡ではA-2・2・1a¹類やA-3・3・1 a¹類が、山形県北柳1遺跡（小林・大泉 1997）ではA類（編み方など詳細不明）

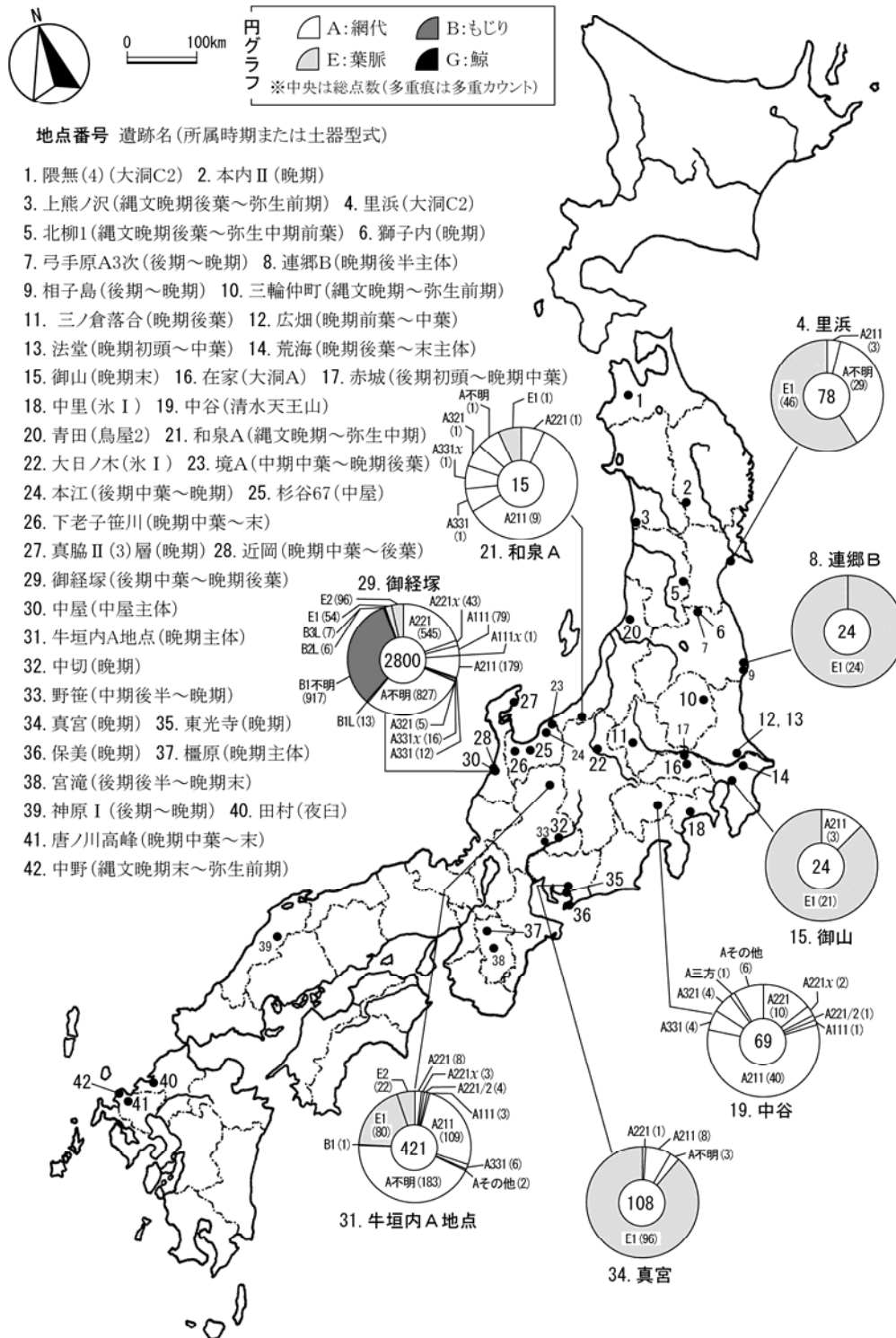


図39 縄文時代晩期の主な「敷物圧痕」分析対象遺跡と圧痕比率 (松永 2008aを改変)

が確認できるように、網代編みによる敷物が引き続き使用されていたことが分かる。

E-1類は、里浜貝塚・獅子内遺跡・北柳1遺跡のほか、青森県隈無（4）遺跡（木村・坂本 1997）や福島県連郷B遺跡（矢島ほか 2000）などに認められる。特に里浜貝塚や連郷B遺跡では、明らかにE-1類が主体であり、土器製作用の敷物における主流が網代編みの編物から木の葉に変わったようである。また北柳1遺跡や秋田県上熊ノ沢遺跡（武藤・和泉 1991）では、弥生時代に下る可能性もあるが、E-2類の平行葉脈圧痕が見られ、多雪・寒冷地帯という地域の特徴も確認できる。

晩期の東北地方で特に注目すべきは、里浜貝塚の「敷物圧痕」（A類、E-1類）が製塩土器の底部に残されたものであるという点である（図40）。縄文時代の製塩土器は、後期末から晩期にかけての東日本に特徴的な土器であるが、消耗品的な要素が非常に強い（近藤ほか 1994）。海水を長時間煮つめるために大量生産された深鉢形土器で、いずれも無文の粗製品なのである。そのような装飾性のない土器に「敷物圧痕」が残されるということは、底部の圧痕にも装飾的な意図がないことを示す良い証拠である。それは同時に、「敷物圧痕」の原体が土器製作用の敷物であるという通説を改めて補強することにもつながるだろう。

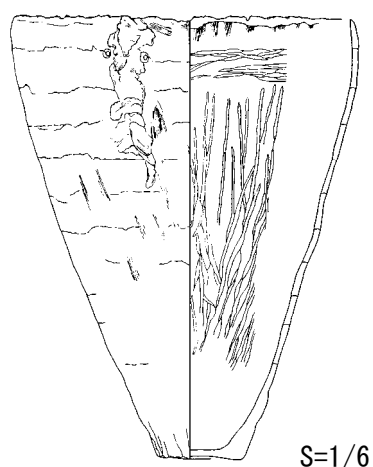


図40 里浜貝塚の製塩土器
（藤沼ほか 1983よりトレース）

関東・甲信越地方でも、A-2・1・1類をはじめとして網代圧痕が変わりなく見られるが、やはり時期が下るにつれE類の割合が増加する様子が見られる。

後期前半に圧倒的多数を占めていたA-2・1・1類（素材はd¹類・d²類・e¹類など）は、茨城県広畑貝塚（藤本 1988）、茨城県法堂遺跡（戸沢・半田 1966）、群馬県三ノ倉落合遺跡（井川・大越ほか 1997）、埼玉県在家遺跡（細田ほか 1991）、千葉県御山遺跡（渡辺・矢本 1994）、神奈川県中里遺跡（村上・吉垣・谷口 1997）、山梨県中谷遺跡（長沢 1997）、長野県大日ノ木遺跡（若林・川崎・廣瀬・宮島 1999）、新潟県青田遺跡（荒川・石丸ほか 2004）、新潟県和泉A遺跡（荒川・加藤 1999）などで引き続き見かけられる。中でも中谷遺跡や青田遺跡、和泉A遺跡などでは、依然としてこの種の圧痕が多い⁷⁶⁾。土器製作時の敷物に見る東日本的規範は、場所によっては晩期も根強く残っていたようである。加えて、

A-2・1・1類以外の網代圧痕も様々存在しており（編み方はA-2・2・1類、A-2・2・1×*x*類、A-1・1・1類、A-3・3・1類、A-3・3・1×*x*類、A-3・2・1類など、素材はa¹類・c¹類・c²類・d¹類・e¹類）、特に中谷遺跡ではかなりの種類が認められる。

E-1類は、上記の法堂遺跡・三ノ倉落合遺跡・御山遺跡・大日ノ木遺跡・青田遺跡・和泉A遺跡の他、栃木県三輪仲町遺跡（塚原・後藤・安永 1994）や千葉県荒海貝塚（西村 1975）など各地で見かけられる。特に三輪仲町遺跡や御山遺跡、荒海貝塚では、明らかにこの種の圧痕が基本となっており、東北地方の里浜貝塚や連郷B遺跡などにも相通じる特徴として注目される。また青田遺跡では、多雪・寒冷地帯ゆえのE-2類が多数見られるが、E-1類よりもむしろこちらの方が目立つ。いずれにせよ、晩期になってE類の割合が増すことは東日本に共通した現象のようである。

ところで、広畑貝塚・法堂遺跡の「敷物圧痕」（A-2・1・1類、E-1類）は製塩土器底部に残された資料である。宮城県里浜貝塚の例と同様に、「敷物圧痕」が残される意味を考える上で注目される。

北陸・東海地方では、縄文時代後期に引き続き日本海側と太平洋側で圧痕に差違が認められるが、その具体的内容を見ると一部晩期独自の様相がうかがわれる。

北陸地方では、富山県杉谷67遺跡（藤田・山本 1973）、富山県下老子笹川遺跡（町田ほか 2006）、石川県真脇遺跡Ⅱ（3）層（山本 1986b）、石川県御経塚遺跡（川端・渡辺ほか 1983）⁷⁷⁾、石川県中屋遺跡（出越 1981）、石川県近岡遺跡（久田ほか 1995、楠・新出・向井 1998）などの遺跡が挙げられる。圧痕の種類としてはA類・B類・E類の各種があり、中でも御経塚遺跡や中屋遺跡ではかなり多様な資料が認められる。

A類の網代圧痕は、A-2・2・1類をはじめとして、各遺跡で見かけられる。細かい種類でいえば、編み方はA-2・2・1類、A-2・2・1×*x*類、A-1・1・1類、A-1・1・1×*x*類、A-2・1・1類、A-3・3・1類、A-3・3・1×*x*類、A-3・2・1類などが、素材はa¹類・c²類・d¹類・d²類・e¹類が確認できる。上記の遺跡のほか、多くの遺跡に共通するのはA-2・2・1類（素材はa¹類・c²類など）であるが、網代圧痕の主体というとは必ずしも一定しない。御経塚遺跡や中屋遺跡ではA-2・2・1類が、真脇遺跡Ⅱ（3）層ではA-1・1・1類が、近岡遺跡ではA-2・1・1類が最も多く、遺跡によって様相が異なるのである。これは、微妙な時期差としても捉えられるかも知れないが、それ以上に、縄文時代中期より続く西日本的な規範の緩さとして理解すべきではないだろうか。加えて、御経塚遺跡でA-1・1・1c²類の東北型網代圧痕が見られることも、中期以来の特徴である。

また当地方では、該期においてもB類のもじり編み圧痕が多数見られる。B-1類（特にL類）は上記の遺跡全てに確認でき、さらに御経塚遺跡や中屋遺跡ではB-2L・3L類の編布圧痕・カゴ底圧痕も認められる。中期前半ほど顕著ではないものの、真脇遺跡・御経塚遺跡・中屋遺跡・近岡遺跡ではB-1類の占める割合がかなり大きい。北陸地方では、数量比的な波は多少あるものの、縄文時代を通じて、もじり編みの敷物が卓越していたようである。

E類の葉脈圧痕もしばしば見かけられるが、その中には多雪・寒冷地帯固有のE-2類も含まれる。E-2類が見られた遺跡としては、杉谷67遺跡・御経塚遺跡・近岡遺跡などがある。

中期から後期にかけて特殊な変遷を示した岐阜県では、山地部の牛垣内遺跡（谷口ほか1998）に豊富な資料があり、A類・B類・E類の各種が認められる。中でも最も多い網代圧痕の主体は、A-2・1・1類（素材は d^2 ・ e^1 類など）で、いわゆる東日本的な特徴を示す。しかしその一方で、B-1類・E-2類といった北陸地方などとの共通点も比率的には多くないが見られ、文化の交差点ならではの特殊な状況がうかがわれる。岐阜県におけるその他の遺跡としては、中切遺跡（西部・三宅1996）でA-2・1・1 d^1 類、A-1・1・1 d^2 類、E-1類が1～2点ずつ見られる。

岐阜県を除く東海地方では、愛知県の資料が比較的多い。真宮遺跡（斎藤2001）、東光寺遺跡（酒井ほか1993）、保美貝塚（小林・高平・長谷部・早川1966）などで、E-1類の網状葉脈圧痕が多く見られる。また3遺跡ともA-2・1・1類（素材は d^1 類・ d^2 類など）を伴い、同時期の東北地方南部や関東地方の一部に近い様相を示す。後期では岐阜県や静岡県の一部まで東日本の規範が影響していた様子が見受けられたが、晩期には愛知県の「敷物圧痕」も東日本という枠組みとして捉えて良いのかも知れない。真宮遺跡では、これらに加えて単純な編み方のA-2・2・1 c^2 類も見られる。

近畿地方では、奈良県橿原遺跡（末永・酒詰ほか1961）で該期に属する可能性のあるA類（編み方など詳細不明）およびE-1類が見られる程度である。他時期においても資料の少ないこの地方には、やはり土器そのものに何か圧痕が残りにくい要因があったのだろう。

中国・四国地方では、該期に属する明確な資料が見当たらなかった。全国的なピーク期である後期ですら資料が少なかった当地方では、これはやむを得ない状況なのかも知れない。しかし圧痕が残っていないだけで、敷物の使用まで否定する必要はないように思う。

九州地方では、型取り技法に伴う圧痕資料、すなわち組織痕土器（網代圧痕・もじり編み圧痕・編布圧痕・網目圧痕・平織圧痕）がこの時期に多数見られるが、「敷物圧痕」はごくわずかである。弥生時代に下る可能性のあるものも含めても、福岡県田村遺跡（浜石

ほか 1987) や佐賀県唐ノ川高峰遺跡(田島ほか 1996b)、佐賀県中野遺跡(堀川 1979)でE-1類が確認でき⁷⁸⁾、また田村遺跡ではA類(編み方など詳細不明)が見られる程度である。しかし、数が少ないとはいえ、型取り技法という新しい成形技法が出現してからも、粘土紐の積み上げによって土器を作る際には何らかの敷物を敷いていたことが分かる点では、注目される資料である。

このように縄文時代晩期の「敷物圧痕」には、後期と共通する特徴もあれば、晩期独自の特徴も認められる。日本列島全体としては資料が減少する中、各地でE類の葉脈圧痕の割合が増えるようである。しかし、A類・B類の編物圧痕も少なからず認められ、やはり地域によっては、網代編みやもじり編みの編物が、引き続き土器製作用敷物として使用されていたことがうかがわれる。その編み方や素材は、縄文時代後期の特徴の多くを踏襲しつつも、いくつかの変化があったようである。

第2節 弥生時代の「敷物圧痕」

弥生時代に入っても、日本列島各地の弥生土器底部に「敷物圧痕」が認められる。ただし、基本的には減少傾向ということもあり、縄文時代(特に中期～後期)ほどの資料は集めることができなかった。そのため、縄文時代のような詳細な地域的・時期的特徴を明らかにすることは難しいが、せめて管見に触れた諸遺跡の情報から、大まかに弥生時代各時期の状況を見ることにしたい。なお、縄文時代晩期(弥生時代早期含む)に遡る可能性がある資料については、第1節ですでに触れたため、ここでは原則として弥生時代前期以降に属するものを扱うことにする。

1) 弥生時代前期 (図41)

弥生時代前期の「敷物圧痕」については、縄文時代の名残もあつてか、東日本でA類(編み方はA-2・2・1×x類、A-1・1・1類、A-2・1・1類、A-3・3・1×x類、A-3・2・1類など、素材はc²類・d¹類・d²類・e¹類など)の網代圧痕がしばしば認められる。該期に属するA類が認められた遺跡としては、岩手県上村貝塚(鈴木ほか 1991)、福島県山田遺跡(石田・平吹 1999)、新潟県大塚遺跡(寺崎・高橋・川村・田中ほか 1988)などがある。さらに弥生時代前期から中期にまたがる資料も挙げれば、新潟県猫山遺跡(古澤・酒井・石田 2003)や新潟県西郷遺跡(土橋ほか 2009)でも各種A類(編み方はA-2・1・1類、A-3・3・2類、A-3・3・1類、A-3・3・1×x類、素材はa¹類・d¹類・d²類・e¹類)が認められる。



図41 弥生時代の主な「敷物圧痕」分析対象遺跡と圧痕比率

これらの遺跡のうち、山田遺跡や猫山遺跡、大塚遺跡ではA-2・1・1類（素材はd¹類など）が見られ、縄文時代以来の東日本の特徴が残ったものとして注目される。

上村貝塚や大塚遺跡ではA類に加えてE-1類の網状葉脈圧痕が見られるが、この種の圧痕は石川県八日市地方遺跡（橋本・福海・宮田 2003）や愛知県松河戸遺跡（村松 2001）、福岡県千里シビナ遺跡（塩屋・田中・渡辺 1982）でも見られる。このことから、該期にはある意味で木の葉を敷くことの方が普遍的であるともいえよう。このE-1類が占める割合は、以後より一層増加していく。なお、山田遺跡や猫山遺跡、西郷遺跡ではE-2類の平行葉脈圧痕が認められるが、これは縄文時代以来の多雪・寒冷地帯の特徴である。

また松河戸遺跡では、E-1類とともにC類の織物圧痕も認められる。これは、機織技術が導入された弥生時代ならではの特徴である。

このように弥生時代前期の「敷物圧痕」は、縄文時代に見られた地域の特徴を残しつつ、弥生時代独自の特徴（C類の存在、E-1類の普遍性）も見せ始めるようである。編物については情報が限られるが、各種A類が見られる東日本では、依然として土器製作時に網代編みの敷物を敷いていたことは間違いない。

2) 弥生時代中期（図41）

弥生時代中期には、一段と「敷物圧痕」の様相が変わり、東日本（特に太平洋側）でC類の織物圧痕とE-1類の網状葉脈圧痕の組み合わせが目立つようになる。

該期に属するC類・E-1類がともに見られた遺跡としては、宮城県高田B遺跡（高橋・古川ほか 1994）、福島県連郷B遺跡（矢島ほか 2000）、福島県大畑貝塚（馬目ほか 1975）、栃木県山崎北遺跡（上野・今平 1998）、埼玉県池上西遺跡（宮 1983）、埼玉県北島遺跡（吉田 2003）、千葉県常代遺跡群（甲斐ほか 1996）、神奈川県池子遺跡群（山本・谷口 1999）、岐阜県野笹遺跡（千藤ほか 2000）、愛知県朝日遺跡（加藤・高橋・中川ほか 1982）などがある。C類は、愛知県長谷口遺跡（永井ほか 2004b）などでも認められる。

E-1類は、上記の遺跡に加え、茨城県北原遺跡（石川 2004）、群馬県神保富士塚遺跡（小野 1993）山梨県南大浜遺跡（笠原 2000b）、新潟県村尻遺跡（石川・田中ほか 1982）、石川県矢木ジワリ遺跡（増山 1987）、三重県宮山遺跡（竹内ほか 1999）、滋賀県赤野井湾遺跡（濱・芝池・田井中ほか 1998）などで認められる。この種の圧痕は、やはり該期においても普遍性が高い。

その一方で、遺跡によってはA類・B類の編物圧痕も見られる。該期のA類（編み方はA-2

・2・1類、A-2・2・1×x類、A-1・1・1類、A-1・1・1×x類、A-2・1・1類、A-3・3・2類、A-3・3・1×x類など、素材はa¹類・c²類・d¹類・d²類・e¹類)が見られた遺跡としては、高田B遺跡、北原遺跡、神保富士塚遺跡、池上西遺跡、北島遺跡、常代遺跡群、池子遺跡群、南大浜遺跡、村尻遺跡、石川県八日市地方遺跡(橋本・福海・宮田 2003)、矢木ジワリ遺跡などがある。特に高田B遺跡、北原遺跡、神保富士塚遺跡、池上西遺跡、北島遺跡、常代遺跡群、池子遺跡群、村尻遺跡では、A-2・1・1類(素材はd¹類・d²類・e¹類など)が認められ、該期においても縄文時代以来の東日本の特徴が残っているようである。B類⁷⁹⁾については、八日市地方遺跡、矢木ジワリ遺跡、富山県高島A遺跡(金三津・矢島・宮脇・澤田 2007)でB-1類(特にL類)のスタレ状圧痕が認められる。これも、縄文時代の北陸地方の特徴に通じるものがある。さらに福島県龍門寺遺跡(渡辺 1985a)では、B-2類(絡め方が分かるものはR類)の編布圧痕が認められ、織物が主流になった弥生時代においても編布が製作・使用されていたことが分かる。

このように弥生時代中期には、C類やE-1類が目立つようになり、A類が最もよく見られた縄文時代とは異なる状況がうかがわれる。しかし、中には縄文時代と共通する特徴を持った編物圧痕(A類・B類)が見られる遺跡もあり、地域によっては未だ土器製作時に網代編みやもじり編みの編物を敷いていたようである。

3) 弥生時代後期 (図41)

弥生時代後期に入っても、日本列島各地で存在が認められるのはE-1類の網状葉脈圧痕である。該期(またはそれ以降)に属するE-1類が見られた遺跡としては、福島県相子島貝塚(木幡ほか 1997)、千葉県国府関遺跡群(小久貫・菅谷ほか 1993)、静岡県登呂遺跡(後藤・曾野ほか 1954)、愛知県石堂野B遺跡(松田 2003)、愛知県権現山遺跡(早野ほか 2003)、大阪府亀井遺跡(寺川・尾谷ほか 1980)、宮崎県丸野第2遺跡(後藤・長津・菅付 1990)などが挙げられる。

ただし、相子島貝塚や茨城県松尾(安土星)遺跡(黒沢 2000)、茨城県惣根(団子内)遺跡(黒沢 2000)でC類が見られ⁸⁰⁾、青森県西山遺跡(白鳥・成田 1991)でA-1・1・1×x c²類が見られるように、やはり土器製作時に編織物を敷くこともあったようである。特にC類の存在は、弥生時代中期の東日本に通じる特徴である。しかし、全国的には編織物圧痕が減少傾向にあるため、特に該期の編物に関して詳細な情報を得ることは難しい。

以上のように弥生時代後期は、各地でE-1類が見られる一方で、地域によっては編織物圧

痕（A類・C類）も見られるという状況を示す。それは多くの点で弥生時代中期と共通するが、編織物圧痕の減少傾向はより一層強くなる。E-1類は古墳時代以降も見られるが、「敷物圧痕」自体が減少を続け、やがて糸切り底などに取って代わられる。

第3節 小結

本章第1節・第2節において、日本列島先史時代（縄文時代・弥生時代）の「敷物圧痕」を概観した。特定の時期や地域においては織物圧痕（C類）や自然物圧痕（E類・F類・G類）の方が卓越する場合もあるが、本論の主題である編物圧痕（A類・B類）を中心にまとめると、以下の通りである。

日本列島最古の「敷物圧痕」資料は、縄文時代草創期のものである。該期前半にはB-4R類の絡め編み圧痕が確認でき、後半にはA類の網代圧痕が数種類認められる。縄文時代のかなり早くからすでに、広義の網代編み・もじり編みによる編物が製作され、土器製作用敷物として使用されていたことが分かる。

続く縄文時代早期になると、より広い範囲で「敷物圧痕」が見られるようになり、若干の地域的・時期的特徴もうかがえる。該期には、北海道地方東部の曙式土器と系列土器に見られるF類のホタテ貝圧痕が最も特徴的であるが、その一方でA類の網代圧痕は日本列島各地で散見される。特に九州地方では、A類とともにB類のもじり編み圧痕も認められ、やはり広義の網代編み・もじり編みの編物が土器製作用敷物として使用されていたことが分かる。その他には、E-1類の網状葉脈圧痕が北海道地方・九州地方ともに確認できる。

縄文時代前期には、土器の平底化と連動しながら、「敷物圧痕」の資料数が増加していく。該期後半を中心に、各種編物圧痕をはじめとした「敷物圧痕」（A類・B類・E類）が各地で認められ、縄文時代中期につながる地域的特徴も見受けられるようになる。東北地方では、多雪・寒冷地帯に分布するA-1・1・1c²類の東北型網代圧痕とE-2類の平行葉脈圧痕の初現的資料が認められる。また東北地方南部や関東地方では、縄文時代中期以降の東日本で主体を占めるA-2・1・1類の網代圧痕がすでに該期から存在している。さらに東北地方から北陸地方にかけての日本海側地域では、同地域で縄文時代中期前半に卓越するB-1類のスダレ状圧痕が確認できる。このように編物圧痕を中心に様々な地域性が浮かび上がる中、特殊な資料としてB-2類の編布圧痕が出現していることも注目される。

縄文時代中期から後期にかけては、資料が非常に多く、様々な地域的特徴（図42）が明確になる。東北地方や北陸地方など日本海側を中心とした地域では、A-1・1・1c²類にほぼ

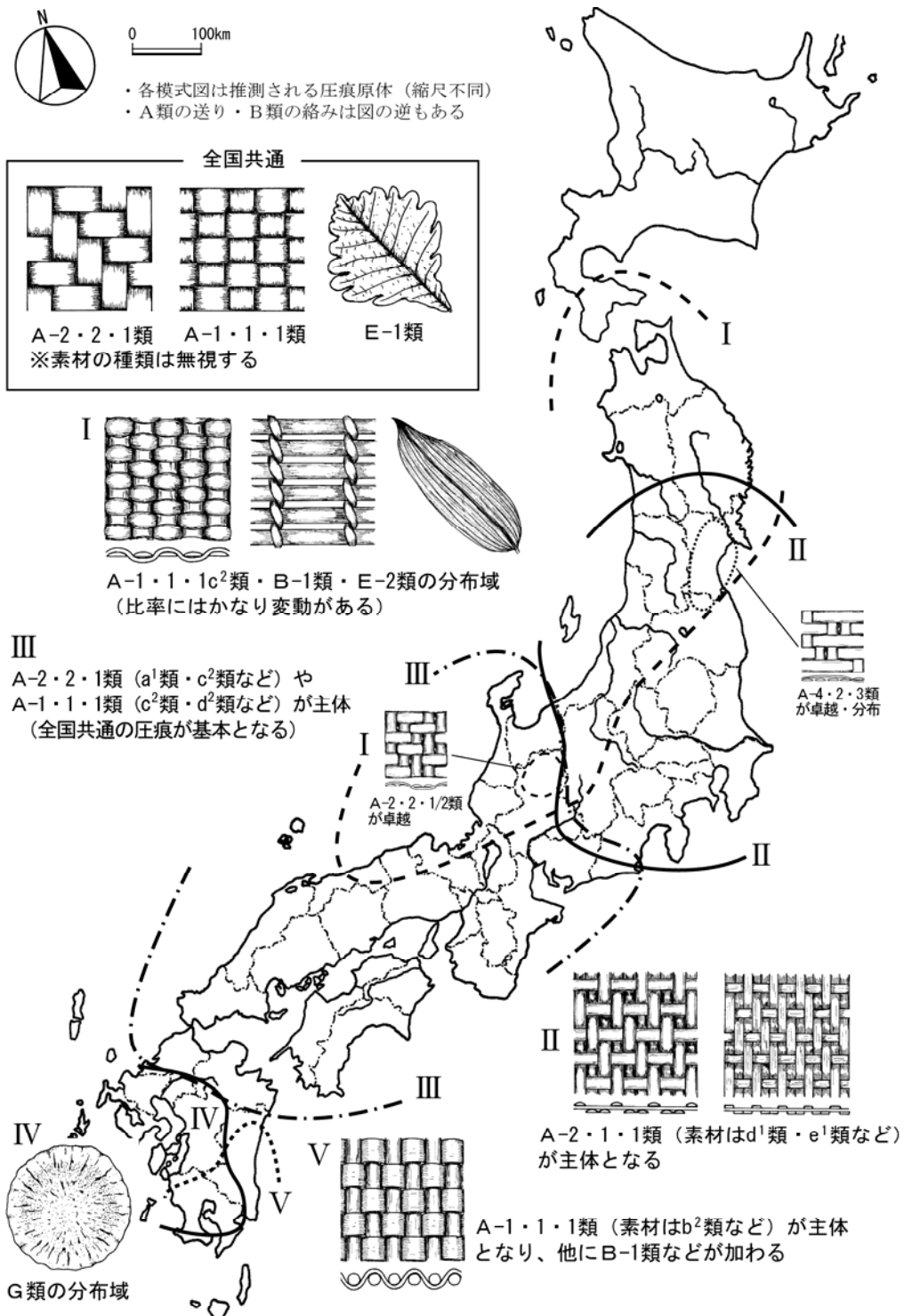


図42 縄文時代中期後葉～後期前半の「敷物圧痕」に見る地域性（松永 2008aを改変）

相当する東北型網代圧痕（特に東北地方北部）やB-1類のスタレ状圧痕（特に中期前半）、E-2類の平行葉脈圧痕が特徴的に分布する。東北地方南部および関東・甲信越地方では、中期後半から後期前半を中心に、A-2・1・1類（素材はd¹類・e¹類など）が主体となることが共通する。特に後期のA-2・1・1類は、他の圧痕に比べて圧倒的な割合を占めており、東日本の土器製作用敷物に一種の規範が存在したことがかなり確実に推測される。その規範は、時期が下るにつれ西進し、東海地方にも浸透していく。その一方で東北地方南部では、中期末から後期前葉を主とする宮城県および福島県の一部でA-4・2・3類（素材はa¹類・c¹類・c²類）が卓越し、規範下の比較的狭い範囲で卓越した敷物もあったようである。北陸・東海地方から中国・四国地方までを含む西日本では、後期前半を中心に（北陸地方では中期以来）、A-2・2・1類（素材はa¹類・c²類など）やA-1・1・1類（素材はc²類・d²類など）がよく見られる。西日本全体としてはA-2・2・1類の方が多く、遺跡単位で見るとA-1・1・1類を主体とする遺跡も多く、東北地方南部から関東・甲信越地方にかけての東日本に見られたような明確な規範はなかったものと思われる。中期後半から後期前半にかけての岐阜県山地部でA-2・2・1/2類（素材はc²類・d²類など）が卓越することや、東海地方が徐々に東日本的規範に染まっていくことも、西日本における規範の緩さ・無さを示唆している。また資料の分布が、主として日本海側に集中し、近畿地方や中国・四国地方では全時期を通じて少ないという偏りがあることも、西日本の大きな特徴である。九州地方では、中期から後期にかけての阿高式・阿高式系土器に伴うG類の鯨椎端板圧痕が最大の特徴であるが、後期前半の南部では網代圧痕が多く、A-1・1・1類（素材はb²類など）が主体となる。このような様々な特徴が認められる一方で、A-2・2・1類やA-1・1・1類、E-1類は、素材などを無視すれば、ほぼ全国に分布する。他時期においてもこれらの圧痕は各地で認められ、土器製作用の敷物として最も基本的なものと考えられる。いずれにせよ、縄文時代中期から後期にかけての日本列島では、各地域で入手可能な素材を用いた各種敷物を使用していたようである。特に編物についていえば、その地域に生育する植物を素材として、土器製作用敷物に適した編み方の編物が使用されていたものと見られる。

縄文時代晩期になると、日本列島全体として「敷物圧痕」の数が減少傾向となる中、各地でE類の葉脈圧痕の割合が増える。しかし東北地方から北陸・東海地方にかけては、A類・B類の編物圧痕もよく見られる。該期の「敷物圧痕」で特徴的なものとしては、東日本のA-2・1・1類、多雪・寒冷地帯の東北型網代圧痕（A-1・1・1c²類）およびE-2類、北陸地方のB-1類などが挙げられる。編物圧痕については、縄文時代後期以前と共通点も多い

が、東日本のA-2・1・1類がより一層西進したり、北陸地方でB類（特にB-1類）が多数見られたりするなど、該期に入ってから動きもあったようである。なお九州地方では、型取り技法に伴う組織痕土器が多数見られ、土器製作用敷物以外の編物利用を示す圧痕資料が確認できることも忘れてはならない。

弥生時代に入っても、減少傾向ながら日本列島各地で「敷物圧痕」が認められる。

弥生時代前期には、東日本で各種A類が見られ、縄文時代に引き続いて網代編みの敷物の存在が確認できる。中にはA-2・1・1類のように縄文時代に通じる特徴も認められるが、C類の織物圧痕が出現し、E-1類が広範囲に見られるといった弥生時代中期に顕著な特徴も兆し始める。縄文時代と弥生時代には、土器製作技術や編織技術に違いがあり、それが「敷物圧痕」に反映されたのであろう。

弥生時代中期に入り、東日本（特に太平洋側）でC類の織物圧痕とE-1類の網状葉脈圧痕が目立つようになる。E-1類は他の地域でも見られ、最も普遍的な「敷物圧痕」となる。一方で、地域によっては依然としてA類・B類の編物圧痕が存在し、東日本のA-2・1・1類や北陸地方のB-1類といった縄文時代に通じる特徴も認められる。該期においても、網代編みやもじり編みの編物が土器製作用敷物に使用されていたようである。また稀有な資料として、B-2類の編布圧痕の存在が確認できることも重要である。機織技術導入により布の主流が織物に移っても、縄文時代以来の編布が製作・使用されていたことが知られる。

弥生時代後期の「敷物圧痕」は、弥生時代中期と共通点が多く、各地でE-1類が見られる一方、地域によっては編織物圧痕（A類・C類）も見られる。しかし、編織物圧痕の減少傾向はより一層強くなり、特に編物圧痕はきわめて少ない。該期には、編物を土器製作用敷物に使用する必要性がかなり低くなったのであろう。縄文時代（特に中期～後期）のA類に代わり「敷物圧痕」の主体となったE-1類は、古墳時代以降も見られるが、これもやがて糸切り底などにとって代わられる。

このように日本列島先史時代の「敷物圧痕」には、縄文時代草創期以来様々な特徴があり、それらから土器製作用敷物としての編物のあり方をうかがい知ることができる。日本列島では、圧痕が残される土器の変遷とも大きく関わりながら、様々な編物が土器製作用敷物に適宜選択されていたようである。その中には、地域・時期を問わないものもあれば、特定の地域・時期に特化したものもあったことが見て取れる。

第4章 中国大陸・朝鮮半島の編物圧痕資料

第3章で、日本列島先史時代における、編物圧痕資料を含む各種「敷物圧痕」を見た。その結果、圧痕という間接的な資料ながら、土器製作用敷物に関して様々な情報を得ることができた。同種の資料は、中国大陸・朝鮮半島においても認められる。以下、中国大陸・朝鮮半島の先史時代（主に新石器文化段階）に属する「敷物圧痕」を、日本列島と同様の視点から見ることにはしたい。すなわち、編物以外の敷物（織布など）の圧痕も含めた「敷物圧痕」全般を、序章第3節に示した分類（A～H類）に基づいて時期別に概観する。本章・本論の分析対象とした各遺跡・各資料の詳細データについては、付表8：中国新石器時代・朝鮮新石器時代の「敷物圧痕」資料一覧表、付表9：中国新石器時代の網代圧痕素材一覧表を参照されたい。なお、本章のうち中国新石器時代に関する部分は、過去の拙稿「中国新石器時代の「敷物圧痕」について」（松永 2003）の一部に、加筆・修正をおこなって再構成したものである。

第1節 中国新石器時代の「敷物圧痕」

中国大陸では、新石器時代前期から後期までの各時期に、編物圧痕を含めた各種「敷物圧痕」が認められる。ただし、中国大陸の「敷物圧痕」は主に華中地方以北に分布するという偏りがあり、華南の長江下流域に集中した編物実物資料とは実に対照的である。各遺跡の位置については図43に、各遺跡の資料の内容については表1に示したので、これらを参照しながら時期別に資料を見ていきたい。

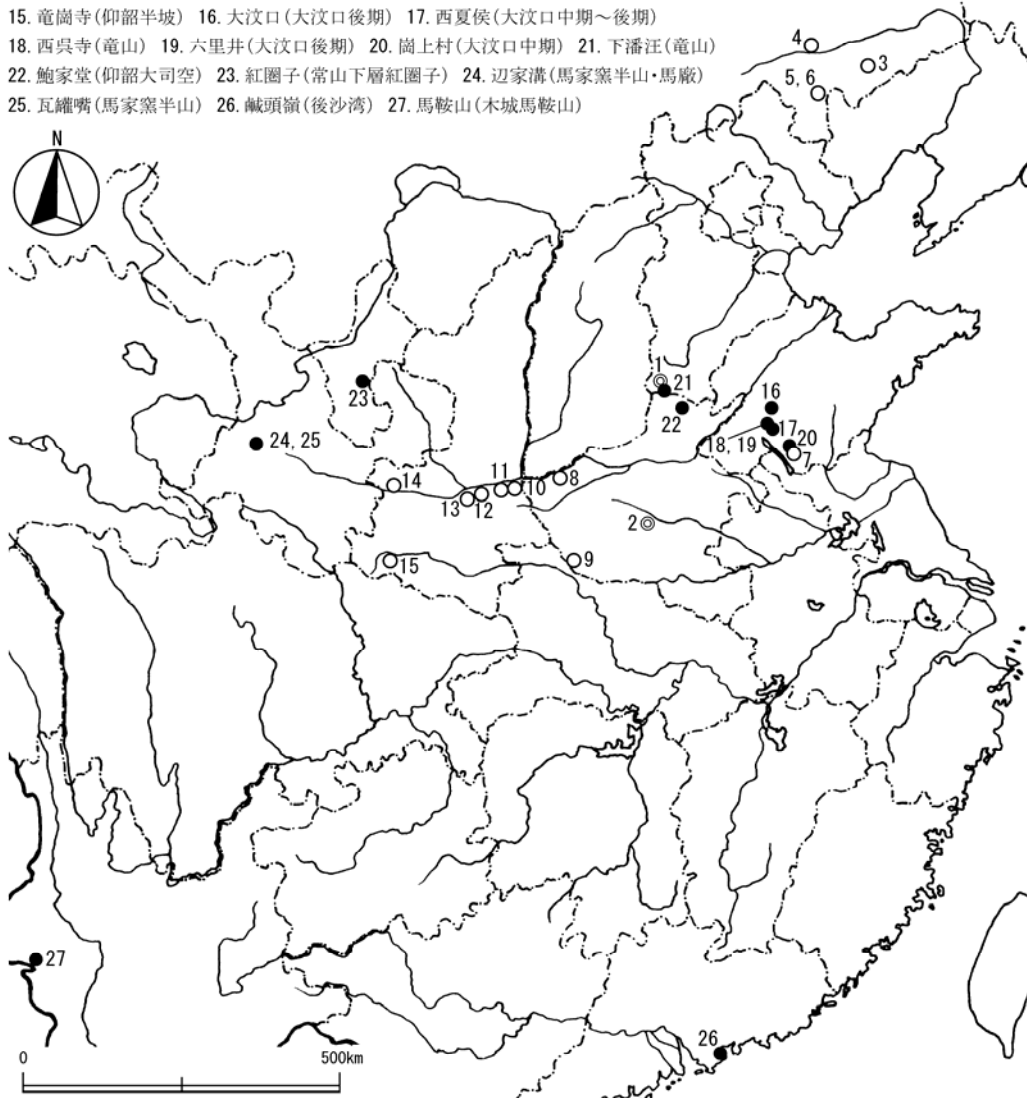
1) 中国新石器時代前期（図43、表1）

新石器時代前期の「敷物圧痕」は、きわめて数が少ない。特に該期前半には皆無であり、後半でも河北省磁山遺跡（渡辺 1995、河北省文物管理处・邯鄲市文物保管所 1981、邯鄲市文物保管所・邯鄲地区磁山考古隊短訓班 1977）や河南省賈湖遺跡（河南省文物考古研究所 1999）で若干数の資料が発見されている程度である。

磁山遺跡では、盃の底部にB-1類およびB-2類のもじり編み圧痕が見られ、特に後者が多い。絡め方は、B-1類がLで、B-2類はL・Rの両方が見られる（主体はL類）。B-2類の編布圧痕の中には、一部平織状の組織（擬似平織）を有するものがあり、編布から織布への技術的転換を示唆する資料として注目される。

地点番号 遺跡名(所属文化類型)

1. 磁山(磁山) 2. 賈湖(裴李崗) 3. 大沁他拉(紅山前期～後期) 4. 那斯台(紅山前期～後期)
5. 紅山後(紅山前期～後期) 6. 西水泉(紅山前期～中期) 7. 北辛(北辛) 8. 三里橋(仰韶史家(三里橋))
9. 下王崗(仰韶半坡(下王崗)・竜山) 10. 横陣(仰韶半坡) 11. 元君廟(仰韶半坡)
12. 姜寨(仰韶半坡・史家・西王村) 13. 半坡(仰韶半坡～西王村) 14. 北首嶺(仰韶半坡)
15. 竜崗寺(仰韶半坡) 16. 大汶口(大汶口後期) 17. 西夏侯(大汶口中期～後期)
18. 西吳寺(竜山) 19. 六里井(大汶口後期) 20. 崗上村(大汶口中期) 21. 下潘汪(竜山)
22. 鮑家堂(仰韶大司空) 23. 紅圈子(常山下層紅圈子) 24. 辺家溝(馬家窯半山・馬廠)
25. 瓦罐嘴(馬家窯半山) 26. 鹹頭嶺(後沙湾) 27. 馬鞍山(木城馬鞍山)



※◎：新石器時代前期の遺跡 ○：新石器時代中期の遺跡 ●：新石器時代後期の遺跡

図43 中国新石器時代の「敷物圧痕」分析対象遺跡 (松永 2003を改変)

一方、賈湖遺跡では、碗と支脚に「敷物圧痕」が残されている。この遺跡では、磁山遺跡に見られたB-2類⁸¹⁾ (絡め方はL類・R類両方) とともに、A-2・2・1類 (素材はa¹類・c²類) の網代圧痕も見られる。

両遺跡ともにB類、特にB-2類の編布圧痕が見られ、新石器時代前期後半にはこの種の敷物が基本であったように見える。しかし、わずか2遺跡の状況からそれを断言することは

時期	No.	遺跡名	所在地	文化類型	A類																備考
					B類				C類				D類		H類						
					221	221/2	111	111x	211	331	322	32/345	41/113	523		×4+	織様	1	2		
前期	1	磁山	河北省武安市	磁山													L	L・R	B2(特にL)の方が多い		
前期	2	賈湖	河南省舞陽縣	裴李崗		al・c2											L・R				
	3	大沁他拉	內蒙古奈曼旗	紅山前～後期																	
	4	那斯台	內蒙古巴林右旗	紅山前～後期		b2	d2											○			
	5	紅山後	內蒙古赤峰市	紅山前～後期		b2													紅山中期的ものが多い		
	6	西水泉	內蒙古赤峰市	紅山前～中期		b2										b2			模様が山形縹紋		
	7	北辛	山東省滕州市	北辛		al・c2・d2		d2							e2				A221が最も多い		
	8	三里橋	河南省陝縣	仰韶史家(三里橋)															○		
	9	下王崗	河南省淅川縣	仰韶半坡(下王崗)		al?・b2?	al?					d2?									
中期	10	橫陣	陝西省華陰市	仰韶半坡		al?												○			
	11	元君廟	陝西省華陰市	仰韶半坡		al?・c2	b2?	b2?		al?								○			
	12	姜寨	陝西省西安市	仰韶半坡		○				○								○			
	13	半坡	陝西省西安市	仰韶半坡～西王村		al?・b2・c2	b2	b2	b2	b2	al		al				○	○	Aが最も多い		
	14	北首濼	陝西省寶鷄市	仰韶半坡		al?							al?					○			
	15	電崗寺	陝西省南鄭縣	仰韶半坡		al?												○			
	16	大汶口	山東省泰安市	大汶口後期														○			
	17	西夏侯	山東省曲阜市	大汶口中～後期														○			
	18	西吳寺	山東省兗州市	龍山														○			
	19	六里井	山東省兗州市	大汶口後期														○			
	20	崗上村	山東省滕州市	大汶口中期														○			
	21	下潘汪	河北省磁縣	龍山																	
	22	鮑家堂	河南省安陽市	仰韶大司空							b2										
後期	9	下王崗	河南省淅川縣	龍山																	
	12	姜寨	陝西省西安市	仰韶西王村															A331の可能性あり		
	23	紅園子	寧夏固原縣	常山下層紅園子		b2					b2					b2			模様が之字紋		
	24	辺家溝	甘肅省和政縣	馬家窯半山		b2													A221/2ほかの可能性あり		
	25	瓦罐嘴	甘肅省和政縣	馬家窯馬廠							b2										
	26	崑頭嶺	広東省深圳市	馬家窯半山							b2										
	27	馬鞍山	雲南省龍陵縣	後沙灣 木城馬鞍山			al・d2													別種Aの可能性あり	

※1.所在地は、できる限り現在の行政区分に合わせ、省または自治区および地级市または県級市・県・旗を示した(前・中・後各期の遺跡は、上から順に東北→西南となるように並べてある)
 2.○:該当する資料が存在(A類で素材が確認できるものは代わりに素材分類を、B類で結め方が確認できるものは代わりに結め方分類を示した) ●:断定できないが該当する可能性のある資料が存在
 3.各遺跡のNoは図43の地点番号に対応している

表1 中国新石器時代の「敷物圧痕」一覽表 (松永 2003を改変)

きない。少なくとも、この時期から土器製作時に敷物を敷いていたことと、網代編み・もじり編みの両方が存在していたことだけは確実である。

2) 中国新石器時代中期 (図43、表1)

新石器時代中期になると、「敷物圧痕」の資料が大幅に増える。一部後期に下る可能性があるが、該期に属する「敷物圧痕」が見られた遺跡として、内蒙古自治区大沁他拉遺跡 (朱 1979)、内蒙古自治区那斯台遺跡 (巴林右旗博物館 1987)、内蒙古自治区紅山後遺跡 (濱田・水野 1938)、内蒙古自治区西水泉遺跡 (中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队 1982)、山東省北辛遺跡 (中国社会科学院考古研究所山東隊・山東省滕県博物館 1984)、河南省三里橋遺跡 (中国科学院考古研究所 1959)、河南省下王崗遺跡 (河南省文物研究所ほか 1989)、陝西省横陣遺跡 (中国社会科学院考古研究所陝西隊 1984)、陝西省元君廟遺跡 (北京大学歴史系考古教研室 1983)、陝西省姜寨遺跡 (西安半坡博物館ほか 1988)、陝西省半坡遺跡 (中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館 1963)、陝西省北首嶺遺跡 (中国社会科学院考古研究所 1983)、陝西省竜崗寺遺跡 (陝西省考古研究所 1990) が挙げられる。

該期の「敷物圧痕」の分布はほぼ華北地方および東北地方に限られ、仰韶文化半坡類型や紅山文化のものが大半を占める。仰韶文化・紅山文化以外では、北辛文化に類例が確認できる。土器の器種としては、北辛文化のものについては分からないが、仰韶文化では碗・鉢を中心として盆・盂・甑・罐・壺に、紅山文化では罐に圧痕が残される。

該期の特徴としては、新石器時代前期に多く見られたB類がほとんど見られなくなり、A類の網代圧痕が主流になることが挙げられる。B類は、半坡遺跡にB-2類の編布圧痕があるのみである。A類は、A-2・2・1/2類を含むA-2・2・1類の仲間が特に多く、A-1・1・1×x類を含むA-1・1・1類の仲間がそれに次ぐ。またA類の素材は、北に向かうほどb²類が多くなり、南に向かうほどa¹類の割合が増える (可能性があるもの含む)。さらに仰韶文化の土器には、C類の織物圧痕が伴うことが多く⁸²⁾、ごく稀な例としてD-1類・D-2類の巻き上げ圧痕やH類の特殊な圧痕 (十字溝と無数の凹凸によって構成される圧痕)⁸³⁾ も見られる。

このように中国新石器時代中期の「敷物圧痕」は、各地域でA類を主体としながらも、仰韶文化にしばしばC類が伴うことで同時期の日本列島 (縄文時代前期頃) のそれとは一線を画す。日本列島では編布の存在がようやく確認できる頃に、中国大陸ではすでに布の主流が織布になっていたようである。またA類・C類以外の編織物圧痕として、少数ながら

B類やD類も見られ、日本列島では弥生時代に出揃う網代編み系統・もじり編み系統・巻き上げ編み系統の三大系統が全て確認できることも重要な特徴である。

3) 中国新石器時代後期 (図43、表1)

新石器時代後期になると、「敷物圧痕」の分布は山東地域の大汶口文化(中期～後期)および竜山文化の遺跡に中心を移す。大汶口文化・竜山文化以外では、仰韶文化大司空類型・西王村類型、常山下層文化紅圈子類型、馬家窯文化半山類型・馬廠類型、後沙湾類型、木城馬鞍山類型に類例があり、新石器時代前期・中期では確認できなかった華南地方にも若干の資料が見られる。

該期に属する「敷物圧痕」が見られた遺跡としては、山東省大汶口遺跡(山東省文物管理处・済南市博物館 1974)、山東省西夏侯遺跡(中国科学院考古研究所山東隊 1964、中国社会科学院考古所山東工作隊 1986)、山東省西呉寺遺跡(国家文物局考古領隊培訓班 1990)、山東省六里井遺跡(国家文物局考古領隊培訓班 1999)、山東省崗上村遺跡(山東省博物館 1963)、河北省下潘汪遺跡(河北省文物管理处 1975)、河南省鮑家堂遺跡(中国社会科学院考古研究所安陽隊 1988)、河南省下王崗遺跡(河南省文物研究所ほか 1989)、陝西省姜寨遺跡(西安半坡博物館ほか 1988)、寧夏回族自治区紅圈子遺跡(固原県文管所・中国歴史博物館考古部 1993)、甘肅省辺家溝遺跡(Palmgren 1934)、甘肅省瓦罐嘴遺跡(Palmgren 1934)、広東省鹹頭嶺遺跡(深圳博物館・中山大学人類学系 1990、西谷 1997)、雲南省馬鞍山遺跡(耿 1991)がある。

圧痕が残される土器で器種が分かるものとしては、大汶口文化では鼎・壺・杯・罐(本体底部および蓋頂部)・鉢・尊形器、竜山文化では盆・杯、仰韶文化西王村類型では鉢、常山下層文化紅圈子類型では鉢・盆・罐・壺、馬家窯文化半山類型では罐、後沙湾類型では盤(鉢)・盆がある。

該期には、B類・D類・H類は一切見られなくなり、A類とC類のみに限られる。特にC類の織物圧痕は、大汶口文化や竜山文化の遺跡に非常に多い。またA類については新石器時代中期とほとんど同様の傾向を見せ、A-2・2・1類およびA-1・1・1類の仲間が多く見られ、南北で素材がa¹類・b²類に分かれる。その他、紅圈子遺跡を中心とする寧夏・甘肅周辺に見られるA-3・2・2b²類が特徴的である。

このように中国新石器時代後期には、様々なA類が見られる一方で、分布の中心である大汶口文化や竜山文化の遺跡ではC類が主体となることが大きな特徴である。本論の主題

である編物圧痕については、B類・D類が確認できずA類の情報しか得られないが、編み方や素材に中期との共通点が認められることが注目される。加えて、A-3・2・2b²類のような該期の一部地域で目立つ網代圧痕が存在することも無視できない。

新石器時代よりも後の時代には、「敷物圧痕」はほとんど見られなくなる⁸⁴⁾。中国大陸においてロクロ技術と底部の糸切りが一般化するに従い、土器製作時に敷物を敷く必要がなくなったのであろう。

第2節 朝鮮新石器時代の「敷物圧痕」

管見の限りでは、朝鮮半島において先史時代、特に新石器時代に属する編物圧痕（A類・B類・D類）の資料は1例も見当たらなかった⁸⁵⁾。該期の土器は、朝鮮半島北半部を除いて主に丸底・尖底土器が製作されるため（早乙女 2000、田村 1989）、敷物を敷いていたとしても圧痕が残らないのであろう。しかし、新石器時代早期～中期の江原道文岩里遺跡（金・朴・曹 2004）ではE-1類の網状葉脈圧痕が多数見られることから（図44-1）、今後朝鮮半島においても編物を原体とする新石器時代の「敷物圧痕」が見つかる可能性がないわけではない。少なくとも朝鮮新石器時代において、土器製作時に何らかの敷物（植物の葉）を敷く行為があったことは明らかである。ちなみにこのE-1類は、無文土器時代の全羅

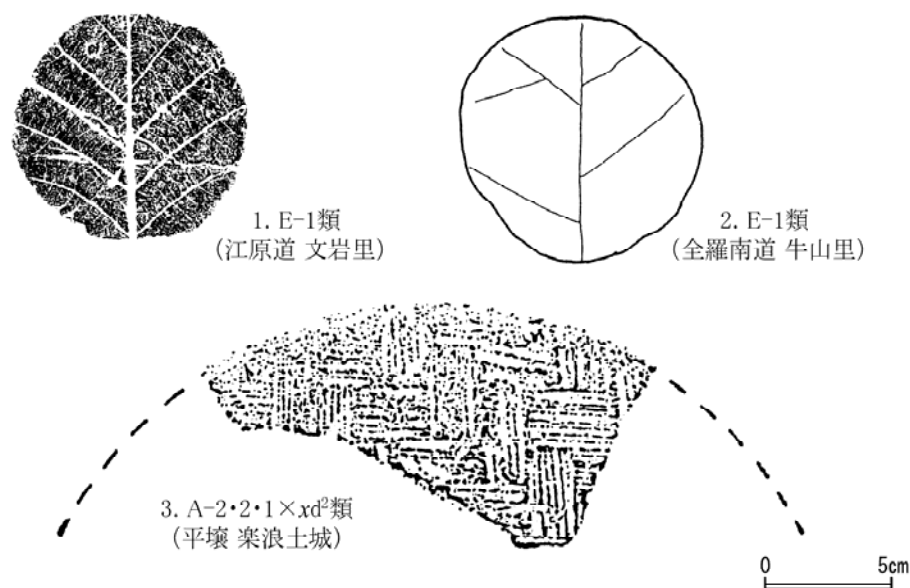


図44 朝鮮半島の「敷物圧痕」

(拓影・実測図は各報告より転載、S=1/3)

南道牛山里遺跡（李・禹・河 1988）でも認められる（図44-2）。

また歴史時代の資料になるが、平壤直轄市楽浪土城址（谷 1986）では、A-2・2・1× xd^2 類と見られる網代圧痕が滑石混和胎土土器（谷 2002）に残されており（図44-3）、このことから朝鮮半島新石器時代の編物圧痕が見つかる可能性は否定できない。ただし、これまでに朝鮮半島で見つかっている先史時代の「敷物圧痕」が、いずれもE-1類の網状葉脈圧痕であることを積極的に評価するならば、該地・該期の土器製作用敷物は植物の葉であり、この段階では編物の敷物は使用されていなかった可能性も考えておく必要がある。

いずれにせよ、現時点では朝鮮半島新石器時代における「敷物圧痕」はE-1類のみであり、土器製作用敷物としての編物については不明であるといわざるを得ない。

第3節 小結

本章第1節・第2節において、中国大陸・朝鮮半島の「敷物圧痕」を、新石器時代を中心に概観した。特定の時期や地域においては織物圧痕（C類）や葉脈圧痕（E類）の方が卓越する場合もあるが、編物圧痕（A類・B類・D類）を中心にまとめておく。

中国大陸では、新石器時代前期後半から「敷物圧痕」が見られる。遺跡数は少ないが、A-2・2・1類の網代圧痕やB-1類・B-2類のもじり編み圧痕が認められ、網代編み・もじり編みの編物が土器製作用敷物に使用されていたことが知られる。該期にはB-2類の編布圧痕が比較的多く、中にはすでに織布への技術的転換を示唆する資料も認められる。

新石器時代中期になって、華北地方や東北地方といった各地の諸文化（北辛文化、仰韶文化、紅山文化）に多くの資料が認められるようになる。該期には、「敷物圧痕」の主流がA類の網代圧痕に移り、A-2・2・1/2類を含むA-2・2・1類の仲間や、A-1・1・1× x 類を含むA-1・1・1類の仲間など、様々な種類が見られる。これらA類の素材には地域性があり、北に向かうほど b^2 類が多く、南に向かうほど a^1 類が多くなる。またA類以外の編物圧痕として、少数ながらB-2類の編布圧痕やD-1類・D-2類の巻き上げ圧痕があり、網代編み・もじり編み・巻き上げ編みが該期に出揃う。編物圧痕以外では、仰韶文化の土器にC類の織物圧痕とH類の特殊な圧痕が残されるが、特にC類はA類に次いで数が多い。このことから、中国大陸ではかなり早くから布の主流が織布に移ったことがうかがわれる。

新石器時代後期においても、華北地方を主として各地の諸文化（大汶口文化、竜山文化、仰韶文化大司空類型・西王村類型、常山下層文化紅圈子類型、馬家窯文化半山類型・馬廠類型、後沙湾類型、木城馬鞍山類型）に多くの資料が認められる。ただし分布の中心は山

東の大汶口文化・竜山文化に移り、また華南地方にも資料が確認できる。該期の「敷物圧痕」は、A類とC類に限られ、特に大汶口文化や竜山文化ではC類が主体となる。編物圧痕はA類の網代圧痕のみであるが、A-2・2・1類とA-1・1・1類の仲間が多く、素材が南北でa¹類・b²類に分かれるといった、新石器時代中期との共通点が注目される。またそれだけではなく、一部地域で目立つ網代圧痕も存在し、さらなる地域の特徴も浮かび上がる。

その後、中国大陸では「敷物圧痕」はほとんど見られなくなり、ロクロ成形に伴う糸切り底などに移行する。

このように中国大陸では、新石器時代前期から晩期までA類が共通して見られるが、それに伴ってB-2類からC類への移行やD類の出現といった技術的变化が認められることが重要である。これらの変化は、いずれも日本列島よりも早く果たされる。また、「敷物圧痕」の主体がA類となることは日本列島の多くの地域・時期と共通するが、その編み方や素材には共通点だけでなく相違点も認められる。いずれにせよ、新石器時代の中国大陸においても、それぞれの地域で様々な編物が土器製作用敷物として選択・使用されていたことが明らかである。

一方、朝鮮半島では、先史時代に属する編物圧痕は確認できず、新石器時代や無文土器時代にE-1類の網状葉脈圧痕が見られるのみである。歴史時代にA類の網代圧痕が存在することから、朝鮮新石器時代の土器製作時にも編物が敷かれていた可能性がないわけではないが、現時点では推測の域を出ず、新資料の発見に期待するよりほかない。

終章 東アジア先史時代の植物質編物

ここまで、新石器文化段階を中心とする東アジア先史時代の各種編物について、日本列島の実物資料、中国大陸・朝鮮半島の実物資料、日本列島の圧痕資料（編物圧痕を含む「敷物圧痕」）、中国大陸・朝鮮半島の圧痕資料の順に見てきた。それぞれの資料を地域・時期によって整理した結果、編物に関する様々な情報を得ることができた。いずれの情報も、序章第2節で想定した通り、各地域・各時期の編物および編物技術のあり方につながるものと考えられる。

本章では、いよいよそれらを総合して、東アジア先史時代における編物の製作・使用の実態について考察することにした。

第1節 東アジア先史時代の編物の特徴とその背景

東アジア先史時代の編物に、様々な特徴があることは、すでに見てきたように明らかである。中には、特定の地域・時期に特化した特徴もあれば、列島規模・大陸規模の広範囲で時代を通じて共通する特徴もある。ここでは、それら諸特徴の背景に何があるのかについて、もっと踏み込んで検討してみたい。その結果が、必ずや多少なりとも東アジア先史時代における編物の製作・使用の実態を示すはずである。

1) 東アジア先史時代の編物に見る三大要素の相関関係とその背景

すでに何度も述べたが、東アジア先史時代の編物を見る上で最も基本的かつ重要な要素は、編み方・器種・素材の三つである。これら三大要素は、相互に影響しながら編物を構成していると考えられ、各々を切り離して見るべきではない。事実、各種編物資料を概観する過程で、編み方・器種・素材が相関関係を持っていると見られる事例がしばしば認められた。東アジア先史時代における編物の製作・使用の実態を明らかにするためには、第一にこれらの相関関係とその背景について検討しなければならない。

そこで見たいのが、東アジア先史時代の編物に見る諸要素の主な組み合わせを簡単にまとめた表2・3である。表2には実物資料の諸要素の組み合わせを、表3には圧痕資料（「敷物圧痕」の中の編物圧痕）の諸要素の組み合わせを示した。これらの表から、東アジア先史時代の各地域・各時期において、編み方・器種・素材の組み合わせが少なからず決まっていることが見て取れる。

	編み方	器種	素材	主な地域	主な時期
A	広義の網代編み (2超2潜1送、 1超1潜1送、 1超2潜1送、 三方六ツ目ほか)	カゴほか	タケササ類	東北地方、関東・甲信越地方、東海地方	縄文時代中期～弥生時代中期
B	広義の網代編み (2超2潜1送、 1超1潜1送ほか)	カゴほか	タケササ類	沖縄地方	縄文時代前期～後期
C	広義の網代編み (体部ザル目の類、 底部網代編み)	籃胎漆器	タケササ類	東北地方を中心とする北海道地方～北陸・東海地方	縄文時代晩期
D	広義の網代編み (2超2潜1送、 ザル目の類、 3超3潜1送、 三方六ツ目ほか)	カゴほか	タケ?	長江下流域	中国新石器時代前期～初期青銅器時代
E	広義の網代編み (2超2潜1送、 1超1潜1送ほか)	カゴほか	イヌビロ属	四国地方、九州地方	縄文時代早期～後期
F	広義の網代編み (2超2潜1送ほか)	カゴほか	マタタビ属	北陸地方、山陰地方	縄文時代中期～後期、弥生時代中期
G	口縁部巻き縁or矢筈巻き縁、口縁部付近や体部中央ヨコ添えもじり、体部1超1潜1送や2超2潜1送、底部2超2潜1送×経緯2ほか	カゴ	マタタビ属、針葉樹ほか	北陸地方・山陰地方を中心とする西日本	弥生時代中期～後期
H	広義の網代編み (経緯4本以上1組)	敷物	アシ?	北海道地方、関東・甲信越地方、東海地方、近畿地方	縄文時代後期～弥生時代後期
I	広義の網代編み (経緯4本以上1組)	敷物・壁材	アシ?	長江下流域	中国新石器時代中期～初期青銅器時代
J	もじり編み(主に右)	編布	アカソほか	北海道地方、東北地方、関東・甲信越地方、北陸地方	縄文時代前期～晩期
K	広義のもじり編み (主に左)	カゴほか	針葉樹(スギ、ヒノキ、アスナロほか)	北陸地方～山陰地方	縄文時代前期～晩期
L	もじり編み(主に左)	カゴほか	カエデ属	北海道地方、北陸地方	縄文時代中期～後期
M	広義のもじり編み (主に左)	カゴほか	マタタビ属	北陸地方	縄文時代中期～晩期
N	もじり編み (主に左)	カゴ・編袋	蔓植物(テイカカズラ属、ウドカズラ含む)	九州地方	縄文時代中期～後期
O	巻き上げ編み	カゴ	アケビ属ほか	近畿地方、山陰地方	弥生時代前期～後期

表2 東アジア先史時代の編物実物資料に見る諸要素の主な組み合わせ

	編み方	器種	素材	主な地域	主な時期
A	A-2・2・1	土器製作用敷物 (圧痕原体)	a1・c2ほか	北陸・東海地方以西の西日本を中心とする日本列島各地	縄文時代中期～晩期を中心とする縄文時代前期～弥生時代中期
B	A-2・2・1、 A-1・1・1ほか	土器製作用敷物 (圧痕原体)	a1	華北地方以南	中国新石器時代前期～後期
C	A-2・2・1、 A-2・2・1/2、 A-1・1・1ほか	土器製作用敷物 (圧痕原体)	b2	華北地方以北	中国新石器時代中期～後期
D	A-2・2・1/2	土器製作用敷物 (圧痕原体)	c2・d2ほか	岐阜県山地部	縄文時代中期後半～後期前半
E	A-1・1・1 (密接※東北型)	土器製作用敷物 (圧痕原体)	c2・d2 (ポコポコの質感強)	東北地方北部を中心とする日本海側地域	縄文時代中期～後期を中心とする縄文時代前期～晩期
F	A-1・1・1	土器製作用敷物 (圧痕原体)	b2ほか	九州地方南部	縄文時代後期前半
G	A-2・1・1	土器製作用敷物 (圧痕原体)	d1・e1ほか	東北地方南部、関東・甲信越地方、東海地方	縄文時代中期後半～後期前半を中心とする縄文時代前期～弥生時代中期
H	A-3・2・2	土器製作用敷物 (圧痕原体)	b2	寧夏自治区・甘肅省周辺	中国新石器時代後期
I	A-4・2・3	土器製作用敷物 (圧痕原体)	a1・c1・c2	宮城県、福島県の一部	縄文時代中期末～後期前葉
J	B-1(主にL)	土器製作用敷物 (圧痕原体)	棒状材or束状材 ・軟質材	東北地方から北陸地方にかけての日本海側地域	縄文時代中期前半を中心とする縄文時代前期～弥生時代中期
K	B-2(主にL、細密)	土器製作用敷物 (圧痕原体)	糸材	北陸地方	縄文時代中期～晩期
L	B-2(主にL)	土器製作用敷物 (圧痕原体)	糸材	華北地方	中国新石器時代前期
M	D	土器製作用敷物 (圧痕原体)	芯材・巻き材	中国東北地方、華北地方	中国新石器時代中期

表3 東アジア先史時代の編物圧痕資料に見る諸要素の主な組み合わせ

各要素を個別に見ると、まず、各地域で特定の素材が長期に渡って使用されていることに気づく。日本列島の実物資料で具体例を挙げれば、東北地方から東海地方にかけての東日本や沖縄地方のタケササ類（表2-A～C）、北陸地方から山陰地方にかけての針葉樹（表2-G・K）やマタタビ属（表2-F・G・M）、四国地方から九州地方のイヌビワ属（表2-E）、九州地方のカズラ類のような蔓植物（表2-N）などがある。これらの素材は、多少の変動はあるものの、縄文時代・弥生時代の複数時期に渡り、ほぼ決まった地域内で使用されている。植物学的な同定を経たものではないが、中国大陸の実物資料を見ると、長江下流域でタケやアシとされるような似た植物が新石器時代から初期青銅器時代まで共通して使用されていることも（表2-D・I）、同様の事象として理解できよう。圧痕資料原体の素材については、幅や質感などから大まかに分類できるのみなので、実物資料のような植物種を明確にすることは難しいが、やはり似たような状況がうかがわれる。日本列島では東北型網代圧痕の素材である質感の強いc²類・d²類（表3-E）や、東日本（東北地方や関東・甲信越地方など）のA-2・1・1類の主な素材であるd¹類・e¹類（表3-G）が、中国大陸では華北地方以南のA類の主な素材であるa¹類（表3-B）や、華北地方以北のA類の主な素材であるb²類（表3-C）などがその例として挙げられよう。先行研究の成果や実物資料の同定結果などを勘案して敢えて素材を推定すれば、東北型網代圧痕の素材はマタタビなどの蔓植物、東日本のA-2・1・1類や華北地方以南のA類の素材はタケササ類、華北地方以南のA類の素材は蔓植物や草本類であろうか。これら圧痕資料については、素材以外の要素も含め、後で詳しく検討する。いずれにせよ、実物資料・圧痕資料ともに、各地域で入手できる植物素材が大前提として製作される編物を規定しているものと考えられる。すなわち、編物の特徴の背景には、第一に各地域の植生があるのである。そして、その上で編み方や器種が決まるという図式が想定できる。

視点を変えて、編み方を軸に資料を見ると、編み方に素材が対応しており、それぞれの編み方に適した植物素材が使い分けられていることが分かる。この点では、編み方による技術的な制約が植生内の素材選択に働いていると見ることができよう。具体的には、広義の網代編みには経条・緯条ともに比較的硬質な素材（表2-A～Dのタケササ類など）が選択されることが多く、広義のもじり編み（特に絡め材）には比較的軟質な素材（表2-K・M・Nの針葉樹や蔓植物など）が選択されることが多い。また、類例が少ないため断言できないが、弥生時代の巻き上げ編みに共通してアケビ属が使用されていること（表2-O）も、編み方が素材選択に作用している可能性があるだろう。さらに、面を形成する編み方を中心に

まとめた表2には示さなかったが、巻き縁など口縁部の巻き材には、樹皮をはじめ比較的軟質な素材が使用されており、部位による素材の使い分けも少なからずあったようである。

なお、編み方といえば、広義のもじり編みの多くが左絡みになっているが（表2-K～N、表3-J～L）、これは明らかに技術的な要因によるものである。通常、右利きの人間がもじり編みをおこなおうとすれば、左絡みの方が容易であり、そのために左絡みが主体となったものと理解できる。これについては、堀川久美子氏（堀川 2011）も指摘している通りである。ただし、編物の中には、素材や器種の影響で絡め方が逆になるものもあることに注意する必要がある。その好例として、縄文時代の編布には右絡みが多いことが挙げられる（表2-J）。縄文時代の細密な編布圧痕とされるものや中国新石器時代の編布圧痕は左絡みの方が多く（表3-K・L）、民具の越後アンギンも左絡みが基本なのだが、縄文時代の通常の編布に限ってはそうならないのである（松永 2011c）。これについては、おそらく、素材となっている糸の種類や撚り方向、密度などが関係しているものと思われる。左絡みが主体となるもじり編みの編物と右絡みが主体となる縄文時代の編布との差違を考えると、素材の違いが最も大きいからである。しかし、現時点ではこれ以上のことはいえず、詳細な原因は別の機会に製作実験などを通じて究明する必要がある。編布以外では、北海道石狩紅葉山49号遺跡（石橋ほか 2005）の魎（柵）が右絡み主体である。この魎は、他のもじり編みの編物とは一線を画し、数メートル規模の巨大な構造物である。そのため、この種の編物を製作する際は、通常のもじり編みとは違う動作になったのかも知れない。あるいは、この遺跡で魎を製作した人間が偶然左利きだった可能性もあろう。

再び視点を変えて、縄文時代の編布（表2-J）や籃胎漆器（表2-C）、弥生時代の定型化したカゴ（表2-G）などについては、器種の特殊性が際立っており、製作する器種に合わせて編み方と素材が決まったようにも見える。さらに、日本列島・中国大陸の敷物や壁材にアシのような植物を素材とする経条・緯条4本以上1組の網代編み（多経多緯式）が用いられていること（表2-H・I）も、器種が主体となって編み方・素材が決まったと見られる好例である。敷物や壁材のような面積の広い平面的な編物を製作するには、アシのような直線状の素材を4本以上まとめて超え・潜りした方が効率的だったものと推測される。また敷物といえば、「敷物圧痕」の原体は土器製作用敷物であるが、これについても器種が編み方などに影響していることがうかがわれる。「敷物圧痕」には様々な種類があるが、日本列島・中国大陸ともにA類の網代圧痕が最も多く、特にA-2・2・1類やA-1・1・1類が普遍的に見られる。これは土器製作用敷物に、堅く丈夫で隙間がなく、単純な構造で編みや

すい網代編みの編物が最も適しているためと考えられるのである（詳細は後述）。ともあれ、特定の器種を製作する背景には、当然ながらその編物の使用目的（衣食住など）があるろう。各地域・各時期の人間生活において、編物を使用する必要があるからこそ、各器種を製作しているのである。そして、その器種を製作するために、編み方・素材を選択するという図式が浮かび上がる。この図式は、例に挙げた編物以外においても想定できる。

このように、東アジア先史時代における編物の編み方・器種・素材の背景には、各地域・各時期の植生や技術的要因、使用目的などがあるものと考えられる。そして、それらの背景の下で、三大要素が双方向的・複合的に影響し合って編物が製作・使用されていたことが分かる。編み方・器種・素材に相関関係があることは先行研究においても指摘されていたが、本論ではその実態を、背景も含めてより具体的に確認することができた。どの要素が特に強く影響するかはそれぞれの編物によって異なるが、三大要素が常に何らかの相関関係を持ちながら編物の製作・使用に結びついていたことは間違いない。おそらくこれは、本論の対象外とした地域・時期においても同様であろう。

2) 東アジア先史時代の「敷物圧痕」の特徴とその背景

本論の分析対象とした各種編物資料のうち、最も多いのは、土器底部の「敷物圧痕」としての編物圧痕である。通常、植物質の編物は遺存しにくい、圧痕は腐朽することのない無機質遺物（土器）に置き換わっているため、必然的に数が多いのである。「敷物圧痕」については、編物以外の土器製作用敷物を原体とするものも多数あり、編物圧痕だけを見てもその本質を明らかにすることはできない。そのため、織物圧痕や自然物圧痕なども含めた「敷物圧痕」全般の特徴とその背景について、総合的に検討する必要がある。ひいてはそれが、各種編物圧痕の原体となった、土器製作用敷物としての編物の実態を理解することにもつながるはずである。縄文時代および中国新石器時代の「敷物圧痕」の特徴と背景については、過去にも検討したことがあるが（松永 2003・2008a）、それに弥生時代や朝鮮新石器時代の資料も加えて、もう一度見直してみたい（旧稿の再構成含む）。

これまでの研究により、「敷物圧痕」の背景には土器製作技術と編物技術（編織技術）の二つが大きく関わっていると考えられる。以下、これらの視点から資料を見てみよう。

まずは、土器製作技術との関わりについてである。「敷物圧痕」は土器製作時（特に成形時）に用いられた敷物の痕跡であり、当然のことながら第一に土器製作技術（特に成形技法）が背景にあることが想定される。そこで、この種の圧痕が残される土器に目を向け

てみると、日本列島では主に北陸・東海地方以北の本州および九州地方において、縄文時代中期～後期をピークに各時期の縄文土器（深鉢・浅鉢・壺・注口土器など）および弥生土器（甕・壺など）に「敷物圧痕」が残されている。また中国大陸では、主に華北地方以北において、新石器時代中期から後期を中心とする諸文化（前期：磁山文化・裴李崗文化、中期：仰韶文化・紅山文化など、後期：大汶口文化・竜山文化など）の土器（碗・鉢・盆・罐・壺など）にこの種の圧痕が残されることが多い。さらに朝鮮半島では、中東部（江原道）の新石器時代の土器（深鉢・鉢）などに類例が確認できる。

これらの土器の共通点は、いずれも底部形態が平底を呈するという点である⁸⁶⁾。土器底部に「敷物圧痕」が残るためには、何よりも平底であることが基本条件であり、それが圧痕の空間的・時間的分布に明確に反映されているものと理解できる。逆に、日本列島・中国大陸・朝鮮半島で「敷物圧痕」が見られない、あるいは少ない地域・時期というのは、平底以外の底部形態（丸底・尖底・上げ底）が主体となっている。具体的には、縄文時代草創期～前期前半の日本列島各地（丸底・尖底が卓越）、縄文時代中期以降の近畿地方や中国・四国地方（上げ底⁸⁷⁾が卓越）、中国新石器時代の華南地方（丸底が卓越）、新石器時代の朝鮮半島南半部（丸底・尖底が卓越）などの資料が少ないのである。さらに、資料が見られない地域・時期では、調整や施文によって土器底面の圧痕を消す習慣が徹底していた可能性などもあろう。いずれにせよ、「敷物圧痕」の資料の多寡には、圧痕の残りやすさが少なからず影響していることに注意しなくてはならない。

このように「敷物圧痕」は、平底土器を前提として存在するわけだが、もう少し踏み込むと、そのあり方には各土器の成形技法が反映されている。「敷物圧痕」が残される土器は、多くが粘土紐の積み上げ（輪積み・巻き上げ技法）によって成形されたものなのである（アジア民族造形文化研究所 1989、可児 2005）。中には回転台成形などによるものもあるが、基本的には回転台・ロクロ出現前の土器にこの種の圧痕が残されるものと理解して良いだろう。一般的に「敷物圧痕」原体は、ロクロよりも前の原始的な回転具としての機能を持つものと考えられているが、圧痕の残される土器がまさにそれを物語っている。

さて、「敷物圧痕」原体には、この原始的な回転具以外の可能性はないのだろうか。この点について、圧痕の種類や分布から検討してみたい。東アジア先史土器の「敷物圧痕」の中で、最も普遍的に見られるのは、A類の網代圧痕である。編み方や素材の差違を無視すれば、縄文時代・弥生時代の日本列島や新石器時代の中国大陸では、多くの地域・時期にこの種の圧痕が見られ、広義の網代編みの敷物が東アジアにおける最も基本的な土器製

作用敷物であったことがうかがわれる。網代編みの敷物は、隙間がなく、堅くて丈夫なことが特徴であり、土器製作用の回転具としては最適である。このことからA類の原体となった網代編みの敷物については、やはり回転具であったものと考えられる。網代圧痕以外の「敷物圧痕」原体についても、しっかり編まれた編物(B類・D類)や貝殻(F類)、鯨骨(G類)など丈夫なものが多く、成形時に回転具として利用されていた可能性が高い。

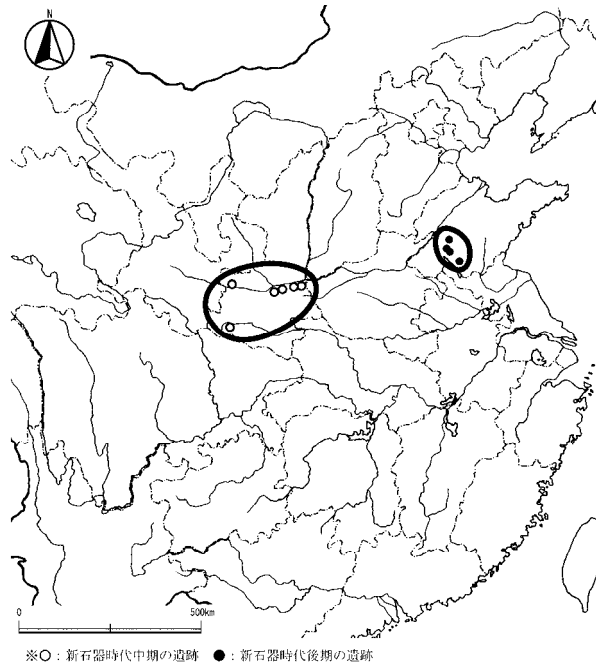


図45 中国新石器時代におけるC類の分布域
(松永 2005)

ところが、弥生時代の日本列島や新石器時代の中国大陸では、比較的軟弱な敷物が特化する場合があり、それらについては土器製作時における回転具以外の利用を考える必要がある。具体的には、C類の織物圧痕のことであり、弥生時代中期～後期の東日本や中国新石器時代中期～後期の黄河中流域(仰韶文化)・山東地域(大汶口文化・竜山文化)にこの種の圧痕が卓越するのである。もちろん、その背景には機織技術の導入・発達による編みから織りへの移行もあるだろうが、それだけでは説明できず、該地・該期の土器製作技術も少なからず影響しているものと思われる。ただし、日本列島と中国大陸のC類が卓越する時期にはかなりの間があり、文化的内容も異なることから、両者が全く同じ技術的背景によるものとは考えがたい。

そこで、日本列島と中国大陸を分けて資料の検討をするが、分布域が明確な中国大陸の方から先に見ることにしよう。早速、中国新石器時代のC類の分布域(図45)と土器製作技術に注目すると、中国大陸でも早くから回転台・ロクロが発達した地域・時期であることが浮かび上がる(アジア民族造形文化研究所 1989、西江

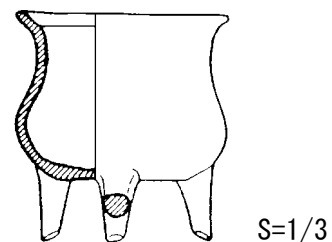


図46 織物圧痕の残る輪製土器
(原報告より転載)

1995、李 1996)。黄河中流域の仰韶文化では粘土紐の積み上げ（輪積み・巻き上げ技法）に伴って回転台が一般的に利用されており、また大汶口文化・竜山文化が展開する山東地域は長江中・下流域と並んでロクロが最も早く出現した地域である。すなわち、これらの地域文化には、より高度な回転技術が存在し、編物のような回転具の必要性は他地域・他時期よりも低かったものと思われる。そこで見えてくるのは、C類の原体である織布が、土器底部と回転台の間に敷いた絶縁体であった可能性である。図46は、山東省西夏侯遺跡（中国科学院考古研究所山東隊 1964）から出土した輪製（回転台成形）の小鼎であるが、この底部にC類の圧痕が残されていることが、その証左の一つとなろう。中国大陸における「敷物圧痕」の長期的な変遷は、回転具（編物をはじめとする圧痕原体そのもの）から回転台（織物のような圧痕原体を絶縁体とする回転式成形台）、回転台からロクロ（糸切り痕を残すような高速回転式成形台）という、土器製作用回転技術の発展とほぼ連動しているようである。

一方、弥生時代の日本列島におけるC類については、少し異なる背景が想定される。奇しくも弥生時代は回転台の出現期であるが、その使用は、C類が卓越する東日本ではなく、近畿地方を中心とした橿原文などについて推測されている（佐原 1959）。そもそも、日本列島と中国大陸では、土器製作用回転技術の発展過程に大きな差がある。大陸からの影響を受けながら古墳時代になってロクロの導入に至った日本列島に対し、中国大陸では新石器時代のうちに回転技術をロクロまで内的発展させているのである。これらを勘案すれば、弥生時代のC類の原体は、回転具でも絶縁体でもない可能性が出てくる。もしかしたら、弥生時代にC類がよく見られる東日本などでは、回転台と絶縁体の組み合わせが、回転しない成形台（作業台）と回転具兼絶縁体の組み合わせ（いわば回転具と回転台の中間）に置き換わっていたのではないだろうか。あくまでも可能性の話であるが、縄文時代の日本列島では地面の上に編物などの回転具を敷いて成形作業をおこなっていたが、弥生時代には回転台を使用しなくても何らかの作業台の上に織物などを敷いて成形作業をおこなっていたように思えるのである。織物のような柔軟な敷物でも、平坦面がしっかりした作業台の上ならば回すことは可能であり、また作業台との絶縁体にもなって一石二鳥である。さらに織物以外の圧痕原体（特にE-1類）についても、弥生時代には同様の性格を持っていた可能性があろう⁸⁸⁾。

なお、縄文時代・弥生時代ともに日本列島では、E-1類の網状葉脈圧痕が各地で多数見られる。朝鮮半島でも新石器時代や無文土器時代にこの種の圧痕が確認できるし、中国大陸

にもこの種の圧痕を彷彿とさせる資料（葉脈紋）がある。E-1類の原体である木の葉は、最も容易く用意できる敷物であり、そのため利用法の如何（回転具または絶縁体、主体的利用または補助的利用）に関わらず、強度に多少難があっても東アジアで広く使われていたものと思われる。

このように「敷物圧痕」原体となった各種敷物は、土器成形時の回転具を基本とし、時には作業台・回転台との絶縁体の機能を持っていたものと考えられるわけだが、これらの敷物は専用品（土器製作専用の敷物）なのであろうか、それとも転用品（別の用途に使っていた器物を再利用したもの）なのであろうか。他の利用法が想定しにくい植物の葉（E類）やホタテ貝の貝殻（F類）、鯨の椎端板（G類）などについては、深く検討するまでもなく土器製作専用の敷物と考えられる。植物の葉は、周囲に生えていた植物の中で、特に葉が大きなものを土器製作時に採ってきたのであろう。また、ホタテ貝の貝殻や鯨の椎端板は、肉を食用とした後の残骸を土器製作時に敷物として使用するために取っておいたのであろう。つまり、ここで問題となるのは、残る圧痕原体の編物や織物である。かつてG.M. クロウフット氏が、古くなった巻き上げ編みの敷物を土器製作に転用する西アジアの民族例を紹介しているように（Crowfoot 1938）、これらは別の用途に使用されていたカゴや敷物、衣類などを土器製作用敷物として転用した可能性も考えられるのである。

ここで手がかりとしたいのが、日本列島の縄文時代における編物圧痕資料と編物実物資料の違いである。縄文時代の編物には実物資料・圧痕資料ともに地域的特徴・時期的特徴があることはすでに述べた通りであるが、同一地域・同一時期の両者を比較した場合、編み方などの傾向が一致しないのである。その好例が、縄文時代中期後半以降の東日本の編物資料で、圧痕資料ではA-2・1・1類（2本超え1本潜り1本送り、見方を変えれば1本超え2本潜り1本送り）が主体となるのに対し、実物資料ではそれ以外の編み方（2本超え2本潜り1本送りや1本超え1本潜り1本送り）の方が一般的なのである。両者の違いは単純に、平面的な敷物である圧痕原体と、カゴのような立体物を主とする実物資料の違いのようにも思えるが、敷物とされる実物資料だけを比較しても圧痕原体とは様相が異なる。すなわち、A-2・1・1類の圧痕原体は、土器製作時の敷物に特化した編物と考えられる。この種の網代圧痕は、特に縄文時代後期前半をピークとして東日本で圧倒的多数を占め、土偶脚部にも同種の圧痕が認められるほどである。これは、一種の地域的規範として、2本超え1本潜り1本送りの編物が意識的に選択されていたことを示しているのであろう。これらのことから、A-2・1・1類の圧痕原体となった編物は、使い古したカゴ・敷物などの転用品である

可能性は低く、土器製作専用の敷物として用意されたものと考えられる。

他地域・他時期の編物圧痕原体についても、同様に土器製作専用の敷物であった可能性が想定できる。例えば、鳥取県では縄文時代後期をはじめとして広義のもじり編みの実物資料が特徴的に出土しているのに対し、同時期の圧痕資料にはB類のもじり編み圧痕がほとんど見られない。これも、同一地域内における編物の圧痕資料と実物資料が異なる一例であり、土器製作専用の敷物の存在を示唆しているように思われる。このような諸例を勘案すれば、少なくとも特定の地域・時期において主体となる編物圧痕の原体は、土器製作時に使用することを目的として用意された敷物であった可能性が高い。ただし、各遺跡において比率的に少ない編物圧痕や複雑な模様を編み出してある編物圧痕などの原体については、むしろ不足分を補うための転用品であった可能性を考える必要がある。

このように考えると、「敷物圧痕」原体となった土器製作専用の敷物は基本的に出土していないということになるが、これについては埋没中に腐ってしまったか、土器の焼成時に一緒に焼いてしまった可能性⁸⁹⁾を想定しておきたい。

日本列島、特に縄文時代の資料についてはこの通りであるが、中国大陸の編物資料は、実物資料と圧痕資料の分布域が全く異なるため、両者を比較することは難しい。中国新石器時代の「敷物圧痕」原体を見ると、土器製作用敷物に適した単純な網代編みの編物が多いことから、基本的にはこれらも専用品と考えたいが現時点では断定できない。先述したように、中国大陸では圧痕原体となった敷物の機能が一部回転具から絶縁体に移ったとすると、回転台との密着を防ぐことができれば十分な絶縁体になった時点で専用品から転用品に変わった可能性もあろう。絶縁体と考えられるC類原体の織布を、土器作りのたびにいちいち織っていたとも考えにくい。そうすると、回転具兼絶縁体の機能を想定した弥生時代のC類などについても、使い古した織布を転用したものなのかも知れない。

「敷物圧痕」と、その背景にある土器製作技術との関わりについて、筆者が知り得た情報からいえることは、以上の通りである。続いて、編物技術（編織技術）との関わりについて見ることにしよう。「敷物圧痕」のうち、特に編物圧痕（編織物圧痕）に認められる編み方や素材などの諸特徴を、編物技術という視点からもう少し掘り下げてみたい。

それでは、編物圧痕に認められる編み方の系統から見よう。東アジア先史時代の編物の編み方には、大別して網代編み系統・もじり編み系統・巻き上げ編み系統の三つがあるが、「敷物圧痕」にそれらが一様に見られるわけではない。何度も述べてきたように、東アジア先史時代において最も普遍的な編物圧痕は、A類の網代圧痕である。A-2・2・1類

やA-1・1・1類をはじめとして、日本列島や中国大陸の各地で認められ、遺跡別に見てもこの種の圧痕が主体を占めることが多い。B類のもじり編み圧痕は、一部の地域・時期において卓越することはあるが（B-1類：縄文時代中期前半をはじめとする東北地方～北陸地方など、B-2類：中国新石器時代前期の華北地方）、全く見られない遺跡も多く、A類の普遍性には遠く及ばない。残るD類の巻き上げ圧痕は、それ以上に少なく、中国新石器時代中期にわずかな類例が確認できるのみである。

このA類の普遍性の一因として考えられるのが、網代編みという技法の編みやすさである。先に見たように、網代編みの編物が土器製作用の回転具に最適であることも一つの要因であろうが、それに加え、この編み方が最も単純で編みやすい技法であることも普遍性の高さに影響していると思われる。網代編みは、手で条材を縦・横・斜めに単純に交差させるだけの編み方で、専用の道具も必要としない。それに対し、B類のもじり編みやD類の巻き上げ編みは、条材を絡めたり巻き上げたりしなくてはならず少々手間がかかる。その上、もじり編み圧痕の原体の多くは、専用の道具（編み台・編み錘のセット）を用いていると見られ、手のみで編めるものでもない。「敷物圧痕」原体については、基本的に短期の使い捨てであったことが推測される。そのため、いざという時に手のみで簡単に素早く編める、網代編みの編物が多用されたのであろう。

A類をさらに詳しく見ていくと、日本列島・中国大陸ともに最も広く見られるのがA-2・2・1×x類やA-2・2・1/2類を含めたA-2・2・1類（2本超え2本潜り1本送り）の仲間であることに気づく。それに、A-1・1・1×x類を含めたA-1・1・1類の仲間（1本超え1本潜り1本送り）が次ぐ。両者とも単純な構造の編み方であるが、平編みともいわれるような最も単純なA-1・1・1類の仲間ではなく、綾のあるA-2・2・1類の仲間の方が普遍性が高いのである。土器製作用敷物に、より簡単な編み方が好まれていたのならば、これは一見すると辻褃が合わない。しかし、両者の編み方の素材に対する適応性に注目すると、この現象を合理的に説明することができる。確かに構造上は、A-1・1・1類の仲間の方が単純であるが、この編み方で隙間のない敷物を作るためには、条材に軟質な素材を用いる、経条と緯条の素材を異なったものにする、一方の条材の間隔を広くとってザル目状（ゴザ目状）に編む、などの工夫をする必要がある。それに対してA-2・2・1類の仲間は、ほど良い間隔があるため、どのような素材であっても特別な工夫をせずに隙間のない敷物を作ることが可能である。つまり、構造と素材の面を総合すると、A-2・2・1類、すなわち2本超え2本潜り1本送りの網代編みが最も編みやすいのである。これが、この種の編み方の土器製作用敷物が東

アジアで最も広く用いられた理由であろう。かつて小林行雄氏も、同様の指摘をしている（小林1964）。

このように、A類の網代圧痕のあり方には、原体となった編物の構造だけでなく、素材の種類も少なからず影響している。そこで、A類の中でも素材が特徴的なものについて、もう少し詳しく見てみたい。

縄文時代後期前半をピークとして東日本で圧倒的多数を占めるA-2・1・1類は、d¹類やe¹類に分類される細い硬質材を主な素材としている。その多くは、質感などから判断して、おそらくタケササ類であろう。マダケなどについては鉄器がないと加工ができないといわれているが（渡辺 1996・1999）、マダケやヤダケといった広義のタケササ類を用いた網代編みの編物実物資料が、実際に東日本の縄文時代遺跡から多く出土している。圧痕資料と実物資料の編み方や器種については大なり小なり違いがあるが、同一地域内において利用できる素材は共通しているはずであり、実物資料の素材は圧痕資料の素材推定において十分参考になるものと考えられる。従って、A-2・1・1類の主な素材であるd¹類やe¹類を、同一地域・同一時期の実物資料に多く見られるタケササ類と推定することはきわめて妥当であろう。さらに、素材から編み方を見ると、このタケササ類と見られる硬質材が、A-2・1・1類の網代圧痕を生み出した可能性が浮かび上がる。A-2・1・1類の網代圧痕は、B-1類のスダレ状圧痕に時折よく似ることがあるが（図47）⁹⁰⁾、B類のもじり編みをタケササ類を用いておこなおうとすると、その硬さゆえに条材を上手く絡められず、結果としてA-2・1・1類の網代編みのようになる。すなわち、A-2・1・1類とは、構造上は広義の網代編みではあるが、本質的にはもじり編みが硬質なタケササ類による制約を受けて生まれたものであることが推測されるので

ある。A-2・1・1類とB-1類が対照的な分布（A-2・1・1類：太平洋側中心、B-1類：日本海側中心）を示すことも（図42）、A-2・1・1類の網代編みが、B類のもじり編みとほぼ同じ位置づけの編み方であったことを反映しているかのようなのである。ただし、A-2・1・1類の多くが民具表現の飛

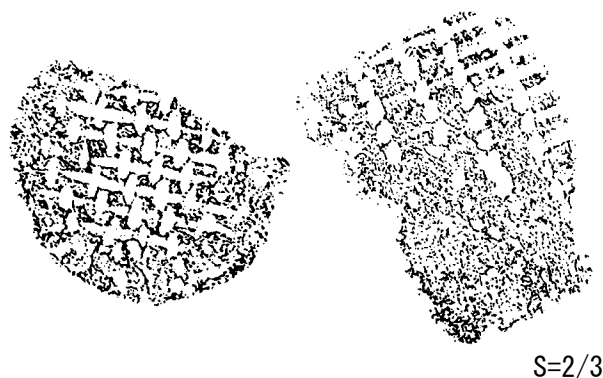


図47 A-2・1・1類（左）とB-1類（右）の近似例
（両者とも狩野・酒井・橋本ほか 1992より転載）

びゴザ目編みの類であり、単にザル目編み（ゴザ目編み）の応用としてこの種の編み方が生まれた可能性もある。

縄文時代中期から後期を中心に日本海側の多雪地帯に分布する東北型網代圧痕（ポコポコとした質感の強いA-1・1・1c²類・d²類）については、丸みを帯びた軟質な蔓植物を素材としていると見られ、先行研究ではマタタビと考えられている（植松 1981、山本 1989、渡辺 1996）。民具のマタタビ製カゴ類との質感や分布域が共通することからも、その可能性が高い⁹¹⁾。若干の個体差があるため他の蔓植物も含んでいるかも知れないが、基本的には密な平編みをおこなうために、多雪地帯での利用に適した軟質な蔓植物であるマタタビを選択したものと見られる。

縄文時代後期前半の九州地方南部に特徴的なA-1・1・1b²類については、東北型網代圧痕とは異なった種類の蔓植物が推測される。個々の資料の質感は、ツツラフジやトウなどの編物に似ているが、同一地域・同一時期に同種の編物実物資料は見つかっていないし⁹²⁾、そもそもトウは日本列島に自生していない（黒沼 2009）。そのため、現時点でこの種の圧痕の素材を軽々に特定することはできないが、密な編物を製作するためにツツラフジのような軟質な蔓植物を選択したものと考えられる。

中国大陸では、新石器時代のA類の素材が、南北で大きく異なる。具体的には、北に向かうほどb²類が多くなり、南に向かうほどa¹類が多くなるのである（図48）⁹³⁾。a¹類の分布域は概ね照葉樹林帯にあたり、b²類の分布域は落葉広葉樹林帯などにあたる。この植生を念頭においた上で、圧痕の質感などから素材を推定すると、南に多いa¹類はタケササ類が想定され、北に多いb²類は蔓植物や草本類が想定される⁹⁴⁾。つまり、南の照葉樹林帯では主にタケササ類を用いて網代編みをおこなっていたのに対し、タケササ類の少な

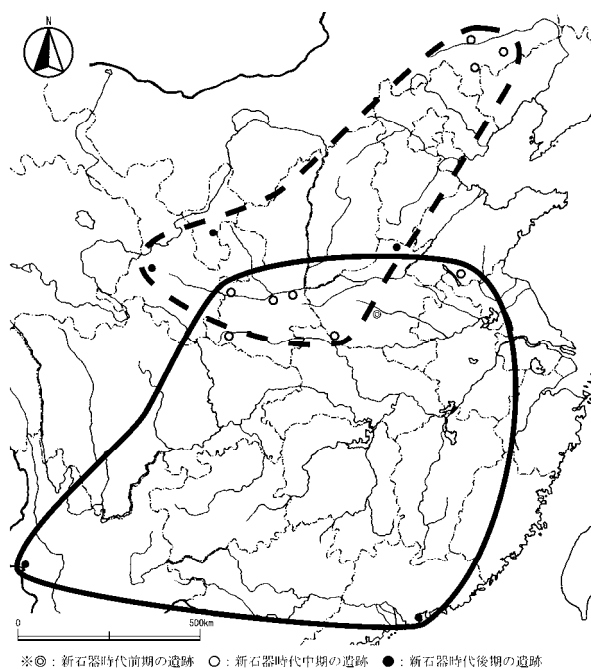


図48 中国新石器時代におけるA類の素材分布

（実線はa¹類、破線はb²類、松永 2005）

い北の諸地域では代わりに蔓植物・草本類を用いていたものと考えられる⁹⁵⁾。これは、いわゆる「照葉樹林文化」・「ナラ林文化」（佐々木 1993）に通じる現象として捉えることもできよう。

さて、「敷物圧痕」に見る編物技術を、織物も含めた編織技術の一部と見ると、さらなる関わりが浮かび上がる。東アジア先史時代の「敷物圧痕」は、時期が遡るほどA類の網代圧痕が基本となるが、C類の織物圧痕が出現すると同時に（日本列島：弥生時代前期、中国大陸：新石器時代中期）、そのあり方に変化が表れるのである。それは、先に見たように土器製作用回転技術の変化（編物をはじめとする回転具から、織物をはじめとする絶縁体または回転具兼絶縁体への変化）としても捉えられるが、やはり機織技術導入による編織技術の変化も大きかったものと見られる。特に、B-2類の編布圧痕への影響はきわめて大きく、織物圧痕が出現すると編布圧痕は一気に激減する。機織技術は、たとえ最も単純な原始機であっても、2本の経条（経糸）をいちいち絡めていかねばならない編み台・編み錘のセット（編布の製作道具）に比べ、はるかに容易に一枚の布を作り出すことができる技術である。当然人々は、もじり編みの編布よりも織機による織布を多く製作するようになったことだろう。それゆえ日本列島においても、中国大陸においても、C類の出現とともにB-2類が一気に廃れたものと理解できる。




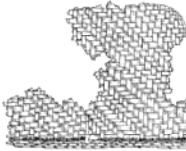


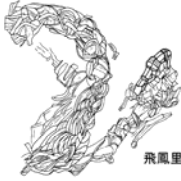



以上のように、編物圧痕を含む東アジア先史時代の「敷物圧痕」のあり方には、様々な形で各地域・各時期の土器製作技術や編物技術（編織技術）が関わっている。編物圧痕だけに限っても、非常に多くのものが複合的に背景にある実態が浮き彫りになった。

第2節 文化史的にみた東アジア先史時代の編物

第1節において、東アジア先史時代の編物の諸特徴とその背景について考察したところ、当時の編物の実態に関わる多くの知見を得ることができた。それらを踏まえて、東アジア先史時代の編物のあり方について文化史的に見てみたい。

図49は、これまで得た知見に基づいて、新石器文化段階を中心とした東アジア先史時代における編物の主な変遷を示したものである。現時点で土器のような詳細な広域編年を組むことはできないが、いつか編物の編年を組む際の参考になるように作成した。以下、これを参照しながら、東アジア先史時代の編物文化史を順に追ってみよう。

東アジア先史時代の編物が初めて確認できるのは、縄文時代草創期の日本列島においてである。1万数千年前の縄文土器底部に、絡め編み圧痕（B-4R類）や網代圧痕（A-2・2・1

年代calBC	日本列島	中国大陸	朝鮮半島
13000	《縄文時代草創期》 		
12000	絡め編み圧痕(三角山 I) <small>三角山 I</small>		
11000			
10000	網代圧痕(打越) <small>仲道A</small> 網代圧痕(仲道A) <small>仲道A</small> 《縄文時代早期》	《新石器時代前期》	《新石器時代早期》
9000			
8000	網代編み実物(粟津湖底)  <small>東名</small>		
7000	 <small>粟津湖底</small>		
6000		 <small>跨湖橋</small>	《新石器時代前期》
5000	網代編み・もじり編みカゴ実物(東名) 《縄文時代前期》	網代編み実物(長江流域) 網代圧痕・編布圧痕ほか(磁山・賈湖) ★一部疑似平織(磁山) 《新石器時代中期》	
4000	編布実物(三内丸山ほか) 編物圧痕の漸増  <small>三内丸山</small> 編布圧痕(市道) 《縄文時代中期》	網代編み敷物実物ほか(長江下流域) 網代圧痕・編布圧痕・巻き上げ圧痕 (華北地方・東北地方) ★織物実物(草鞋山)  織物圧痕(仰韶文化) <small>半坡</small>	 <small>飛鳳里</small> もじり編み編袋実物(飛鳳里) 《新石器時代中期》
3000	編物実物・圧痕ともに出土遺跡が増加し、地域性が明確に 《縄文時代後期》	《新石器時代後期》 多様な網代編み実物(長江下流域) 網代圧痕(華北地方・華南地方) ★絹織物実物(銭山漾) 織物圧痕(山東地域) 	《新石器時代後期》
2000	編物実物・圧痕ともに数量的ピーク、各地域で多様な編み方・器種・素材 《縄文時代晩期》 籃胎漆器・漆漉し編布の卓越(東北地方ほか)→弥生期衰退 ★機織技術の導入 《弥生時代前期》 巻き上げ編みカゴ実物・箕実物 《弥生時代中期》	《初期青銅器時代》 新石器時代を継承したカゴ・敷物実物(長江下流域)  《殷》 《西周》 《春秋時代》	
1000	カゴの定型化(西日本)★織物圧痕の増加 《弥生時代後期》	《戦国時代》 《秦》《前漢》 《新》《後漢》	《無文土器時代前期》 《無文土器時代中期》 《無文土器時代後期》 《原三国時代》
B.C.			網代圧痕(楽浪土城)  <small>楽浪土城</small>
A.D.	編物圧痕の激減		

※()内には該当する遺跡名・地名・地域名・文化名のいずれかを示した。また、織物に関する事象を★で示した。

図49 東アジア先史時代における編物の変遷
(実測図・拓影は各報告より転載、縮尺不同)

×x類ほか) が残されており、すでに広義の網代編み・もじり編みの編物が土器製作用敷物に使用されていたことが分かる。もう少し下って縄文時代早期前葉になると、網代編みの実物資料も確認できる。中国大陸や朝鮮半島では、現時点でこれほど古い編物資料は実物・圧痕ともに見つかっていないが、これらの地域でも同じ頃に何らかの編物が製作・使用されていたことだろう。さらに、縄文時代草創期の編物の技術水準から見て、東アジアの編物の起源は後期旧石器時代にまで遡る可能性が高い。土器の起源を編んだカゴ類とする説があるように(小林 2002)、土器出現以前の旧石器時代に、立体的なものも含め編物の存在を想定することは考古学的に十分妥当である。

それから紀元前6000年～紀元前5000年頃には、新石器時代前期後半の中国大陸でも編物の実物資料・圧痕資料が確認できるようになる。実物資料は長江流域、圧痕資料は華北地方と、資料の分布に違いがあるが、両者を総合すれば広義の網代編み(実物資料および圧痕資料)・もじり編み(圧痕資料)の存在、平面的な編物(敷物)・立体的な編物(箕?)の存在が明らかである。特筆すべきは編布圧痕(B-2類)の存在で、日本列島よりも早く編布の存在が確認でき、さらには織布への移行を示す資料(疑似平織)も認められて実に先進的である。一方、日本列島では、縄文時代早期後半にあたり、網代編み・もじり編みの実物資料がこの頃に確認できる。圧痕資料も散見されるが、実物資料の方が情報が多く、平面的な編物(敷物)・立体的な編物(カゴ)が製作されていたこと、多様な用途(貯蔵穴での利用や石材の収納など)に編物が使用されていたこと、編み方・素材の組み合わせによる装飾・文様効果があったことなどを知ることができる。この時点で、日本列島・中国大陸ともに、編物文化が生活の様々な分野に浸透していたことが確実である。

紀元前5000年～紀元前3500年頃は、概ね日本列島では縄文時代前期、中国大陸では新石器時代中期、朝鮮半島では新石器時代前期にあたる。日本列島では、網代編み・もじり編みの実物資料・圧痕資料が漸増的に認められ、多様な編物の製作・使用がうかがわれるが、中国大陸に遅れてこの頃に編布(実物資料・圧痕資料)が出現することが最大の特徴である。この編布は、以後縄文時代晩期まで日本列島における布の代表としてあり続ける。これに対して、中国大陸では確実に織布(実物資料・圧痕資料)が出現し、編布はほとんど見られなくなる(編布圧痕はわずかに存在)。機織技術の確立が、布の製作に与えた影響は非常に大きかったようである。なお、織物圧痕(C類)の原体は、土器製作用回転具と見られる編物圧痕(A類ほか)の原体とは、性格が異なる可能性(回転台との絶縁体)がある。布以外では、長江下流域で網代編みの敷物などの実物資料が出土し、華北地方や東

北地方で網代圧痕（A-2・2・1類ほか）や巻き上げ圧痕（D類）といった「敷物圧痕」が見つかっている。これらのうち巻き上げ圧痕は、少数ながら網代編み系統・もじり編み系統・巻き上げ編み系統の三大系統が出揃ったことを示す資料であり、織物とともに日本列島よりも数千年早い技術革新が注目される。また朝鮮半島では、この間に含まれる紀元前3700年頃のもじり編みの編袋が貯蔵穴から見つかっている。これにより、東アジア全域で編物文化が展開されていたことを知ることができる。

紀元前3500年頃を境に、日本列島は縄文時代中期に、中国大陸は新石器時代後期に、朝鮮半島は新石器時代中期に入る。日本列島では、実物資料・圧痕資料ともに出土遺跡が増加し、地域性が明確になってくる。特に圧痕資料の増加は、平底土器の定着を背景として、きわめて顕著である。中国大陸では、長江下流域で広義の網代編みを基本とする実物資料が多数出土するが、圧痕資料は華北地方や華南地方の網代圧痕に限られるようになる。織物の発展はさらに進み、長江下流域における絹織物の存在や、山東地域における織物圧痕の卓越が注目される。ここまで機織技術が定着すると、もはや編布は中国大陸から姿を消してしまう。朝鮮半島では、編物資料が見られず、以後楽浪土城で網代圧痕（A-2・2・1×x類）が確認できるまで、どのような編物が製作・使用されていたのか不明である。しかし、日本列島や中国大陸の状況を勘案すれば、生活の様々な分野で様々な編物が活用されていたことだろう。

紀元前2000年～紀元前1500年頃、概ね日本列島は縄文時代後期前葉～中葉、中国大陸は初期青銅器時代である。日本列島では、実物資料・圧痕資料ともに、この頃の資料が最も多い。そのため、編み方・器種・素材の多様なヴァリエーションが確認でき、それらが地域ごとに相関関係を持っていたことや、生活の様々な場面（貯蔵穴や水場など）で編物が使用されていたこと、土器製作用敷物に一種の規範があったことなど、豊かな編物文化の実態がよく分かる。一方、初期青銅器時代に入った中国大陸では、長江下流域で網代編みのカゴや敷物といった実物資料が出土しているが、新石器時代との共通点が多く、技術的なつながりがうかがわれる。

紀元前1300年頃、日本列島は縄文時代晩期に入る。この頃、中国大陸はすでに殷代に入っており、もはや本論の分析対象である先史時代ではない。一方、朝鮮半島は時代的には分析対象にあたるが、すでに述べたように歴史時代まで編物資料を欠くため、検討のしようがない。そのため以後は日本列島のみを見ることになるが、縄文時代晩期には、東北地方を中心に、高度な漆工技術の産物である籃胎漆器と漆漉し布（編布）が卓越することが

特徴的である。圧痕資料は減少傾向となるが、各種編物圧痕（A類・B類）が引き続き見られ、土器製作用敷物としての編物の使用が確認できる。また、本論の分析対象とはしなかったが、九州地方では組織痕土器が見られ、型取り技法に伴う編物の使用があったこともこの時期の編物の大きな特徴である。このように、該期には日本列島各地にかなり独特の編物文化が展開していたようである。なお、組織痕土器の中には、織物の圧痕（平織圧痕）を有するものもあり、ついに日本列島においても機織技術の導入がうかがわれる。

紀元前800年頃、日本列島は九州地方で弥生時代前期に入るとされ（春成・今村ほか 2004）、さらに紀元前500年前後に、本州でも弥生時代前期に入ると見られる（山本 2007a）。この弥生時代前期以降、日本列島の編物文化は縄文時代のそれとは一線を画すものとなる。具体的には、縄文時代晩期に特徴的だった籃胎漆器や編布が衰退・激減し、その一方で巻き上げ編みのカゴや広義の網代編みの箕が見られるようになるのである。土器底部に網代圧痕が見られるなど、縄文時代に通じる特徴もあるが、大陸文化の影響を受けたであろう新技法・新器種の登場はきわめて画期的である。該期には、本州でC類の織物圧痕が確認でき、縄文時代晩期の九州地方で先行導入された機織技術が、生活技術の一つとして列島内に広まったこともうかがえる。縄文時代前期以来ずっと使用されてきた編布が激減した要因として、この機織技術の波及は大きいと見られる。なお、弥生時代以降、縄文時代に多かった貯蔵穴からの編物の出土例が一気に減ることから、生活文化の変化（貯蔵対象の食物の変化）とともに編物のあり方が変わったこともうかがえる。これまで触れなかったが、壺形土器をカゴで包む例（被籠土器）が見られることも、弥生時代に入ってから（古墳時代まで）の特徴である（植松 1980）。

紀元前400年頃、日本列島は弥生時代中期に入るが、該期には様々な編み方・器種・素材の編物実物資料が見られる。中でも注目されるのは、西日本を中心にカゴの定型化が特徴的に進むことである。おそらく当時のカゴ製作に、一種の共通規範・共通理解があったのだろう（発生は弥生時代前期か）。このカゴの定型化は、弥生時代後期以降も続き、弥生時代後期末～古墳時代後期にはこの定型化したカゴが土器の型取り技法（カゴ型土器の型）にも用いられる。編物圧痕は、該期においても依然として見られるが、それ以外の「敷物圧痕」（C類・E-1類）が目立つようになり、日本列島でも土器製作用敷物の性格が変わった可能性がある。

紀元50年頃、日本列島は弥生時代後期に入る。該期の特徴の一つが、編物圧痕が激減することで、土器製作用敷物として編物を敷くことの必要性がかなり低くなったことがうか

がわれる。その一方で、実物資料は各地で出土しており、弥生時代中期の特徴を受け継ぎながら、さらなる顕著化も見せている。この弥生時代後期における編物のあり方は、続く古墳時代へと受け継がれ、さらに変化していくものと見られる。

以上のように、新石器文化段階を中心とする東アジア先史時代の編物文化は、網代編みまたはもじり編みを中心に共通点を見せながら変遷するが、その速度や内容にはかなりの地域差がある。それは、各地域における種々の文化現象（編織技術の革新、土器製作技術の発展、漆工技術の卓越、食物の変化など）や植生をはじめとする環境の違いに起因するのであろう。本論では、ある程度その見通しをつけたものの、その詳細を深く追求するにはより多くの情報を集める必要がある。しかし、少なくとも様々な背景の下、編物文化が発展的に展開・継承されてきたことが浮き彫りになった。

第3節 今後の課題と展望

以上、東アジア先史時代の編物について、実物資料・圧痕資料の情報を統合した上で、その実態への接近を試みた。結果、個別研究が多く、汎アジア的視点に欠けていた従来の先史編物研究では分からなかったことが、かなり明らかになったと思う。

まず、筆者が三大要素として重視した、編物の編み方・器種・素材について、三者に明確な相関関係があることを具体的に示した。そして、三者のあり方の背景に、各地域・各時期の植生や技術的要因、使用目的などがあることを浮き彫りにした。

次に、土器底部の編物圧痕資料について、編物以外の原体を含む「敷物圧痕」全体を見ることにより、土器製作用敷物（特に土器製作用回転具）としての編物の位置付けを明確にした。そして、土器製作用敷物の諸特徴の背景に、土器製作技術や編物技術（編織技術）があることを指摘した。

最後に、東アジア先史時代の編物文化史を順に追うことにより、日本列島・中国大陸・朝鮮半島の編物が、共通点を見せながらも各々独自に変遷する過程を捉えた。そして、東アジア各地における編物の変遷の背景に、種々の文化現象や環境の違いがあることを強調するに至った。

このように、新石器文化段階を中心とする東アジア先史時代の編物が、きわめて複合的な背景の下で製作・使用されていた実態が明らかになったのである。

しかし、これで東アジア先史時代の編物の全てが解明されたわけではない。現時点では資料が足りない地域・時期（特に朝鮮半島の新石器時代）があり、第一にその空白を埋め

る必要がある。また、編物の製作・使用の背景として想定した事象の中には、推測の域を出ないものや、より深く追求する必要があるものなどが少なくない。これらについては、一層の資料収集や情報収集に努め、関連諸学（植物学・民俗学・民族学など）の援用や顕微鏡による資料の詳細観察、各種編物の製作・使用実験などを通して検証と深化を進めていかねばならない。さらに、本論中に型式分類や編年の下地になるものは提示したが、あくまでもこれはたたき台である。遺物の性格上、きわめて可塑性の高い土器ほどの細かい型式分類・編年にはならないだろうが、できる限りの精緻化をはかっていきたい。その他、本論では分析対象としなかった関連資料や地域・時期があるが、これらについても研究を展開し、より総合的・包括的な編物文化史の構築を目指さなくてはならない。

以上の課題を解決すべく、多くの方のご意見・ご批判をいただきながら、今後も編物文化の実態解明に向かうことができれば何よりである。

おわりに

本論をなすにあたり、指導教官である名古屋大学の山本直人先生には、長きに渡る在学期間の中で多大なご迷惑をおかけしながら、厳しくも的確なご指導を賜りました。先生のご指導がなければ、本論は決して完成しなかったものと思います。また研究を日本列島から東アジアへと広げることができたのは、かつての指導教官である金沢大学の中村慎一先生のご指導のおかげです。これまで在籍した名古屋大学の梶原義実先生、伊藤伸幸先生、金沢大学の佐々木達夫先生、高濱秀先生、藤井純夫先生にも、様々な形で大変お世話になりました。さらに、研究がここまでたどり着くには、家族からの支援の他、次の方々・機関からのご指導・ご助言・ご協力・ご配慮がありました。そのご恩にどれくらい報いることができたかは分かりませんが、ここに心より感謝申し上げます（五十音順およびアルファベット順、敬称略、機関名は当時の名称）。

相羽重徳、青山裕子、安孫子昭二、阿部昭典、池田亨、池野正男、稲畑航平、今井哲哉、植月学、漆畑稔、越前慎子、大野淳也、長田友也、尾関清子、河西健二、加藤雅士、金三津道子、上村建三、菅頭明日香、岸本雅敏、倉石公太、桑原百合枝、斉藤準、齋藤哲、坂上有紀、佐藤信之、佐藤雅一、渋谷綾子、澁谷昌彦、庄田慎矢、新宅輝久、関清、多賀直人、建石徹、谷口恭子、谷口宗治、趙曄、津村宏臣、鄭雲飛、寺崎裕助、土橋由理子、中川道子、中沢英正、長澤展生、中田節子、西田巖、西野摩耶、野田真弓、古澤妥史、方向明、町田賢一、丸山真史、宮坂清、向井裕知、村上由美子、山口一男、山本正敏、湯尾和広、湯尻修平、渡邊裕之、Jason Channel、Dale Croes、Eva Marie Fuschillo、Kathleen Hawes、Amy Beth Homan、Olivia Ness

石川県立白山ろく民俗資料館、伊豆の国市教育委員会、小矢部市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター、河姆渡遺址博物館、湖州博物館、財団法人石川県埋蔵文化財センター、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団、佐賀市教育委員会、諸暨博物館、浙江省文物考古研究所、津南町教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センター、鳥取市埋蔵文化財センター、富山県埋蔵文化財センター、富士竹類植物園

補遺 本論完成より後の2012年10月13・14日、佐賀市教育委員会主催のシンポジウム『縄文時代の編組製品研究の到達点』（あみもの研究会）が開催された。その内容は、編物実物資料の地域性と素材に主眼をおいたものであったが、少なくとも本論と関わる部分において、論旨に大きく反するものではなかった。そのため、シンポジウムを踏まえた上での追加や修正は特におこなっていない。ただし、各技法の捉え方などには若干異論があるため、それらについては別の機会に論じたい。

註

- 1) 坪井氏は、1893年に、東京都西ヶ原貝塚から出土した縄文土器底部の圧痕を「無紋」・「編み物押し形」・「木の葉押し形」・「木の葉編み物混交押し形」・「不詳」の5種類に大別し、特に編み物押し形（網代圧痕）を「一二編み」・「二二編み」・「三三編み」に細分している（坪井 1893）。1899年の分類は、それを発展させたものである。
- 2) この三部作は、一つにまとめて『九州考古学論攷』（鏡山 1972）に再録されている。
- 3) さらに額田氏は、編物設計のための計算式を考え出し、単位図形の応用による設計法なども合わせて「竹製民具の構成理論」として発表している（額田 1970）。
- 4) 鈴木保彦氏による戦後縄文土器研究史概説を参考にすれば（鈴木 2008）、本論でいう編物研究第1期（1879年～1967年）の終わり頃が、鈴木氏のいう戦後縄文土器研究第2期（1957年～1965年）に概ね相当し、この時期までに全国的な縄文土器編年の大綱がほぼできあがったという。そして編物研究第2期（1968年～1979年）は、戦後縄文土器研究第3期（1966年～1989年）の前半に概ね相当し、大規模開発に伴う発掘調査の増加で考古学的情報（端的にいえば土器資料の数であろう）が爆発的に増大していった時期に位置づけられる。
- 5) 荒木氏が「42型式（双子編み）」としたものが（荒木 1970）、もじり編みの編物によるスタレ状圧痕を指していると考えられる。
- 6) スタレ状圧痕の命名は、沼田啓太郎氏によるという（渡辺 1976）。
- 7) この年最深積雪量は、気象庁が1972年に発行した『日本気候図』第2集が基である。
- 8) この同心円状の圧痕は、いずれもきわめて不鮮明である。カゴ底圧痕ではない可能性、編物圧痕ではない可能性もあるので（篠原 2001、松永 2008a）、本論では分析対象としない。
- 9) この論考は、賀川氏の著作集（賀川 1996）に再録されている。
- 10) この論考は、『文理融合の考古学』（山本 2007b）に再録されている。
- 11) この予稿集では、新潟県津南町とその周辺の植物利用・編物技術などについて、様々な論考が発表されている。まず、中沢英正氏は、津南町の植生調査の成果に基づき、編物などに繊維が利用できる植物の種類を明らかにしている（中沢 2011）。次いで、上村健三氏は、蔓・樹皮を素材とした編物の製作技術（採取・素材加工・編成）について、自身の製作経験も踏まえて解説している（上村 2011）。池田亨氏は、民俗学的な視点から、津南町周辺の里山における植物利用の知識と技術についてまとめている（池田 2011）。また、土屋健作氏は、カラムシの繊維を用いた単節縄文製作実験の成果について誌上発表している（土屋 2011）。さらに、主催者である津南町教育委員会事務局の佐藤雅一氏は、越後アンギンと縄文時代編布の研究史をまとめ、今後の研究の展望について述べている（佐藤_雅 2011）。同

事務局の佐藤信之氏は、津南町における植物繊維の利用について、聞き取り調査成果も含めてまとめている（佐藤_信 2011）。同じく事務局の今井哲哉氏は、土偶の衣服状表現から、縄文時代における編物技術について仮説的な予察を試みている（今井 2011）。いずれも、先史時代における編物の製作・使用の実態を考える上で大いに参考となる論考である。

- 12) 例えば、日本列島・中国大陸・朝鮮半島では、タケササ類をザル目編みにした製品が多く見られる（センテンス 2002、大分県産業科学技術センター別府産業工芸試験所 1999）。また、日本列島・朝鮮半島では、稲ワラをもじり編みや巻き上げ編みにした製品が共通して見られる（宮崎 1985a・b、印 2006）。
- 13) 民俗考古学的な編物研究によく引用される『竹編組技術資料』（大分県別府産業工芸試験所 1991・1992）において、「四つ目編み」・「ざる目編み」・「ござ目編み」・「六つ目編み」・「麻ノ葉編み」は漢字とひらがなで表記されている。しかし、本論では、これら民具呼称を強調するため、「編み」の前の語を漢字とカタカナにした「四ツ目編み」・「ザル目編み」・「ゴザ目編み」・「六ツ目編み」・「麻ノ葉編み」と表記することにする。ただし、これらから派生した編み方にさらに付く「飛び」や「木目」などの語は、派生的・応用的であることを逆に強調するため、漢字とひらがなで表記する（「飛びゴザ目編み」や「木目ゴザ目編み」など）。また、経条の間隔をあけたものを指す「ザル目編み」・「ゴザ目編み」については、最も単純なもの（1本超え1本潜り1本送りの類）は多くの研究者が用いている「ザル目編み」とするが、派生的・応用的なものについては「ザル目編み」と呼ぶことがほとんどないため、「飛びゴザ目編み」・「木目ゴザ目編み」のように「ゴザ目編み」を用いることにする。さらに、「麻ノ葉編み」については、現時点では資料が少なく細分してもあまり意味がないため、「麻ノ葉つぶし」や「麻ノ葉崩し」などの応用的なものも一括して「麻ノ葉編み」とする。
- 14) ヨコ添えもじり編み・1条絡め編みともに、日本国内の民具には見られない編み方のため、鳥取県青谷上寺地遺跡の発掘報告において新しく設定された名称である（野田 2005、本間 2005）。しかし、同様の編み方は海外には存在しており、英語では前者をラティス・トワイニング (lattice twining) と呼び、後者に構造的に近いものをラップ・トワイニング (wrap twining) と呼ぶようである（センテンス 2002）。
- 15) 巻きつけは、巻き材を単純に巻いているだけであり、現時点で「巻きつけ編み」とはしない。なお、吉本忍氏はこの種の組織を「振り組織」に含めている（吉本 1987）。
- 16) 山本直人氏・野田真弓氏は、縄類と同じように「左撚り」・「右撚り」と表現している。しかし本論では、条材を絡めている編物ということ、縄類とは区別して端的に表すために、「左絡み」・「右絡み」と表現することにする。
- 17) 民具表現には、作り手の感覚のようなものが反映される。ただし、それが出土遺物に余計な先入観を与える可能性もあることに十分注意する必要がある（例えば、ザルとはいえない器種にザル目編みの語

を用いる場合など)。また、民具表現は、同一技法でも地域によって名称が異なる場合があり、この点も注意が必要である。

- 18) カゴの中には、発掘報告などで「ザル」とされているものも含める。カゴとザルの区別は人によって異なり（深さや用途など）、厳密な基準は存在しないためである。
- 19) ほかに、形態的にある程度器種が推測できても明確ではないものは、「スダレ状」や「ネット状」のように「○○状」と表記する。
- 20) 土器底部の編物圧痕の中には、カゴ類を原体とするカゴ底圧痕のように、原体が元々別の用途に使用されていたものも存在する。しかし、そのような転用品の圧痕であったとしても、圧痕原体となった時点でその編物が土器製作用の敷物として利用されていたことに変わりはなく、器種としてはあくまで土器製作用敷物と見るべきであろう。
- 21) 各条を複数本1組にするものについては、いくつかの種類が認められるが、筆者の分類では「 $\times x$ 」として一括する。細別が必要な場合は、 x の中に単位となる条の本数を入れれば良い（中国の網代編み分類・表現方法の数値に相当）。経条・緯条の単位本数が異なる場合は、「 $\times x$ （経または緯）」と表すか、「 $\times x/y$ 」（ x が経条、 y が緯条）と表せば良い。
- 22) 2本超え1本潜り1本送りの敷物を裏返しに敷いた場合、超えと潜りが逆転して1本超え2本潜り1本送りとなる。つまり、2本超え1本潜り1本送りと1本超え2本潜り1本送りは別種のように見えても、両者の原体は同じ可能性がある（区別ができない）。そこで圧痕の分類としては、2本超え1本潜り1本送りと1本超え2本潜り1本送りを一括する。3本超え2本潜り2本送りと2本超え3本潜り2本送り、4本超え2本潜り3本送りと2本超え4本潜り3本送りについても、同様の理由でそれぞれ一括する。
- 23) A-4・2・3類は、細かく見ると「4本超え2本潜りまたは2本超え4本潜りで、2本送り1回・3本送り2回の繰り返しとなるもの」が基本のようであるが、これをそのまま「A-4・2・2/3/3類」と表現すると、非常に長くて分かりにくい。そこで、繰り返す回数の多い3本送りを基本とする4本超え2本潜り3本送りまたは2本超え4本潜り3本送りとみなして便宜的に「A-4・2・3類」と表すことにする。当然、送りを変化させない4本超え2本潜り3本送り・2本超え4本潜り3本送りの本類に一括することになる。なお、中国に類例のある「3本超え2本潜りと3本超え4本潜りを繰り返し、5本送るもの」も長くなってしまいが、「2本超え2本潜り1本送りで経条・緯条を2本1組にするもの」と別種であることを示すためにはどうしても省略できず、「A-3・2/3・4・5類」と表現する。
- 24) 模様編みの中でも、主体が単純な網代編みとなる場合は、超え・潜り・送りによる分類を優先する（例えば、図13-16に示したA-3・3・1a¹類）。
- 25) 図15に示した素材は、あくまでも推測される素材の代表例である。d²類・e²類に分類できる草本類な

ど、他にもかなり多くの種類の存在が推測される。また、圧痕は押圧された編物の一方の面しか反映しないため、丸みを帯びた材は断面形（円形・半円形）を問わずc類ないしd類に一括せざるを得ないことに注意されたい。さらに、本論中で示す素材の硬軟については、筆者の主観的判断に基づき、報告書の拓影や写真から判断したものが多くを断っておく。拓影・写真による圧痕観察の際には、例えば「圧痕が角張っていてしかも材同士の間隔が広ければ、軟質である可能性が低いので硬質材」、「圧痕が丸みを帯びていてしかも材同士の間隔が密であれば、硬質である可能性が低いので軟質材」というように、様々な編物原理を考慮に入れて硬軟を判断している。当然、モデリング陽像を取って綿密な観察をした場合などよりも精度は粗いことは重々承知している。しかし、陽像観察においても人によって硬軟の判断は異なる場合があり、編物原理に基づく判断も的外れというわけではないと思う。

- 26) ここでいう「太い」・「細い」とは、先行研究や各発掘報告を参考にした上で、3mmを目安に区別している。中には太い材と細い材が混在する例もあるが、そのような場合は平均的な太さを基準として、いずれか一方に分類する。
- 27) 正確には、「スタレ状」・「ムシロ状」などに細分することが可能である。
- 28) もじり編みの経条・緯条の区別については、圧痕の種類によって異なる。スタレ状圧痕・編布圧痕については、編み台・編み錘のセットによる製作を意識した通例に従い、絡める方の条材を経条（経糸）とする。しかし、カゴ底圧痕は、明らかに絡める方の条材が緯条である。また、1条絡め編み・ヨコ添えもじり編みを包括する絡め編み圧痕は、スタレ状圧痕・編布圧痕よりもカゴ類との関係が想定されることや、「ヨコ添え」の名称が設定されていることを勘案して、現時点では絡める方の条材を緯条とみなす。図14-9～14の各拓影は、このような基準に合わせて向きを決めているので注意されたい。
- 29) 図14-16に示したD-1類は、B-3類の可能性もあるが断定できないため、現時点では過去の拙稿（松永 2003・2004）に合わせて巻き上げ圧痕に分類しておく。
- 30) 平行葉脈圧痕については、原体となったササ類の葉の枚数と敷き方から細分することが可能である（松永 2011b）。しかし、本論の目的にとってはあまり意味がないため、今回は一括する。
- 31) 素材の表記については、原報告の表現をある程度生かしながらも、筆者の判断でできる限り統一した。
- 32) 本論における縄文時代の時期区分については、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期区分に基づくが（時期をまたぐものなど、資料によっては2時期を一括する場合あり）、さらに各時期を細分する必要がある場合は、6期区分を前半・後半の2小期または初頭・前葉・中葉・後葉・末の5小期に分ける。その上で、各資料（実物資料・圧痕資料）の時期的位置付けについては、『総覧 縄文土器』（小林ほか 2008）の編年観・年代観を基本とし、加えて『縄文時代研究事典』（戸沢ほか 1994）、『日本土器事典』（大川・鈴木・工楽ほか 1996）、『縄紋社会研究の新視点』（小林 2004）、『文理融合の

考古学』(山本 2007a)、「縄文時代の暦年代」(小林 2008)などを参考にしている。

- 33) 東名遺跡の編物実物資料については、本論作成中に正式な発掘報告(西田・山田・佐々木 2009)が刊行されたが、その中で報告された資料の数は膨大であり、全ての情報を整理する時間を確保できなかった。そのため本論では、以前に刊行されていた概報(西田 2008)の掲載資料を分析対象とし、それに正式報告の内容を加えることにした。
- 34) 小竹貝塚の編物実物資料は未報告であるが、(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所の島田美佐子氏・町田賢一氏のご厚意によって実見の機会を得た。参考・引用文献の一覧に示した文献は、あくまでも本遺跡の場所や時期、性格などについて参考にしたものである。なお、本遺跡から出土した編物実物資料は、真脇遺跡や鳥浜貝塚に見られる針葉樹材を用いたもじり編みのカゴ類とほぼ同じものである。
- 35) 縄文時代後期に下る可能性があるもの(中期～後期にまたがるもの)としては、石狩紅葉山49号遺跡、下田遺跡、寿能遺跡、北江古田遺跡、桜町遺跡、坂の下遺跡、前原遺跡から出土した各資料が挙げられる。ここでは、便宜的に中期のものとして紹介したが、後期の編物を考える上でもこれらの情報は参考にしている。
- 36) 縄目返し縁の一種またはその可能性があるものとして、北江古田遺跡(図20-4)と椎ノ木崎遺跡の例がある。
- 37) 縄文時代晩期に下る可能性があるもの(後期～晩期にまたがるもの)としては、萩内遺跡、中山遺跡、寺野東遺跡、寿能遺跡、後谷遺跡、下宅部遺跡、野地遺跡、本郷大田下遺跡、曾畑貝塚から出土した各資料が挙げられる。もちろん、晩期の編物を考える上でもこれらの情報は参考にしている。
- 38) 網は、船ヶ谷遺跡の晩期例しか確認できていないが(圧痕資料としては九州地方晩期の組織痕土器もある)、漁網に使用したと見られる石錘の存在などから、縄文時代後期以前にも存在していたことが確実である。
- 39) 本論における弥生時代の時期区分については、(早期・)前期・中期・後期の3(4)期区分に基づくが、さらに各時期を細分する必要がある場合は、3(4)期区分を前半・後半の2小期または初頭・前葉・中葉・後葉・末の5小期に分ける。その上で、各資料(実物資料・圧痕資料)の時期的位置付けについては、『日本土器事典』(大川・鈴木・工楽ほか 1996)の編年観・年代観を基本とし、加えて『弥生時代の実年代』(春成・今村ほか 2004)、『文理融合の考古学』(山本 2007a)などを参考にしている。
- 40) 弥生時代中期に下る可能性があるもの(前期～中期にまたがるもの)としては、高宮八丁遺跡、亀虎川遺跡、丁・柳ヶ瀬遺跡、唐古・鍵遺跡、青谷上寺地遺跡、長崎県里田原遺跡から出土した各資料が挙

げられる。

- 41) 丁・柳ヶ瀬遺跡から、朱漆を塗布した編物破片（弥生時代前期後半）が出土しているが、詳細は不明である。渡辺誠氏の観察所見（渡辺 1985b）を見る限り、少なくとも縄文時代の籃胎漆器とは別種のものである。
- 42) 大阪府シシヨツカ古墳（高島 2004）など、古墳時代後期～終末期に見られる漆塗籠棺は、一種の籃胎漆器である。
- 43) 弥生時代後期以降に下る可能性があるもの（中期～後期以降にまたがるもの）としては、藤江B遺跡、朝日遺跡、赤野井湾遺跡、上小紋遺跡から出土した各資料が挙げられる。
- 44) 古墳時代以降に下る可能性があるもの（後期～古墳時代以降にまたがるもの）としては、国府関遺跡群、荻市遺跡、赤野井湾遺跡、井辺遺跡、青谷上寺地遺跡、津島遺跡から出土した各資料が挙げられる。
- 45) 江尻遺跡の編物実物資料は未報告であるが、（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所の越前慎子氏のご厚意によって実見の機会を得た。参考・引用文献の一覧に示した文献は、あくまでも本遺跡の場所や時期、性格などについて参考にしたものである。
- 46) 本論における中国新石器時代の時期区分については、前期・中期・後期の3期区分に基づくが、さらに各時期を細分する必要がある場合は、3期区分を前半・後半の2小期または前葉・中葉・後葉の3期に分ける。その上で、各資料（実物資料・圧痕資料）の時期的位置付けについては、『中国の考古学』（小澤・谷・西江 1999）の編年観・年代観を基本とし、加えて『論仰韶文化』（河南省考古学会・澠池県文物保護管理委員会 1986）、『仰韶文化研究』（厳 1989）、『新中国の考古学』（中国社会科学院考古研究所 1988）、『稲の考古学』（中村 2002）、『中国新石器時代資料集成』（羅 1995）、『中国古代製陶工藝研究』（李 1996）、「紅山文化分期初探」（張 1991）などを参考にしている。
また、朝鮮新石器時代の時期区分については、早期・前期・中期・後期の4期区分に基づき、必要に応じて4期区分を前半・後半の2小期に分ける。各資料（実物資料・圧痕資料）の時期的位置付けについては、『朝鮮半島の考古学』（早乙女 2000）の編年観・年代観を基本とするが、新石器文化段階であることを強調するために、本書で用いられている「櫛目文土器時代」ではなく「朝鮮新石器時代」の呼称を用いることにした。
- 47) 跨湖橋遺跡から出土した敷物の可能性がある編物（図32-1）は、原報告の実測図ではほぼ全面が3本超え3本潜り1本送りのように描かれている。しかし、原報告の写真を見ると、この編物は明らかに2本超え2本潜り1本送りが基本となっている。
- 48) 上海市紡織科学研究院・上海市絲綢工業公司の鑑定による。
- 49) 浙江省文物考古研究所の趙曄氏のご厚意によって編物の出土状況写真を見せていただいた。

- 50) 諸暨博物館の方々のご厚意によって編物実物資料を実見・調査する機会を得た。
- 51) 銭山漾遺跡の織物については、浙江省紡織科学研究所によって、1点が絹（蚕糸の織物）、3点が苧麻布（カラムシの織物）と鑑定されている。
- 52) 筆者が実見した尖山湾遺跡出土編物の中には、部分的にもじり編みになる資料や、巻き上げ編みの可能性がある資料も少数ながら認められた。
- 53) 分析対象とした各遺跡の資料の詳細（数量など）については、基本的に原報告を参照していただきたいが、遺跡によっては本論の記載と原報告の内容が大きく食い違っている場合がある。それは、例えば原報告で「1本超え1本潜り1本送り」と記載されていても、筆者が見る限り「2本超え1本潜り1本送り」とであると判断したものについては、本論中「A-2・1・1類」として記載してあるためである。このような例は、非常に多数あり（A類をB類、B類をA類のごとく誤記している報告も少なくない）、いちいち遺跡ごと・遺物ごとの説明をつけていない。筆者の分類案や本論の付資料、原報告の付図・拓影などを参照の上、各自でご理解していただきたい。また、本論の記述には、本章の基になった過去の拙稿（松永 2008a）とも、分類が若干異なっているものもある。これは、本論をまとめるにあたって全資料を再検討した結果、一部所見を変更した方が適切であると判断した資料があるためである。もちろん、本論の記述が筆者の最新の見解であり、この場を借りて訂正させていただきたい。
- 54) 土器底部に網状の葉脈を模して沈線を入れる葉脈紋の例は、中国大陸では内蒙古自治区・山東省・河北省の新石器時代遺跡に見られ（松永 2003）、またロシア沿海地方のザイサノフカ I 遺跡でも類例が知られる（アンドレエフ 1982）。いずれも木の葉を敷物としたE-1類を祖型とする可能性が高く、今後東北アジア各地でこの種の圧痕が見つかることが期待される。
- 55) 原報告では「3～4本を一単位とした櫛歯状の原体による、短い井桁状の擦痕」とされている。
- 56) この資料について、岡元満子氏は「竹などより柔らかい繊維でタタミ状に編んだもの」（岡元 1986）としている。原体は目が詰まった編物で、密なもじり編みの圧痕（B-1類）の可能性もある。
- 57) 尖底土器の底部に同心円状の圧痕ないし擦痕が残される例があるが（井口 1987）、「敷物圧痕」とは性格の異なる圧痕であると思われる。
- 58) 山内清男氏所蔵の大木1式土器に、明らかにA類の圧痕が残るものが1点あるという（荒木 1968）。また小笠原好彦氏によって、大木貝塚から出土した大木1式あるいは大木2式に属するA類（編み方など詳細不明）が紹介されている。さらに経塚森遺跡のA-3・3・1×x a¹類は、大木1式に前後すると考えられる資料である。
- 59) 押出遺跡や仲ノ縄B遺跡にも、本論の基準でA-1・1・1c²類に分類される資料がある。しかし、いずれも経条の間隔が広いザル目編みの類で、いわゆる東北型網代圧痕とは異なるものである。

- 60) 特にA-2・2・1×x 類については、山形県の押出遺跡にも類例が認められる上、岩手県の経塚森遺跡のA-3・3・1×xa¹類ともよく似ており、縄文時代前期の東北地方では経条・緯条複数本1組の網代編み（狭義の網代編み）が一般的であった可能性もある。早い時期の網代圧痕の原体が経条・緯条複数本1組にすることは、北海道地方早期のA-1・1・1×x類や九州地方早期のA-2・2・1×x d²類などにも通じるものがあるかも知れない。
- 61) 金の尾遺跡では、長沢宏昌氏によって該期のカゴ底圧痕の存在も指摘されている（長沢 1986）。長沢氏の論考によれば、山梨県下では前期末十三菩提式期から中期初頭五領ヶ台式期にかけて「網代編み」によるカゴ底圧痕が見られるという。しかし、これらの圧痕はいずれも非常に不明瞭で、再検討の余地があるように思う。
- 62) 真脇遺跡では、山本直人氏によって縄文時代前期後葉から弥生時代以降までの「敷物圧痕」が、土器型式に対応した細かい層位ごとに集計されている。各時期の圧痕が、これほど子細に取り上げられている遺跡は他に例がない。
- 63) 原報告によると、真脇遺跡におけるスタレ状圧痕の出現時期は、确实なところで前期末朝日下層式期から中期初頭新保式期にかけての可能性が推測されるという。
- 64) 植松なおみ氏のいう東北型網代圧痕の中には、幅3mm未満で筆者分類d²類に含まれるものも存在するが、大半は幅3～4mmに集中している。この圧痕の最大の特徴は、軟質な植物素材を割いて密に平編みをおこなったことによる「ボコボコ」とした質感である。
- 65) 館石野 I 遺跡では、A類（A-1・1・1c²類主体）に匹敵するほどE類（E-1類主体）の占める割合が多い。岩手県では、南に向かえば向かうほどA-1・1・1c²類主体の傾向は弱くなり、E-1類の割合が増すと同時に、A類の主体がA-2・1・1類（素材はd¹類・e¹類など）に移るようである。北田勲氏・平野祐氏による岩手県内資料の集成・分析（北田・平野 2007）においても、これに近い結果が示されている。
- 66) 個人的な印象であるが、甲信越地方では、関東地方よりも軟質材（c²類・d²類）の割合が増えるような感がある。
- 67) 新潟県道尻手遺跡（中田 2005）では、過渡的様相を示しており、中期中葉馬高式期にB-1類のスタレ状圧痕の割合が比較的高い。そして後期前葉堀之内式期には、A-2・1・1類をはじめとする網代圧痕主体に移行している（松永 2006）。
- 68) 長野県下でも、山溝遺跡（山岡・伊藤・井上ほか 1973）などで東北型網代圧痕に類すると見られる資料（A-1・1・1（×x）c²類）が確認できる。
- 69) 境A遺跡の「敷物圧痕」の所属時期は、不明確なものが多く、実際は縄文時代中期から晩期に及ぶものと思われる。ただし、少ないながらも確実な時期が分かるものは中期中葉や後期の資料であり、本稿

では中期後半から後期後半までの範囲に属するものとして扱うことにした。また本江遺跡の「敷物圧痕」も、晩期のものを含んでいる可能性が高いが、縄文時代後期中葉以降・後半の土器が圧倒的に多いことから、後期の資料として扱うことにした。

- 70) 真脇遺跡Ⅲ層のうち、後期前葉気屋Ⅱ式を主体とする第5層では、A-2・1・1類がA-2・2・1類を数点上回る。主体とはいえないものの、この遺跡でA-2・1・1類がこれほど多くなるのはこの時期のみであり、何らかの特殊な事情があったのかも知れない。
- 71) 三重県下でも、該期のA-2・1・1類が見られる遺跡は存在する（伊藤・森川ほか 1992、木野本・伊藤 2009）。しかし、ごくわずかにすぎず、東海地方西半部の解釈に影響を与えるほどのものではない。
- 72) A類・E-1類以外に、きわめて稀な例であるが、近畿地方にもB-1L類のスタレ状圧痕が存在する。滋賀県弘川佃遺跡（中村・堀 2007）と京都府車塚遺跡（稲畑ほか 2007）に、後期前半に属する資料を1点ずつ確認した。
- 73) 東京都元八王子池の下遺跡（山村ほか 1983）では、中期初頭五領ヶ台式に属する同心円状圧痕の原体について鯨の脊椎骨の可能性が指摘されている。ただしこれは、山梨県下において長沢宏昌氏がカゴ底圧痕の一種とするものと同種である可能性が高く、両者以外の圧痕の可能性も含めて再検討する必要がある。また福岡県久泉遺跡（新原・水ノ江 1999）では、後期末広田Ⅱ・Ⅲ式併行期の土器底部に鯨骨のような圧痕が残されているが、阿高式系土器に見るG類とは明らかに異なるという。
- 74) 九州地方のB-1類は、南北問わず、経条が密接した「縄目状」（岡元 1986）のものがよく見られ、正確にはスタレ状圧痕と区別すべきである。鹿児島県武具塚および周辺の圧痕資料を分析した廣田晶子氏によると（廣田 1998）、九州地方南部では志布志湾周辺にスタレ状圧痕が多く、薩摩・大隅半島南端から薩摩半島西部にかけては縄目状の圧痕（原文「モジリ編み密」）が多く見られるという。
- 75) 原報告の中では、「織物のような細かな組織痕跡」とされているが、B-2類の編布圧痕の可能性が考えられる。
- 76) 青田遺跡では、A-2・1・1類の応用と思われる広義の網代編みの実物資料が出土している。具体的には、2本超え1本潜り1本送りを90°回転（または裏返しに）して1本超え2本潜り1本送りを見た場合の各経条間に、1本ずつ経条を足したような組織を呈する3本超え3本潜り2本送りのカゴで、さらに途中で送りの方向を変えてジグザグ状の木目ゴザ目編みになっている（図25-1）。青田遺跡の「敷物圧痕」の中で筆者がA-2・1・1類と判断した資料の中にもジグザグ状のもの（木目ゴザ目編みと見るならばA-1・2・1類と記すべきか）が多く、これらはA-3・3・2類の経条が圧痕としてはっきり出ずにA-2・1・1（1・2・1）類に見えるだけなのかも知れない。これは、青田遺跡以外のA-2・1・1類についてもいえることである（もちろん、いずれの遺跡においても確実に3本超え3本潜り2本送りと認識できるものは、

A-3・3・2類に分類している)。

- 77) 御経塚遺跡の資料は、正確には後期中葉から晩期後葉に及ぶ。しかし、この遺跡の編布圧痕やカゴ底圧痕はしばしば晩期の資料として扱われており、本論でも便宜的に晩期の資料として扱うことにした。
- 78) 田村遺跡・中野遺跡の資料が属する夜臼式については、弥生時代早期と位置づけた方が妥当かも知れない。しかし、同時期の他地域との関係から、本論では縄文時代晩期末に含めて扱うことにした。
- 79) 山崎北遺跡では、C類と重複して「渦巻き状の痕跡」が認められる資料が1点あり、B-3類の可能性もある。
- 80) 松尾遺跡と惣根遺跡のC類は、弥生時代後期末の十王台式土器の底部に残されたものである。『日本土器事典』（鴨志田 1996）によれば、十王台式土器の底部には、E-1類とC類が残されることが圧倒的であるという。
- 81) 賈湖遺跡の原報告で「網紋」とされている資料全てを、拓影・写真からB-2類の編布圧痕であると判断した。
- 82) 仰韶文化期以降の「布紋」は、B-2類の編布圧痕であることがはっきり分かる半坡遺跡の「絞纏法」を除き、基本的に織物圧痕であるものとしてC類に分類した。大汶口文化・竜山文化の「布紋」が全て平織の圧痕であることは間違いないが、仰韶文化の遺跡で報告に図のない「布紋」の中には、一部編布圧痕を含んでいる可能性がある。また半坡遺跡で「絞纏法」とされているもののうち1点は、本文の記述および写真からC類であると判断した。
- 83) 半坡遺跡と三里橋遺跡にのみ見られる資料で、いずれの報告でも特殊な敷物の圧痕とされているが、詳細は不明である。
- 84) 青海省搭里他里哈遺跡（青海省文物管理委員会・中国科学院考古研究所青海隊 1963）などに類例（A類・C類）がある。
- 85) 「敷物圧痕」以外では、釜山広域市東三洞貝塚に網目圧痕を有する土器口縁部片がある（渡辺 1983）。
- 86) 北海道地方の縄文時代早期に見られる、F類のホタテ貝圧痕を有する土器については、貝殻の曲面によって上げ底状を呈する。しかし、土器そのものの位置付けとしては、平底土器の概念で捉えられるべきものである。
- 87) 西日本の上げ底については、阿部芳郎氏が凸形の製作台による窪みである可能性を指摘している（阿部 1994）。もしそうであれば、上げ底自体を一種の「敷物圧痕」として捉えるべきなのかも知れない。
- 88) 弥生時代の近畿地方におけるE-1類については、畿内第Ⅰ・Ⅱ様式に見られるが、回転台を盛用していた第Ⅲ・Ⅳ様式には見られなくなり、その後第Ⅴ様式に再び多くなるという指摘がある（小林・佐原 1964）。このことも、弥生時代の「敷物圧痕」原体が回転具兼絶縁体のような中間的存在であったこと

を示しているのではないだろうか。

- 89) わざわざ編み上げた敷物を焼いてしまうことには、多少なりとも違和感があるかも知れない。しかし、土器焼成時に一種の薪の役割を果たしてむしろ都合が良かった可能性があるし、一度使用した編物を焼き捨てる民俗例（鹿児島県のピワカゴ）の存在（室井 1973）からも、十分あり得る話である。かつて荒木ヨシ氏が、網代圧痕を分析して同一の敷物の利用を多くて2～3回であったという指摘をしております（荒木 1971）、実際焼いたかどうかはともかくとしても、土器製作用の敷物は短期的な使用であったようである。
- 90) 図47左のA-2・1・1類の素材は、おそらく軟質な蔓植物（c²類）であろう。この種の網代編みの素材としては典型的とはいえないが、スタレ状圧痕との類似性がよく分かるのであえてこの資料を示した。A-2・1・1類は太平洋側から離れるにつれ、硬質材の占める割合が減少していくような感がある。
- 91) 日本列島において全国的に分布するマタタビが、日本海側の多雪地帯でのみ編物に利用されるという事実に関しては、研究史第3期前半でも触れたように山本直人氏（山本 1989）が水気との関係を指摘している。山本氏は、石川県内の多雪地域における民俗例（尾口村深瀬のヒノキ笠、河内村のコツラ細工）を踏まえた上で、冬季に湿気の多いジメジメとした環境が、条材を編む際に水気を必要とするマタタビ（やヒノキ）による編物製作を発達させたと考えている。
- 92) 佐賀県東名遺跡では、ツヅラフジを用いた縄文時代早期の編物が出土している（西田・山田・佐々木 2009）。特に経条にツヅラフジの丸材を用い、緯条に同定不能の割り裂き材を用いたAM2318のカゴは、筆者が圧痕原体として想定したツヅラフジの編物にきわめて近い。これを、九州地方南部の縄文時代後期前半に当てはめることができるかどうかは十分検討する必要があるが、参考にはなるだろう。
- 93) 図48には、a¹類およびb²類の可能性のある資料（表1で？を付したもの）が存在する遺跡も図示してある。これらの遺跡の資料は、縮尺が分からないなどの理由で断定ができないが、いずれもa¹類またはb²類の可能性が高いからである。また同図では、圧痕資料の見られない長江流域もa¹類の分布域として囲んであるが、これは長江流域で見つかっている網代編みの実物資料の多くが、a¹類にする相当する素材（タケ？）を使用しているからである。おそらくこの空白域に「敷物圧痕」が見つかった場合、a¹類が素材である可能性が高い。
- 94) 中国大陸のb²類については、内蒙古自治区紅山後遺跡（濱田・水野 1938）でアシのような細材を並べ樹皮で編んだものとされ、内蒙古自治区西水泉遺跡（中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队 1982）ではイネ科草本の葉・茎とされている。ただし紅山後遺跡の資料を小林行雄氏がツヅラフジ製としているように（小林 1959）、明確に特定できているわけではなく、植物学的な検証が必要である。
- 95) a¹類が認められる仰韶文化遺跡の分布域は、現在落葉広葉樹林帯にあたるが、陝西省半坡遺跡をはじ

めとしてタケを常食とするチュウゴクタケネズミの骨がしばしば発見されている。このことから、当時この地域にタケが多く分布していたことが推測されるが、その背景にはヒブシサーマル期の温暖な気候があるものと思われる。

参考文献

日本語

- 会田 進ほか、1974、『扇平遺跡』、岡谷市教育委員会：岡谷。
- 相原 秀仁・山本 健一・宮内 慎一ほか、1997、『釜ノ口遺跡Ⅱ』、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター：松山。
- 相原 俊夫・河合 英夫・中山 豊、1998、『御屋敷添遺跡第1地点発掘調査報告書』、愛甲御屋敷添遺跡発掘調査団：横浜。
- 青崎 和憲、1977、『南宮島遺跡』、始良町教育委員会：始良町。
- 青森県教育庁文化財保護課、2011、「特別史跡三内丸山遺跡出土資料について」(http://sannaimaruyama.pref.aomori.jp/kishahappyo/pochette_happyoshiryou.pdf)、青森県教育庁文化財保護課：青森。
- 赤澤 徳明ほか、1999、『下糸生協遺跡』、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター：福井。
- 明石 博志・木村 方一ほか、1977、『八千代C遺跡発掘調査報告書』、帯広市教育委員会：帯広。
- 秋田 かな子、1990、「土器底部の輪積み技法」『東海大学校地内遺跡調査団報告1』、150～165頁、東海大学校地内遺跡調査委員会・東海大学校地内遺跡調査団：平塚。
- 秋田 かな子、2006、『第14回足もとに眠る歴史展 縄文土器の作られ方』、東海大学校地内遺跡調査団：平塚。
- 秋田 かな子、2008、「土器の外底面圧痕と製作技術」『縄文時代の考古学』7、63～71頁、同成社：東京。
- 秋田県教育委員会、1975、『大湯環状列石 周辺遺跡分布調査概報』、秋田県教育委員会：秋田。
- 秋山 道生ほか、1992、『徳丸東遺跡発掘調査報告』、板橋区教育委員会：東京。
- 浅野 哲男・河瀬 実浩ほか、2000、『岩井谷遺跡』、(財)岐阜県文化財保護センター：岐阜。
- 浅野 豊子・沢田 まさ子・松山 和彦・安 英樹ほか、1999、『金沢市北塚遺跡・北塚古墳群一第15・16次発掘調査報告書一』、(財)石川県埋蔵文化財センター：金沢。
- アジア民族造形文化研究所、1989、『アジアと土器の世界』、雄山閣：東京。
- 安孫子 昭二、1971、「網代底について」『平尾遺跡調査報告Ⅰ』、172～174頁、平尾遺跡調査会：東京。
- 阿部 芳郎・小宮山 友康・矢島 國雄ほか、1993、『吉岡堀ノ内横穴墓群・上土棚遺跡(縄文時代編)・上土棚南遺跡』、綾瀬市教育委員会・相武考古学研究所・上土棚遺跡発掘調査団・上土棚南遺跡発掘調査団：綾瀬。
- 阿部 芳郎、1994、「後期第Ⅳ群土器の製作技術と機能」『津島岡大遺跡4』、291～311頁、岡山大学埋

- 蔵文化財調査研究センター：岡山。
- 新井 和之、1987、「編物」『北江古田遺跡発掘調査報告書（1）』、34～37頁、中野区・北江古田遺跡調査会：東京。
- 新井 仁、1993、『内匠上之宿遺跡』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橋村。
- 荒井 幹夫・佐々木 保俊・小出 輝雄ほか、1978、『打越遺跡』、富士見市教育委員会：富士見。
- 荒川 隆史・加藤 学、1999、『和泉A遺跡』、新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団：新潟。
- 荒川 隆史・石丸 和正ほか、2004、『青田遺跡』、新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団：新潟。
- 荒木 ヨシ、1968、「縄文式時代の網代編み」『物質文化』No.12、20～26頁、物質文化研究会：東京。
- 荒木 ヨシ、1970、「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」『物質文化』No.15、12～18頁、物質文化研究会：東京。
- 荒木 ヨシ、1971、「縄文式時代の網代編み（第3報・完結）」『物質文化』No.17、29～40頁、物質文化研究会：東京。
- 荒木 ヨシ、1995、「縄文時代に於ける分業の一考察」『物質文化』No.58、1～19頁、物質文化研究会：東京。
- 新屋 雅明、1988、『赤城遺跡』、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大宮。
- 新屋 雅明、2000、『石神貝塚』、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 安藤 広道、2005、「縄文時代・弥生時代の繊維製品」『季刊考古学』第91号、65～69頁、雄山閣：東京。
- 安藤 文一ほか、1974、『細池遺跡』、糸魚川市教育委員会：糸魚川。
- アンドレエフ、Г．Е．（荻原 真子訳）、1982、「沿海州のザイサノフカ I 遺跡」『シベリア極東の考古学』2、151～185頁、河出書房新社：東京。
- 安楽 勉・藤田 和裕、1975、『里田原遺跡』、長崎県教育委員会、長崎。
- 安楽 勉・藤田 和裕、1985、『名切遺跡』、長崎県教育委員会、長崎。
- 飯坂 盛泰ほか、2000、『上信越自動車道関係発掘調査報告書VI』、新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団：新潟。
- 飯田 陽一、1998、『行沢大竹遺跡』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橋村。
- 五十嵐 彰ほか、1995、『多摩ニュータウン遺跡 平成4年度』第1分冊、東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 井川 達雄・大越 直樹ほか、1997、『三ノ倉落合遺跡』、山武考古学研究所：成田。

- 生田 周治、1987、『調布市下石原遺跡—第3地点（第8地域福祉センター）—』、調布市教育委員会：調布。
- 井口 直司、1987、「尖底土器底部圧痕類の研究」『東京考古』5、35～47頁、東京考古談話会：日野。
- 池田 亨、1981、『宮下原遺跡』、六日町教育委員会：六日町。
- 池田 亨・荒木 勇次、1987、『柳古新田下原A遺跡』、大和町教育委員会：大和町。
- 池田 亨・荒木 勇次、1988、『水上遺跡』、大和町教育委員会：大和町。
- 池田 亨・荒木 勇次ほか、1988、『万條寺林遺跡』、塩沢町教育委員会：塩沢町。
- 池田 亨、2011、「里山に生きる「人と植物」の知識と技術」『植物繊維を「編む」—アングンの里 津南の編み技術と歴史— 予稿集』津南学叢書第15輯、28～40頁、津南町教育委員会：津南町。
- 池田 敏郎・柳 恒雄・山本 肇・竹田 和夫、1988、『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書VI』、新潟県教育委員会：新潟。
- 池野 正男・柳井 睦、1976、『富山県立山町岩峠野遺跡緊急発掘調査概要』、富山県教育委員会：富山。
- 池畑 耕一・中村 耕治、1984、『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報—昭和58年度—』、鹿児島県教育委員会：鹿児島。
- 井澤 洋一、1996、『桑原遺跡群2』、福岡市教育委員会：福岡。
- 石川 日出志・田中 耕作ほか、1982、『村尻遺跡 I』、新発田市教育委員会：新発田。
- 石川 日出志ほか、1997、『北越考古学』第8号、北越考古学研究会：新発田。
- 石川 日出志、2004、「茨城県北原遺跡再葬墓の研究」『明治大学人文科学研究所紀要』第54冊、明治大学人文科学研究所：東京。
- 石黒 立人・加藤 博紀・鬼頭 剛、2008、『須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡』、(財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター：弥富。
- 石田 明夫・平吹 睦美、1999、『山田遺跡発掘調査報告書』、会津若松市教育委員会：会津若松。
- 石塚 和則、2007、『宮原遺跡』、狭山市遺跡調査会：狭山。
- 石塚 久則、1995、『上栗須寺前遺跡群II』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橘村。
- 石橋 孝夫ほか、2005、『石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書』、石狩市教育委員会：石狩。
- 石橋 峯幸・斎藤 進ほか、1987、『多摩ニュータウン遺跡 昭和60年度』第3分冊、(財)東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 市川 修ほか、1983、『塚屋・北塚屋』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大宮。
- 市川 金丸、1976、『泉山遺跡発掘調査報告書』、青森県教育委員会：青森。
- 市川 正史・井関 文明、2000、『上土棚南遺跡 第4次調査』、(財)かながわ考古学財団：横浜。

- 市川 正史・恩田 勇・谷口 肇、1994、『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ』、神奈川県立埋蔵文化財センター：横浜。
- 市川 正史・鈴木 次郎・能嶋 政義・恩田 勇、1997、『宮ヶ瀬遺跡群Ⅸ』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 市川 正史・鈴木 次郎・吉田 政行、1998、『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅤ』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 市原 寿文・住田 誠行ほか、1979、『中村遺跡第1～2次発掘調査報告書』、中津川市教育委員会：中津川。
- 市堀 藤夫、1974、「火打谷大垣内遺跡」『志賀町史』資料編 第1巻、399～413頁、志賀町：志賀町。
- 伊藤 邦弘・黒坂 広美、1996、『野新田遺跡発掘調査報告書』、(財)山形県埋蔵文化財センター：上山。
- 井藤 徹・菅谷 文則・久野 邦雄ほか、1965、『井辺弥生式遺跡発掘調査報告』、和歌山市教育委員会：和歌山。
- 伊藤 徳也・森川 幸雄ほか、1992、『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告』第1分冊、三重県埋蔵文化財センター：明和町。
- 伊東 信雄、1966、「縄文時代の布」『文化』第30巻 第1号、1～20頁、東北大学文学部：仙台。
- 伊東 信雄・須藤 隆、1985、『山王団遺跡調査図録』、一迫町教育委員会：一迫町。
- 伊藤 富治夫、1980、『東京都小金井市貫井南遺跡一昭和54年度調査報告一』、小金井市貫井南遺跡調査会：小金井。
- 伊藤 久嗣、1980、『納所遺跡 一遺構と遺物一』、三重県教育委員会：津。
- 稲垣 尚美・土生 朗治・小村 正之、2002、『黒河・中老田遺跡発掘調査報告』、小杉町教育委員会：小杉町。
- 稲畑 航平ほか、2007、「(4) 車塚遺跡 第7次」『京都府遺跡調査概報』第123冊、124～200頁、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター：向日。
- 井鍋 誉之・西尾 太加二・伊藤 純子、2002、『勝田井の口遺跡』、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所：静岡。
- 井上 美知子・鈴木 三男、2007、「桜町遺跡編物実物資料および縄の素材」『桜町遺跡発掘調査報告書 縄文時代総括編』、86～99頁、小矢部市教育委員会：小矢部。
- 伊庭 功・瀬口 眞司ほか、1997、『粟津湖底遺跡 第3貝塚』、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会：大津。
- 伊庭 功・松澤 修、2000、『粟津湖底遺跡 予備調査・南調査区』、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会：大津。

- 今井 恵昭・丹野 雅人・佐藤 宏之、1989、『多摩ニュータウン遺跡 昭和62年度』第5分冊、(財) 東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 今井 哲哉、2011、「縄文時代の「編み」と衣服」『植物繊維を「編む」—アングンの里 津南の編み技術と歴史— 予稿集』津南学叢書第15輯、63～67頁、津南町教育委員会：津南町。
- 今福 利恵・田口 明子、1994、『水口遺跡』、山梨県教育委員会：甲府。
- 芋本 隆裕ほか、1987、『亀虎川の木質遺物—第7次発掘調査報告書 第4冊—』、(財) 東大阪市文化財協会：東大阪。
- 岩瀬 彰利・蔵本 俊明、1996、『大西貝塚(Ⅱ)』、豊橋市教育委員会：豊橋。
- 岩瀬 彬・佐々木 由香、2002、「六ツ目編みの構成要素からみた器種の推定」『人類誌集報2002』、140～146頁、東京都立大学人類誌調査グループ：東京。
- 岩瀬 由美・柿田 祐司・宮田 明、1998、『軽海西芳寺遺跡Ⅱ』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 岩名 建太郎・栗木 崇・山本 幸恵、2000、『押出シ遺跡(遺物編)』、(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所：静岡。
- 岩橋 陽一・鶴間 正昭ほか、1989、『多摩ニュータウン遺跡 昭和62年度』第4分冊、(財) 東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 印 炳善(朴 燦一・尹 明淑訳)、2006、『韓国の藁と草の文化』、法政大学出版社：東京。
- 上田 典男ほか、1998、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4—長野市内その2—』、(財) 長野県埋蔵文化財センター：更埴。
- 植田 文雄、1995、「低地の縄文遺跡」『季刊考古学』第50号、37～42頁、雄山閣：東京。
- 植田 文雄、1996、『正楽寺遺跡』、能登川町教育委員会：能登川町。
- 植田 弥生・辻 誠一郎、1992、「北寺遺跡とその周辺の高木生と古環境」『市港遺跡・北寺遺跡』、99～107頁、三方町教育委員会：三方町。
- 植田 弥生、2000、「縄文時代早期の木材樹種同定」『粟津湖底遺跡 自然流路』、113～125頁、滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会：大津。
- 植田 弥生、2003、「四方谷岩伏遺跡出土木材の樹種同定」『四方谷岩伏遺跡』、130～140頁、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター：福井。
- 上野 章・神保 孝造・酒井 重洋、1976、『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群 第4次緊急発掘調査概要』、富山県教育委員会：富山。
- 上野 修一・今平 昌子、1998、『山崎北・金沢・台耕上・関口遺跡』、(財) 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター：国分寺町。

- 上野 佳也ほか、1983、『軽井沢町茂沢南石堂遺跡 総集編』、軽井沢町教育委員会：軽井沢町。
- 植松 なおみ、1980、「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』No.35、20～35頁、物質文化研究会：東京。
- 植松 なおみ、1981、「東北型網代圧痕について」『古代文化』第33巻 第2号、17～26頁、古代学協会：京都。
- 宇賀神 誠司・岡村 秀雄・新海 節生・寺島 俊郎・百瀬 忠幸ほか、1991、上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内その2—』、長野県埋蔵文化財センター：更埴。
- 氏家 信行・志田 純子、1998、『山居遺跡発掘調査報告書』、(財)山形県埋蔵文化財センター：上山。
- 丑野 毅・田川 裕美、1991、「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』第24号、13～36頁、日本文化財科学会：奈良。
- 内田 律雄ほか、1988、『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書IV（海崎地区2）』、島根県教育委員会：松江。
- 宇部 則保・小久保 拓也、2002、『是川中居遺跡（長田沢地区）』、八戸遺跡調査会：八戸。
- 梅原 末治・小林 行雄、1935、「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊、1～89頁、京都府：京都。
- 漆畑 稔・澁谷 昌彦ほか、1986、『仲道A遺跡』、大仁町教育委員会：大仁町。
- 江坂 輝彌 1954「茨城県野中貝塚調査報告」『考古学雑誌』第39巻 第3号、49～58頁、日本考古学会：東京。
- 江坂 輝彌・渡辺 誠、1977、『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』、津南町教育委員会：津南。
- 越前 慎子・町田 賢一ほか、2008、『板屋谷内B・C古墳群・堂前遺跡発掘調査報告』、(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所：富山。
- 江原 英ほか、1997、『寺野東遺跡V』、(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター：国分寺町。
- 江原 英ほか、1998、『寺野東遺跡IV』、(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター：国分寺町。
- 江原 英ほか、1999、『寺野東遺跡II』、(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター：国分寺町。
- 江本 直ほか、1988、『曾畑』、熊本県教育委員会：熊本。
- 扇崎 由・安川 満、「上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区II）」『岡山市埋蔵文化財調査の概要—1995（平成7）年度—』、4～9頁、岡山市教育委員会：岡山。
- 大分県別府産業工芸試験所、1991、『竹編組技術資料』基礎技術編：別府。
- 大分県別府産業工芸試験所、1992、『竹編組技術資料』応用技術編：別府。
- 大分県産業科学技術センター別府産業工芸試験所、1999、『竹編組技術資料』アジアと日本の竹文化資料

- 編：別府。
- 大江 正行ほか、1990、『仁田遺跡・暮井遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橋村。
- 大江 まさるほか、1987、『奥飛騨の縄文遺跡 下田遺跡』、河合村教育委員会：河合村。
- 大賀 健・千田 幸生・長谷川 一郎ほか、1997、『新堀東源ヶ原遺跡』、群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会：松井田町。
- 大賀 靖浩、1987、『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』、東伯町教育委員会：東伯町。
- 大上 周三・大塚 健一・飯塚 美保、1997、『下大槻峯遺跡 (No.30) I』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 大川 清・鈴木 公雄・工楽 善通ほか、1996、『日本土器事典』、雄山閣：東京。
- 大熊 茂広、2002、「縄文時代の編み物が多数出土 ―メノト遺跡―」『静岡の原像をさぐる』、6～15頁、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所：静岡。
- 大熊 茂広ほか、2006、『八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡』、掛川市教育委員会：掛川。
- 大越 昌子、1984、「編み物の材質について」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』人工遺物・総括編、763～768頁、埼玉県教育委員会：浦和。
- 大迫 靖雄、1988、「曾畑貝塚低湿地遺跡から出土した木質遺物に関する一考察」『曾畑』、217～231頁、熊本県教育委員会：熊本。
- 大沢 和夫・今村 善興・神村 透ほか、1972a、『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―上伊那郡飯島町地内その1―』、長野県教育委員会：長野。
- 大沢 和夫・今村 善興・神村 透ほか、1972b、『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―下伊那郡高森町地内その1―』、長野県教育委員会：長野。
- 大沢 和夫・今村 善興・丸山 徹一郎ほか、1973、『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―上伊那郡南箕輪村その1・その2―』、長野県教育委員会：長野。
- 大園 弘、1975、『坂の下遺跡の研究』、佐賀県立博物館：佐賀。
- 大谷 稚歌、2002、「ダイアミ製品に関する調査報告」『人類誌集報2002』、133～139頁、東京都立大学人類誌調査グループ：東京。
- 太田原 潤・野村 信生、2000、『餅ノ沢遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 大野 淳也・中井 真夕・吉川 純子、2005、『桜町遺跡発掘調査報告書 縄文時代編Ⅱ 弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ』、小矢部市教育委員会：小矢部。
- 大場 磐雄ほか、1953、『千種』、新潟県教育委員会：新。
- 大場 利夫・明石 博志、1968、『平和遺跡』、浦幌町教育委員会：浦幌町。

- 大道 篤史・高橋 與右衛門、1997、『上甲子遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 大脇 直泰、1961、「押圧文土器について」『古代学』第9巻、132～141頁、古代学協会：大阪。
- 小笠原 雅之ほか、2000、『三内丸山遺跡XVII』、青森県教育委員会：青森。
- 小笠原 好彦、1970、「縄文・弥生式時代の布」『考古学研究』第17巻 第3号、29～49頁、考古学研究会：岡山。
- 小笠原 好彦、1983a、「編物・布」『縄文文化の研究』第7巻、293～304頁、雄山閣：東京。
- 小笠原 好彦、1983b、「縄文～古墳時代の布」『季刊考古学』第5号、35～39頁、雄山閣：東京。
- 岡田 一広ほか、2007、『矢張下島遺跡調査報告』、南砺市教育委員会：南砺。
- 岡田 賢、2002、「飛騨みやがわ考古民俗館蔵の編組製品の素材について」『人類誌集報2002』、127～132頁、東京都立大学人類誌調査グループ：東京。
- 岡田 賢、2005、「編組製品の素材差と機能差について」『人類誌集報2003』、5～12頁、東京都立大学人類誌調査グループ：東京。
- 岡田 光広・落合 章雄、1994、『野田市岩名第14遺跡』、(財)千葉県文化財センター：四街道。
- 岡田 光弘、1995、『流山市上新宿貝塚発掘調査報告書』、(財)千葉県文化財センター：四街道。
- 岡田 康博・阿部 美杉・齋藤 岳・小笠原 雅行、1997、『三内丸山遺跡VIII』、青森県教育委員会：青森。
- 岡田 康博・中村 美杉・齋藤 岳・小笠原 雅行ほか、1998、『三内丸山遺跡IX』、青森県教育委員会：青森。
- 岡田 康博・中村 美杉・齋藤 岳・小笠原 雅行、2002、『三内丸山遺跡XX』、青森県教育委員会：青森。
- 岡林 孝作ほか、2000、『本郷大田下遺跡』、奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所：奈良。
- 岡本 健一・金子 直行・赤熊 浩一、1993、『谷津・二反田・下向山』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 岡本 孝之・河野 喜映・鈴木 次郎、1977、『尾崎遺跡』、神奈川県教育委員会：横浜。
- 岡本 東三・押野 一貴ほか、1996、『大寺山洞穴 第3・4次発掘調査概報』、千葉大学文学部考古学研究室：千葉。
- 岡本 東三・内田 貴陽ほか、1997、『大寺山洞穴 第5次発掘調査概報』、千葉大学文学部考古学研究室：千葉。
- 岡本 直久・佐野 元・河合 君近、2002、『内田町遺跡』、(財)瀬戸市埋蔵文化財センター：瀬戸。

- 岡元 満子、1986、「底部に圧痕を有する縄文式土器について」『鹿大考古』5、91～125頁、鹿児島大学
法文学部考古学研究室：鹿児島。
- 小川 正夫、1998、『桧林A遺跡』、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所：静岡。
- 荻澤 太郎・鶴沢 幸一・安達 浩、1995、『丸山東遺跡Ⅱ』縄文時代編、東京外かく環状道路練馬地区
遺跡調査会：東京。
- 小久貫 隆史・菅谷 通保ほか、1993、『千葉県茂原市国府関遺跡群』、茂原市教育委員会・(財)長生
郡市文化財センター：茂原。
- 小澤 正人・谷 豊信・西江 清高、1999、『中国の考古学』、同成社：東京。
- 忍澤 成視、1992、『市原市山田橋亥の海道具塚』、(財)市原市文化財センター：市原。
- 忍澤 成視、1995、『市原市能満上小貝塚』、(財)市原市文化財センター：市原。
- 忍澤 成視、1999、『祇園原貝塚』、(財)市原市文化財センター：市原。
- 尾関 清子、1996、『縄文の衣』、学生社：東京。
- 尾関 清子、2002、「是川中居遺跡の編布」『是川中居遺跡(長田沢地区)』、162～171頁、八戸遺跡調
査会：八戸。
- 尾関 清子、2007、「縄文時代草創期・早期の土器底部圧痕について」『考古学ジャーナル』No.565、28
～33頁、ニューサイエンス社：東京。
- 小田木 富慈美ほか、1999、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告XIV』、(財)大阪市文化財協会：大阪。
- 鬼柳 彰ほか、1986、『上ノ国町小岱遺跡』、(財)北海道埋蔵文化財センター：札幌。
- 小野 和之、1993、『神保富士塚遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橋村。
- 小野 和之・大木 紳一郎・櫻井 美枝、1997、『南蛇井増光寺遺跡V』、(財)群馬県埋蔵文化財調査
事業団：北橋村。
- 小野 久隆・奥野 都、1978、『池上遺跡』第4分冊の2 木器編、(財)大阪文化財センター：大阪。
- 小野 正文ほか、1986、『釈迦堂Ⅰ』、山梨県教育委員会：甲府。
- 小野 正文ほか、1987、『釈迦堂Ⅱ』、山梨県教育委員会：甲府。
- 小野田 勝一・春成 秀爾・西本 豊弘、1988、『伊川津遺跡』、渥美町教育委員会：渥美町。
- 小濱 学・松本 美先ほか、1997、『新徳寺遺跡』、三重県埋蔵文化財センター：明和町。
- 小濱 学・小山 憲一ほか、2008、『大原堀遺跡発掘調査報告—第2・3次調査—』、三重県埋蔵文化財セ
ンター：明和町。
- 小原 眞一、1995、『柳上遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛
岡。

- 恩田 勇・近野 正幸・吉田 政行、1998、『宮ヶ瀬遺跡群XVI』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 甲斐 博幸ほか、1996、『千葉県君津市常代遺跡群』、(財)君津郡市文化財センター：木更津。
- 鏡山 猛、1961a、「原生期の織布(上)」『史淵』第84輯、39～70頁、九大史学会：福岡。
- 鏡山 猛、1961b、「原生期の織布(中)」『史淵』第86輯、25～50頁、九州大学文学部：福岡。
- 鏡山 猛、1962、「原生期の織布(下)」『史淵』第89輯、27～43頁、九州大学文学部：福岡。
- 鏡山 猛、1972、「原生期の織布」『九州考古学論攷』、413～485頁、吉川弘文館：東京。
- 賀川 光夫、1988、「中国長江流域にみる編物(網代)について」『曾畑』、274～281頁、熊本県教育委員会：熊本。
- 賀川 光夫、1996、「中国長江流域にみる編物(網代)について」『九州の黎明と東アジア』、229～233頁、京都修学社：京都。
- 垣内 光次郎・西野 秀和ほか、1985、『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡(Ⅱ)』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 景山 和也、2001、『金沢市笠舞A遺跡(V)』、金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター)：金沢。
- 葛西 智義ほか、1986、『木古内町建川1・新道4遺跡』、(財)北海道埋蔵文化財センター：札幌。
- 笠原 みゆき、2000a、『大月遺跡(第10次調査)』、山梨県教育委員会：甲府。
- 笠原 みゆき、2000b、『南大浜遺跡』、山梨県教育委員会：甲府。
- 堅田 直、1965、『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』、帝塚山大学考古学研究室：奈良。
- 加藤 亜希子・佐々木 由香、2002、「考古学における編組製品の研究」『人類誌集報2002』、111～121頁、東京都立大学人類誌調査グループ：東京。
- 加藤 勝仁・小川 岳人・伊丹 徹、2000、『川尻遺跡Ⅱ』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 加藤 道男・阿部 博志・小徳 晶、1984、『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ』、宮城県文化財保護協会：仙台。
- 加藤 安信・高橋 信明・中川 真文ほか、1982、『朝日遺跡』、愛知県教育委員会：名古屋。
- 金沢大学考古学研究会、1976、『金沢大学考古学研究会活動報告』第2号：金沢。
- 可児 通宏、2005、『縄文土器の技法』、同成社：東京。
- 鐘方 正樹・角南 聡一郎、1997、「籠目土器と笄形土製品」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』、1～15頁、奈良市教育委員会：奈良。
- 金子 昭彦・藤村 敏男、1992、『経塚長根・経塚森遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：都南村。

- 金子 昭彦・阿部 勝則・工藤 利幸、1999、『長谷堂貝塚発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 金子 昭彦・高橋 與右衛門、1996、『寺久保遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 金子 昭彦・高橋 與右衛門、1997、『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 金子 佐知子・高橋 與右衛門・金子 昭彦、1998、『才津沢遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 金子 裕之、1981、「特殊な木漆器—愛媛県船ヶ谷遺跡の場合—」『月刊文化財』218号、44～50頁、文化庁文化財保護部：東京。
- 金田 善敬ほか、2003、『津島遺跡4』、岡山県教育委員会：岡山。
- 金箱 文夫ほか、2003、『発掘された日本列島 2003』、朝日新聞社：東京。
- 金原 正明、2005、「青谷上寺地遺跡出土かごの材質同定」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』1、155～158頁、鳥取県埋蔵文化財センター：鳥取。
- 金丸 誠、1989、『千葉市浜野川神門遺跡』、(財)千葉県文化財センター：四街道。
- 金三津 英則・矢島 博文・宮脇 満・澤田 雅志、2007、『高島A遺跡発掘調査報告』、射水市教育委員会：射水。
- 金三津 道子・町田 尚美、2004、『富山県射水郡小杉町黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡発掘調査報告』、(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所：富山。
- 金三津 道子・朝田 亜紀子、2009、『竹ノ内Ⅱ遺跡・柳田遺跡・下山新東遺跡・下山新遺跡発掘調査報告』、(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所：富山。
- 金三津 道子、2010、『若栗中村遺跡・舌山遺跡・宮沢积迦遺跡発掘調査報告』、(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所：富山。
- 鴨志田 篤二、1996、「十王台式土器」『日本土器事典』、535頁、雄山閣：東京。
- 上川村教育委員会、1986『人ヶ谷岩陰 第1次発掘調査概報』：上川村。
- 上村 健三、2011、「蔓、樹皮の編み組み技術」『植物繊維を「編む」—アングンの里 津南の編み技術と歴史— 予稿集』津南学叢書第15輯、5～12頁、津南町教育委員会：津南町。
- 狩野 睦・酒井 重洋・橋本 正春ほか、1992、『北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編7—』、富山県教育委員会：富山。
- 川上 貞雄・遠藤 孝司ほか、1982、『平遺跡緊急発掘調査報告書』、新津市教育委員会：新津。

- 川崎 邦彦・小坂井 孝修・千野 裕道・小葉 一夫ほか、1981、『多摩ニュータウン遺跡 昭和55年度』第1分冊、(財)東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 川崎 保、1999、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書20—東部町内—』、(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター：更埴。
- 川崎 保・宇賀神 誠司、2001、『県単農道整備事業(ふるさと)大野田地区埋蔵文化財発掘調査報告書—浅科村内—』、(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター：更埴。
- 川島 雅人・金持 健司ほか、1996、『多摩ニュータウン遺跡 No.457遺跡』、東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 川島 雅人・山本 孝司・大西 雅也、2000、『多摩ニュータウン遺跡 No.339遺跡』、東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 川添 和暁ほか、2001、『牛牧遺跡』、(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 川添 和暁・瀨瀬 茂・佐野 元、2001、「牛牧遺跡第1次～第3次調査出土土器について」『牛牧遺跡』、157～176頁、(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 川添 和暁ほか、2009、『大坪西遺跡』、(財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター：弥富。
- 川田 壽文・江里口 省三・石橋 峯幸ほか、1984、『多摩ニュータウン遺跡 昭和58年度』第2分冊、(財)東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 河田 弘幸、2000、『桐内C遺跡』、秋田県教育委員会：秋田。
- 河野 一隆ほか、1997、『京都府遺跡調査概報』第79冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター：向日。
- 川端 敦子、1983、「底部圧痕に関する基礎的報告」『北陸の考古学』、219～232頁、石川考古学研究会：金沢。
- 川端 敦子・渡辺 誠ほか、1983、『野々市町御経塚遺跡』、野々市町教育委員会：野々市町。
- 川畑 誠・沢辺 利明ほか、1998、『石川県羽咋郡志雄町荻市遺跡』、(社)石川県埋蔵文化財保存協会：小松。
- 川辺 賢一ほか、1996、『東京都練馬区川北遺跡第2地点調査報告書』、川北遺跡調査会：東京。
- 川本 素行ほか、1989、『練馬区弁天池低湿地遺跡の調査』、練馬区遺跡調査会：東京。
- 神原 雄一郎、2009、『盛岡市遺跡の学び館所蔵考古資料図録 I』、盛岡市遺跡の学び館：盛岡。
- 菊池 徹夫ほか、1994、『城山遺跡の調査』、早稲田大学：東京。

- 菊池 徹夫・岡内 三眞・高橋 龍三郎・山本 暉久ほか、1997、『館石野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』、早稲田大学文学部考古学研究室・田野畑村役場：田野畑村。
- 菊池 利和・酒井 宗孝・高橋 義介、1988、『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：都南村。
- 菊池 人見・金子 佐知子・高橋 與右衛門、1998、『本内遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 木田 清、2000、『松任市博労ドウコウダ遺跡・宮永雁堀遺跡』、松任市教育委員会：松任。
- 北浦 弘人ほか、1986、『池ノ内遺跡』、米子市教育委員会：米子。
- 北沢 実ほか、1990、『帯広・八千代A遺跡』、帯広市教育委員会：帯広。
- 北沢 実、1988、『帯広・暁遺跡3』、帯広市教育委員会：帯広。
- 北田 勲・平野 祐、2007、『県内出土土器底部にみられる網代痕跡』『岩手県における縄文文化の諸相資料集』、37～42頁、岩手考古学会：盛岡。
- 北林 八洲晴ほか、1973、『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 昭和47年度』、青森県教育委員会：青森。
- 北林 八洲晴、1975、『むつ小川原開発地域関係埋蔵文化財試掘調査概報 昭和49年度』、青森県教育委員会：青森。
- 木戸 春夫、2000、『上敷免北遺跡』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 木戸口 俊子、1997、『間洞Ⅱ遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 木下 保明、2010、『⑮江尻遺跡』『平成21年度埋蔵文化財年報』、43～44頁、(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所：富山。
- 木野本 和之・伊藤 文彦、2009、『東庄内A遺跡(第2次)発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター：明和町。
- 木村 高・坂本 真弓、1997、『隈無(4)遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 木村 俊彦・中島 宏、1988、『埼玉県滑川町打越遺跡の発掘調査』『日本考古学協会第54回総会研究発表要旨』、22～23頁、日本考古学協会：東京。
- 木村 吉行・柏木 善治、1998、『不弓引遺跡(No.21・22) 鶴巻大椿遺跡(No.23) 鶴巻上ノ窪遺跡(No.25上) 北矢名南蛇久保遺跡(No.25下) 北矢名矢際遺跡(No.26)』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 久木田 浩子・高橋 誠、1999、『上牧第2遺跡・母智丘原第2遺跡』、宮崎県埋蔵文化財センター：宮崎。

- 久々 忠義ほか、1984、『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編—』、上市町教育委員会：上市町。
- 久々 忠義・塚田 一成・中井 真夕、2004、『桜町遺跡発掘調査報告書 縄文遺構編 I 弥生・古墳・古代・中世編 II』、小矢部市教育委員会：小矢部。
- 楠 正勝ほか、1989、『金沢市西念・南新保遺跡 II』、金沢市教育委員会：金沢。
- 楠 正勝・新出 敬子・向井 裕知、1998、『金沢市近岡遺跡』、金沢市埋蔵文化財センター：金沢。
- 楠 正勝・谷口 宗治・前田 雪恵・向井 裕知、2009、『中屋サワ遺跡 IV・下福増遺跡 II・横江荘遺跡 II』、金沢市埋蔵文化財センター：金沢。
- 工藤 晃ほか、1993、『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 XV』、秋田県教育委員会：秋田。
- 工藤 大・木村 鐵次郎、1991、『弥栄平 (6) 遺跡・弥栄平 (7) 遺跡・弥栄平 (8) 遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 工藤 正、1979『青森県尾上町八幡崎・李平遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』、尾上町教育委員会：尾上町。
- 工藤 俊樹ほか、1985、『右近次郎遺跡 II』、大野市教育委員会：大野。
- 工藤 俊樹ほか、1988、『鳴鹿手島遺跡』、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター：福井。
- 工藤 利幸、1982、『盛岡市葦内遺跡』、(財)岩手県埋蔵文化財センター：都南村。
- 工藤 泰博、1993、『土井 I 号遺跡』、板柳町教育委員会：板柳町。
- 國平 健三・長岡 文紀・御堂島 正、1987、『宮久保遺跡 I』、神奈川県立埋蔵文化財センター：横浜。
- 熊代 昌之、2006、『日渡遺跡群 正福寺遺跡第7次調査概要報告書』、久留米市教育委員会：久留米。
- 倉永 英季、2001、『木脇遺跡 (旧石器時代～弥生時代編)』、宮崎県埋蔵文化財センター：佐土原町。
- 栗木 譲一・松崎 元樹・伊藤 敏行、1989、『多摩ニュータウン遺跡 昭和62年度』第3分冊、東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 栗澤 光男・高橋 忠彦・榮 一郎、1994、『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 VIII』、秋田県教育委員会：秋田。
- 栗澤 光男・藤澤 昌、1996、『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 XX』、秋田県教育委員会：秋田。
- 呉地 英夫、1989、『東京都稲城市駒沢学園校地内遺跡発掘調査報告書』、駒沢学園校地内遺跡調査会：稲城。
- 黒川 利司ほか、1981、『東北自動車道遺跡調査報告書 V』、宮城県文化財保護協会：仙台。
- 黒坂 禎二、1989、『上組 II』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大宮。

- 黒澤 春彦・関口 満・駒澤 悦郎、1997、『三夜原東遺跡・新堀東遺跡・壺杯清水西遺跡』、土浦市教育委員会：土浦。
- 黒沢 浩、2000、「川上博義氏寄贈の十王台式土器」『明治大学博物館研究報告』第5号、55～74頁、明治大学博物館：東京。
- 黒沼 保子、2009、「編組製品における木本割裂き材の利用について」『奈良教育大学学術リポジトリ』NEAR (<http://hdl.handle.net/10105/914>)、奈良教育大学：奈良。
- 小池 史哲ほか、1979、『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第12集』、福岡県教育委員会：福岡。
- 小池 史哲ほか、1992、『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告7』上巻、福岡県教育委員会：福岡。
- 小池 史哲、1995、『新延貝塚』、福岡県教育委員会：福岡。
- 河野 喜映・井澤 純、1995、『青野原バイパス関連遺跡』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 甲元 眞之ほか、2001、「中島遺跡発掘調査報告」『環東中国海沿岸地域の先史文化 第5編』、1～83頁、熊本大学文学部考古学研究室：熊本。
- 古環境研究所、1997、「釜ノ口遺跡8次調査で検出された植物遺体(編み物)の植物珪酸体分析」『釜ノ口遺跡Ⅱ』、158～160頁、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター：松山。
- 小葉 一夫・丹野 雅人・千野 裕道ほか、1982、『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度』第5分冊、(財)東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 小葉 一夫ほか、1993、『多摩ニュータウン遺跡 平成3年度』第3分冊、(財)東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 小坂井 孝修ほか、1981、『多摩ニュータウン遺跡 昭和55年度』第4分冊、(財)東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 小柴 吉男ほか、1990、『荒屋敷遺跡Ⅱ』、三島町教育委員会：三島町。
- 小島 俊彰、1964、『高岡公園小竹藪縄文遺跡』、高岡市教育委員会：高岡。
- 小島 俊彰ほか、1967、『富山県高岡市勝木原遺跡Ⅰ』、富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブ：高岡。
- 小島 俊彰ほか、1979、『滑川市史』考古資料編、滑川市：滑川。
- 小島 正裕・甲崎 光彦ほか、1981、『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度』第2分冊、(財)東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 小嶋 芳孝・松山 和彦ほか、1993、『岩内遺跡・長滝遺跡群発掘調査報告』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 小関 真司・渡辺 薫、1997、『津谷遺跡発掘調査報告書』、(財)山形県埋蔵文化財センター：上山。

- 小高 幸男、1998、『常代遺跡Ⅱ』、(財)君津都市文化財センター：木更津。
- 小谷 和彦・藤岡 比呂志・藤根 久ほか、2000、『いんべ遺跡』、(財)岐阜県文化財保護センター：岐阜。
- 児玉 作左衛門・大場 利夫・武内 収太、1958、『サイベ沢遺跡』、市立函館博物館：函館。
- 児玉 大成、1998、『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』、青森市教育委員会：青森。
- 後藤 一重、1995、『香々地の遺跡Ⅱ』、香々地町教育委員会：香々地町。
- 後藤 喜八郎・若井 千佳子・谷本 靖子・門田 優子、1996、『相模原市No.62遺跡発掘調査報告書』、相模原市No.62遺跡発掘調査団：川崎。
- 後藤 哲男・長津 宗重・菅付 和樹、1990、『丸野第2遺跡』、田野町教育委員会：田野町。
- 後藤 秀彦ほか、1976、『共栄B遺跡』、浦幌町教育委員会：浦幌町。
- 後藤 守一・曾野 寿彦ほか、1954、『登呂』本編、毎日新聞社：東京。
- 後藤 守一ほか、1957、『蜷塚遺跡 その第一次発掘調査』、浜松市教育委員会：浜松。
- 後藤 守一ほか、1958、『蜷塚遺跡 その第二次発掘調査』、浜松市教育委員会：浜松。
- 後藤 守一ほか、1960、『蜷塚遺跡 その第三次発掘調査』、浜松市教育委員会：浜松。
- 後藤 守一ほか、1961、『蜷塚遺跡 その第四次発掘調査』、浜松市教育委員会：浜松。
- 後藤 信祐ほか、1984、『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅴ』、小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団：小矢部。
- 小西 雅徳ほか、1986、『あざみ野遺跡』、國學院大學：東京。
- 木幡 成雄ほか、1997、『相子島貝塚』、いわき市教育委員会：いわき。
- 小林 清隆・高梨 友子、2001、『君津市寺ノ代遺跡』、(財)千葉県文化財センター：四街道。
- 小林 圭一・大泉 壽太郎、1997、『北柳1・2遺跡発掘調査報告書』、(財)山形県埋蔵文化財センター：上山。
- 小林 謙一、2004、『縄紋社会研究の新視点』、六一書房：東京。
- 小林 謙一、2008、「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学』2、257～269頁、同成社：東京。
- 小林 公治・笠原 みゆき、2000、『大月遺跡第7・8次調査』、山梨県教育委員会：甲府。
- 小林 重義・實川 順一・村松 篤ほか、1992、『袋低地遺跡』考古編、東北新幹線赤羽地区遺跡調査会：東京。
- 小林 達雄・山村 貴輝・松尾 茂美、1994、『四葉地区遺跡 平成5年度』、板橋区四葉遺跡調査会：東京。
- 小林 達雄、2002、「第2章 縄文土器起源論」『縄文土器の研究〈普及版〉』、23～60頁、学生社：東京。

- 小林 達雄ほか、2008、『総覧 縄文土器』、アム・プロモーション：東京。
- 小林 知生・高平 修一・長谷部 学・早川 正一、1966年、「保美貝塚」『渥美半島埋蔵文化財調査報告』、1～12頁、愛知県教育委員会：名古屋。
- 小林 広和ほか、1984、『牛奥遺跡調査報告書』、山梨県教育委員会：甲府。
- 小林 保男・宮尾 亨、1992、『東京都板橋区赤塚大塚原遺跡発掘調査報告書』、板橋区赤塚大塚原遺跡調査会：東京。
- 小林 行雄、1959、「つづらふじ」『図解考古学辞典』、668～669頁、東京創元社：東京。
- 小林 行雄、1964、『続古代の技術』、塙書房：東京。
- 小林 行雄・佐原 真、1964、『紫雲出』、詫間町文化財保護委員会：詫間町。
- 小林 行雄・末永 雅雄・藤岡 謙二郎、1976、『大和唐古弥生式遺跡の研究』、隣川書店：京都。
- 小林 義典ほか、1984、『大入遺跡発掘調査報告書』、玉川文化財研究所：横浜。
- 駒形 敏朗ほか、1977、『埋蔵文化財発掘調査報告書 藤橋遺跡』、長岡市教育委員会：長岡。
- 駒形 敏朗・寺崎 裕助、1981、『埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡』、長岡市教育委員会：長岡。
- 駒形 敏朗・松井 潔・渡辺 茂、1983、『多賀屋敷遺跡調査報告書』、越路町教育委員会：越路町。
- 小宮 俊久・小宮 豪、1994、『下田遺跡』、新田町教育委員会：新田町。
- 小宮山 友康・阪本 宏児・砂田 佳弘ほか、1997、『吉岡遺跡群Ⅲ』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 近藤 顕子・山崎 美和・藤田 富士夫、2005、『富山市池多南遺跡・池多南Ⅱ遺跡発掘調査報告書』、富山市教育委員会：富山。
- 近藤 敏ほか、1987、『菊間手永遺跡』、(財)市原市文化財センター：市原。
- 近藤 英夫・秋田 かな子・桑折 礼子ほか、1990、『真田大原遺跡』、東海大学校地内遺跡調査委員会・真田大原遺跡調査団：平塚。
- 近藤 義郎ほか、1994、『日本土器製塩研究』、青木書店：東京。
- 近藤 義郎ほか、1995、『南方前池遺跡』、山陽町教育委員会：山陽町。
- (財)北海道埋蔵文化財センター、1981、『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』：札幌。
- 斉藤 傑、1974、『松前町大津遺跡発掘報告書』、松前町教育委員会：松前町。
- 斎藤 嘉彦、2001、『国指定史跡 真宮遺跡』、岡崎市教育委員会：岡崎。
- 早乙女 雅人、2000、『朝鮮半島の考古学』、同成社：東京。
- 坂井 隆・原 雅信、1989、『八寸大道上遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橋村。
- 酒井 俊彦ほか、1993、『東光寺遺跡』、(財)愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。

- 酒井 宗孝・小田野 哲憲、1992、『本郷遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：都南村。
- 酒井 宗孝、1999、『尿前Ⅱ遺跡A地区発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 坂上 克弘・今井 康博ほか、1974、『港北ニュータウン地域内文化財調査報告Ⅳ』、横浜市埋蔵文化財調査委員会：横浜。
- 阪本 安光、1985、『松山市・船ヶ谷遺跡』、愛媛県教育委員会：松山。
- 坂本 嘉弘、1979、『石原貝塚・西和田貝塚』、宇佐市教育委員会・大分県教育委員会：宇佐。
- 桜田 隆ほか、1978、『青森市三内遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 桜井 秀雄・宇賀神 誠司、2000、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19—小諸市内3—』、(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター：更埴。
- 迫 和幸ほか、1986、『横浜市戸塚区竹鼻遺跡発掘調査報告書』、竹鼻遺跡発掘調査団：横浜。
- 佐々木 高明、1993、『日本文化の基層を探る』、日本放送出版協会：東京。
- 佐々木 弘、1993、『館Ⅳ遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 佐々木 由香・西山 幸恵、2002、『宮川村飛騨みやがわ考古民俗館収蔵の編組製品の調査』『人類誌集報2002』、77～110頁、東京都立大学人類誌調査グループ：東京。
- 佐々木 由香、2006a、『編組製品』『下宅部遺跡Ⅰ(1)』、147～179頁、下宅部遺跡調査団・東村山市遺跡調査会：東村山。
- 佐々木 由香、2006b、『割裂き木部材・蔓・草の編み組み加工容器』『考古学ジャーナル』No.542、13～19頁、ニューサイエンス社：東京。
- 佐々木 洋治、1971、『高島町史』別巻 考古資料篇、高島町：高島町。
- 佐々木 洋治・佐藤 庄一ほか、1990、『押出遺跡発掘調査報告書』、山形県教育委員会：山形。
- 佐々木 嘉直・小田野 哲憲・酒井 宗孝、1992、『石曾根遺跡発掘調査報告書』、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：都南村。
- 佐藤 敦史・江端 高行・相羽 重徳・田中 一穂、2002、『寺地遺跡』、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団：新潟。
- 佐藤 訓敏・北沢 実、1986、『帯広・暁遺跡2』、帯広市教育委員会：帯広。
- 佐藤 孝雄・大内 千年ほか、1994、『国指定史跡上高津貝塚A地点』、土浦市教育委員会：土浦。
- 佐藤 剛、2010、『「縷り編組織を基本とした模様編布」について』『柏木川4遺跡(4)』、201～222

- 頁、(財)北海道埋蔵文化財センター：札幌。
- 佐藤 信之、2011、「津南町における植物繊維の利用について」『植物繊維を「編む」—アングンの里 津南の編み技術と歴史— 予稿集』津南学叢書第15輯、57～62頁、津南町教育委員会：津南町。
- 佐藤 典邦・山崎 京美、1996、『綱取貝塚—第1・2次調査報告—』、いわき市教育委員会：いわき。
- 佐藤 雅一、2011、「アングン研究の回顧と展望」『植物繊維を「編む」—アングンの里 津南の編み技術と歴史— 予稿集』津南学叢書第15輯、46～56頁、津南町教育委員会：津南町。
- 佐藤 正俊・長橋 至、1983、『原の内A遺跡—第2次発掘調査報告書—』、山形県教育委員会：山形。
- 佐原 真、1959、「弥生式土器製作技術に関する二、三の考察」『私たちの考古学』第5巻 第4号、2～11頁、考古学研究会：岡山。
- 沢田 まさ子ほか、1994、『北塚遺跡第13次発掘調査報告書』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 山武考古学研究所、1993、『二本松東山遺跡』、聖籠町教育委員会：聖籠町。
- 塩地 潤一ほか、2008、『横尾貝塚』、大分市教育委員会：大分。
- 潮見 浩ほか、1974、『岩田遺跡』、平生町教育委員会：平生町。
- 塩屋 勝利・田中 寿夫・渡辺 和子、1982、『千里シビナ遺跡』、福岡市教育委員会：福岡。
- 塩山 則之ほか、1989、『高宮八丁遺跡』木器編、寝屋川市教育委員会：寝屋川。
- 嶋原 靖彦・土井 義行・百瀬 忠幸ほか、1984、『帷子峯遺跡』、横浜新道三ツ沢ジャンクション遺跡調査会：横浜。
- 重田 勉、1999、『宮司遺跡Ⅱ・鴨田遺跡Ⅵ』、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会：大津。
- 宍戸 信悟・宮坂 淳一、1998、『東富岡・杉戸遺跡 (No.38) 東富岡・北三間遺跡 (No.4) 上粕屋・川上遺跡 (No.5・6) 上粕屋・三本松遺跡 (No.7) 上粕屋・川上西遺跡 (No.8)』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 宍戸 信悟・宮坂 淳一・松田 光太郎・三瓶 裕司、2000、『三ノ宮・下谷戸遺跡 (No.14) Ⅱ』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 篠原 浩恵、2001、「縄文時代における底部圧痕について」『研究紀要』第9号、77～94頁、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター：国分寺町。
- 柴田 陽一郎・桜田 隆・高橋 学、1991、『宝竜堂遺跡発掘調査報告書』、秋田県教育委員会：秋田。
- 澁谷 正三、1981、「根岸遺跡」『宮城県営圃場整備関連遺跡詳細分布調査報告書 (昭和55年度)』、3～56頁、宮城県文化財保護協会：仙台。
- 嶋倉 巳三郎、1981、「鳥取県布勢遺跡木製品の樹種」『布勢遺跡発掘調査報告書』、42～51頁、(財)鳥取県教育文化財団：鳥取。

- 嶋倉 巳三郎、1985、「丁・柳ヶ瀬遺跡出土木製品の樹種」『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』、239～244頁、兵庫県教育委員会：神戸。
- 嶋倉 巳三郎、1990、「荒屋敷遺跡Ⅱから出土した加工木の樹種」『荒屋敷遺跡Ⅱ』、736～749頁、三島町教育委員会：三島町。
- 嶋倉 巳三郎、1993、「福岡遺跡から出土したカゴ類の樹種」『今津塚田遺跡・福岡遺跡（6区）』、68頁、（財）鳥取県教育文化財団：鳥取。
- 島地 謙、1996、「玉津田中遺跡出土木製品の樹種」『神戸市西区玉津田中遺跡』第6分冊、15～49頁、兵庫県教育委員会：神戸。
- 島田 美佐子・新宅 茜・朝田 亜紀子、2010、『惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告』、（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所：富山。
- 清水 潤三ほか、1959、『亀ヶ岡遺跡』、三田史学会、有隣堂出版：横浜。
- 清水 直樹、1983、『島遺跡発掘調査報告書 第1集』、北条町教育委員会：北条町。
- 清水 正明・森川 幸雄ほか、2002、『権現坂遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター：明和町。
- 清水 芳裕ほか、1979、『和歌山県北山村下尾井遺跡』、北山村教育委員会：北山村。
- 下城 正・女屋 和志雄、1988、『深沢遺跡・前田原遺跡』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橋村。
- 下原 裕司・加藤 秀之ほか、1989、『井の頭池遺跡群 御殿山遺跡』、井の頭池遺跡群遺跡調査会：武蔵野。
- 下村 悟史、1976、「押型文土器底部のアンペラ状圧痕」『古代文化』第28巻 第6号、32～33頁、古代学協会：京都。
- 遮那 藤麻呂・金井 正彦・酒井 幸則ほか、1973、『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡高森町地内その2—』、長野県教育委員会：長野。
- 白岩 修、2000、『石河内本村遺跡』、木城町教育委員会：木城町。
- 白鳥 文雄・成田 悟、1991、『雷遺跡・西山遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 神 敏明・斎藤 實・藤村 敏男、1994、『倍田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 神 康夫、1999、『戸沢遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 新東 晃一・中島 哲郎・井ノ上 秀文・出雲 茂人、1981、『中尾田遺跡』、鹿児島県教育委員会：鹿児島。

- 進藤 敏雄・合田 恵美子・後藤 信祐、2000、『御霊前遺跡』、栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団：宇都宮。
- 新原 正典・水ノ江 和同、1999、『久泉遺跡』、福岡県教育委員会：福岡。
- シンポジウム『稲作起源を探る』実行委員会事務局、1996、『シンポジウム 稲作起源を探る』、日本文化財科学会・シンポジウム『稲作起源を探る』実行委員会：宮崎。
- 末木 健ほか、1975、『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂・明野・葺崎地内—』、山梨県教育委員会：甲府。
- 末木 健ほか、1987、『金の尾遺跡・無名塚（きつね塚）』、山梨県教育委員会：甲府。
- 末永 雅雄・酒詰 仲男ほか、1961、『樞原』、奈良県教育委員会：奈良。
- 末永 雅雄、1986、『増補 宮瀧の遺跡』、木耳社：東京。
- 須賀 博子、1997、『土器底面の網代圧痕に関する基礎的な観察と編み方の地域性』、『池之元遺跡発掘調査研究報告書』、141～153頁、富士吉田市史編さん委員会：富士吉田。
- 菅沼 亘・阿部 恭平・石原 正敏、1998、『笹山遺跡発掘調査報告書』、十日町市教育委員会：十日町。
- 菅沼 亘・宮内 信雄、2007、『幅上遺跡発掘調査報告書』、十日町市教育委員会：十日町。
- 菅野 美香子・榮 一郎・三浦 俊成、2006、『深渡遺跡』、秋田県教育委員会：秋田。
- 菅谷 通保ほか、1990、『日暮里延命院貝塚』、荒川区教育委員会：東京。
- 杉島 孝博・四柳 嘉章ほか、1977、『赤浦遺跡』、七尾市教育委員会：七尾。
- 杉本 二郎ほか、1983、『山賀（その1）』、（財）大阪文化財センター：大阪。
- 杉本 順一、1960、『日本及びその周辺区域の竹笹類の分布について』、『富士竹類植物園報告』第5号、41～51頁、日本竹笹の会：御殿場。
- 杉山 寿栄男、1927、『石器時代の木製品と編物』、『人類学雑誌』第42巻 第8号、315～322頁、東京人類学会：東京。
- 杉山 寿栄男、1928、『日本原始工芸概説』、工芸美術研究会：東京。
- 杉山 寿栄男、1930、『石器時代有機質遺物の研究概報』、『史前学雑誌』第2巻 第4号、21～43頁、史前学会：東京。
- 杉山 寿栄男、1942a、『日本原始繊維工芸史』原始篇、雄山閣：東京。
- 杉山 寿栄男、1942b、『日本原始繊維工芸史』土俗篇、雄山閣：東京。
- 杉山 武・奥山 キミ子・滝沢 幸長ほか、1989、『白座遺跡・野場遺跡（3）発掘調査報告書』、階上町教育委員会：階上町。
- 鈴鹿 良一ほか、1987、『真野ダム関連遺跡発掘調査報告X』、福島県教育委員会・（財）福島県文化

- 鈴木 良一ほか、1990、『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XIV』、福島県教育委員会・(財)福島県文化センター：福島。
- 鈴木 良一ほか、1996、『摺上川ダム遺跡発掘調査報告II』、福島県教育委員会・(財)福島県文化センター：福島。
- 鈴木 良一ほか、1997、『摺上川ダム遺跡発掘調査報告IV』、福島県教育委員会・(財)福島県文化センター：福島。
- 鈴木 良一ほか、1998、『摺上川ダム遺跡発掘調査報告VI』、福島県教育委員会・(財)福島県文化センター：福島。
- 鈴木 篤英ほか、2003、『四方谷岩伏遺跡』、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター：福井。
- 鈴木 克彦ほか、1984、『亀ヶ岡石器時代遺跡』、青森県立郷土館：青森。
- 鈴木 定明・小林 清隆、1985、『主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書I』、(財)千葉県文化財センター：千葉。
- 鈴木 貞行ほか、1991、『上村貝塚発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：都南村。
- 鈴木 次郎・坂口 滋皓・谷口 肇・恩田 勇、1990、『宮ヶ瀬遺跡群I』、神奈川県立埋蔵文化財センター：横浜。
- 鈴木 次郎・近野 正幸、1995、『宮ヶ瀬遺跡群V』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 鈴木 次郎・市川 正史・近野 正幸、1999、『宮ヶ瀬遺跡群XVIII』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 鈴木 保彦ほか、1972、『東正院遺跡調査報告』、神奈川県教育委員会：横浜。
- 鈴木 保彦ほか、1977、『下北原遺跡』、神奈川県教育委員会：横浜。
- 鈴木 保彦、2008、「縄文土器の研究史―戦後から現在―」『総覧 縄文土器』、864～871頁、アム・プロモーション：東京。
- 鈴木 三男・能城 修一、1987、「北江古田遺跡の木材遺体群集」『北江古田遺跡発掘調査報告書』(2)、506～556頁、中野区・北江古田遺跡調査会：東京。
- 鈴木 三男・能城 修一、1999、「池子遺跡群出土の木製品および自然木の樹種」『池子遺跡群X』第4分冊、219～279頁、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 鈴木 三男・小川 とみ・能城 修一、2004、「青田遺跡出土木材の樹種」『青田遺跡』関連諸科学・写真図版編、53～70頁、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団：新潟。
- 鈴木 三男・佐々木 由香、2006、「下宅部遺跡から出土した編組製品と繊維の素材同定」『下宅部遺跡I(1)』、346～351頁、下宅部遺跡調査団・東村山市遺跡調査会：東村山。

- 鈴木 三男、2009、「出土木製品及び自然木の樹種」『野地遺跡』、163～168頁、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団：新潟。
- 住吉 政浩・小畑 頼孝ほか、1997、『水神貝塚』、豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会：豊橋。
- 諏訪 昭千代ほか、1978、『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ』、鹿児島県教育委員会：鹿児島。
- 清藤 一順、1981、『千葉市矢作貝塚』、(財)千葉県文化財センター：千葉。
- 清藤 一順・田中 豪ほか、1982、『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』、(財)千葉県文化財センター：千葉。
- 関 清ほか、1986、『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第8次緊急発掘調査概要』、富山県教育委員会：富山。
- 関 孝一、1966、「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第51巻 第3号、25～43、日本考古学会：東京。
- 関 孝一、1969、「長野県上高井郡高山村坪井遺跡の発掘調査」『信濃』第21巻 第8号、58～74頁、信濃史学会：松本。
- 関 雅之、1971、『耳取遺跡』、見附市教育委員会：見附。
- 関口 満ほか、1998、『前谷遺跡群・東原観音塚』、土浦市教育委員会：土浦。
- 関根 慎二、1998、『白川傘松遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橘村。
- 瀬戸口 望、1974、「倉園遺跡採集の指宿式土器とその他について」『鹿児島考古』第10号、97～113頁、鹿児島考古学会：鹿児島。
- センチンス,B.(福井正子訳)、2002、『世界のかご文化図鑑』、東洋書林：東京。
- 千藤 克彦ほか、2000、『野笹遺跡Ⅰ』、(財)岐阜県文化財保護センター：岐阜。
- 孫 国平(楨林 啓介訳)、2010、「田螺山遺跡第一段階調査(2004-2008年)の概要」『浙江省余姚田螺山遺跡の学際的総合研究』、21～40頁、金沢大学人文学類フィールド文化学研究室：金沢。
- 高木 正文・村崎 孝宏ほか、1998、『黒橋貝塚』、熊本県教育委員会：熊本。
- 高島 徹、2004、「シシヨツカ」『発掘された日本列島 2004』、28～29頁、朝日新聞社：東京。
- 高島 好一・木幡 成雄ほか、1993、『久世原館・番匠地遺跡』、いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団：いわき。
- 高杉 博章・小山 裕之・中山 豊・佐々木 竜郎、2000、『上吉沢市場地区遺跡群発掘調査報告書』、平塚市：平塚。
- 高野 晋司ほか、1983、『弘法原遺跡』、吾妻町教育委員会：吾妻町。

- 高橋 章ほか、1990、『土佐井地区遺跡』、大平村教育委員会：大平村。
- 高橋 栄一・古川 一明ほか、1994、『高田B遺跡—第2次・3次調査—』、宮城県教育委員会：仙台。
- 高橋 賢一・三浦 和信・宮城 孝之・田島 新、1986、『酒々井町伊篠白幡遺跡』、(財)千葉県文化財センター：千葉。
- 高橋 忠彦ほか、1984、『中山』、五城目町教育委員会：五城目町。
- 高橋 保、2005、『海道遺跡・大塚遺跡』、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団：新潟。
- 高橋 保雄・奥村 信男・木村 雄司・村上 章久、2006、『上野東遺跡・現明嶽遺跡』、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団：新潟。
- 高堀 勝喜・平田 天秋ほか、1976、『能都町・波並西の上遺跡発掘調査報告書』、石川県教育委員会：金沢。
- 高堀 勝喜・加藤 三千雄ほか、1982、『能都町史』第3巻 歴史編、能都町史編集専門委員会：能都町。
- 滝口 宏ほか、1987、『北江古田遺跡発掘調査報告書』、中野区・北江古田遺跡調査会：東京。
- 瀧瀬 芳之ほか、1993、『上敷免遺跡』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 田鎖 寿夫ほか、1984、『江刺家遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県埋蔵文化財センター：都南村。
- 田鎖 寿夫、1988、『馬立 I・太田遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県埋蔵文化財センター：都南村。
- 竹内 英昭ほか、1999、『宮山遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター：明和町。
- 武内 雅人、1997、『溝の口遺跡発掘調査報告書』、(財)和歌山県文化財センター：和歌山。
- 武田 勝栄・山本 肇・佐藤 雅一・斉藤 準、2007、『長岡市石倉遺跡出土の縄文土器』『越佐補遺些』第12号、34～41頁、越佐補遺些の会：長岡。
- 田島 龍太ほか、1996a、『徳蔵谷遺跡 (3)』、唐津市教育委員会：唐津。
- 田島 龍太ほか、1996b、『唐ノ川高峰遺跡 (3)』、唐津市教育委員会：唐津。
- 田代 孝、1987、『郷蔵地遺跡』、山梨県教育委員会：甲府。
- 田代 己佳、1999、『土器底部にみる組織圧痕の観察について (その1)』『研究紀要』第7号、105～122頁、(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター：国分寺町。
- 橘 善光ほか、1978、『むつ市文化財調査報告』第4集、むつ市教育委員会：むつ。
- 辰野 伝衛・根津 清志・深沢 健一・小池 政美ほか、1973、『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市西春近— 昭和47年度』、長野県教育委員会：長野。
- 辰口町教育委員会、1978、『苜生遺跡』：辰口町。
- 辰口町埋蔵文化財調査委員会・石川考古学研究会、1982、『辰口町下開発茶白山古墳群』、辰口町教育委

- 員会：辰口町。
- 館野 孝・小嶋 正裕ほか、1982、『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度』第6分冊、(財)東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 田中 敦子、1984、「山口遺跡出土縄文土器の底部」『仙台市体育館予定地』、241～250頁、仙台市教育委員会：仙台。
- 田中 耕作・鈴木 暁、2003、『二タ子沢C遺跡発掘調査報告書』、新発田市教育委員会：新発田。
- 田中 純男ほか、1984、『多摩ニュータウン遺跡 昭和58年度』第3分冊、東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 田中 広明・新屋雅明・小野美代子、1992、『新屋敷東・本郷前東』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 田中 伸明ほか、1999、『三ツ井遺跡』、(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 田中 正夫・新屋 雅明、1992、『四本竹遺跡』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 田辺 昭三・加藤 修・高谷 美由紀ほか、1973、『湖西線関係遺跡調査報告書』、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会：大津。
- 田辺 常博ほか、1992、『市港遺跡・北寺遺跡』、三方町教育委員会：三方町。
- 谷 豊信、1986、「楽浪土城址出土の土器(下)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第5号、73～124頁、東京大学文学部考古学研究室：東京。
- 谷 豊信、2002、「楽浪土器の系譜」『東アジアと日本の考古学IV』、207～234頁、同成社：東京。
- 谷岡 陽一・中原 斉・瀧川 知子、1989、『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』、福部村教育委員会：福部村。
- 谷岡 陽一・中原 斉・瀧川 知子、1990、『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅲ』、福部村教育委員会：福部村。
- 谷口 和人ほか、1993、『荒城神社遺跡』、(財)岐阜県文化財保護センター：岐阜。
- 谷口 和人ほか、1995、『岡前遺跡』、(財)岐阜県文化財保護センター：岐阜。
- 谷口 和人ほか、1997、『西田遺跡』、(財)岐阜県文化財保護センター：岐阜。
- 谷口 和人ほか、1998、『牛垣内遺跡』、(財)岐阜県文化財保護センター：岐阜。
- 谷口 宗治、1998、『金沢市北塚遺跡一第14次発掘調査報告書一』、金沢市埋蔵文化財センター：金沢。
- 谷藤 保彦・関根 慎二ほか、1987、『糸井宮前遺跡Ⅱ』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橋村。
- 田端 勉ほか、1975、『豊田市埋蔵文化財調査集報 第二集』縄文Ⅰ、豊田市教育委員会：豊田。
- 玉林 美男・宍戸 信吾、1990、『天屋遺跡』、神奈川県立埋蔵文化財センター：横浜。
- 田村 晃一、1989、「朝鮮半島の土器」『アジアと土器の世界』、雄山閣：東京。

- 近野 正幸・恩田 勇・谷口 肇、1997、『宮ヶ瀬遺跡群XⅢ』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 親跡 喬・野村 忠司、2000、『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』、中郷村教育委員会：中郷村。
- 千野 裕道ほか、1989、『多摩ニュータウン遺跡 昭和62年度』第6分冊、東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 千葉 敏朗・石川 正行・小川 直裕・秋本 雅彦ほか、2006、『下宅部遺跡Ⅰ』、下宅部遺跡調査団・東村山市遺跡調査会：東村山。
- 千葉 敏朗、2009、『縄文の漆の里 下宅部遺跡』、新泉社：東京。
- 中国社会科学院考古研究所(関野雄監訳)、1988、『新中国の考古学』、平凡社：東京。
- 立木(土橋) 由理子・吉澤 環ほか、1999、『国道18号上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ』、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団：新潟。
- 塚原 孝一・後藤 信祐・安永 真一、1994、『三輪仲町遺跡』、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団：宇都宮。
- 塚本 和弘・後藤 和風、1994、『善福寺遺跡発掘調査報告書』、菊川町教育委員会：菊川町。
- 塚本 師也、1992、『品川台遺跡』、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団：宇都宮。
- 塚本 師也、1997、『浄法寺遺跡』、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団：宇都宮。
- 辻 正徳・池畑 耕一、1982、『日置郡吹上町大園原遺跡』『鹿児島考古』第16号、115～132頁、鹿児島考古学会：鹿児島。
- 都築 恵美子ほか、1992、『東京都練馬区愛宕下遺跡調査報告書』、練馬区遺跡調査会：東京。
- 土屋 健作、2011、『カラムシを用いた単節縄文の製作実験』『植物繊維を「編む」ーアングンの里 津南の編み技術と歴史ー 予稿集』津南学叢書第15輯、41～45頁、津南町教育委員会：津南町。
- 土屋 積・石原 州一・鶴田 典昭・中島 英子、1997、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14』、(財)長野県埋蔵文化財センター：更埴。
- 角山 幸洋、1962、『弥生時代織物の問題点』『古代学研究』第32号、16～21頁、古代学研究会：狭山町。
- 角山 幸洋、1976、『縄文晩期の編物』『横田健一先生還暦記念 日本史論叢』、55～67頁、横田健一先生還暦記念会：吹田。
- 坪井 正五郎、1893、『西ヶ原貝塚探究報告 其四』『東京人類学会雑誌』第93号、109～119頁、東京人類学会：東京。
- 坪井 正五郎、1899、『日本石器時代の網代形編み物』『東京人類学会雑誌』第161号、440～444頁、東京人類学会：東京。
- 鶴田 典昭・石原 州一ほか、1999、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8ー長野市内その6ー』、

- (財) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター：更埴。
- 鶴巻 康志・田中 耕作、1994、『平成5年度新発田市遺跡範囲確認調査報告書』、新発田市教育委員会：新発田。
- 出口 浩ほか、1983、『成川遺跡』、鹿児島県教育委員会：鹿児島。
- 出口 雅人、1991、『千葉市誉田高田貝塚確認調査報告書』、(財) 千葉県文化財センター：四街道。
- 出越 茂和、1981、『金沢市中屋遺跡』、金沢市教育委員会：金沢。
- 出原 恵三、1992、『松ノ木遺跡Ⅰ』、本山町教育委員会：本山町。
- 出原 恵三・松田 直則・曾我 貴行ほか、1996、『船戸遺跡』、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター：南国。
- 寺門 義範ほか、1991、『千葉市神門遺跡』、千葉市教育委員会・(財) 千葉市文化財調査協会：千葉。
- 寺川 史郎・尾谷 雅彦ほか、1980、『亀井・城山』、(財) 大阪文化財センター：大阪。
- 寺崎 裕助・高橋 昌也・川村 浩司・田中 靖ほか、1988、『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅳ』、新潟県教育委員会：新潟。
- 寺田 良喜ほか、2000、『等々力原遺跡Ⅰ・等々力根遺跡Ⅱ・御岳山古墳Ⅰ』、世田谷区教育委員会：東京。
- 寺村 光晴・青木 重孝・関 雅之ほか、1987、『史跡 寺地遺跡』、青海町：青海町。
- 土岐山 武、1981、『千賀田遺跡・三代河原遺跡』『宮城県営圃場整備関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和55年度)』、67～80頁、宮城県文化財保護協会：仙台。
- 戸沢 充則・半田 純子、1966、『茨城県法堂遺跡の調査』『駿台史学』第18号、57～95頁、駿台史学会：東京。
- 戸沢 充則ほか、1994、『縄文時代研究事典』、東京堂出版：東京。
- 戸田 哲也ほか、1978、『新橋遺跡発掘調査報告』、富里村村史編纂委員会：富里村。
- 戸田 哲也・田村 良照・麻生 順司ほか、1985、『横浜市港南区殿屋敷遺跡群C地区発掘調査報告書』、殿屋敷遺跡群C地区発掘調査団：横浜。
- 戸田 哲也ほか、1993、『中野山越遺跡発掘調査報告書』、古川町教育委員会：古川町。
- 戸田 哲也ほか、1997、『堂之上遺跡』、久々野町教育委員会：久々野町。
- 戸田 哲也、1998、『多摩区No.61遺跡(宿河原縄文時代低地遺跡)発掘調査報告書』、多摩区No.61遺跡発掘調査団：横浜。
- 戸田 哲也ほか、2003、『羽根尾貝塚』、玉川文化財研究所：横浜。
- 栃木 英道ほか、1989、『犀川鉄橋遺跡Ⅱ』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。

- 土橋 由理子ほか、2009、『西郷遺跡・大蔵遺跡』、新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団：新潟。
- 富田 和夫・細田 勝、1989、『中三谷遺跡』、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大宮。
- 富田 紘一ほか、1989、『椎ノ木崎遺跡試掘調査報告書』、牛深市教育委員会：牛深。
- 鳥谷 芳雄・錦織 稔之ほか、2000、『神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡』、島根県教育委員会：松江。
- 富山 孝一ほか、2007、『上水流遺跡1』、鹿児島県立埋蔵文化財センター：霧島。
- 富山県埋蔵文化財センター、2008、『弥生時代のムラ 江上A遺跡出土品集』：富山。
- 鳥浜貝塚研究グループ、1979、『鳥浜貝塚 ―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1―』、福井県教育委員会：福井。
- 鳥浜貝塚研究グループ、1981、『鳥浜貝塚 ―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査2―』、福井県教育委員会：福井。
- 鳥浜貝塚研究グループ、1983、『鳥浜貝塚 ―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査3―』、福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館：福井。
- 鳥浜貝塚研究グループ、1984、『鳥浜貝塚 ―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査4―』、福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館：福井。
- 鳥浜貝塚研究グループ、1985、『鳥浜貝塚 ―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査5―』、福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館：福井。
- 鳥浜貝塚研究グループ、1987、『鳥浜貝塚 ―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査6―』、福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館：福井。
- 長井 数秋・米倉 豊・八木 武弘、1975、「松山市船ヶ谷遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No.112、12～15頁、ニューサイエンス社：東京。
- 永井 宏幸ほか、2004a、『吉野遺跡』、（財）愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 永井 宏幸ほか、2004b、『長谷口遺跡』、（財）愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 中井 真夕、2007、『桜町遺跡発掘調査報告書』木製品・繊維製品・植物編、小矢部市教育委員会：小矢部。
- 永岡 弘章、2002、『明神前遺跡発掘調査概要報告書』、鹿沼市：鹿沼。
- 中川 治美、2000、「木器・植物製品」『栗津湖底遺跡 自然流路』、35～44頁、滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会：大津。

- 中川 道子・青山 裕子・町田 尚美・永井 三郎、2011、『羽根下立遺跡発掘調査報告』、(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所：富山。
- 仲川 靖・林 博通・田路 正幸ほか、1997、『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ』、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会：大津。
- 長澤 展生ほか、2000、『向原Ⅱ遺跡発掘調査報告書』、松代町教育委員会：松代町。
- 長澤 展生ほか、2006、『内後遺跡発掘調査報告書』、十日町市教育委員会：十日町。
- 中沢 英正、2011、「津南の植生」『植物繊維を「編む」—アングンの里 津南の編み技術と歴史— 予稿集』津南学叢書第15輯、2～4頁、津南町教育委員会：津南町。
- 長沢 宏昌ほか、1984、『豆塚遺跡・東新居遺跡』、山梨県教育委員会：甲府。
- 長沢 宏昌、1986、「縄文時代前期末～中期初頭の土器底部にみられる編物痕について」『研究紀要』3、1～14頁、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター：甲府。
- 長沢 宏昌ほか、1987、『釈迦堂Ⅲ』、山梨県教育委員会：甲府。
- 長沢 宏昌、1988、「山梨県内出土縄文土器の底部圧痕について」『研究紀要』4、1～30頁、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター：甲府。
- 長沢 宏昌、1997、「都留市中谷遺跡出土の縄文土器底部圧痕について」『研究紀要』13、15～30頁、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター：甲府。
- 中里 壽克、1989、「米泉遺跡出土陶胎漆器及籃胎漆器」『金沢市米泉遺跡』、219～235頁、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 中島 俊一・湯尻 修平、1977、『松任市長竹遺跡発掘調査報告』、石川県教育委員会：金沢。
- 永嶋 正春、1985、「縄文時代の漆工技術—東北地方出土籃胎漆器を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第6集、1～51頁、国立歴史民俗博物館：佐倉。
- 永嶋 正春、1998、「寺野東遺跡出土漆関係資料—その漆工技術的検討—」『寺野東遺跡Ⅳ（縄文時代谷部編-2）』、95～121頁、(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター：国分寺町。
- 永嶋 正春、2010、「柏木川4遺跡出土編布の素材について」『柏木川4遺跡（4）』、240～254頁、(財)北海道埋蔵文化財センター：札幌。
- 中田 節子、2005、「道尻手遺跡出土土器底部繊維組織圧痕についての一考察」『道尻手遺跡 本文編』、347～374頁、津南町教育委員会：津南。
- 中田 節子、2007、「桜町遺跡の縄文土器底部圧痕の繊維技法について」『桜町遺跡発掘調査報告書 縄文時代総括編』、3～8頁、小矢部市教育委員会：小矢部。
- 長津 宗重、1991、『崩野遺跡Ⅱ』、南郷町教育委員会：南郷町。

- 長野 真一・井ノ上 秀文、1981、『宮之迫遺跡』、末吉町教育委員会：末吉町。
- 長野 真一・中村 耕治、1983、『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』、鹿児島県教育委員会：鹿児島。
- 永野 達郎・成尾 英仁、1999、『帖地遺跡（縄文編）』、喜入町教育委員会：喜入町。
- 中野 知照ほか、1981、『布勢遺跡発掘調査報告書』、（財）鳥取県教育文化財団：鳥取。
- 永松 実・斎藤 隆・渡辺 昌宏、1976、『小山台貝塚』、図書刊行会：東京。
- 中村 享史、1996、『安塚坂下古墳群』、栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団：宇都宮。
- 中村 恵次・斎木 勝ほか、1977、『千葉市中野僧御堂遺跡』、（財）千葉県文化財センター：千葉。
- 中村 健二・鈴木 康二ほか、1996、『小川原遺跡3』、滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会：大津。
- 中村 健二・堀 真人、2007、『弘川佃遺跡・弘川宮ノ下遺跡』、滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会：大津。
- 中村 孝三郎・寺村 光晴・松崎 庚一、1957、『三佛生』、長岡市立科学博物館：長岡。
- 中村 孝三郎、1958、『馬高』、長岡市立科学博物館：長岡。
- 中村 孝三郎・竹田 祐司・小林 達雄、1973、『千石原』、長岡市立科学博物館：長岡。
- 中村 孝三郎、1988、『根立遺跡発掘調査報告』、三島町教育委員会：三島町。
- 中村 栄・岩崎 誉尋、1997、『富山県八尾町妙川寺遺跡発掘調査報告（1）』、八尾町教育委員会：八尾町。
- 中村 準一ほか、1985、『藤ノ木遺跡』、加賀市教育委員会：加賀。
- 中村 慎一、2002、『稲の考古学』、同成社：東京。
- 中村 慎一ほか、2010、『浙江省余姚田螺山遺跡の学際的総合研究』、金沢大学人文学類フィールド文化学研究室：金沢。
- 中村 哲也、1997、『八盃久保（2）遺跡・八盃久保（3）遺跡・幸神遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 中村 由克、2001、『市道遺跡発掘調査報告書』信濃町教育委員会：信濃町。
- 中村 良一、1987、『青ノ久保遺跡発掘調査報告書』、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：都南村。
- 中山 修宏・平井 典子ほか、1977、『鹿谷本郷遺跡』、勝山市教育委員会：勝山。
- 中山 吉秀ほか、1979、『千葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡』、（財）千葉県文化財センター：千葉。
- 名久井 文明、1998、『縄紋時代から継続する編組技術』『縄文式生活構造』、24～61頁、同成社：東京。
- 名久井 文明、1999、『樹皮の文化史』、吉川弘文館：東京。

- 名久井 文明、2004、「民俗的古式技法の存在とその意味」『国立歴史民俗博物館研究報告』第117集、185～240頁、国立歴史民俗博物館：佐倉。
- 名久井 文明、2009、「縄紋時代から受け継がれた現代網代組み技術」『日本考古学』第27号、1～20頁、日本考古学協会：東京。
- 成田 滋彦・奈良 昌毅ほか、1991、『富ノ沢（1）・（2）遺跡Ⅲ』、青森県教育委員会：青森。
- 成田 誠治ほか、1976、『千歳遺跡（13）発掘調査報告書 昭和50年度』、青森県教育委員会：青森。
- 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班、1974、『吉野屋遺跡』：三条。
- 新関 厚・高梨 修ほか、1992、『東京都八王子市落越遺跡Ⅰ』、落越遺跡調査団：八王子。
- 新津 健ほか、1989、『金生遺跡Ⅱ（縄文時代編）』、山梨県教育委員会：甲府。
- 新津 健・米田 明訓、1994、『天神遺跡』、山梨県教育委員会：甲府。
- 贅 元洋・岩瀬 彰利ほか、1993、『白石遺跡』、豊橋市教育委員会：豊橋。
- 西 邦和、1995、『能登川町埋蔵文化財調査報告書第36集 林・石田遺跡』、能登川町教育委員会：能登川町。
- 西口 陽一・宮野 淳一・上西 美佐子ほか、1984、『山賀（その3）』、（財）大阪文化財センター：大阪。
- 西田 巖、2008、『東名遺跡 —第2次調査の概要—』、佐賀市教育委員会：佐賀。
- 西田 巖・中野 充・川口 雄也、2009、『東名遺跡群Ⅱ』第4分冊、佐賀市教育委員会：佐賀。
- 西田 巖・山田 広幸・佐々木 由香、2009、『東名遺跡群Ⅱ』第5分冊、佐賀市教育委員会：佐賀。
- 西谷 大、1997、「中国東南沿岸部の新石器時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集、1～58頁、国立歴史民俗博物館：佐倉。
- 西野 秀和ほか、1983、『鹿島町徳前C遺跡（Ⅳ）』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 西野 秀和ほか、1985、『門前町道下元町遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 西野 秀和ほか、1987、『辰口町史』第2巻 前近代編、辰口町役場：辰口町。
- 西野 秀和・本田 秀生、1987、『金沢市笠舞A遺跡（Ⅲ）』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 西野 秀和・岡本 恭一ほか、1989、『金沢市米泉遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 西部 良治・三宅 唯美、1996、『中切遺跡』、恵那市教育委員会：恵那。
- 西村 正衛、1974、「千葉県成田市荒海貝塚（第一次調査）」『学術研究』第23号、25～56頁、早稲田大学教育学部：東京。
- 西村 正衛、1975、「千葉県成田市荒海貝塚（第二次調査）」『学術研究』第24号、1～25頁、早稲田大学教育学部：東京。

- 新田 浩三・石橋 宏克、1991、『銚子市余山貝塚』、(財)千葉県文化財センター：四街道。
- 二宮 忠司・渡辺 和子、1983、『福岡市早良区四箇周辺遺跡調査報告書(5)』、福岡市教育委員会：福岡。
- 額田 巖、1965、「竹細工の民族学的研究」『物質文化』No.5、36～55頁、物質文化研究会：東京。
- 額田 巖、1966、「Basketryの研究」『物質文化』No.7、47～61頁、物質文化研究会：東京。
- 額田 巖、1970、「竹製民具の構成理論」『物質文化』No.16、25～31頁、物質文化研究会：東京。
- 布目 順郎、1984、「縄類と編物の材質について」『鳥浜貝塚 一縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査4一』、1～8頁、福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館：福井。
- 布目 順郎、1987、「鳥浜貝塚出土のアンギン様編物について」『鳥浜貝塚 一縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査6一』、11～15頁、福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館：福井。
- 布目 順郎、1988、『絹と布の考古学』、雄山閣：東京。
- 布目 順郎、1989a、「金沢市米泉遺跡出土のアンギン様編布No.1について」『金沢市米泉遺跡』、207～214頁、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 布目 順郎、1989b、「金沢市米泉遺跡出土のアンギン様編布No.2について」『金沢市米泉遺跡』、215～218頁、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 布目 順郎、1990、「押出遺跡出土の一種の編物について」『押出遺跡発掘調査報告書(図版・表・分析編)』、86～88頁、山形県教育委員会：山形。
- 布目 順郎、1992a、「境A遺跡出土土器底面の編・織目痕」『北陸自動車道遺跡調査報告一朝日町編7一』、57～70頁、富山県教育委員会：富山。
- 布目 順郎、1992b、『目で見る繊維の考古学』、染織と生活社：京都。
- 能城 修一・鈴木 三男、1989、「木材化石」『練馬区弁天池低湿地遺跡の調査』、103～132頁、練馬区遺跡調査会：東京。
- 能城 修一・鈴木 三男、1996、「君津市常代遺跡から出土した木製品の樹種」『千葉県君津市常代遺跡群』第3分冊、826～861頁、(財)君津都市文化財センター：木更津。
- 能城 修一・佐々木 由香・山本 直人、2009、「中屋サワ遺跡出土木材の樹種」『中屋サワ遺跡Ⅳ・下福増遺跡Ⅱ・横江荘遺跡Ⅱ』、178～197頁、金沢市埋蔵文化財センター：金沢。
- 野代 幸和・網倉 邦生、2000、『桂野遺跡(第1～3次)・西馬鞭遺跡』、山梨県教育委員会：甲府。
- 野田 真弓、2005、「青谷上寺地遺跡出土のかご(第1節～第8節)」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』1、93～138頁、鳥取県埋蔵文化財センター：鳥取。
- 芳賀 英一・丹野 隆明、1990、『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ』、福島県教育委員会：福

- 島。
- 橋本 勉ほか、1985、『ささら（Ⅱ）』、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大宮。
- 橋本 勉、1990、『雅楽谷遺跡』、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 橋本 正春ほか、1994、『富山県大門町 串田新遺跡Ⅶ』、大門町教育委員会：大門町。
- 橋本 正博・福海 貴子・宮田 明、2003、『八日市地方遺跡Ⅰ』、小松市教育委員会：小松。
- 長谷川 幸志、1998、『高見遺跡』、（財）岐阜県文化財保護センター：岐阜。
- 秦 光次郎ほか、1996、『上田遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 畠山 昇・成田 悟・三浦 孝仁、1993、『野場（5）遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 端野 英子、1979、『金沢市笠舞A遺跡調査報告』、石川県教育委員会：金沢。
- 服部 久士・平子 弘・山田 猛、1989、『天道遺跡発掘調査報告』、三重県教育委員会：津。
- 服部 実喜・榊渕 規彰、1987、『日向南新田遺跡』、神奈川県立埋蔵文化財センター：横浜。
- 埴 喜代子、1982、『網代痕の観察』『神谷原Ⅱ』、465～472頁、八王子市櫛田遺跡調査会：八王子。
- 濱 修・芝池 信幸・田井中 洋介ほか、1998、『赤野井湾遺跡』、滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会：大津。
- 浜石 哲也ほか、1987、『田村遺跡Ⅲ』、福岡市教育委員会：福岡。
- 濱田 彰久、1997、『庵ノ前遺跡Ⅲ』、熊本県教育委員会：熊本。
- 濱田 耕作・榊原 政職、1920、『肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告』『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第5冊、65～88頁、京都帝国大学：京都。
- 濱田 耕作・水野 清一、1938、『赤峰紅山後』、東亜考古学会：東京。
- 早野 浩二ほか、2003、『権現山遺跡』、（財）愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 原川 雄二・松井 和浩・及川 良彦、2002、『多摩ニュータウン遺跡 No.939遺跡Ⅲ（2）』、東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 原田 恒弘・水田 稔・徳江 秀夫ほか、2000、『馬場東矢次Ⅱ遺跡・新川鑄木遺跡・井出二子山古墳・保渡田八幡塚古墳』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橋村。
- 原田 昌幸ほか、1986、『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』、（財）千葉県文化財センター：千葉。
- 原田 幹ほか、1995、『川地遺跡』、（財）愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- パリノ・サーヴェイ株式会社、1999a、『奥谷南遺跡の土坑に関する自然科学分析』『奥谷南遺跡Ⅰ』、187～194頁、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター：南国。
- パリノ・サーヴェイ株式会社、1999b、『龍頭遺跡から出土した編物の樹種』『龍頭遺跡』、96～97頁、

- 大分県教育委員会：大分。
- 春成 秀爾・今村 峯雄ほか、2004、『弥生時代の実年代』、学生社：東京。
- 東 和幸、1998、「鹿児島県の組織痕土器」『南九州縄文通信』No.12、86～96頁、南九州縄文研究会：始良町。
- 東 和幸、2006、「南九州縄文時代の編み物」『鹿児島民具』第18号、4～14頁、鹿児島民具学会：南さつま。
- 久田 正弘ほか、1995、『金沢市近岡遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 久田 正弘・中川 律子・本田 秀生・佐々木 由香、2008、「白江梯川遺跡の琴とかごについて」『石川県埋蔵文化財情報』第19号、(財)石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 平井 進、1992、『上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：都南村。
- 平井 勝ほか、2000、『津島遺跡2』、岡山県教育委員会：岡山。
- 平川 泰彦・西脇 対名夫、1998、「千歳市キウス5遺跡出土の縄文時代編物に使用された木材の樹種について」『キウス5遺跡(5)』第2分冊、383～385頁、(財)北海道埋蔵文化財センター：札幌。
- 平口 哲夫・杉島 孝博・四柳 嘉章・高堀 勝喜、1976、「第一章 原始時代の遺跡・遺物」『珠洲市史』第1巻=資料編 自然・考古・古代、445～574頁、珠洲市：珠洲。
- 平口 哲夫、1982、「福田原山遺跡」『鹿島町史』資料編(続)上巻、370～394頁、鹿島町：鹿島町。
- 平口 哲夫・米澤 義光ほか、1991、『富来町福浦港ヘラソ遺跡発掘調査報告Ⅲ』、能登ダイヤモンド・ゴルフ場(予定地)内埋蔵文化財調査委員会：富来町。
- 平田 天秋ほか、1977、『尾口村尾添遺跡発掘調査報告』、石川県教育委員会：金沢。
- 平田 天秋ほか、1982、『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 平野 吾郎ほか、1983、『有東遺跡Ⅰ』、静岡県教育委員会：静岡。
- 広瀬 雄一・森田 孝志、2006、「坂の下遺跡」『九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物』、65～68頁、九州縄文研究会。
- 廣田 晶子、1998、「出土土器底部の編物圧痕」『鹿児島県桜島町武貝塚発掘調査研究報告書』、137～150頁、奈良大学文学部考古学研究室：奈良。
- 福田 一志・古門 雅高、1997、『伊木力遺跡Ⅱ』、長崎県教育委員会：長崎。
- 福田 友之・羽柴 直人ほか、1986、『上牡丹森』、大鰐町教育委員会：大鰐町。
- 福原 博信、1998、『小浜遺跡』、五木村教育委員会：五木村。
- 福山 俊彰・松田 政基・桐谷 優、1997、『五料平遺跡・五料野ヶ久保遺跡・五料稻荷谷戸遺跡』、群

- 馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会：松井田町。
- 藤 則雄、1986、「植物遺体」『石川県能都町真脇遺跡』、407～424頁、能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団：能都町。
- 藤崎 光洋・中村 和美、2006、『三角山遺跡群（3）』第1分冊、鹿児島県立埋蔵文化財センター：霧島。
- 藤澤 昌、1999、『潟前遺跡（第1次）』、秋田県教育委員会：秋田。
- 藤代 美津子、2002、「宮川村にける編組製品をどう分類するか」『人類誌集報2002』、122～126頁、東京都立大学人類誌調査グループ：東京。
- 藤代 美津子、2005、「フジカゴの製作」『人類誌集報2003』、13～18頁、東京都立大学人類誌調査グループ：東京。
- 藤田 富士夫・山本 修、1973、『富山市杉谷（67・81・64番）遺跡』、富山市教育委員会：富山。
- 藤田 富士夫、1975、『富山市古沢遺跡発掘調査報告書』、富山市教育委員会：富山。
- 藤沼 邦彦ほか、1983、『里浜貝塚Ⅱ』、東北歴史資料館：多賀城。
- 藤本 弥城、1988、「茨城県広畑貝塚出土の晩期縄文土器」『考古学雑誌』第73巻 第4号、1～35頁、日本考古学会：東京。
- 藤原 司・藤本 幸雄、2000、『奥椿岱遺跡』、秋田県教育委員会：秋田。
- 藤巻 幸男ほか、1993、『五目牛清水田遺跡』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橘村。
- 船井 向洋・松下 孝幸、1996、『宮ノ前北遺跡』、伊万里市教育委員会：伊万里。
- 古市 豊司ほか、1976、『五戸町中ノ沢西張遺跡・古街道長根遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 古内 茂、1986、『加曾利貝塚』、（財）千葉県文化財センター：千葉。
- 古門 雅高・宮路 淳子・川道 寛、1998、『宮下貝塚』、富江町教育委員会：富江町。
- 古門 雅高ほか、2006、「伊木力遺跡」『九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物』、94～96頁、九州縄文研究会。
- 古川 郁夫・堤 誠司・佐藤 真美、1996、「桂見遺跡より出土した木器類の樹種構成の特徴」『桂見遺跡一八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区一』、357～363頁、（財）鳥取県教育文化財団：鳥取。
- 古川 一明、1982、『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和56年度）』、宮城県文化財保護協会：仙台。
- 古川 秀幸、1997、『矢風遺跡 第2次調査』、二丈町教育委員会：二丈町。
- 古澤 妥史・酒井 亜紀・石田 守之、2003、『大割遺跡・猫山遺跡・大曲川端遺跡』、京ヶ瀬村教育委員会：京ヶ瀬村。
- 古原 敏広、1982『駒場7遺跡における考古学的調査』、静内町教育委員会：静内町。

- 別府 洋二・甲斐 昭光・鈴木 敬二ほか、1996、『神戸市西区玉津田中遺跡』第5分冊、兵庫県教育委員会：神戸。
- 星 雅之・阿部 勝則・高橋 與右衛門、1998、『本内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 細田 勝ほか、1987、『神明・矢垂』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大宮。
- 細田 勝ほか、1991、『在家』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 細田 勝・岩田 明広、1994、『樋ノ下遺跡』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 堀川 久美子、2011、「日本における遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『植生史研究』第20巻第1号、3～26頁、日本植生史学会：東京。
- 堀川 義英、1979、『牟田辻・中野遺跡』、佐賀県教育委員会：佐賀。
- 堀内 大介・有山 径世ほか、2000、『外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡 発掘調査報告』、婦中町教育委員会：婦中町。
- 本間 一恵、2005、「弥生のかごを復元する」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』1、139～144頁、鳥取県埋蔵文化財センター：鳥取。
- 本間 信昭・室岡 博、1976、『兼俣遺跡』、妙高高原町教育委員会：妙高高原町。
- 前迫 満子・前迫 亮一、2006、「南九州縄文土器の底部圧痕に関する覚書」『Archaeology From the South』、13～32頁、鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会：鹿児島。
- 前田 清彦ほか、1993、『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』、豊川市教育委員会：豊川。
- 前山 精明、1997、『有馬崎遺跡』、分水町教育委員会：分水町。
- 牧野 賢美・吉田 英亮、2001、『桐内B遺跡・桐内D遺跡』、秋田県教育委員会：秋田。
- 牧本 哲雄・小谷 修一・高垣 陽子ほか、1996、『桂見遺跡—八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区—』、(財)鳥取県教育文化財団：鳥取。
- 増子 正三、1998、「新発田市古屋敷遺跡の縄文中期の土器と土偶」『北越考古学』第9号、52～55頁、北越考古学研究会：新発田。
- 増山 仁・徳田 澄子・田村 明美・南 久和ほか、1985、『金沢市東市瀬遺跡』、金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会：金沢。
- 増山 仁、1987、『金沢市矢木ジワリ遺跡・金沢市矢木ヒガシウラ遺跡』、金沢市教育委員会：金沢。
- 増山 仁、1989、『金沢市笠舞A遺跡(Ⅳ)』、金沢市教育委員会：金沢。
- 町田 賢一ほか、2006、『下老子笹川遺跡発掘調査報告』、(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所：富山。

- 町田 賢一、2011、「①小竹貝塚」『平成22年度埋蔵文化財年報』、11～14頁、(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所：富山。
- 松井 泉、1998、『下九沢下作ノ口遺跡』、市道上溝376号ほか2道路改良事業地内発掘調査団：相模原。
- 松井 孝宗・高橋 健太郎、1999、『中川原遺跡発掘調査報告書』、豊田市教育委員会：豊田。
- 松浦 郁乃・宮川 勝次、1998、『金沢市北塚遺跡・北塚古墳群 第17次発掘調査報告書』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 松浦 宥一郎、2005、「中国古代紡織技術の発達と紡織製品」『季刊考古学』第91号、82～86頁、雄山閣：東京。
- 松岡 敦子、1981、「六反田遺跡出土縄文土器の底部」『六反田遺跡発掘調査報告書』、202～230頁、仙台市教委：仙台。
- 松崎 水穂・長内 孝幸・福田 裕二、1998、『原歌遺跡S地点』、上ノ国町教育委員会：上ノ国町。
- 松田 訓、2003、『石堂野B遺跡』、(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 松田 真一ほか、1989、『奈良県山辺郡山添村大川遺跡』、山添村教育委員会：山添村。
- 松田 光太郎・井辺 一徳・田村 裕司、1999、『白久保遺跡』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 松谷 暁子、1983、「有東遺跡出土繊維状植物遺残の同定」『有東遺跡 I』、73～74頁、静岡県教育委員会：静岡。
- 松永 篤知、2003、「中国新石器時代の「敷物圧痕」について」『中国考古学』第3号、22～45頁、日本中国考古学会：東京。
- 松永 篤知、2004、「東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類について」『金沢大学考古学紀要』第27号、99～108頁、金沢大学文学部考古学講座：金沢。
- 松永 篤知、2006、「馬高式期の編物技術」『火焰土器の時代』津南学叢書第4輯、80～83頁、津南町教育委員会：津南町。
- 松永 篤知、2008a、「縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『考古学雑誌』第92巻 第2号、1～48頁、日本考古学会：東京。
- 松永 篤知、2008b、「網代・敷物」『総覧 縄文土器』、942～945頁、アム・プロモーション：東京。
- 松永 篤知、2008c、「縄文時代草創期の編物技術」『縄文文化の胎動—予稿集—』津南学叢書第8輯、73～75頁、津南町教育委員会：津南町。
- 松永 篤知、2010、「縄文時代後期・晩期の編物技術—正面ヶ原A遺跡出土資料の理解のために—」『正面ヶ原A遺跡から垣間見る縄文社会—予稿集—』津南学叢書第13輯、71～77頁、津南町教育委員会

- 会：津南町。
- 松永 篤知、2011a、「堂平遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『堂平遺跡』本文編、415～426頁、津南町教育委員会：津南町。
- 松永 篤知、2011b、「縄文土器底部の平行葉脈圧痕について—土器製作用敷物としての笹葉の利用—」『考古学と陶磁史学』、272～285頁、金沢大学考古学研究室：金沢。
- 松永 篤知、2011c、「日本列島先史時代の編物—縄文時代の編布を出発点として—」『植物繊維を「編む」—アングンの里 津南の編み技術と歴史— 予稿集』津南学叢書第15輯、13～27頁、津南町教育委員会：津南町。
- 松藤 和人・西脇 対名夫ほか、1990、『伊木力遺跡』、多良見町教育委員会：多良見町。
- 松村 信博・山本 純代、1999、『奥谷南遺跡 I』、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター：南国。
- 松本 建速、1999、『下館銅屋遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 松本 勲・林 弘也、1979、「辻田遺跡から出土した木材資料の樹種同定について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第12集、144～155頁、福岡県教育委員会：福岡。
- 松本 昌樹・伊藤 攻、2000、『潟前遺跡(第2次)』、秋田県教育委員会：秋田。
- 松本 康弘ほか、1993、『飯田二反田遺跡』、大分県教育委員会：大分。
- 松山 和彦・三浦 ゆかり、2001、『金沢市藤江B遺跡 I』、(財)石川県埋蔵文化財センター：金沢。
- 馬目 順一ほか、1975、『大畑貝塚調査報告』、いわき市教育委員会：いわき。
- 間宮 政光、1997、『行田梅木平遺跡』、群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会：松井田町。
- 丸山 伸治、1988、「縄文時代の技術(編み物製品)」『曾畑』、314～330頁、熊本県教育委員会：熊本。
- 三浦 圭介、1974、『むつ小川原開発に伴う新住区予定地内埋蔵文化財分布・試掘調査報告書 昭和48年度』、青森県教育委員会：青森。
- 三浦 圭介ほか、1990、『空沢遺跡』、青森県教育委員会：青森。
- 三浦 正人・中田節子、1989、「繊維製品」『小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡』、62～76頁、(財)北海道埋蔵文化財センター：札幌。
- 三島 格、1961、「鯨の脊椎骨を利用せる土器製作台について」『古代学』第10巻 第1号、66～73頁、(財)古代学協会：大阪。
- 水沢 裕子ほか、1979、『松原遺跡』、世田谷区教育委員会：東京。
- 水沢 教子ほか、2000、『更埴条里遺跡・屋代遺跡群』縄文時代編、長野県埋蔵文化財センター：更埴。
- 水ノ江 和同、1996、『中村石丸遺跡』、福岡県教育委員会：福岡。

- 三ツ橋 和正、1996、『相模原市No.27遺跡発掘調査報告書』、相模原市No.27遺跡発掘調査団：相模原。
- 皆川 洋一・西脇 対名夫ほか、1995、『千歳市キウス5遺跡・キウス7遺跡(2)・ケネフチ8遺跡』、(財)北海道埋蔵文化財センター：札幌。
- 三鍋 秀典・瀬戸 智子、1994、『古屋敷IV遺跡 発掘調査報告』、立山町教育委員会：立山町。
- 南 久和・増山 仁ほか、1986、『金沢市新保本町チカモリ遺跡』、金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会：金沢。
- 南 久和ほか、1977、『金沢市北塚遺跡』、金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会：金沢。
- 南 久和ほか、1981、『金沢市笠舞遺跡』、金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会：金沢。
- 南 久和ほか、1992、『金沢市中屋サワ遺跡』、金沢市教育委員会：金沢。
- 南 久和ほか、1993、『金沢市馬替遺跡』、金沢市教育委員会：金沢。
- 南 洋一郎ほか、1986、『福井県史』資料編13 考古、福井県：福井。
- 南 洋一郎、1990、『浜島遺跡』『福井市史』資料編1 考古、760～779頁、福井市：福井。
- 宮 昌之、1983、『池上西』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大宮。
- 宮城県教育委員会、1987、『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他』、宮城県文化財保護協会：仙台。
- 三宅 徹也・天間 勝也・鈴木 克彦ほか、1991、『富ノ沢(2)遺跡IV』、青森県教育委員会：青森。
- 三宅 博士・広江 耕史ほか、1987、『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』、島根県教育委員会：松江。
- 宮崎 清、1985a、『藁』I、法政大学出版局：東京。
- 宮崎 清、1985b、『藁』II、法政大学出版局：東京。
- 宮田 明、1995、『富山市岩瀬天神遺跡出土の縄文土器について』『富山市考古資料館紀要』第14号、1～19頁、富山市考古資料館：富山。
- 宮田 明ほか、1998、『石川県鳳至郡柳田村上町和住下遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 宮本 哲郎・谷口 明伸、1999、『八日市ヤスマル遺跡』、金沢市埋蔵文化財センター：金沢。
- 向坂 鋼二・栗野 克己・平賀 孝晴、1982、『半場遺跡1978年度発掘調査報告書』、佐久間町教育委員会：佐久間町。
- 向坂 鋼二・西井 幸雄・鈴木 敏則、1992、『佐鳴湖西岸遺跡群 本文編II』、(財)浜松市文化協会：浜松。
- 武藤 貞昭・小谷 和彦ほか、1999、『上開田村平遺跡』、(財)岐阜県文化財保護センター：岐阜。
- 武藤 祐浩・和泉 昭一、1991、『大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II』、秋田県教育委員会：秋田。

- 武藤 祐浩・栗澤 光男、1988、『中小坂遺跡発掘調査報告書』、秋田県教育委員会：秋田。
- 武藤 雄六・小林 公明ほか、1988、『唐渡宮』、富士見町教育委員会：富士見町。
- 村上 吉正・吉垣 俊一・谷口 肇、1997、『中里遺跡 (No.31) ・西大竹上原遺跡 (No.32) 』、(財) かながわ考古学財団：横浜。
- 村上 吉正・吉垣 俊一、1998、『東向遺跡 (No.33) 』、(財) かながわ考古学財団：横浜。
- 村上 拓・佐々木 務、1996、『牧田貝塚発掘調査報告書』、(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 村上 拓・熊谷 佳恵、1999、『芦名沢 I 遺跡発掘調査報告書』、(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 村木 功ほか、1987、『松の外遺跡・西戸古墳群』、毛呂山町教育委員会：毛呂山町。
- 村木 淳・小久保 拓也・杉山 陽亮、2005、『是川中居遺跡4』、八戸市教育委員会：八戸。
- 村越 潔ほか、1974、『小栗山地区遺跡発掘調査報告書』、青森県教育委員会：青森。
- 村越 潔・葛西 励ほか、1979、『石郷遺跡』、平賀町教育委員会：平賀町。
- 村越 潔、1985、「縄文時代の織布について若干の考察」『日本史の黎明』、155～167頁、六興出版：東京。
- 村田 章人、1993、『原ヶ谷戸・滝下』、(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 村松 一秀、2000、『松河戸遺跡 一安賀地区発掘調査の概要一』、春日井市教育委員会：春日井。
- 村松 一秀、2001、『平成13年度企画展 松河戸遺跡展』、春日井市教育委員会：春日井。
- 室岡 博・関 雅之・本間 信昭、1984、『長峰遺跡Ⅱ』、吉川町教育委員会：吉川町。
- モース (モールス) ,E.S. (矢田部 良吉訳)、1879、『大森介墟古物編』理科会粹 第一帙上冊、東京大学法理文学部：東京。
- 毛利光 用子ほか、1980、『恩智遺跡』 I・II、瓜生堂遺跡調査会：東大阪。
- 茂木 好光ほか、1984、『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書 (昭和58年度) 』、宮城県文化財保護協会：仙台。
- 望月 精司ほか、1988、『念仏林遺跡』、小松市教育委員会：小松。
- 森 秀典・山崎 典子・川端 幸江、1991、「立山町芦峯寺不動平遺跡」『大境』第13号、23～35頁、富山考古学会：高岡。
- 森川 和昌ほか、2006、『堀切遺跡F区発掘調査報告書』、黒部市教育委員会：黒部。
- 森島 稔・笹沢 浩、1966、「長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡調査報告 (その一)」『信濃』第18巻 第6号、43～58頁、信濃史学会：松本。

- 森田 尚宏ほか、1986、『田村遺跡群』第1分冊、高知県教育委員会：高知。
- 盛本 勲、2006、「沖縄県の低湿地遺跡と植物性遺物」『九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物』、172～174頁、九州縄文研究会。
- 盛本 勲・知名 定順・東門 研治、2006a、「前原遺跡」『九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物』、176～184頁、九州縄文研究会。
- 盛本 勲・知名 定順・東門 研治、2006b、「伊礼原C遺跡」『九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物』、188～191頁、九州縄文研究会。
- 森本 和男・新田 浩三・川島 利道、1998『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財発掘調査報告書1』、（財）千葉県文化財センター：四街道。
- 矢口 忠良ほか、1973、『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一飯田市地内その2—昭和47年度』、長野県教育委員会：長野。
- 矢島 國雄・阿部 芳郎・小滝 勉・井上 洋一ほか、1998、『上土棚南遺跡第3次調査』、綾瀬市教育委員会：綾瀬。
- 矢島 敬之ほか、2000、『連郷B遺跡』、いわき市教育委員会：いわき。
- 安井 健一、1994、『野田市東金野井貝塚発掘調査報告書』、（財）千葉県文化財センター：四街道。
- 柳田 康雄・小川 泰樹、1995、『宇野代遺跡』、福岡県教育委員会：福岡。
- 柳谷 博ほか、1998、『下野谷遺跡Ⅰ』、早稲田大学：東京。
- 柳原 梢子、2008、「縄文時代のかごの研究」『東京大学考古学研究室研究紀要』第22号、1～40頁、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室：東京。
- 山内 賢一・林寺 巖州・小林 高範・古川 知明、1993「小竹貝塚出土の遺物について」『富山市考古資料館紀要』第13号、富山市考古資料館：富山。
- 山内 幹夫ほか、1985、『母畑地区遺跡発掘調査報告19』、福島県教育委員会・（財）福島県文化センター：福島。
- 山内 幹夫・阿部 力・佐藤 悦夫ほか、1996、『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅰ』、福島県教育委員会・（財）福島県文化センター：福島。
- 山内 幹夫・鹿目 昭次・土井 昭二ほか、1997、『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅲ』、福島県教育委員会・（財）福島県文化センター：福島。
- 山内 幹夫・土井 昭二・佐藤 啓、1998、『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅴ』、福島県教育委員会・（財）福島県文化センター：福島。
- 山内 幹夫・佐藤 啓ほか、1999、『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅶ』、福島県教育委員会・（財）福島

- 県文化センター：福島。
- 山岡 栄子・伊藤 修・井上 充子ほか、1973、『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡飯島町内その3・駒ヶ根市内—』、長野県教育委員会：長野。
- 山川 正一・松田 英博・米澤 義光、1996、『宇ノ気町気屋遺跡』、宇ノ気町教育委員会：宇ノ気町。
- 山岸 英夫・松本 茂・七海 康広・高橋 信一、1993、『東北横断自動車道遺跡調査報告19』、福島県教育委員会・（財）福島県文化センター：福島。
- 山岸 英夫ほか、1999、『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅷ』、福島県教育委員会・（財）福島県文化センター：福島。
- 山口 慶一・今井 恵昭・鶴間 正昭ほか、1982、『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度』第4分冊、東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 山口 慶一ほか、2001、『袋低地遺跡』、東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 山口 讓治・牟田 裕二ほか、1990、『比恵遺跡群（9）』、福岡市教育委員会：福岡。
- 山口 逸弘ほか、2002、『白井大宮Ⅱ遺跡』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団：北橋村。
- 山口 典子・上守 秀明・田島 新、1991、『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡』、（財）千葉県文化財センター：四街道。
- 山崎 直方、1893、「下総貝塚遺物図解」『東京人類学会雑誌』第85号、269～274頁、東京人類学会：東京。
- 山下 晃・金子 浩之・外岡 龍二・高橋 豊、1983、『伊豆・平野山遺跡』、松崎町教育委員会：松崎町。
- 山下 勝年ほか、1989、『神明社貝塚』、南知多町教育委員会：南知多町。
- 山下 平重、1999、『多肥松林遺跡』、香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター：高松。
- 山田 昌久、1984、「縄文時代の編み物」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』人工遺物・総括編、555～560頁、埼玉県教育委員会：浦和。
- 山田 昌久、2000、「漆器と木製品」『戸平川遺跡』、167～178頁、秋田県教育委員会：秋田。
- 山村 貴輝ほか、1983、『元八王子池の下遺跡発掘調査報告書』、元八王子池の下遺跡調査団：昭島。
- 山本 起嗣・菅原 一彦ほか、2006、『森吉家ノ前A遺跡』、秋田県教育委員会：秋田。
- 山本 孝司・川島 雅人・及川 良彦・五十嵐 彰、1998、『多摩ニュータウン遺跡 No.245・341遺跡』、東京都埋蔵文化財センター：多摩。
- 山本 茂樹・川手 昌英・今福 利恵・網倉 邦生、1998、『甲ッ原遺跡Ⅳ』、山梨県教育委員会：甲府。
- 山本 茂樹・三田村 美彦ほか、1995、『日影田遺跡（第1・2次調査）』、山梨県教育委員会：甲府。

- 山本 暉久・谷口 肇、1999、『池子遺跡群X』、(財)かながわ考古学財団：横浜。
- 山本 暉久・服部 実喜・谷口 肇、1988、『金沢文庫遺跡』、神奈川県立埋蔵文化財センター：横浜。
- 山本 直人、1984、「第1号住居址」『八反田遺跡発掘調査報告書』、10～14頁、津南町教育委員会：津南町。
- 山本 直人、1985、「小松市小原遺跡のカゴ底圧痕（予報）」『石川考古』第163号、7頁、石川考古学研究会：金沢。
- 山本 直人、1986a、「金沢市内縄文時代遺跡出土のカゴ底圧痕」『金沢市新保本町チカモリ遺跡―第4次発掘調査兼土器編―』、310～312頁、金沢市教育委員会：金沢。
- 山本 直人、1986b、「底部圧痕・編物・縄」『石川県能都町真脇遺跡』、248～260頁、能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団：能都町。
- 山本 直人ほか、1986、『石川県能美郡辰口町岩内遺跡発掘調査報告書』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 山本 直人、1987、「金沢市戸水C遺跡出土のカゴ」『石川考古学研究会会誌』第30号、63～65頁、石川考古学研究会：金沢。
- 山本 直人ほか、1987、『石川県石川郡河内村福岡遺跡』、河内村教育委員会：河内村。
- 山本 直人ほか、1988、『石川県能美郡辰口町岩内遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 山本 直人、1989、「石川県におけるワラ・タケ以外のカゴ類」『北陸の考古学Ⅱ』、39～60頁、石川考古学研究会：金沢。
- 山本 直人、2007a、「第Ⅰ部 年代測定学と考古学の融合研究」『文理融合の考古学』、1～98頁、高志書院：東京。
- 山本 直人、2007b、「ワラ・タケ以外のカゴ類」『文理融合の考古学』、141～167頁、高志書院：東京。
- 山本 正敏・神保 孝造、1975、『富山県立山町金剛新遺跡緊急発掘調査概報』、立山町教育委員会：立山町。
- 山本 正敏、1990、「魚津市東尾崎遺跡出土遺物の紹介」『魚津市立博物館紀要』第1号、1～18頁、魚津市教育委員会：魚津。
- 山本 正敏・狩野 睦・酒井 重洋・橋本 正春ほか、1987、『北陸自動車道遺跡調査報告―朝日町編3―』、富山県教育委員会：富山。
- 山本 正敏・林 浩明、1990、『安居五百歩遺跡Ⅰ』、福野町教育委員会：福野町。
- 山森 伸正・林 浩明、1987、『富山県小矢部市桜町遺跡―県道改良工事に伴う雀谷地区の調査―』、小矢部市教育委員会：小矢部。

- 湯尻 修平、1977、『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』、石川県教育委員会：金沢。
- 湯尻 修平ほか、1984、『羽咋市気多社僧坊跡群』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 湯尻 修平・山本 直人ほか、1987、『小松市中海遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 余合 昭彦・石黒 立人ほか、1993、『三斗目・三本松遺跡』、(財)愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 吉岡 弘樹、2000、『塩瀬下原遺跡』、山梨県教育委員会：甲府。
- 吉岡 康暢、1971、「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第56巻 第4号、1～49頁、日本考古学会：東京。
- 吉川 國男、1974、「土器底圧痕文」『高井東遺跡』、112～118頁、埼玉県教育委員会：浦和。
- 吉川 國男、1984、「編み物遺存体」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』人工遺物・総括編、769～780頁、埼玉県教育委員会：浦和。
- 吉川 國男・橋本 富夫ほか、1990、『桶川市史』第9巻 補遺編、桶川市：桶川。
- 吉田 格ほか、1989、『東京都三鷹市井の頭池遺跡群C地点』、井の頭池遺跡群遺跡調査会：武蔵野。
- 吉田 恵二ほか、1998、『綾部原遺跡』、都内遺跡調査会綾部原遺跡調査団：東京。
- 吉田 昇ほか、1998、『佃遺跡』、兵庫県教育委員会：神戸。
- 吉田 浩明・麻生 順司、1998、『寸嵐二号遺跡発掘調査報告書』、相模湖町No.6遺跡発掘調査団：横浜。
- 吉田 寛・坂本 嘉弘、1997、『下原遺跡』、大分県教育委員会：大分。
- 吉田 寛、1999、『龍頭遺跡』、大分県教育委員会：大分。
- 吉田 充・高橋 與右衛門、1997、『椈の木遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。
- 吉田 稔、1995、『修理山遺跡』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里村。
- 吉田 稔、2003、『北島遺跡VI』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里町。
- 吉野 健、2002、『前中西遺跡II』、熊谷市教育委員会：熊谷。
- 吉本 忍、1987、「あみもの 編物」『文化人類学事典』、22～23頁、弘文堂：東京。
- 吉本 忍、2010、「柏木川4遺跡出土の編布の分析」『柏木川4遺跡(4)』、223～239頁、(財)北海道埋蔵文化財センター：札幌。
- 米内 邦雄・宮入 和博、1972、『千代田遺跡』、四街道千代田遺跡調査会：四街道。
- 米澤 義光ほか、1980、『曾福遺跡』、穴水町教育委員会：穴水町。
- 米澤 義光ほか、1985、『山中町上原A遺跡』、山中町教育委員会：山中町。
- 米山 浩之、2000、『垂水A遺跡発掘調査報告』、津市教育委員会：津。

- 羅 二虎、1995、『中国新石器時代資料集成』、京都大学東南アジア研究センター：京都。
- 若林 卓・川崎 保・廣瀬 昭弘・宮島 義和、1999、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21
—上田市内・坂城町内—』、(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター：更埴。
- 和田 哲・中島 光世ほか、1996、『田中タダによる共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、
日野市遺跡調査会・田中タダ：日野。
- 渡辺 清志、2000、『浜平岩陰／入波沢西／入波沢東遺跡』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：大里
村。
- 渡辺 修一、1991、『四街道市内黒田遺跡群』、(財)千葉県文化財センター：四街道。
- 渡辺 修一・矢本 節朗、1994、『四街道市御山遺跡(1)』、(財)千葉県文化財センター：四街道。
- 渡辺 忠胤・川口 正幸・池田 晃一・大森 壮一ほか、1983、『町田市木曽中学校遺跡』、木曽中学校
用地内遺跡調査会・町田市教育委員会：町田。
- 渡邊 裕之ほか、1992、『六野瀬遺跡1990年調査報告書』、安田町教育委員会：安田町。
- 渡邊 裕之・坂上 有紀ほか、2009、『野地遺跡』、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事
業団：新潟。
- 渡辺 誠、1975、「底部圧痕」『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』、121～127頁、平安博物館：
京都。
- 渡辺 誠、1976、「スタレ状圧痕の研究」『物質文化』No.26、1～23頁、物質文化研究会：東京。
- 渡辺 誠ほか、1978、『福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書』、勝山市教育委員会：勝山。
- 渡辺 誠、1981a、「編み物用錘具としての自然石の研究」『名古屋大学文学部研究論集』80 史学27、1
～46頁、名古屋大学文学部：名古屋。
- 渡辺 誠、1981b、「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』第66巻 第4号、28～54頁、
日本考古学会：東京。
- 渡辺 誠・植松 なおみ、1981、「布勢遺跡出土のカゴについて」『布勢遺跡発掘調査報告書』、39～41
頁、(財)鳥取県教育文化財団：鳥取。
- 渡辺 誠、1982、「弥生時代の筥」『稲・舟・祭』、121～137頁、六興出版：東京。
- 渡辺 誠、1983、『縄文時代の知識』、東京美術：東京。
- 渡辺 誠、1985a、「編布の研究」『日本史の黎明』、169～207頁、六興出版：東京。
- 渡辺 誠、1985b、「編物」『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』、245～248頁、兵庫県教育委員会：神戸。
- 渡辺 誠、1985c、「民具の素材」『民具研究ハンドブック』、34～39頁、雄山閣：東京。
- 渡辺 誠、1985d、「唐津市菜畑遺跡等出土の組織痕土器について」『古代』第80号、360～381頁、早稲

- 田大学考古学会：東京。
- 渡辺 誠、1989、「栗谷遺跡の編布痕について」『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』、66～67頁、福部村教育委員会：福部村。
- 渡辺 誠、1990、「編布（アングン）の研究」『荒屋敷遺跡Ⅱ』、750～758頁、三島町教育委員会：三島町。
- 渡辺 誠、1991a、「土器の底部圧痕」『茨城県福田（神明前）貝塚』、73～78頁、（財）古代学協会：京都。
- 渡辺 誠、1991b、「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』、213～232頁、肥後考古学会：熊本。
- 渡辺 誠、1992、「編布の変遷」『衣生活と民具』、7～23頁、日本民具学会：東京。
- 渡辺 誠、1993、「福岡遺跡出土のカゴ類について」『今津塚田遺跡・福岡遺跡（6区）』、66～67頁、（財）鳥取県教育文化財団：鳥取。
- 渡辺 誠、1994、「編み物の容器一籠と筥・箕一」『季刊考古学』第47号、35～38頁、雄山閣：東京。
- 渡辺 誠、1995、「中国新石器時代における編布圧痕の研究」『名古屋大学文学部研究論集』122 史学41、1～11頁、名古屋大学文学部：名古屋。
- 渡辺 誠、1996、「マタタビ製のカゴ類」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』No.12、83～92頁、名古屋大学古川総合研究資料館：名古屋。
- 渡辺 誠、1998、「佃遺跡編物実物資料について」『佃遺跡』第2分冊、85～88頁、兵庫県教育委員会：神戸。
- 渡辺 誠、1999、「タケ・ワラ以前の編組製品」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』No.15、73～101頁、名古屋大学古川総合研究資料館：名古屋。
- 渡辺 誠、2000、「日本最古の網代」『考古学論究』7、9～12頁、立正大学考古学会：東京。
- 渡辺 誠、2003a、「編布・砂鉄と漆」『新世紀の考古学』、177～186頁、大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会：いわき。
- 渡辺 誠、2003b、「もっとも細かい網代の圧痕」『樞原考古学研究所論集』第14、31～40頁、奈良県立樞原考古学研究所：樞原。
- 渡辺 誠、2006a、「藁細工の発達」『考古学の諸相』Ⅱ、945～950頁、坂詰秀一先生古稀記念会：東京。
- 渡辺 誠、2006b、「熊本市上南部遺跡出土の組織痕土器について」『名古屋大学博物館報告』No.22、11～17頁、名古屋大学博物館：名古屋。
- 渡辺 洋一・酒井 宗孝、1995、『大畑Ⅰ遺跡・大畑Ⅱ遺跡発掘調査報告書』、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：盛岡。

渡部 明夫ほか、1990、『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 永井遺跡』、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター：高松。

渡 則子、1998、『館平遺跡』、八戸市教育委員会：八戸。

中国語

河南省考古学会・澠池県文物保護管理委員会、1986、『論仰韶文化』、中原文物編輯部：鄭州。

河南省文物研究所ほか、1989、『浙川県下王崗』、文物出版社：北京。

河南省文物考古研究所(張 居中ほか)、1999、『舞陽賈湖』、科学出版社：北京。

河北省文物管理处(唐 雲明)、1975、『磁県下潘汪遺址発掘報告』『考古学報』1975年 第1期、73～116頁、科学出版社：北京。

河北省文物管理处・邯鄲市文物保管所(孫 徳海・劉 勇・陳 光唐)、1981、『河北武安磁山遺址』『考古学報』1981年 第3期、303～338頁、科学出版社：北京。

邯鄲市文物保管所・邯鄲地区磁山考古隊短訓班、1977、『河北磁山新石器遺址試掘』『考古』1977年 第6期、361～372頁、科学出版社：北京。

嚴 文明、1989、『仰韶文化研究』、文物出版社：北京。

耿 徳銘、1991、『怒江中游史前文化遺存綜説』『考古』1991年 第7期、626～638頁、科学出版社：北京。

固原県文管所・中国歴史博物館考古部(李 文傑・馬 東海)、1993、『寧夏固原県紅圈子新石器時代墓地調査簡報』『考古』1993年 第2期、103～116・175頁、科学出版社：北京。

国家文物局考古領隊培訓班、1990『兗州西呉寺』、文物出版社：北京。

国家文物局考古領隊培訓班、1999、『兗州六里井』、科学出版社：北京。

湖南省文物考古研究所、2006、『彭頭山与八十垱』、科学出版社：北京。

山東省博物館(王 思礼・蔣 英炬)、1963、『山東滕県崗上村新石器時代墓葬試掘報告』『考古』1963年 第7期、351～361頁、考古雜誌社：北京。

山東省文物管理处・済南市博物館、1974、『大汶口』、文物出版社：北京。

朱 風瀚、1979、『吉林奈曼旗大沁他拉新石器時代遺址調査』『考古』1979年 第3期、209～222頁、科学出版社：北京。

常州市博物館(陳 麗華・黄 建康・唐 星良ほか)、2001、『1985年江蘇常州圩墩遺址の発掘』『考古学報』2001年 第1期、73～110頁、考古雜誌社：北京。

深圳博物館・中山大学人類学系、1990、『深圳市大鵬鹹頭嶺沙丘遺址発掘簡報』『文物』1990年 第11期、1～11頁、文物出版社：北京。

- 西安半坡博物館ほか、1988、『姜寨』、文物出版社：北京。
- 青海省文物管理委員会・中国科学院考古研究所青海隊、1963、「青海省都蘭県諾木洪塔里他里哈遺址調査
与試掘」『考古学報』1963年 第1期、17～44頁、文物出版社：北京。
- 浙江省文物管理委員会、1960a、「吳興錢山漾遺址第一、二次発掘報告」『考古学報』1960年 第2期、73
～91頁、科学出版社：北京。
- 浙江省文物管理委員会（梅 福根）、1960b、「杭州水田畷遺址発掘報告」『考古学報』1960年 第2期、
93～106頁、科学出版社：北京。
- 浙江省文物考古研究所、2003、『河姆渡』、文物出版社：北京。
- 浙江省文物考古研究所・蕭山博物館（蔣 樂平・鄭 雲飛・方 向明・鄭 建明ほか）、2004、『跨湖橋』、
文物出版社：北京。
- 浙江省文物考古研究所・平湖市博物館（徐 新民・程 傑）、2005、「浙江平湖市莊橋墳良渚文化遺址及
墓地」『考古』2005年 第7期、10～14頁、考古雜誌社：北京。
- 浙江省文物考古研究所・湖州市博物館、2006、『毘山』、文物出版社：北京。
- 陝西省考古研究所、1990、『竜崗寺』、文物出版社：北京。
- 蘇州博物館・昆山市文化局ほか（丁 金龍・張 照根・程 振旅）、2000、「江蘇昆山市少卿山遺址の発
掘」『考古』2000年 第4期、32～49頁、考古雜誌社：北京。
- 孫 維昌、1997、「上海市金山県查山和亭林遺址試掘」『南方文物』1997年 第3期、3～23頁、江西省博
物館・江西省文物考古研究所：南昌。
- 中国科学院考古研究所、1959、『廟底溝与三里橋遺跡』、科学出版社：北京。
- 中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館、1963、『西安半坡』、文物出版社：北京。
- 中国科学院考古研究所山東隊（高 広仁・任 式楠）、1964、「山東曲阜西夏侯遺址第一次発掘報告」『考
古学報』1964年 第2期、57～106頁、文物出版社：北京。
- 中国社会科学院考古研究所、1983、『宝鷄北首嶺』、文物出版社：北京。
- 中国社会科学院考古研究所安陽隊、1988、「安陽鮑家堂仰韶文化遺址」『考古学報』1988年 第2期、169
～188頁、科学出版社：北京。
- 中国社会科学院考古研究所内モンゴ工作隊（劉 晋祥・楊 国忠）、1982、「赤峰西水泉紅山文化遺址」『考
古学報』1982年 第2期、183～198頁、科学出版社：北京。
- 中国社会科学院考古研究所山東隊・山東省滕県博物館（吳 汝祚・万 樹瀛）、1984、「山東滕県北辛遺
址発掘報告」『考古学報』1984年 第2期、159～191頁、科学出版社：北京。
- 中国社会科学院考古所山東工作隊（高 広仁・任 式楠・吳 汝祚）、1986、「西夏侯遺址第二次発掘報

- 告」『考古學報』1986年 第3期、307～338頁、科學出版社：北京。
- 中國社會科學院考古研究所陝西隊、1984、「陝西華陰橫陣遺址發掘報告」『考古學集刊』第4輯、1～39頁、中國社會科學出版社：北京。
- 張 星德、1991、「紅山文化分期初探」『考古』1991年 第8期、727～736頁、科學出版社：北京。
- 南京博物院、1980、「江蘇吳縣草鞋山遺址」『文物資料叢刊』3、1～24頁、文物出版社：北京。
- 巴林右旗博物館（董 文義・韓 仁信）、1987、「內蒙古巴林右旗那斯台遺址調查」『考古』1987年 第6期、507～518頁、科學出版社：北京。
- 北京大學歷史系考古教研室、1983、『元君廟仰韶墓地』、文物出版社：北京。
- 羅家角考古隊（姚 件源）、1981、「桐鄉縣羅家角遺址發掘報告」『浙江省文物考古所學刊』、1～42頁、文物出版社：北京。
- 李 文傑、1996、『中國古代製陶工藝研究』、科學出版社：北京。

韓國語

- 金 聖範・朴 玟貞・曹 美順、2004、『高城文岩里遺跡』、國立文化財研究所：大田。
- 任 鶴鐘・李 政根・金 良美、2008、『飛鳳里』、國立金海博物館：金海。
- 李 隆助・禹 鐘允・河 文植、1988、「牛山里마천先史遺跡」『住岩뎨水沒地域文化遺跡發掘調查報告書（Ⅴ）』、全南大學校博物館：光州。

英語

- Akazawa, Takeru, 1972, *Report of the Investigation of the Kamitakatsu shell-midden Site*, University Museum, University of Tokyo : Tokyo.
- Palmgren, N., 1934, *Kansu mortuary urns of the Pan Shan and Ma Chang groups*, *Palaeontologia Sinica*, Series D, Vol. III, Fasc. 1, Geological Survey of China : Beijing.
- Crowfoot, G.M., 1938, *Mat Impressions on Pot Bases*, *Annals of Archaeology and Anthropology*, Vol. 25, pp. 3-11, Institute of Archaeology, University of Liverpool : Liverpool.

- ・ 付表1 縄文時代の編物実物資料 一覧表
- ・ 付表2 弥生時代の編物実物資料 一覧表
- ・ 付表3 中国新石器時代の編物実物資料 一覧表
- ・ 付表4 中国初期青銅器時代の編物実物資料 一覧表
- ・ 付表5 朝鮮新石器時代の編物実物資料 一覧表
- ・ 付表6 日本列島先史時代の「敷物圧痕」資料 一覧表
- ・ 付表7 中国新石器時代・朝鮮新石器時代の「敷物圧痕」資料 一覧表
- ・ 付表8 日本列島先史時代の網代圧痕素材 一覧表
- ・ 付表9 中国新石器時代の網代圧痕素材 一覧表

付表1 縄文時代の編物実物資料 一覧表

- ※1.本表は、本論の分析対象とした縄文時代の編物実物資料の諸情報を、都道府県・遺跡ごとに整理したものである。
 2.各資料のデータは、原報告を基にしているが、本論中に示した基準に基づいて筆者が適宜修正を加えており、原報告と一致しない場合がある。
 3.所在地については、できる限り最新の行政区分に合わせた。
 4.編み方については、「考古学表現/民具表現」を基本とし、必要に応じてそれ以外の表現による解説を記した。
 5.各資料の素材については、樹種同定などがおこなわれている場合、可能な限り丸括弧内に分析者または文献を示した。
 6.備考1には個々の資料に対する補足説明を記した。

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	口縁部	編み方		底部	素材	備考1	備考2	文献
								体部・股片	底辺部					
北海道	石狩 紅寒山 49号	千歳市	縄文中期後半～後期初頭	図Ⅲ-89-10 図Ⅲ-89-11	カゴ？ カゴ？ 瓢(竇だて) 瓢(竇だて) 瓢(冊) 瓢(冊) 瓢(冊) 瓢(冊) 瓢(冊) 瓢(冊) 瓢(冊) 瓢(冊) 瓢(冊) 瓢(冊) 瓢(冊) 瓢(冊)	河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路 河道・流路	不明 不明 — — — — — — — — — — — — — —	もじり編み(左)/編目 もじり編み(左)/編目 もじり編み(左・右)/編目 もじり編み(右)/編目、巻きつけ(左)、櫛がけ もじり編み(右)/編目、巻きつけ(左)、櫛がけ もじり編み(右)/編目、巻きつけ(左)、片櫛 もじり編み(右)/編目、巻きつけ(左)、片櫛、角櫛 もじり編み(右・左)/編目、巻きつけ(左)、片櫛、櫛がけ もじり編み(右・左)/編目、巻きつけ(左)、片櫛、角櫛 もじり編み(右・左)/編目、巻きつけ(左)、片櫛、角櫛 もじり編み(右・左)/編目、巻きつけ(左)、片櫛、角櫛 もじり編み(右・左)/編目、巻きつけ(左)、片櫛、角櫛 もじり編み(右・左)/編目、巻きつけ(左)、片櫛、角櫛 もじり編み(右・左)/編目、巻きつけ(左)、片櫛、角櫛 もじり編み(右・左)/編目、巻きつけ(左)、片櫛、角櫛 もじり編み(右・左)/編目、巻きつけ(左)、片櫛、角櫛	— — — — — — — — — — — — — — — —	カエデ属(平川・西脇1998) カエデ属(平川・西脇1998) 栂・細栂トネリコ属/ヤナギ属、縮め材ブドウ科ツル、端結束ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 栂トネリコ属/ヤナギ属、縮め材ブドウ科ツル、端結束ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル、巻きつけ材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル、巻きつけ材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル/コクワ? (石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル、巻きつけ材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫) 縦木・栂トネリコ属、縮め材ブドウ科ツル表皮(石橋孝夫)	備考1 備考2	皆川・西脇ほか1995 石橋ほか2005		
													備考1	備考2

調査 府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・ 資料番号	器種	出土遺構	編み方			備考1	備考2	文献							
							口縁部	体部の破片	底部										
北海道	石狩紅葉山 49号 道	石狩市	縄文中期後 半～後期初 頭	WP2	鉢(冊)	河道・流路	—	巻きつけ(左)、摺がけ	—	縦木・横木トネリコ皿(石簡 孝夫)									
													WP3	鉢(冊)	河道・流路	—	—	縦木トネリコ皿(石簡孝夫)	未製品
													WP4	鉢(冊)	河道・流路	巻きつけ(左)、摺がけ	—	縦木トネリコ皿、巻き つけ材ブドウ科ツル表皮 (五簡孝夫)	
													WP5	鉢(冊)	河道・流路	もじり編み(右)/細目、 巻きつけ(左)、摺がけ	—	縦木・横木トネリコ皿、絡め 材ブドウ科ツル(石簡孝夫)	
													WP6	鉢(冊)	河道・流路	もじり編み(右)/細目、 巻きつけ(左)、片摺、摺 がけ	—	縦木・横木トネリコ皿、絡め 材ブドウ科ツル(石簡孝夫)	
													WP7	鉢(冊)	河道・流路	巻きつけ(左)、摺がけ	—	縦木・横木トネリコ皿(石簡 孝夫)	
													WP8	鉢(冊)	河道・流路	—	—	縦木トネリコ皿(石簡孝夫)	未製品
													WP9	鉢(冊)	河道・流路	もじり編み(右)/細目、 巻きつけ(左)、摺がけ	—	縦木・横木トネリコ皿、絡め 材ブドウ科ツル、巻きつけ材 ブドウ科ツル表皮(石簡孝 夫)	
													WP10	鉢(冊)	河道・流路	もじり編み(右・左)/細 目、巻きつけ(左)、摺が け	—	縦木・横木トネリコ皿、絡め 材ブドウ科ツル、巻きつけ材 ブドウ科ツル表皮(石簡孝 夫)	
													WP11	鉢(冊)	河道・流路	もじり編み(左)/細目、 巻きつけ(左)、摺がけ	—	縦木・横木トネリコ皿、絡め 材ブドウ科ツル(石簡孝夫)	
													WP12	鉢(冊)	河道・流路	もじり編み(右・左)/細 目、巻きつけ(右)、片摺	—	縦木・横木トネリコ皿、絡め 材ブドウ科ツル(石簡孝夫)	ほか、樹皮紐1点・撚組1点あり、縄文中 期のE1の圧痕あり
													WP13	鉢(冊)	河道・流路	巻きつけ(左)、片摺、摺 がけ	—	縦木・横木トネリコ皿、巻き つけ材ブドウ科ツル表皮 (石簡孝夫)	
													WP14	鉢(冊)	河道・流路	巻きつけ(左)、摺がけ	—	縦木・横木トネリコ皿(石簡 孝夫)	
													WP15	鉢(冊)	河道・流路	もじり編み(右)/細目、 巻きつけ(左)、片摺、摺 がけ	—	縦木・横木トネリコ皿、絡め 材ブドウ科ツル、巻きつけ材 ブドウ科ツル表皮(石簡孝 夫)	
													WP16	鉢(冊)	河道・流路	巻きつけ(左)、摺がけ	—	縦木・横木トネリコ皿(石簡 孝夫)	
													WP17	鉢(冊)	河道・流路	もじり編み(右)/細目、 巻きつけ(左)、片摺、摺 がけ、角摺り	—	縦木・横木トネリコ皿、絡め 材ブドウ科ツル、巻きつけ材 ブドウ科表皮(石簡孝夫)	
													WP18	鉢(冊)	河道・流路	もじり編み(右)/細目、 巻きつけ(左)、摺がけ	—	縦木・横木トネリコ皿、絡め 材ブドウ科ツル、巻きつけ材 ブドウ科ツル表皮(石簡孝 夫)	
													WP19	鉢(冊)	河道・流路	巻きつけ(左)、片摺、摺 がけ	—	縦木・横木トネリコ皿・巻き つけ材ブドウ科ツル表皮 (石簡孝夫)	
													WP20	鉢(冊)	河道・流路	巻きつけ(左)、摺がけ	—	縦木・横木トネリコ皿(石簡 孝夫)	
													WP21	鉢(冊)	河道・流路	巻きつけ(左)、片摺、摺 がけ、角摺り	—	縦木・横木トネリコ皿(石簡 孝夫)	
													WP22	鉢(冊)	河道・流路	巻きつけ(左)、片摺、摺 がけ	—	縦木・横木トネリコ皿(石簡 孝夫)	

船道 府県	遺跡名	所在地	時期	船名番号・ 資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献											
							口縁部	底部の破片															
北海道	忍路土場	小樽市	縄文後期初頭～中葉 縄文後期手稲中段階～新段階 縄文後期ホッケマキ古段階	S-21	敷物状	—	—	網代1超1漣1送×経緯8/市松	—	巻いた織物の上に付着													
								S-27					スグレ状	—	—	—	一方の糸材を平行に並べる	—	—	—			
								T-3					カゴ形蓋	—	—	—	もじり編み(左)/編目	—	—	—	—		
								A-1					編布	作業場	—	—	もじり編み(右)/編目	—	オヒョウ(布目1989n)	—	—	—	
								S-1					スグレ状	作業場	—	—	一方の糸材を平行に並べる	—	—	—	—	—	
								S-2					スグレ状	—	—	—	一方の糸材を平行に並べる	—	—	—	—	—	
								S-3					敷物(敷物状)	—	—	—	網代1超1漣1送×経緯6/市松?	—	—	—	—	—	
								S-4					敷物(敷物状)	作業場	—	—	網代1超1漣1送×経緯6/市松・網代1超1漣1送×経緯6/市松2	—	—	2枚重なって出土、うち一方のみ経緯が確認できる	—	—	—
								S-5					敷物(敷物状)	作業場	—	—	網代1超1漣1送×経緯6/市松	—	—	—	—	—	—
								S-6					敷物(敷物状)	—	—	—	網代1超1漣1送×経緯2/ザル目?	—	—	—	—	—	—
								S-7					敷物(敷物状)	作業場	—	—	網代1超1漣1送×経緯4/四ツ目に、2本1單位の斜糸加える?	—	—	—	—	—	—
								S-8					スグレ状	—	—	—	一方の糸材を平行に並べる	—	—	—	—	—	—
								S-9					敷物(敷物状)	—	—	—	不明	—	—	—	—	—	—
								S-10					スグレ状	作業場	—	—	一方の糸材を平行に並べる	—	—	—	—	—	—
								S-11					敷物(敷物状)	作業場	—	—	網代1超1漣1送×経緯6/市松	—	—	—	—	—	—
								S-11					カゴ?	作業場	—	—	もじり編み/編目?	—	—	—	経糸(芯材)2本1單位	—	—
								S-12					敷物(敷物状)	—	—	—	不明	—	—	—	一部二重に重なって出土	—	—
								S-13					敷物(敷物状)	作業場	—	—	網代1超1漣1送×経緯6/市松?	—	—	—	—	—	—
								S-14					敷物(敷物状)	作業場	—	—	網代1超1漣1送×経緯1・2/ザル目の粗	—	—	—	—	—	—
S-14	敷物(敷物状)	作業場	—	—	網代1超1漣1送/市松	—	—	—	—	—	—												
S-15	敷物(敷物状)	作業場	—	—	網代1超1漣1送×経緯8/市松、上は網代1超1漣1送×経緯2/ザル目orもじり編み/編目の要?	—	—	—	—	—	—												
S-16	スグレ状	—	—	—	一方の糸材を平行に並べる	—	—	—	—	—	—												
S-17	敷物(敷物状)	—	—	—	網代1超1漣1送×経緯6/市松	—	—	—	カゴ状編物の上に残存	—	—												
S-17	カゴ?	—	—	—	格子目状に組んだ経糸・緯糸に、斜糸を加え、三方の糸の交点で織る?	—	—	—	敷物状編物が上に残存	—	—												
S-18	敷物(敷物状)	—	—	—	網代1超1漣1送×経緯6/市松	—	—	—	—	—	—												
S-19	敷物(敷物状)	作業場	—	—	網代1超1漣1送×経緯6/市松	—	—	—	—	—	—												

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	底部				
北海道	志路土場	小樽市	縄文後期 ホッケアゴ古 段階-中段 階	S-20	甕物(甕物状)	—	網代1超1漕1送×経織 6/巾松	—	—	斜めの織維が所々に残り、織り かたじけなくして留めた織維が見 られる	ほか三つ編み組細49点・機組(糸)3 点・織維染き18点・細2点・織維5点・環 状織維製品3点・朱漆塗組15点・朱漆 袋?糸17点あり	三浦・中田1989
				S-22	甕物(甕物状)	—	網代1超1漕1送×経織 6/巾松	—	—	斜めの織維が所々に残り、織り かたじけなくして留めた織維が見 られる		
				S-23	甕物(甕物状)	作業場	網代1超1漕1送×経織 8/巾松	—	一部斜めの織維が残る			
				S-24	スグレ状	作業場	一方方向の糸材を平行に 並べる	—	一部斜めの織維が残る			
				S-25	甕物(甕物状)	作業場	不明	—	一部斜めの織維が残る			
				S-26	スグレ状	—	一方方向の糸材を平行に 並べる	—	—			
				S-28	スグレ状	作業場	一方方向の糸材を平行に 並べる	—	斜めの織維がごく少量残る			
				S-29	スグレ状	作業場	一方方向の糸材を平行に 並べ、さらに斜糸を加え て重なる	—	—			
				S-30	スグレ状	作業場	一方方向の糸材を5本1単 位で平行に並べ、その 間に3本1単位の斜糸を 加える	—	5本1単位の平行糸と、3本1単 位の斜糸は素材が異なる可能 性あり、一部留め材と思われる 織維が付き 下に、経糸・緯糸を組んだもの が残る			
				S-31	スグレ状	作業場	一方方向の糸材を平行に 並べる	—	—			
				S-31	スグレ状	作業場	不明	—	—			
				S-32	甕物(甕物状)	作業場	不明	—	—			
				S-33	スグレ状	—	一方方向の糸材を平行に 並べる	—	—			
				S-34	スグレ状	作業場	一方方向の糸材を平行に 並べる	—	—			
				S-35	甕物(甕物状)	作業場	網代1超1漕1送×経織 8/巾松	—	上下が30°～35°で重なり合っ て			
				S-36	甕物(甕物状)	作業場	網代1超1漕1送×経織 4/巾松?	—	—			
				S-37	甕物(甕物状)	—	不明	—	織維のかたまり			
				S-38	甕物(甕物状)	—	不明	—	織維が裂けたような状態			
				S-39	甕物(甕物状)	—	不明	—	木の葉が付き			
				S-40	甕物(甕物状)	—	不明	—	—			
				S-41	甕物(甕物状)	—	不明	—	—			
				S-42	甕物(甕物状)	—	網代1超1漕1送×経織 6/巾松?	—	—			
				S-43	甕物(甕物状)	—	網代1超1漕1送×経織 6/巾松?	—	—			
				S-44	甕物(甕物状)	—	網代1超1漕1送×経織 6/巾松・不明	—	—			
				S-45	甕物(甕物状)	—	網代1超1漕1送×経織 6/巾松?	—	—			
				S-46	甕物(甕物状)	—	不明	—	三重に重なる?			
				S-47	甕物(甕物状)	—	不明	—	—			
				T-1	カゴ	作業場	三方/麻/葉蒔しorもじり 編み/罫目の類?	—	—			
				T-2	釜?	作業場	外面編代3股3漕1送/網 代、内面もじり編み/縄 目の類?	—	—			
				T-4	カゴ	—	格子目状に組んだ経 糸・緯糸に、斜糸を加 え、三方の糸の交点で 織る?	—	—			

報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献
			口縁部	底部				
6-11	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-12	編布	河道・流路	—	縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-13	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-14	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-15	編布	河道・流路	—	不明(繊維のみ)	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-17	編布	河道・流路	—	縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-21	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・ループ状・縷糸露出・孔状隙間	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-22	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・ループ状・縷糸露出・孔状隙間	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-23	編布	河道・流路	—	縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-25	編布	河道・流路	—	縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-26	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-28	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・ループ状・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-29	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・ループ状・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-30	編布	河道・流路	—	縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			佐藤2010(永嶋2010、吉本2010)
6-31	編布	河道・流路	—	縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-32	編布	河道・流路	—	縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-33	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-34	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-41	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・ループ状・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-51	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-52	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-53	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-54	編布	河道・流路	—	縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-61	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-62	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-63	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・縷糸露出	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-64	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/縷目・ループ状・縷糸露出・孔状隙間	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			
6-65	編布	河道・流路	—	不明(繊維のみ)	1-01～6-74は1枚の模様編布であった可能性高い			

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方			素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	体部の破片	底部				
北海道	柏木川14	恵庭市	縄文後期森林	6-66	編布	河道・流路	—	ループ状	—	—	1-01~6-74は1枚の模様編布であった可能性高い	佐藤2010(永嶋2010、吉本2010)	
								もじり編み(右)/縄目・ループ状・緯糸露出	—	—	1-01~6-74は1枚の模様編布であった可能性高い		
								もじり編み(右)/縄目・ループ状・緯糸露出	—	—	1-01~6-74は1枚の模様編布であった可能性高い		
								もじり編み(右)/縄目・緯糸露出	—	—	1-01~6-74は1枚の模様編布であった可能性高い		
								もじり編み(右)/縄目・緯糸露出	—	—	1-01~6-74は1枚の模様編布であった可能性高い		
								もじり編み(右)/縄目・緯糸露出	—	—	1-01~6-74は1枚の模様編布であった可能性高い		
								もじり編み(右)/縄目・ループ状	—	—	1-01~6-74は1枚の模様編布であった可能性高い		
								もじり編み(右)/縄目・緯糸露出	—	—	1-01~6-74は1枚の模様編布であった可能性高い		
	朱円	斜里郡斜里町	縄文後期草沢	第1図	編布	墓坑	—	もじり編み(右)/縄目	—	—	人骨に付着	伊東1968(小笠原1970、渡辺1985a、尾関1996)	
								縄代2超2潜1送/縄代	—	—	15片に破砕	(財)北海道埋蔵文化財センター1981	
								縄代2超2潜1送/縄代	—	—	ヒノキ科(青森県教育庁2011)	ほか組紐1点・麻草製品1点・粘り目1点あり。縄文中期〜後期初頭のA11・B1・E2などの圧痕あり	
								不明	不明	不明	不明	不明	
								不明	不明	不明	不明	不明	
青森	三内丸山	青森市	縄文前期簡土層a	カゴ?	カゴ?	—	不明	不明	不明	不明	不明	清水ほか1959	
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
青森	亀ヶ岡	つがる市	縄文晩期	—	—	—	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
青森	八戸市	是川中居	縄文晩期	—	—	—	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		
							不明	不明	不明	不明	不明		

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方			素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	体部の破片	底部				
青森	是川中層	八戸市	縄文晩期	図版89-2	不明	—	巻きつけ?	—	ヒノヤ皮orスギ皮?	—	—	ほかに縄1点あり 杉山1942a(杉山1942b)	
				図版89-3①	敷物?	—	網代編み	—	イノシシ状	—	籠・織物数本1単位		—
				図版89-3②	不明	—	不明	—	樹皮状	—	—		—
				図版89-3③	不明	—	不明	—	アケビ萼状	—	—		—
				図版89-3④	不明	—	不明	—	草茎状	—	—		—
				図版89-4	敷物?	—	網代起し漣1送/網代	—	樹幹状	—	—		—
				図版90-1	不明	—	もじり編み(左)/編目	—	樹皮?	—	—		—
				図版90-2	不明	—	網代編み	—	ササガ状	—	—		—
				図版91	カンシヤキ状	—	巻きつけ(左)	—	蔓状	—	—		—
				第23図12	藍胎漆器	捨て場	網代編み	網代編み	—	1図1漣1送?(解説文)	—		—
				第23図13	藍胎漆器	捨て場	不明	不明	—	1図1漣1送?(様式図)	—		—
				第23図14	藍胎漆器	捨て場	不明	不明	—	—	—		—
				第23図15	藍胎漆器	捨て場	不明	不明	—	—	—		—
				写真33-472	カゴ	捨て場	もじり編み?・ヨコ添えもじり(左)	—	—	—	—		—
				写真33-473	不明	捨て場	網代編み	—	—	—	—		—
写真33-477	カゴ	捨て場	不明	—	—	1図1漣1送?(解説文)	—	—					
写真33-478	不明	捨て場	不明	—	—	束ねられた状態で出土、編物ではない?	—	—					
写真33-479	不明	捨て場	不明	—	—	束ねられた状態で出土、編物ではない?	—	—					
写真33-480	不明	捨て場	不明	—	—	束ねられた状態で出土、編物ではない?	—	—					
編布A(第71図1)	編布	捨て場	もじり編み(右)/編目	—	—	漆漣し布	—	—					
編布B(第71図2)	編布	捨て場	もじり編み(右)/編目	—	—	漆漣し布	—	—					
13図3	藍胎漆器	—	不明	—	—	5片あり	—	—					
か7-6	藍胎漆器	—	不明	不明	不明	全部で16点あり、精製土器などとセットで出土(祭祀的?)	—	—					
第67図	藍胎漆器	—	系縁じ(和服じ)状?	不明	不明	16片あり(うち5片は異個体)、表面に織物状圧痕あり	—	—					
巻頭写真8-C・図版184	不明	河道・流路	網代編み	—	—	—	—	—					
巻頭写真8-D・図版184	カゴ?	河道・流路	網代編み	—	—	—	—	—					
図版184	藍胎漆器	河道・流路	不明	—	—	—	—	—					
第4図	編布	—	もじり編み(右)/編目	—	—	漆漣し布	—	—					
第4図	編布	—	もじり編み(右)/編目	—	—	漆漣し布	—	—					
第4図	編布	—	もじり編み(右)/編目	—	—	漆漣し布	—	—					
第4図	編布	—	もじり編み(右)/編目	—	—	漆漣し布	—	—					
図版4-1・第11図版2	藍胎漆器	出土	不明	不明	不明	彩文	—	—					
図版4-2・第33図版2	藍胎漆器	—	不明	不明	不明	彩文	—	—					
図版4-3・第33図版3	藍胎漆器	—	不明	不明	不明	彩文	—	—					
図版5-1・第11図版1	藍胎漆器	—	不明	不明	不明	彩文	—	—					
図版5-2・第32図版2	藍胎漆器	—	不明	不明	不明	彩文	—	—					
岩手	料内	盛岡市	縄文後期中葉～晩期初期	巻頭写真8-C・図版184	不明	河道・流路	網代編み	—	—	—	—	—	
宮城	山王團	—	縄文晩期中葉～後葉	第67図	藍胎漆器	—	系縁じ(和服じ)状?	不明	不明	不明	不明	16片あり(うち5片は異個体)、表面に織物状圧痕あり	伊東・須藤1985(伊東1966、小笠原1970、渡辺1985a、尾関1996)
				第67図	藍胎漆器	—	系縁じ(和服じ)状?	不明	不明	不明	不明	不明	不明

館道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		口縁部	体部の破片	底部	素材	備考1	備考2	文献					
							口縁部	体部の破片												
宮城	山王団	栗原市	縄文晩期中葉～後葉	図版6-1・第12図版3、 図版6-2・第12図版1、 図版7-2・第32図版3、 第11図版3、 第12図版2、 第14図版1、 第32図版1、 第33図版1・奉迎図版、 第34図版2、 第34図版3、 第22図1、 第22図2、 RW26、 RW7、 RW17、 —、 図版20-10	藍胎漆器	—	不明	網代編み	不明	網代編み	—	—			伊東・須藤1985					
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—				
					藍胎漆器	—	不明	網代編み	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
					藍胎漆器	—	不明	網代/ザル目の類?	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—	—	
秋田	根岸	大崎市	縄文晩期大洲A	第131図	藍胎漆器	—	不明	不明	不明	不明	—	—	—	—	瀬谷1981					
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—				
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—		
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—		
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—		
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—		
					藍胎漆器	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—		
山形	戸平川	秋田市	縄文晩期中葉	第132図	カゴ	—	不明	不明	不明	不明	—	—	—	—	山田2000					
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—				
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—		
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—		
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—		
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—	—		
福島	荒屋敷	大沼郡三島町	縄文晩期大洲A併行主体	No.9039、 No.9040、 No.9101、 No.9105、 No.9102、 No.9107、 No.9104、 No.9106、 No.9103	カゴ	—	不明	不明	不明	不明	—	—	—	—	小柴ほか1990					
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—				
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			
					カゴ	—	不明	不明	不明	—	—	—	—	—		—	—			

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	体部の織片				
栃木	明神前	鹿沼市	縄文後期初頭～前葉	第80図	動物	水場遺構(木組)	—	縄代1廻1漚1送×経2緯4/ザル目	アシ	付近から検出されたトチ集中出土		永岡2002
								—	—	2点接合		
								—	—	3点		
								—	—	第288図10と合わせて4点、第288図2と同類か		
								—	—	第288図2と同類か		
								—	—	第288図2と同類か		
								—	—	第288図2と同類か		
								—	—	第288図2と同類か		
								—	—	第288図2と同類か		
								—	—	第288図2と同類か		
栃木	寺野東	小山市	縄文後期中半～晩期中葉	第288図1	藍胎漆器	—	縄代/ザル目の類	タケ?	第288図10と同類か	ほか未掲載の藍胎漆器片2点あり、縄文時代中期中葉～後期主体のA221・A221x・A111・A211・A331xなどの圧痕あり(江原ほか1997・1999)	江原ほか1998、永嶋1998	
							—	—	第288図2と同類か			
							—	—	第288図2と同類か			
							—	—	第288図2と同類か			
							—	—	第288図2と同類か			
							—	—	第288図2と同類か			
							—	—	第288図2と同類か			
							—	—	第288図2と同類か			
							—	—	第288図2と同類か			
							—	—	第288図2と同類か			
群馬	下田	太田市	縄文中期後半～後期中葉	第42図2	藍胎漆器	河道・流路	不明	—	—			小宮・小宮 1994
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
埼玉	後谷	桶川市	縄文後期末～晩期中葉	第70図	藍胎漆器	河道・流路	不明	—	—			吉川・橋本ほか1990
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
千葉	神門	千葉市	縄文前期初頭～中葉	5号編物	不明	—	不明	—	—	集石付近から出土	ほか環状織維束4点あり	金丸ほか1989
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
千葉	神門	千葉市	縄文前期初頭～中葉	8号織維製品	カゴ?	—	不明	—	—	巻状	ほか草本織維束(環状・束状)2点あり、縄文晩期後半の平織の布圧痕?1点あり	寺門ほか1991
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			
							不明	—	—			

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献																																																																		
							口縁部	底部																																																																						
東京	北江古田 中野区 下宅部 東村山市		縄文中期～後期前半	1	カゴ	貯蔵穴	編目返し縁(左)の一種?	体部の破片	—	土坑側面に沿って出土、クルミの実1点共伴	A211・A221・A111・A332・A331などの圧痕あり	新井1987(樋口ほか1987)																																																																		
								ヨコ添えもじり編み(左)・網代編み																																																																						
								2					カゴ	貯蔵穴	縦芯材折り込み縁	網代編み	—	土坑側面に付着した土坑底面から浮いて出土、大量のクルミの実共伴																																																												
																網代編み																																																														
																3			カゴ	貯蔵穴(土坑)	—	網代編み	—	土坑底面から少し浮いて出土																																																						
																						網代編み																																																								
																						4			カゴ	貯蔵穴(土坑)	—	網代編み	—	土坑下部から出土																																																
																												網代編み																																																		
																												5			カゴ	貯蔵穴(土坑)	—	網代編み	—	土坑側面に付着して出土、クルミの実など共伴																																										
																																		網代編み																																												
																																		6			カゴ	貯蔵穴	—	網代1超1漕1送×経緯2～3/ザル目	—	タケ重料(鈴木・能城1987)																																				
																																								網代編み																																						
																																								2			カゴ	貯蔵穴	—	網代編み	—	—																														
																																														網代編み																																
																																														43号			カゴ	河道・流路	—	網代1超1漕1送/ザル目、ヨコ添えもじり編み(左)	—	もじり編みの紐?2本あり																								
																																																				網代1超1漕1送/四ツ目																										
																																																				24号			カゴ	河道・流路	—	網代3超3漕1送/網代	—	繊維質の紐?あり																		
																																																										網代1超1漕1送×経緯2/ザル目																				
																																																										25号			カゴ	河道・流路	—	網代1超1漕1送×経緯2/ザル目	—	—												
																																																																網代3超3漕1送/網代														
																																																																30号			カゴ	河道・流路	—	イネ科(鈴木・佐々木2006)	—	—						
																																																																						網代1超1漕1送×経緯2/ザル目								
																																																																						32号			カゴ	河道・流路	—	網代3超3漕1送/網代	—	—
																																																																												網代1超1漕1送×経緯2/ザル目		
33号	カゴ	河道・流路	—	網代1超1漕1送×経緯2/ザル目	—	—																																																																								
				網代3超3漕1送/網代																																																																										
				34号			カゴ	河道・流路	—	三方/六ツ目	—	—																																																																		
										網代1超1漕1送/四ツ目																																																																				
										35号			カゴ	河道・流路	—	網代1超1漕1送/四ツ目	—	—																																																												
																網代2超2漕1送×2送/飛び目																																																														
																38号			カゴ	河道・流路	—	網代1超1漕1送/四ツ目	—	—																																																						
																						網代2超2漕1送×経緯2/網代																																																								
																						39号			カゴ	河道・流路	—	網代2超2漕1送×2送/飛び目	—	—																																																
																												網代1超1漕1送/四ツ目																																																		
																												40号			カゴ	河道・流路	—	網代2超2漕1送×経緯2/網代	—	—																																										
																																		網代3超3漕1送/網代																																												
																																		41号			カゴ	河道・流路	—	網代2超2漕1送×2送/飛び目	—	—																																				
																																								網代3超3漕1送/網代																																						
																																								42号			カゴ	河道・流路	—	網代1超1漕1送/四ツ目	—	もじり編みの紐?あり																														
																																														網代2超2漕1送×経緯2/網代																																
																																														49号			カゴ	河道・流路	—	網代2超2漕1送×2送/飛び目	—	—																								
																																																				網代3超3漕1送/網代																										
																																																				4号			カゴ	河道・流路	—	タケ重料(鈴木・佐々木2006)	—	—																		
																																																										網代1超1漕1送/四ツ目																				
																																																										20号			カゴ	河道・流路	—	タケ重料(鈴木・佐々木2006)	—	—												
																																																																網代2超2漕1送×2送/飛び目														
																																																																21号			カゴ	河道・流路	—	網代2超2漕1送×2送/飛び目	—	—						
																																																																						網代3超3漕1送/網代								
22号	カゴ	河道・流路	—		網代2超2漕1送×2送/飛び目	—																																																																—								
					網代3超3漕1送/網代																																																																									
				23号	カゴ		河道・流路	—	網代3超3漕1送×2送/飛び目		—	—																																																																		
									網代1超1漕1送/四ツ目																																																																					
									28号	カゴ			河道・流路	—	網代3超3漕1送×2送/飛び目		—	—																																																												
															網代1超1漕1送/四ツ目																																																															
															44号	カゴ			河道・流路	—	網代1超1漕1送/四ツ目		—	—																																																						
																					網代3超3漕1送×2送/飛び目																																																									
																					45号	カゴ			河道・流路	—	網代1超1漕1送/四ツ目		—	—																																																
																											網代3超3漕1送×2送/飛び目																																																			

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	縄み方			素材	備考1	備考2	文献													
							口縁部	底部・底片	底部																	
東京	下宅部	東村山町	縄文後期中葉～中葉	46号	カゴ	河道・流路	—	—	縄代1超1潜1送×経織 2/四ツ目	割り裂き材																
														47号	不明	河道・流路	—	—	割り裂き材							
														48号	不明	河道・流路	—	縄代1超1潜1送/四ツ目	割り裂き材							
														8号	カゴ	河道・流路	矢筈巻き縁	縄代1超1潜1送×経1～ 2/ザル目、ヨコ添えもじ 3/網代	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														10号	不明	河道・流路	—	縄代1超1潜1送×経織 2?/卍松	割り裂き材							
														13号	カゴ	河道・流路	矢筈巻き縁	縄代1超1潜1送/ザル 目、ヨコ添えもじ/編み (左)	割り裂き材							
														14号	不明	河道・流路	—	縄代1超1潜1送?/四ツ 目	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														15号	カゴ	河道・流路	—	縄代3超2潜1送/網代	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														16号	カゴ	河道・流路	細目返し縁(左)の一 種	縄代1超1潜1送/ザル 目、1.1.5.縁が編み(左)	割り裂き材							
														17号	不明	河道・流路	—	—	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														18号	不明	河道・流路	—	縄代1超1潜1送/四ツ目	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														19号	不明	河道・流路	—	縄代1超1潜1送/四ツ目	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														27号	蓋?	河道・流路	—	—	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														31号	カゴ	河道・流路	—	縄代1超1潜1送/四ツ目	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														7号	カゴ	河道・流路	—	三方/麻ノ葉	割り裂き材							
														9号	動物	河道・流路	—	縄代1超1潜1送/四ツ目	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														11号	カゴ	河道・流路	2本の条材をねじる	縄代2超2潜1送?/飛び 子ザル目	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														12号	カゴ	河道・流路	—	縄代1超2潜1送/飛び子 目且ほか	割り裂き材							
														29号	不明	河道・流路	—	縄代3超3潜1送/飛び子 目	割り裂き材							
														36号	カゴ	河道・流路	巻き縁(左)	縄代1超1潜1送/四ツ目	割り裂き材							
														37号	動物	河道・流路	—	縄代1超1潜1送×経4織 2/ザル目	割り裂き材							
														50号	不明	河道・流路	—	縄代2超2潜1送/飛び子 目	割り裂き材							
														6号	不明	河道・流路	—	縄代2超2潜1送×経織2 ～6/網代	割り裂き材							
														26号	カゴ	河道・流路	—	縄代2超2潜1送/網代	割り裂き材							
														1号	不明	河道・流路	—	縄代2超2潜1送/網代	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														2号	カゴ?	河道・流路	—	縄代1超1潜1送/四ツ目	タケ亜科(鈴木・佐々木 2006)							
														3号	カゴ	河道・流路	巻き縁	縄代1超1潜1送×経織 2.ザル目	割り裂き材							
														I-213-D7-1430	編布	河道・流路	—	もじり編み(右)/編目	—					漆漉し布		千葉・石川・小川・秋本ほか 2006(千葉2009)

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献			
							口縁部	体部の破片							
東京都	井天地	練馬区	縄文後期前 之内2主体	図版4-3	カゴ	貯蔵穴	—	網代1超1漕1送×経緯 2/四ツ目のザル目	タケ重科(能成・鈴木1989)	—	同時期のA221・A211の圧痕あり	川本ほか1989			
				図版4-1	敷物	貯蔵穴	—	網代1超1漕1送/四ツ目	—	タケ重科(能成・鈴木1989)	2片あり				
				第12図	敷物	貯蔵穴	—	網代2超2漕1送/網代	—	タケ重科(能成・鈴木1989)	—				
				—	カゴ	貯蔵穴	—	網代1超1漕1送×経緯 2/四ツ目のザル目	—	タケ重科(能成・鈴木1989)	—				
				図版4-2	敷物	貯蔵穴	—	網代2超2漕1送×経緯2 ~4/網代	—	タケ重科(能成・鈴木1989)	—				
				第36図-64	カゴ(ザル)?	—	不明	網代1超1漕1送×経緯2/ザル目	—	—	—		張・裏に類似?	張・積や毛2点・繊維束1点・植物束1 点・組紐1点・樹皮1点・縄3点(同一個 体)あり、同時期のE1の圧痕あり	戸田ほか2003
				第36図-65	カゴ	—	—	網代1超1漕1送×経緯2/ ザル目	—	—	—		—	—	
				第36図-66	不明	—	—	網代縦線3超3漕1送/連 縦線網代	—	—	—		—	—	
				個体F	カゴ	—	—	網代1超1漕1送/ザル目	縦芯材折り込み縁	1超1漕1送/市松	タケ重科(バリノ・サウヴェ イ)		—	—	
				個体G	カゴ	—	—	巻き縁(右)	—	—	タケ重科(バリノ・サウヴェ イ)		—	—	
神奈川県	多摩区N61	川崎市	縄文後期前 之内1	個体H	カゴ	—	—	網代/ザル目の類?	—	—	—	戸田1998			
				個体I	カゴ	—	—	網代2超2漕1送×2送/ 飛びザ目	—	タケ重科(バリノ・サウヴェ イ)	—		—		
				個体J	カゴ	—	—	網代2超1漕1超2漕の 縄の跡?	—	—	タケ重科(バリノ・サウヴェ イ)		—	—	
				個体K	カゴ	—	—	網代1超2漕1送(2超1 漕1送)/飛びザ目	—	—	タケ重科(バリノ・サウヴェ イ)		—	—	
				図版27	カゴ	—	—	網代編み	—	—	—		—	—	
				図版28	カゴ	—	—	網代編み	—	—	—		—	—	
				図版28	カゴ	—	—	網代1超2漕1送(2超1 漕1送)/飛びザ目	—	—	—		—	—	
				図版28	カゴ	—	—	網代3超3漕2送/飛びザ 目	—	—	—		—	—	
				図版28	カゴ	—	—	網代編み	—	—	—		—	—	
				図版28	カゴ	—	—	網代1超2漕1送(2超1 漕1送)/飛びザ目	—	—	—		—	—	
平浜回明	根立	秦野市	縄文後期	写真30	不明	—	—	網代2超2漕1/網代	—	—	渡辺1983				
新潟県	野地	胎内市	縄文後期前 葉後半	82図	不明	—	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	ほか組1点・樹皮片あり、同時期のA類・ E1の圧痕あり	渡邊・坂上ほか2009 中村1988			
				図版90-14	編布?	—	—	もじり編み(右)/縄目	—	—	—		—		
				図版91-48a ~g	カゴ	土坑	返し巻き縁(左→右→ 左)?	1条絡め編みの類(左)	—	—	ワウツギ(鈴木2009)		—	—	
				図版90-39	藍胎漆器	—	—	網代1超1漕1送/ザル目	—	—	—		—	—	
				図版90-43	編布	—	—	もじり編み(左)/縄目?	—	—	—		—	—	
				図版90-38	藍胎漆器	—	—	網代1超1漕1送/ザル目	—	—	—		—	—	
				図版90-40	藍胎漆器	—	—	網代1超1漕1送/ザル目	—	—	—		—	—	
				図版90-41	藍胎漆器	—	—	網代3超2漕1送/網代	—	—	—		—	—	
				—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—
				—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		口縁部	底面	素材	備考1	備考2	文献	
							体部の破片	底面							
新潟	寺地	糸魚川市	縄文晩期前集～中葉	巻頭図版10・図版第147-1	鑑胎漆器	積石遺状記	不明	網代/ザル目の類	—	—	—	26片あり	縄文中期後半のA221などの圧痕あり	寺村・青木・関ほか1987	
								網代3超3潜2送/木目ゴザ目	—	経タケササ類、織不明(鈴木・小川・能成2004)	—	経タケササ類、織不明(鈴木・小川・能成2004)	—	—	
								1条絡め編みの類(左)	—	経・織ミズ、絡め材マナロ(鈴木・小川・能成2004)	—	経・織ミズ、絡め材マナロ(鈴木・小川・能成2004)	—	—	
								網代2超2潜1送×経織2/網代	—	経不明、織タケササ類(鈴木・小川・能成2004)	—	経不明、織タケササ類(鈴木・小川・能成2004)	—	一部4超4潜の箇所あり	
								網代編み	—	—	—	—	—	—	
								網代2超2潜1/網代	—	経不明、織ミズ類？(鈴木・小川・能成2004)	—	経不明、織ミズ類？(鈴木・小川・能成2004)	—	—	
								網代編み	—	経単子葉類、織不明(鈴木・小川・能成2004)	—	経単子葉類、織不明(鈴木・小川・能成2004)	—	—	
								もじり編み(右)/網目	—	経竹笹類、織(絡め材)針葉樹枝(鈴木・小川・能成2004)	—	経竹笹類、織(絡め材)針葉樹枝(鈴木・小川・能成2004)	—	一部経糸の目を指める	
富山	小竹	富山市	縄文前期末	—	カゴ	—	—	もじり編み(左)/網目	—	—	経糸2本1単位	縄文中期のA221・B11の圧痕あり(山内・林幸・小林・吉川1993)	(町田2011)		
								もじり編み(左)/網目	—	経マタタビ風、口縁部巻き材樹皮、口縁部芯材トネリコ風(井上・鈴木2007)	—	経マタタビ風、口縁部巻き材樹皮、口縁部芯材トネリコ風(井上・鈴木2007)	—	—	
								もじり編み(左)/網目	もじり編み(左)/網目	—	経ニレ風/広葉樹、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材ニレ風/樹皮、口縁部芯材ニレ風(井上・鈴木2007)	—	経ニレ風/広葉樹、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材ニレ風/樹皮、口縁部芯材ニレ風(井上・鈴木2007)	—	—
								もじり編み(左)/網目	もじり編み(左)/網目	—	経コナラ節、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材樹皮、口縁部芯材コナラ節(井上・鈴木2007)	—	経コナラ節、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材樹皮、口縁部芯材コナラ節(井上・鈴木2007)	—	—
								もじり編み(左)/網目	もじり編み(左)/網目	—	経コナラ節、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材マツ風(二葉松類)(井上・鈴木2007)	—	経コナラ節、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材マツ風(二葉松類)(井上・鈴木2007)	—	—
								もじり編み(左)/網目	もじり編み(左)/網目	—	経コナラ節、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材マツ風(二葉松類)(井上・鈴木2007)	—	経コナラ節、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材マツ風(二葉松類)(井上・鈴木2007)	—	—
								もじり編み(左)/網目	もじり編み(左)/網目	—	経コナラ節、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材マツ風(二葉松類)(井上・鈴木2007)	—	経コナラ節、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材マツ風(二葉松類)(井上・鈴木2007)	—	—
								もじり編み(左)/網目	もじり編み(左)/網目	—	経コナラ節、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材マツ風(二葉松類)(井上・鈴木2007)	—	経コナラ節、織(絡め材)マタタビ風、口縁部巻き材マツ風(二葉松類)(井上・鈴木2007)	—	—
富山	桜町	小矢部市	縄文中期末～後期初葉	カゴ?	カゴ?	水場遺構(木材群)	巻き縁(左)	もじり編み(左)/網目	—	—	経糸2本1単位or本1単位(口縁部直下5段)、経糸の目を指める	正か縄7点・漆塗糸3点あり、縄文中期～晩期?のA221・A221x・A111・A111x・A331x・A211・B1・B2・E1・E2などの圧痕あり	中井2007(久々・塚田・中井2004、大野・中井・吉川2005)		
								もじり編み(左)/網目	—	—	—	—	—	—	
								もじり編み(左)/網目	—	—	—	—	—	—	
								もじり編み(左)/網目	—	—	—	—	—	—	
								もじり編み(左)/網目	—	—	—	—	—	—	
								もじり編み(左)/網目	—	—	—	—	—	—	
								もじり編み(左)/網目	—	—	—	—	—	—	
								もじり編み(左)/網目	—	—	—	—	—	—	

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方			素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	体部の残片	底部				
富山	桜町	小矢部市	縄文中期末 ～後期初頭		9	カゴ?	水場遺構(木材柱)	もじり編み(左)/編目	—	経・マタタビ風?、緯(締め材)カヤ(井上・鈴木2007)	一部緯条の目を詰める箇所、緯条が経条と本ずつ超え滑りするように絡む箇所(四本編み)あり	ほかに縄7点・漆器系3点あり、縄文中期～晩期?のA221・A221x・A111・A111x・A331x・A211・B1・B2・E1・E2などの圧痕あり	中井2007(久々・塚田・中井2004、大野・中井・吉川2005)
					10	カゴ?	河道・流路or溝	もじり編み(左)/編目	—	経・緯(締め材)ヒノキ亜科(井上・鈴木2007)	一部緯条の目を詰める箇所、緯条が経条と本ずつ超え滑りするように絡む箇所(四本編み)あり		
					11	カゴ?	河道・流路or溝	もじり編み(左)/編目	—	経・緯(締め材)ヒノキ亜科(井上・鈴木2007)			
					12	カゴ?	河道・流路or溝	もじり編み(左)/編目	—	経・緯(締め材)ヒノキ亜科(井上・鈴木2007)	一部緯条の目を詰める箇所、緯条が経条と本ずつ超え滑りするように絡む箇所(四本編み)あり		
					13	カゴ?	河道・流路or溝	もじり編み(左)/編目	—	経・緯(締め材)ヒノキ亜科(井上・鈴木2007)			
					14	カゴ?	河道・流路or溝	もじり編み(左)/編目	—	経・コナラ筋、緯(締め材)マタタビ風(井上・鈴木2007)	やや緯条の目を詰める		
					15	カゴ?	河道・流路or溝	もじり編み(左)/編目	—	経・アンボナン風、緯(締め材)マタタビ風(井上・鈴木2007)	やや緯条の目を詰める		
					16	カゴ?	—	もじり編み(左)/編目	—	—			
					17	カゴ?	河道・流路or溝	もじり編み(左)/編目	—	経・カヤ、緯(締め材)マタタビ風(井上・鈴木2007)			
					18	カゴ	河道・流路or溝	網代2超2漣1送/網代	巻き縁(左)	緯(締め材)マタタビ風(井上・鈴木2007)			
					19	カゴ?	河道・流路or溝	もじり編み(左)/編目・網代2超2漣1送/網代	—	経・緯マタタビ風?(井上・鈴木2007)	もじり編み部分は緯条の目を詰める		
					20	カゴ?	河道・流路or溝	もじり編み(左)/編目・網代1超1漣1送/サル目	—	経・緯タケササ類(井上・鈴木2007)	もじり編み部分は緯条の目を詰める		
					21	不明	河道・流路or溝	網代1超1漣1送/サル目	—	経・緯タケササ類(井上・鈴木2007)			
					22	不明	河道・流路or溝	網代2超2漣1送/網代	—	経・緯マタタビ風(井上・鈴木2007)			

市道 府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・ 資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	底部				
富山	萩町	小矢部市	縄文中期末 ～後期初頭				口縁部	底部	口縁部巻き材樹皮、口縁部 芯材コナツ部(井上・鈴木 2007)			
							巻き縁(左)	—	経広葉樹、緯マタタビ属？・ 口縁部巻き材樹皮、口縁部 芯材広葉樹散孔材(井上・ 鈴木2007)			
							巻き縁(左)	—	口縁部巻き材樹皮、口縁部 芯材広葉樹散孔材(井上・ 鈴木2007)			
							巻き縁(左)？	—	口縁部巻き材樹皮(井上・ 鈴木2007)			
							巻き縁(左)？	—	口縁部巻き材樹皮(井上・ 鈴木2007)			
							巻き縁(左)？	—	口縁部巻き材樹皮(井上・ 鈴木2007)			
							—	—	経マタタビ属(井上・鈴木 2007)	遺存状態悪い		
							—	—	経カエデ属、緯マツ属(二 葉松類)、口縁部巻き材マ ツ属(二葉松類)、口縁部芯 材カエデ属(井上・鈴木 2007)	遺存状態悪い		
							—	—	経・緯マタタビ属(井上・鈴 木2007)	遺存状態悪い		
							—	—	経コナツ部、緯マタタビ属 (井上・鈴木2007)	遺存状態悪い		ほか編7点・漆塗糸3点あり、縄文中期 ～晩期？のA221・A221B・A111・ A111B・A331B・A211・E1・B2・E1・E2 などの圧痕あり
							—	—	—	遺存状態悪い		
							—	—	—	遺存状態悪い		
							—	—	—	遺存状態悪い		
							—	—	—	遺存状態悪い		
35	カゴ？	—	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明			
36	カゴ	—	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明			
37	カゴ	河道・流路or 溝	—	不明	不明	不明	不明	不明	不明			
38	不明	—	巻き縁？	不明	不明	不明	不明	不明	不明			

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		口縁部	底部	素材	備考1	備考2	文献			
							体部の破片	不明									
富山	桜町	小矢部市	縄文中期夫 ～後期初頭	39	不明	—	不明	不明	巻き縁?	—	経コナフ節・縹カエテ風、口縁部巻き材樹皮、口縁部芯材コナフ節(井上・鈴木2007)	遺存状態悪い	ほか、縄7点、漆塗糸3点あり、縄文中期～晩期?のA221・A221x・A111・A111x・A331x・A211・B1・B2・E1・E2などの圧痕あり	中井2007(久々・塚田・中井2004、大野・中井・吉川2005)			
				40	カゴ	土坑	不明	不明	巻き縁?	—	経タケナサナ類、縹の草、口縁部巻き材樹皮?、口縁部芯材タケナサナ類(井上・鈴木2007)	遺存状態悪い					
				41	不明	押道・流路or溝	不明	不明	巻き縁?	—	口縁部巻き材樹皮、口縁部芯材カエテ風(井上・鈴木2007)	遺存状態悪い					
				42	不明	—	—	巻き縁?	—	口縁部巻き材樹皮、口縁部芯材ヒノキ(井上・鈴木2007)	遺存状態悪い						
石川	真脇	鳳珠郡能登町	縄文前期福浦上層	編物1	カゴ	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	ヒノキ(藤1986)	縹糸が経糸を木ずつ起し、押りする上の方に絡む箇所(四本縄目)あり	ほか、縄12点あり、縄文前期～晩期および弥生のA221・A111・A211・B1・B3・E1・E2などの圧痕あり	山本1986b(山本1989)				
				編物2	カゴ	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	ヒノキ(藤1986)							
	米泉	金沢市	—	縄文晩期	編布No.1	編布	—	もじり編み(右)/縄目	—	—	アカン(布目1989a)	漆漣し布					
					編布No.2	編布	—	もじり編み(右)/縄目	—	—	アカン(布目1989b)	漆漣し布					
					49	藍胎漆器	—	不明	不明	不明	不明	タケ? (中里1989)					
					52	藍胎漆器	—	不明	不明	不明	不明	—					
					62	藍胎漆器	—	不明	不明	不明	不明	不明					
					65	藍胎漆器	—	不明	不明	不明	不明	不明					
					第108図	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	一部縹糸の目を詰める箇所あり						
					第113図	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	—						
					第118図1097	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	—						
					第118図1098	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	—	経アスナロ、縹(締め材)イヌガヤ(能成・佐々木・山本2009)	経糸2本1単位				
中尾サワ	金沢市	—	縄文晩期前葉～後葉	第118図1099	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	経・縹スギ(能成・佐々木・山本2009)	経糸2本1単位						
				第118図1100	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	経・縹スギ(能成・佐々木・山本2009)	経糸2本1単位						
				第118図1101	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	経・縹スギ(能成・佐々木・山本2009)	経糸2本1単位						
				第118図1102	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	経アスナロ、縹(締め材)スギ根(能成・佐々木・山本2009)	経糸2本1単位						
				第118図1103	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	経アスナロ、縹(締め材)不明(能成・佐々木・山本2009)	経糸2本1単位						
				第118図1104	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	経・縹アスナロ(能成・佐々木・山本2009)	経糸2本1単位						
鹿沼市	羽咋郡志賀町	縄文晩期大調C1	第120図1128	藍胎漆器	—	網代/サル目の類	網代編み	不明	—	タケ垂科((株)東郷文化財保存研究所)							
			—	藍胎漆器	—	網代1超1漣送/サル目	—	—									
			図版80-1~4	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—									
			図版80-5	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—									
福井	鳥浜	三方上中郡若菜町	縄文前期	図版81-1~2	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	—							
				図版81-3~4	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—								
				図版82-1~2	カゴ	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	ヒノキ(布目1984)と同定さ れたものと同一体か。							
				—	不明	—	不明	不明	不明	不明							

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方			素材	備考1	備考2	文献					
							口縁部	体部の破片	底部									
福井	鳥浜	三方上中部 若狭町	縄文前期 鳥下層II	図版82-3・4	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	—	—	編物は全部で30点以上出土、ほか縄 類23点あり	鳥浜貝塚研究G1979					
				図版83-1~4	不明	—	縄代3組3層2送/飛び目 /芋目・縄代1組4層1送/ 飛び目	—	—	—	—			—	—	—		
				図版84-1~4	不明	—	縄代3組3層1送・2送/ 飛び目	—	—	—	—			—	—	—	—	
				図版85-1~6	不明	—	縄代2組2層1送/縄代 飛び目	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図版86-1・2	不明	—	縄代1組1層1送×経2? /サル目	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図版86-3~5	不明	—	縄代1組1層1送×経2? 3?/サル目	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図版87-1~6	不明	—	縄代1組1層1送×経2? /サル目	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図版88-1~5	カゴ	—	巻き縁(左)?	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図67	不明	—	縄代/サル目の類?	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図61	不明	—	縄代2組2層1送×経織 2/縄代	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図57最下段	不明	—	縄代2組2層1送/縄代	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図58最上段	不明	—	縄代3組3層1送/飛び目	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図59上2段	不明	—	縄代1組1層1送?/サル 目	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図63上	編布	—	もじり編み(右)/縄目	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図63下	不明	—	1条締め編み(左)	—	—	—	—			—	—	—	—	—
				図133下	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	—	—			—	—	—	—	—
図90上	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
図90下	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
図150下	不明	—	縄代編み	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
図121	不明	—	縄代編み	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
第41図1	カゴ	—	縄目返し縁(左)?	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
第41図2	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
第41図3	カゴ	—	縄目返し縁(左)?	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
第41図4	不明	—	巻きつけ(左)(1条締め 編みの類?)、経糸をク ロスがけで固定	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
第41図5	不明	—	巻きつけ(左)(1条締め 編みの類?)、経糸をク ロスがけで固定	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
第41図6	不明	—	巻きつけ(左)(1条締め 編みの類?)、経糸をク ロスがけで固定	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
第41図7	不明	—	巻きつけ(左)(1条締め 編みの類?)、経糸をク ロスがけで固定、口縁部(巻き縁の類)?	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
第36図	カゴ	—	失蓋縁の類?	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
第37図	カゴ	—	巻き縁(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
第38図	カゴ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—						
四方谷岩伏	北寺	三方上中部 若狭町	縄文後期前 葉	第36図	不明	貯蔵穴	もじり編み(左)/縄目 口縁部下は密なもじり編 み(左)/縄目	—	—	—	—	—	同時期のA221・A221/2・A111・E1な どの圧痕あり	田辺ほか1992				
				第37図	不明	貯蔵穴	口縁部下は密なもじり編 み(左)/縄目	—	—	—	—	—			—	—		
鳥浜	鳥浜	三方上中部 若狭町	縄文後期後 葉	第36図	カゴ	貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	鈴木ほか2003				
				第37図	カゴ	貯蔵穴	口縁部構造樹皮、体部アス ナロ(植田2003)	—	—	—	—	—	—		—	—		
第38図	カゴ	—	貯蔵穴	—	—	—	マタタビ(植田2003)	—	—	—	—	—	—					

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献	
							口縁部	底部					
静岡	メノ	掛川市	縄文後期末	編み物3	カゴ?	—	体部の破片	—	—	—	—	大熊2002	
				編み物5	不明	貯蔵穴	—	三方/麻/葉柄し	—	—	貯蔵穴側面に使われるものが、貯蔵穴底面に敷かれている		—
				貯蔵穴13底面編み物	カゴ?	貯蔵穴	—	網代2超2漚1送×経織2?/ザル目	—	—	—		—
				貯蔵穴13底面編み物	カゴ?	貯蔵穴	—	網代2超2漚1送×経織2?/網代	—	—	—		—
				貯蔵穴11側面編み物	カゴ?	貯蔵穴	—	三方/麻/葉柄しの種類? (四ツ目に単一方向の斜条を戻す?)	—	—	—		—
				貯蔵穴11側面編み物	貯蔵穴側壁	貯蔵穴	—	網代1超1漚1送×経織2/ザル目	—	—	—		—
				貯蔵穴8側面編み物	カゴ?・敷物?	貯蔵穴	—	網代1超2漚1送(2超1漚1送)/飛ビザ目・網代2超2漚1送/網代	—	—	—		—
				貯蔵穴8側面編み物	貯蔵穴側壁	貯蔵穴	—	網代1超1漚1送×経織2/ゴザ目	—	—	—		—
				貯蔵穴8底面編み物	カゴ?・敷物?	貯蔵穴	—	網代1超1漚1送/ザル目?	—	—	—		—
				編み物2-1	カゴ	—	—	三方/六ツ目?	—	—	—		—
				編み物2-2	不明	—	—	網代2超2漚1送/網代	—	—	—		タケ重科の可能性高い(バレオ・ラボ)
				編み物4	不明	—	—	網代1超2漚1送(2超1漚1送)/飛ビザ目	—	—	—		タケ重科の可能性高い(バレオ・ラボ)
				編み物12-1	カゴ	—	—	網代1超1漚1送/ザル目	—	—	—		タケ重科の可能性高い(バレオ・ラボ)
編み物12-2	不明	—	—	網代2超2漚1送/網代	—	—	—	口縁部下に4本1単位の織糸(素材不明)を2段めぐらせる					
編み物13	不明	—	—	網代2超2漚1送/網代	—	—	—	—					
愛知	神郷下	豊田市	縄文前期中葉～中葉	図版第21-4	藍胎漆器	—	網代編み/ザル目?	—	—	—	同時期のA・E1の圧痕あり	田端ほか1975	
				図版第21-6	藍胎漆器	—	網代編み/ザル目?	—	—	—	—		—
				図4-16-44	不明	—	網代編み	—	—	—	—		—
				図4-16-45	不明	クリ塚	網代編み	—	—	—	—		—
				図4-16-46	不明	—	網代編み	—	—	—	—		—
				図4-16-47	不明	クリ塚	網代編み	—	—	—	—		—
				図4-16-48	カゴ?	クリ塚	—	—	—	—	—		草木双子葉類の茎(榎田2000)
				図4-16-49	カゴ?	クリ塚	巻き縁?	—	—	—	—		—
				図4-16-50	カゴ?	クリ塚	巻き縁?	—	—	—	—		—
				図4-16-51	カゴ?	クリ塚	巻き縁(左)?	—	—	—	—		—
滋賀	筑津湖底	大津市	縄文中期前葉	図4-16-52	カゴ?	クリ塚	巻き縁?	—	—	—	—	中川2000	
				図7-62-10	カゴ	貝塚	—	網代1超1漚1送×経織2/ザル目	不明	—	—		—
				図7-63-11	カゴ	貝塚	—	網代1超1漚1送×経織4/ザル目	網代1超1漚1送×経織4/ザル目	—	—		—
				図7-63-12	不明	貝塚	—	網代2超2漚1送/網代	—	—	—		—
				図4	カゴ	沼津遺構(河津)	巻き縁	—	網代編み/四ツ目?	—	—		口縁部平クラ皮、腰部細皮
				AW52	藍胎漆器	—	—	網代編み/ザル目の類?	—	—	—		タケ状
				—	不明	—	—	もじり編み(左)/罫目	—	—	—		ヒノキ(伊東直夫)
				—	不明	—	—	1条絡み編み(左)	—	—	—		—
				—	不明	—	—	—	—	—	—		—
				—	不明	—	—	—	—	—	—		—
兵庫	佃	淡路市	縄文後期前葉～縄文中期前葉	—	不明	—	—	—	—	—	—	渡辺1998(吉田ほか1998)	
				—	不明	—	—	—	—	—	—		
奈良	本郷大田下	宇陀市	縄文後期前葉	図34	カゴ?	貯蔵穴	—	—	—	—	—	岡林ほか2000	
				—	不明	—	—	—	—	—	—		
奈良	筑摩田	米原市	縄文中期前半	図4	カゴ	沼津遺構(河津)	巻き縁	—	—	—	—	植田1995(渡辺1994)	
				—	不明	—	—	—	—	—	—		
奈良	滋賀里	大津市	縄文後期前葉	—	不明	—	—	—	—	—	—	田辺・加藤・高谷ほか1973	
				—	不明	—	—	—	—	—	—		
奈良	筑摩田	米原市	縄文中期前葉	—	不明	—	—	—	—	—	—	渡辺1998(吉田ほか1998)	
				—	不明	—	—	—	—	—	—		

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	底部				
鳥取	桂見(八ツ割・堀谷東)	鳥取市	縄文後期中津	W155	カゴ	—	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	紐・綿スキ、巻きつけ材ヒノキ(古川・堀・佐藤1996)			牧本・小谷・高垣ほか1996
					把手状	—	巻きつけ(左)?	巻きつけ(左)?	—			
					ネット状	—	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	ヒノキ(古川・堀・佐藤1996)			
					スダレ状	—	もじり編み(左)/綱目	もじり編み(左)/綱目	イヌカヤ(古川・堀・佐藤1996)			
					カゴ	—	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	—			
					ネット状	—	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	ヒノキ			
					ネット状	—	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	ヒノキ			
					ネット状	—	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)、紐条を少 ロスがけで固定	ヒノキ			
					不明	—	もじり編み(左)/綱目	もじり編み(左)/綱目	—			
					ネット状	貯蔵穴	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)	巻きつけ(左) (1条締め編みの類?)	ヒノキ・カヤ(古川郁夫)			
					不明	貯蔵穴	もじり編み(右?) / 綱目	もじり編み(右?) / 綱目	同一貯蔵穴から編物(綱代)断片2点出土			
					不明	貯蔵穴	もじり編み(左?) / 綱目	もじり編み(左?) / 綱目	椅子未製品頭部上端に付着			
					カゴ	—	巻き縁(左)?	巻き縁(左)?	口縁部草本単子葉類、体部樹皮(古川郁夫)			
香川	永井	善通寺市	縄文後期津	No.1	カゴ?	—	網代2超2潜1送/綱代	網代2超2潜1送/綱代	草本単子葉類	不明編物(綱代)の上に重なって出土、貯蔵穴の蓋か	同時期のA221・A221/2・A111・A211・A321などの圧痕あり	渡部ほか1990
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ?	—	網代2超2潜1送×経緯1	網代2超2潜1送×経緯1	—			
					カゴ	—	巻き縁(左)	巻き縁(左)	アシ(古市光信)			
岡山	南方前池	赤磐市	縄文晩期池	図15-6	不明	貯蔵穴	網代2超2潜1送/綱代	網代2超2潜1送/綱代	不明	同一貯蔵穴から環状に巻いた蓋8点出土	同時期のA221・A221/2・A321などの圧痕あり	近藤ほか1995
					不明	貯蔵穴	1条締め編み? or 3条締め編み? 網代	1条締め編み(左)	不明			
山口	岩田	熊毛郡平生町	縄文晩期	32	箕?	—	網代2超2潜1送/綱代	網代2超2潜1送/綱代	—	一部草本2本1單位の箇所あり	同時期のA221・A221/2・A111・A211・A321などの圧痕あり	潮見ほか1974
					カゴ?	—	網代2超2潜1送/綱代	網代2超2潜1送/綱代	—			
愛媛	船ヶ谷	松山市	縄文晩期船ヶ谷	第13図	網	—	—	—	—	一部藤葉の条材を編み込んで編み方を変化させる	同時期のA221・A221/2・A111・A211・A321などの圧痕あり	長井・米倉・八木1975 金子1981(版本1985)
					カゴ	—	巻き縁(左)	巻き縁(左)	—			

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		口縁部	底面	素材	備考1	備考2	文献			
							口縁部	体部の破片									
高知	奥谷前	南国市	縄文中期末	160	不明	貯蔵穴	網代2超2潜1送/網代	網代編み	—	—	イソビロ風(ハシリカーヴェイ1989年)			松村・山本1999			
				161	不明	貯蔵穴	網代編み	—	—								
				SK15編物	不明	貯蔵穴	もじり編み	—						貯蔵穴底面・壁面に編物7枚貼り付け、シールド間層はさんで上部に編物4枚貼り付けられている			
				Bクリッド	不明	—	もじり編み(左)/編目	—						直柄石斧に共伴			
				SK88編物(第30号)	編袋?	貯蔵穴	もじり編み(左)・巻かもじり編み(左)/編目	—						取手付き ※このSK49からは、11点以上の編物出土(カゴ・壺・果物の袋・壺・果物の蓋or底敷きなど)			
				SK49737	カゴ	貯蔵穴	もじり編み(左)/編目	—						紐付き			
				J8クリッド7	カゴ	—	もじり編み(左)/編目	もじり編み(左)/編目						底面に補強材			
				SK737310	カゴ	貯蔵穴	—	もじり編み(左)/編目									
				SK887347	カゴ	貯蔵穴	もじり編み(左)/編目	もじり編み(左)/編目									
				K9クリッド725	カゴ	—	もじり編み(左)/編目	もじり編み(左)/編目									
福岡	正福寺	久留米市	縄文後期初頭～中葉	SK49733	カゴ	貯蔵穴	もじり編み(右)/編目	もじり編み(右)/編目	—	—							
				SK88W127-2	刃当て状	貯蔵穴	もじり編み(左)/編目	—	—				経糸2本1単位の箇所と経糸1本1単位の箇所あり、直柄石斧の刀部に付着				
				AM1015	カゴ	—	網代2超2潜1送×経1～2/網代、網代1超1潜1送×経2/サル目	網代編み	網代編み				口縁部フクロジ、経、織ムクロジ、耳部ツツラフジ(能成修一・鈴木三男・金原正明)				
				AM2272	カゴ	—	網代1超1潜1送×経1～2/サル目、もじり編み(左)/編目	—	—				口縁部割り裂き材、縁仕舞丸材、帯部、耳部ツツラフジ、経ムクロジ、織割り裂き材(能成修一・鈴木三男・金原正明)				
				AM2271	カゴ	—	網代2超2潜1送×経1～2/網代、網代2超2潜1送×経1～2/運流網網代	—	—				口縁部割り裂き材、縁仕舞丸材、帯部、耳部ツツラフジ、経ムクロジ、ツツラフジ、割り裂き材(能成修一・鈴木三男・金原正明)				
				AM1004	カゴ	—	網代1超1潜1送×経1～2/サル目、網代2超2潜1送×経1～2/運流網網代	—	—				口縁部割り裂き材、口縁部巻きつけ材割り裂き材、縁仕舞丸材?、耳部ツツラフジ、経、織ムクロジ(能成修一・鈴木三男・金原正明)				
				AM1033	カゴ	—	もじり編み(左)/編目、網代2超2潜1送/網代	—	—				口縁部割り裂き材、口縁部巻きつけ材丸材、縁仕舞丸材、帯部、耳部ツツラフジ、経、織ムクロジ(能成修一・鈴木三男・金原正明)				
				SK2160編物②	カゴ	貯蔵穴	網代1超1潜1送×経1～2/サル目、もじり編み(左)/編目、網代2超2潜1送×経1～2/網代	網代編み	網代編み				口縁部割り裂き材、口縁部巻きつけ材丸材、縁仕舞丸材、帯部、耳部ツツラフジ、経、織ムクロジ(能成修一・鈴木三男・金原正明)				
				AM2364	カゴ	—	網代1超1潜1送×経1～2/サル目、もじり編み(左)/編目、網代2超2潜1送×経1～2/網代	—	—				口縁部割り裂き材(能成修一・鈴木三男・金原正明)				
				AM2366	カゴ	—	網代2超2潜1送×経1～2/網代、網代1超1潜1送×経1～2/サル目、もじり編み(左)/編目	網代編み	網代編み				口縁部割り裂き材、口縁部巻きつけ材丸材、縁仕舞丸材、帯部、耳部ツツラフジ、経、織ムクロジ(能成修一・鈴木三男・金原正明)				
佐賀	東名	佐賀市	縄文早期後半/神B主体										西田2008、西田・山田・佐々木2009				

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		底面	備考1	備考2	文献				
							口縁部	体部・底面								
佐賀	東名	佐賀市	縄文早期遺跡 ノ神B主体		SK1008	カゴ	貯蔵穴	巻き縁？	網代1超1漕1送×経1～3/サル目	—	口縁部割り裂き材、耳部ツツラフジ、口閉紐丸材、経・緯イセヒワ(能成修一、鈴木三男・金原正明)	口縁部～体部上半に耳が付く	西田2008、西田・山田・佐々木2009 編物は全部で700点出土、うち7点ほどがスズメ科植物で残りはカゴ類、ほか編物と同時期の縄文・植物系・B1Rの圧痕(西田・中野・川口2009)あり			
					SK2198⑤	カゴ	貯蔵穴	巻き縁	網代1超1漕1送×経1～3/サル目、網代2超2漕1送/連続網代	網代細み	口縁部割り裂き材、口縁部巻きつけ材、耳部ツツラフジ、経・緯ムクロジ(能成修一、鈴木三男・金原正明)	口縁部～体部上半に耳が付く				
					SK2198⑥	カゴ	貯蔵穴	—	網代1超1漕1送×経1～2/サル目、もじり編み(左)/編目、網代2超2漕1送×経1～2/網代	網代細み	帯部ツツラフジ、経ムクロジ、緯割り裂き材(能成修一、鈴木三男・金原正明)					
					AM2061	カゴ	—	網目返し縁(左)	巻きつけ(左右)、もじり編み(左)/編目、網代1超1漕1送×経1～2/サル目、網代2超2漕1送×経1～2/網代	—	口縁部割り裂き材、縁仕舞丸材、帯部ツツラフジ、経・緯ムクロジ(能成修一、鈴木三男・金原正明)					
					AM2080	カゴ	—	巻き縁？	網代1超1漕1送×経2/サル目、三方/六ツ目	網代2超2漕1送/網代	口縁部ムクロジ、体部ムクロジ、帯部樹皮(能成修一、鈴木三男・金原正明)					
					AM2134	カゴ	—	—	もじり編み(左)/編目、網代1超1漕1送×経1～2/サル目、網代2超2漕1送×経1～2/網代	—	帯部ツツラフジ型、経ムクロジ(能成修一、鈴木三男・金原正明)	表面が黒化(焼かれた?)				
					AM2128	カゴ	—	—	もじり編み(左)/編目、網代1超1漕1送×経2漕2漕1送×経1～2/連続網代	—	帯部丸材、経ツツラフジ、緯割り裂き材(能成修一、鈴木三男・金原正明)					
					AM2117	カゴ	—	巻き縁？	網代2超2漕1送×経1～2/網代	—	口縁部割り裂き材？、経ムクロジ、緯割り裂き材(能成修一、鈴木三男・金原正明)					
					AM2331	カゴ	—	—	網代1超1漕1送×経1～2/サル目	網代編み×経緯2	経・緯半割材、把手？ツツラフジ(能成修一、鈴木三男・金原正明)					
					AM2028	カゴ	—	—	もじり編み(左)/編目、網代2超2漕1送/網代	—	経半割材、緯半割材丸材、体部アイカスフ風(能成修一、鈴木三男・金原正明)	経条2本1単位				
					SK2066	カゴ	貯蔵穴	—	網代1超1漕1送×経1～3/サル目、もじり編み(左)/編目	—	帯部丸材for半割材、経・緯丸材or半割材(能成修一、鈴木三男・金原正明)					
					AM2184	カゴ	—	—	もじり編み(左)/編目、網代1超1漕1送×経2/サル目、網代2超2漕1送×経1～2/連続網代	網代2超2漕1送×経緯2/網代	帯部・底部・ヨコ添え丸材、経丸材、緯ツツラフジ(能成修一、鈴木三男・金原正明)					
					—	カゴ	貯蔵穴	不明(紐付き)	もじり編み(左)/編目	もじり編み(左)/編目	口縁部は紐で取締可能か	一部目を詰めて緯方向の補強材(1超8漕×2超2漕)を入れる		一部目を詰めて緯方向の補強材(1超1漕)を入れる	一部目を詰めて緯方向の補強材(1超1漕)を入れる	大園1975(広瀬・森田2006)
					—	カゴ	貯蔵穴	網目返し縁(左)	もじり編み(左)/編目	—	カズマノ類	一部目を詰めて緯方向の補強材(1超8漕)を入れる		一部目を詰めて緯方向の補強材(1超1漕)を入れる	紐付き	一部目を詰めて緯方向の補強材(1超1漕)を入れる
—	カゴ	貯蔵穴	網目返し縁(左)	もじり編み(左)/編目	—	カズマノ類・シタ類茎	一部目を詰めて緯方向の補強材(1超8漕)を入れる	一部目を詰めて緯方向の補強材(1超1漕)を入れる	紐付き	一部目を詰めて緯方向の補強材(1超1漕)を入れる						
—	カゴ	貯蔵穴	—	もじり編み(左)/編目	—	—	—	—	—	—						
—	カゴ	貯蔵穴	—	もじり編み(左)/編目	—	—	—	—	—	—						

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	体部の破片				
佐賀	坂の下	西松浦郡有田町	縄文中期後半～後期前期	—	カゴ	貯蔵穴	—	もじり編み(左)/編目	カズラ類・シダ類茎	口縁部に近い部分、一部目を詰めて緯方向の補強材(4超8潜・2超2潜)を入れる。一部目を詰めて緯方向の補強材(1超1潜)を入れる。	ほぼ同一地点あり、同時期のG類の圧痕あり	大園1975(広瀬・森田2006)
							—	もじり編み(左)/編目				
							—	もじり編み(左)/編目				
							—	もじり編み(左)/編目				
							—	もじり編み(左)/編目				
							—	もじり編み(左)/編目				
							—	網代2超2潜1送/網代				
							—	もじり編み(左)/編目				
							—	もじり編み(左)/編目				
							—	網代2超2潜1送/網代				
							—	もじり編み(左)/編目				
							—	もじり編み(左)/編目				
							—	網代2超2潜1送/網代				
							—	もじり編み(左)/編目				
長崎	伊木力名切	西彼杵郡長与町	縄文中期前半	—	不明	貯蔵穴	—	網代2超2潜1送/網代	カズラ類	大園1975に該当写真なし	縄文中期後半～後期前半のG類の圧痕あり	広瀬・森田2006
							—	もじり編み(左)/編目				
熊本	菅畑	宇土市	縄文前期	No.1(第124図14)	不明	貯蔵穴	—	網代2超2潜1送/網代	アケビ・樹皮(大迫1988)	第125図16と同じ貯蔵穴から出土、同一個体?、緯糸に變を織み込む箇所あり	ほぼ同一地点あり(貯蔵穴から出土)	丸山1988(江本ほか1988)
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	不明				
							—	不明				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目・網代2超2潜1送/網代				
							—	網代2超2潜1送/網代				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
熊本	菅畑	宇土市	縄文前期	No.1(第125図16)	不明	貯蔵穴	—	網代1超1潜1送/四ツ目	アケビ・樹皮(大迫1988)	第125図17と同じ貯蔵穴から出土、同一個体?、緯糸に變を織み込む箇所あり	ほぼ同一地点あり(貯蔵穴から出土)	丸山1988(江本ほか1988)
							—	不明				
							—	不明				
							—	不明				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目・網代2超2潜1送/網代				
							—	網代2超2潜1送/網代				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				
							—	網代1超1潜1送/四ツ目				

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方			素材	備考1	備考2	文献				
							口縁部	体部の破片	底部								
熊本	曾畑 椎ノ木崎	宇土市	縄文後期～晩期	№15(第123図)	不明	貯蔵穴	網代1超1潜1送/四ツ目	—	—	—	貯蔵穴底面から出土	ほか環状(形状)の塵(差)2点あり(貯蔵穴から出土)	丸山1985(江本ほか1988)				
					カゴ	—	網目返し縁?(左)	—	—	—	—	後期?(渡辺1994)	富田ほか1989				
	権尾	大分市	縄文早期～高主体I・II	82-35X070	カゴ	水物遺構	網代1超1潜1送×経12/ザル目	—	—	—	埴島産黒曜石を収納	縄文後期前葉のB1の圧痕あり	埴地ほか2008				
					編袋?	貯蔵穴	網代編み	—	—	—	—	—	—	—			
	大分	龍頭	杵築市	縄文後期略神松	第70図-2	編袋	貯蔵穴	もじり編み(左)/網目	—	—	—	網代1超1潜1送/ザル目	網代1超1潜1送/ザル目	網代1超1潜1送/ザル目	—		
					第70図-4	編袋?	貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
					第70図-5	編袋?	貯蔵穴	網代編み	—	—	—	—	—	—	—	—	—
					第71図-6	不明	貯蔵穴	網代編み	—	—	—	—	—	—	—	—	—
					第71図-7	編袋	貯蔵穴	もじり編み(左)/網目	—	—	—	—	—	—	—	—	—
					第71図-8・8'	編袋	貯蔵穴	もじり編み(左)/網目	—	—	—	—	—	—	—	—	—
					第72図-9	編袋	貯蔵穴	密なもじり編み(左)	網代1超1潜1送/ザル目	帯状素材を7条程度重ねて縁取り/当て縁?	網代1超1潜1送/ザル目	不明	不明	リウネウチク(盛本2006)	四隅に杭を立てて固定	盛本・知名・東門2008b(盛本2006)	
					—	カゴ	貯蔵穴	網代1超1潜1送/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	沖縄	前原	国頭郡江野原村	縄文中期末～後期前葉(沖縄自設前期)	1	カゴ	貯蔵穴	網代2超2潜2送/ザル目(新城恵)	—	—	タケ	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
2					カゴ	貯蔵穴	巻きつけ(新城恵)	—	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
3					カゴ	貯蔵穴	網代1超1潜1送/ザル目(新城恵)	—	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
4					カゴ	貯蔵穴	網代2超2潜1送/ザル目(新城恵)	—	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
5					カゴ	貯蔵穴	網代1超1潜1送/ザル目(新城恵)	—	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
6					カゴ	貯蔵穴	網代1超1潜1送/ザル目(新城恵)	—	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
7					カゴ	貯蔵穴	巻き縁(左)?	網代1超1潜1送/ザル目(新城恵) or 網代1超1潜1送/ザル目	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
8					カゴの破物	貯蔵穴	網代1超1潜1送/ザル目(新城恵)	—	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
9					カゴ	貯蔵穴	網代1超1潜1送/ザル目(新城恵)	—	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
10					カゴ	貯蔵穴	網代1超1潜1送/ザル目(新城恵)	—	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
11					カゴ	貯蔵穴	巻き込んで処理(新城恵)	網代1超1潜1送/ザル目(新城恵)	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
12					カゴ	貯蔵穴	—	網代1超1潜1送/ザル目(新城恵)	—	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		
13					カゴ	貯蔵穴	—	1条絡め編み(左)	網代1超1潜1送/ザル目(新城恵)?	—	—	タケ	タケ	タケ	盛本・知名・東門2008a(盛本2006)		

付表2 弥生時代の編物実物資料一覧表

※1.本表は、本論の分析対象とした弥生時代の編物実物資料の諸情報、郡道府県・遺跡ごとに整理したものである。

2.表の体裁・記載方法については、付表1に準じる。

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献				
							口縁部	底部・破片								
埼玉	北島	熊谷市	弥生中期後葉	第298図	堰	河道・流路	—	—	—	—	同時期のA211・C類・E1の圧痕あり	吉田2003				
					堰	河道・流路	—	—	—	—	—	—	—	—		
					カゴ	河道・流路	巻き縁	網代2超2漕1送×経緯6/網代1超1漕1送×経緯8/ザル目	三方/六ツ目の一種	口縁部柿木マタタビ風(能城・鈴木1996)	ほか環状蔓?1点あり、同時期の被籠土器6点・A221・A221x・A111・A211・C類・E1などの圧痕あり	甲斐ほか1996				
					カゴ	河道・流路	巻き縁	網代1超1漕1送×経緯2~4/ザル目	—	—	—	—	—			
千葉	常代	君津市	弥生中期前半	375	カゴ	河道・流路	巻き縁	網代1超1漕1送×経緯2~3?/ザル目	—	—	—	—	—			
					カゴ	河道・流路	巻き縁	網代1超1漕1送×経緯2~3?/ザル目	—	—	—	—	—			
					不明	河道・流路	—	—	—	—	—	—	—			
					不明	河道・流路	—	—	—	—	—	—	—			
					堰	河道・流路	—	—	—	—	—	—	—	—		
					図版4下・図版5上	河道・流路	—	—	—	—	—	—	—	—		
					図版19上	河道・流路	—	—	—	—	—	—	—	—		
					図版20下	河道・流路	カゴ	河道・流路	—	—	—	—	—	—	—	
					図版21上	河道・流路	カゴ	河道・流路	返し巻き縁?	不明	—	—	—	—	—	—
					図版21下	河道・流路	動物	河道・流路	—	—	—	—	—	—	—	—
神奈川	池子	逗子市	弥生中期前半	88	カゴ	河道・流路	網目返し縁	網代1超1漕1送×経緯5以上/網代	口縁部柿木マタタビ風(鈴木・能城1992)	ほか環状蔓(製品)3点あり、同時期の被籠土器2点・E1の圧痕あり	小久貫・菅谷ほか1993					
					釜?	河道・流路	—	—	—	—	—	—	—			
					カゴ	河道・流路	不明	網代1超1漕1送×経緯2/ザル目	—	—	—	—	—			
					動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—	—			
					図版57(1)	河道・流路	動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—		
					図版60(2)	河道・流路	動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—		
					図版66(1)・(2)、図版71(1)	河道・流路	動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—		
					図版70(7)	河道・流路	動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—		
					図版70(8)	河道・流路	動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—		
					図版77(3)	河道・流路	動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—		
					図版78(6)	河道・流路	動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—		
					—	河道・流路	動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—		
					—	河道・流路	動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—		
					—	河道・流路	動物?	河道・流路	—	—	—	—	—	—		
新潟	千種	佐渡市	弥生後期	図版18-2	カゴ(ザル)	—	—	—	—	—	全部で3点あり	大場ほか1953				
					不明	—	—	—	—	—	—	—	—			
富山	江上A	中新川郡上市町	弥生後期	433	カゴ	溝	—	—	—	—	—	久々ほか1984				
					カゴ	溝	—	—	—	—	—	—	—	—		
					瓦?	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献		
							口縁部	底部						
富山	惣領館之前	水見市	弥生後期後半～末	404	カゴ	溝	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1題1漚1送/ザル目、網代2題2漚1送/網代	—	→タタビ風		縄文後期～晩期のA221・A211・B1L・E2の圧痕あり	島田・新宅・朝田2010		
							ヨコ添えもじり編み(左)	—						
	江原	高岡		弥生後期末	—	カゴ	河道・流路	ヨコ添えもじり編み(左)	—	—	経糸2本1単位		(木下2010)	
								もじり編み(左)/綱目	—					
								網代2題2漚1送/網代	—					
								網代2題2漚1送/網代	—					
								網代1題1漚1送×経緯2/ザル目	—					
石川	八日市地方	小松市	弥生中期中葉	3	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み、網代1題1漚1送×経緯2/ザル目	巻き縁(左)	—		ほく小同時期の縄共樹皮製品5点・環状織製品2点・樹皮縄1点・削炭素材11点・炭素材8点・炭籠土器1点あり、縄文後期のA221の圧痕、弥生前期～中期のA221・B1・E1の圧痕あり	楠木・福海・宮田2003		
							—	—						
							—	—						
							—	—						
							—	—						
							—	—						
							—	—						
静岡	登呂	静岡市	弥生後期	—	カゴ(ザル)	溝	網代編み	—	—		弥生中期～後期のA221・B1Lの圧痕あり	松山・三浦2001		
							ヨコ添えもじり編み(左)、網代2題2漚1送/網代	—						
							ヨコ添えもじり編み(左)	巻き縁(左)					網代2題2漚1送×経緯2/網代	
							ヨコ添えもじり編み(左)	—						
							網代2題2漚1送/網代	—					—	—
							網代2題2漚1送/網代	—					—	—
							網代2題2漚1送/網代	—					—	—
							網代2題2漚1送/網代	—					—	—
							網代2題2漚1送/網代	—					—	—
							網代2題2漚1送/網代	—					—	—
網代2題2漚1送/網代	—	—	—											
静岡	有東	静岡市	弥生中期中葉～後葉	—	カゴ(ザル)	河道・流路	網代1題1漚1送/ザル目	—	イネ科以外(松谷1983)		ほく環状墓・稲束あり	平野ほか1983		
							網代1題1漚1送/ザル目	—						
							網代1題1漚1送×経緯4/ザル目	—						
							網代1題1漚1送×経緯2/ザル目	—						
							網代2題2漚1送×経緯6	—						
							網代2題2漚1送×経緯6～8/網代	—						
							網代1題1漚1送/ザル目	—						
							網代1題1漚1送/ザル目	—						
							網代1題1漚1送/ザル目	—						
							網代1題1漚1送×経緯1～	—						
静岡	有東	静岡市	弥生後期	—	カゴ(ザル)	河道・流路	網代1題1漚1送/ザル目	—	—		ほく環状墓・稲束あり	後藤・曾野ほか1954		
							網代1題1漚1送/ザル目	—						
							網代1題1漚1送/ザル目	—						
							網代1題1漚1送×経緯1～	—						
							網代1題1漚1送×経緯2/ザル目	—						
							網代1題1漚1送×経緯6	—						
							網代1題1漚1送/ザル目	—						
							網代1題1漚1送/ザル目	—						
							網代1題1漚1送×経緯1～	—						
							網代1題1漚1送×経緯2/ザル目	—						

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方の		口縁部	底面	素材	備考1	備考2	文献			
							体部	の									
静岡	登呂	静岡市	弥生後期	図版第92-1	不明	—	網代編み	—	—	—	—	ほか織物片あり、同時期のE1の圧痕あり	後藤・曾野ほか1954				
				図版第92-2	動物?	—	網代編み(×経緯6?)	—	—	—	—	—	—	ほか織物片あり、同時期のE1の圧痕あり	後藤・曾野ほか1954		
	松戸	春日井市	弥生前期中葉	—	カゴ	河道・流路	巻き縁(左)?	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1超1漕1送×経2?/ザル目	—	—	タケ亜科	—	ほかカゴ6点、植物束数点あり、弥生前期中葉～後葉のC・E1の圧痕あり	村松2001(村松2000)			
				—	カゴ	河道・流路	—	ヨコ添えもじり編み(左)	—	—	タケ亜科	—	—	—			
				—	カゴ	河道・流路	—	ヨコ添えもじり編み(左)	—	—	—	タケ亜科	—	—	—		
				—	カゴ	環壕	不明	不明	網代/ザル目の類	—	—	タケ亜科	—	—	—	—	
	愛知	朝日	清洲市	弥生中期高瀬	78W1-17	動物	堅穴住居跡	—	不明	—	—	—	—	—	—		
					156	カゴ	河道・流路	—	ヨコ添えもじり編み(左)、網代2超2漕1送/網代	—	—	—	—	—	—	—	
					157	カゴ	河道・流路	網目返し縁(左)	網代1超1漕1送×経1～4/ザル目、もじり編み(左)/縄目	—	—	—	—	—	—	—	
					158	カゴ	河道・流路	—	ヨコ添えもじり編み、網代1超1漕1送×経2/ザル目	—	—	—	—	アラカシ(高木典雄・元興寺文化財研究所)	—	—	—
159					カゴ	河道・流路	巻き縁(左)	ヨコ添えもじり編み(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	
160					カゴ	河道・流路	巻き縁(左)	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1超1漕1送×経2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
78W1-19					不明	河道・流路	—	網代1超1漕1送×経2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
161					カゴ	—	—	—	—	—	—	—	タケ(高木典雄・元興寺文化財研究所)	—	—	—	
162					カゴ	河道・流路	—	網代1超1漕1送×経2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	—
78W1-9					カゴ	溝	—	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三重	納所	津市	弥生前期中葉～後期中葉	78W1-8	不明	溝	—	網代2超2漕2送×経緯5～6/網代	—	—	—	—	—	—	—		
				図版4下	カゴ	河道・流路	不明	網代1超1漕1送×経2/ザル目、ヨコ添えもじり編み(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	カゴ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	カゴ	溝	—	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1超1漕1送/ザル目、網代2超2漕1送/網代	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	カゴ	—	—	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1超1漕1送/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	動物?	—	—	網代2超2漕1送×経緯6/網代	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	動物?	—	—	網代2超2漕1送×経緯6/網代	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	動物?	—	—	網代2超2漕1送×経緯6/網代	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	不明	溝	不明	網代1超1漕1送×経1～2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	カゴ(ザル)or 箕?	—	当て縁?	網代1超1漕1送×経2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
大阪	高宮八丁	堺墨川市	弥生前期中葉～中期中葉	—	動物	貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—			
				—	不明	溝	不明	網代1超1漕1送×経緯5～7/ザル目、網代2超2漕1送×経緯5～7/網代	—	—	—	—	—	—	—		
滋賀	赤野井	守山市	弥生前期中葉～後期中葉	図版4下	カゴ	河道・流路	不明	網代1超1漕1送×経2/ザル目、ヨコ添えもじり編み(左)	—	—	—	—	—	—	—		
				—	カゴ	溝	—	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1超1漕1送/ザル目、網代2超2漕1送×経緯6/網代	—	—	—	—	—	—	—		
				—	カゴ	—	—	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1超1漕1送/ザル目	—	—	—	—	—	—	—		
				—	動物?	—	—	網代2超2漕1送×経緯6/網代	—	—	—	—	—	—	—		
				—	動物?	—	—	網代2超2漕1送×経緯6/網代	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	不明	溝	不明	網代1超1漕1送×経1～2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	カゴ(ザル)or 箕?	—	当て縁?	網代1超1漕1送×経2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	不明	溝	不明	網代1超1漕1送×経1～2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	不明	溝	不明	網代1超1漕1送×経1～2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	不明	溝	不明	網代1超1漕1送×経1～2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
三重	納所	津市	弥生前期中葉～後期中葉	—	カゴ	河道・流路	不明	網代1超1漕1送×経2/ザル目、ヨコ添えもじり編み(左)	—	—	—	—	—	—	—		
				—	カゴ	溝	—	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1超1漕1送/ザル目、網代2超2漕1送×経緯6/網代	—	—	—	—	—	—	—		
				—	カゴ	—	—	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1超1漕1送/ザル目	—	—	—	—	—	—	—		
				—	動物?	—	—	網代2超2漕1送×経緯6/網代	—	—	—	—	—	—	—		
				—	動物?	—	—	網代2超2漕1送×経緯6/網代	—	—	—	—	—	—	—		
				—	不明	溝	不明	網代1超1漕1送×経1～2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	カゴ(ザル)or 箕?	—	当て縁?	網代1超1漕1送×経2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	不明	溝	不明	網代1超1漕1送×経1～2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	不明	溝	不明	網代1超1漕1送×経1～2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	
				—	不明	溝	不明	網代1超1漕1送×経1～2/ザル目	—	—	—	—	—	—	—	—	

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		底辺	素材	備考1	備考2	文献			
							口縁部	体部の破片								
大阪府	亀壳川	東大阪市	弥生前期後半～中期前葉	383	箕	溝	不明	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1組1送×経4?/サル目	—	—	—	ほか、組1点、紐状物多数あり	宇本ほか1987			
								不明	—	—	—	—		—		
			弥生中期後葉	384	釜	—	網代1組1送×経1～4?/サル目	不明	不明	網代1組1送×経1～4?/サル目	経緯4本組で直交	口縁部蔓状、経・緯タケ?	—	全部で3点あり	毛利ほか1980	
										—	—	—	—	—	—	寺川、尾谷ほか1980
	山賀	八尾市	弥生前期中葉	第17図	釜	河道・流路	巻き縁(右)	1条絡み編み(左)	—	先器部カマキ、絡め材蔓?	—	—	—	西口・菅野・上西ほか1981		
									—	—	—	—	—	—	—	—
	池上	和泉市	弥生後期	第25図	カゴ(サル?)	河道・流路	巻き縁?	網代1組1送/四ツ目、網代2組2送/網代	網代2組2送×経緯2/網代	タケ?	—	—	—	—	—	
									—	—	—	—	—	—	—	—
			弥生中期中葉～後葉	W40-26	カゴ	溝	—	—	—	網代1組1送/サル目	網代2組2送×経緯2/網代	タケ?	—	—	—	—
										—	—	—	—	—	—	—
弥生不明			W40-25	カゴ	—	—	—	不明	網代1組1送×経3/サル目	—	タケ?	口縁部「2条巻き編み」と記載されているが、口縁部直下のヨコ添えもじり編みのことか?	—	—	—	
									—	—	—	—	—	—	—	—
弥生不明	W40-29	カゴ	—	—	—	—	網代1組1送×経3/サル目	—	タケ?	—	—	—	—			
							—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
丁・脚ヶ瀬	姫路市	弥生前期後半～中期前葉	資料1	不明	土坑	—	巻き上げ編み	—	—	—	—	—	—			
								—	—	—	—	—	—	—	—	—
兵庫	玉津田中	弥生中期	図版502下段	箕	河道・流路	当て縁	—	—	—	—	—	—	—			
								—	—	—	—	—	—	—	—	—
奈良	唐古・織成郡田原本町	弥生前期	図版499下段	不明	河道・流路	—	網代編み	—	—	—	—	—	—			
								—	—	—	—	—	—	—	—	—
		弥生前期	図版500上段	不明	河道・流路	—	—	—	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1組1送/サル目	—	—	—	—	—	—	
									—	—	—	—	—	—	—	—
		弥生前期	図版502下段	不明	河道・流路	—	—	—	網代編み	—	—	—	—	—	—	
									—	—	—	—	—	—	—	—
		弥生前期	6196	箕	河道・流路	—	—	—	網代1組1送×経2/サル目	—	不明(島地1996)	—	—	—	—	
									—	—	—	—	—	—	—	—
		弥生前期	図6	箕	—	—	—	—	網代/サル目の類?	—	—	—	—	—	—	
									—	—	—	—	—	—	—	—
奈良	唐古・織成郡田原本町	弥生前期	図版第81	カゴ	—	巻き縁(左)	ヨコ添えもじり編み(左)、網代2組2送/網代	—	タケ(尾中文彦)	—	—	—	—			
							—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
奈良	唐古・織成郡田原本町	弥生前期	図版第82上	敷物	—	—	網代編み(×経緯4?)	—	アシ?	—	—	—	—			
							—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
奈良	唐古・織成郡田原本町	弥生前期	図版第83	建材?	土坑	—	網代1組1送×経2/サル目	—	ツツアフジ?	—	—	—	—			
							—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
奈良	唐古・織成郡田原本町	弥生前期	図版第80-1	カゴ	—	—	網代編み	放射状(菊底の類?)	タケ?	—	—	—	—			
							—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
奈良	唐古・織成郡田原本町	弥生前期	図版第80-2	カゴ	—	—	ヨコ添えもじり編み(左)	網代2組2送×2/網代	タケ?	—	—	—	—			
							—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
奈良	唐古・織成郡田原本町	弥生前期	図版第80-3	カゴ?	—	—	網代2組2送/網代	—	タケ?	—	—	—	—			
							—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
奈良	唐古・織成郡田原本町	弥生前期	図版第82右	敷物	—	—	網代編み(×経緯4?)	—	アシ?	—	—	—	—			
							—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
奈良	唐古・織成郡田原本町	弥生前期	図版第82左	敷物	—	—	網代2組2送×経緯4?/網代	—	アシ?	—	—	—	—			
							—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
和歌山	井辺	和歌山市	弥生後期～古墳前期	第34図	カゴ(サル)	井戸	巻き縁(左)	三方/ハズ目	アシ?	—	—	—	—			
								—	—	—	—	—	—	—	—	—
鳥取	青谷上寺地	福岡	弥生前期	—	カゴ	土坑	巻き上げ編み	巻き上げ編み	—	—	—	—	—			
								—	—	—	—	—	—	—	—	—
鳥取	青谷上寺地	福岡	弥生前期	36	カゴ	—	巻き上げ編み	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1組1送/サル目	—	—	—	—	—			
								—	—	—	—	—	—	—	—	—

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		底部	素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	体部の破片					
鳥取県	青谷上寺地	鳥取市	弥生前期末～中期前半	65	不明	溝	網代編み	—	—	経・緯不明(金原2005)	経糸・緯糸6～8本1単位含む		
					カゴ	—	矢筈巻き縁	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目、網代2廻1送/飛びゴザ目	—	経マタタビ(金原2005)	ココ添えもじり編みは巻きつけ材3本		
					カゴ	—	矢筈巻き縁	ココ添えもじり編み(左)	—	経・緯マタタビ、親骨ムクロ			
					カゴ	—	矢筈巻き縁	ココ添えもじり編み(左)	—	経・緯マタタビ(金原2005)			
					カゴ	—	巻き縁	ココ添えもじり編み(左)	—	—			
					カゴ	—	巻き縁	ココ添えもじり編み(左)	—	経マタタビ(金原2005)			
					カゴ	—	—	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目、網代4本起え4本漕り/ザル目?	網代2廻2漕1送×経緯2/網代	広葉樹(若年枝)			
					カゴ	不明	溝	もじり編み(左)/縄目	—	—			
					カゴ	水器溜まり	矢筈巻き縁	ココ添えもじり編み(左)	—	綿広葉樹(金原2005)			
					カゴ	カゴ	矢筈巻き縁	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目、網代2廻2漕1送/本目ゴザ目	網代2廻2漕1送×経緯2/網代	経マタタビ(金原2005)	内部の土に炭化米混じる		
					カゴ	カゴ	巻き縁	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目	—	経マタタビ(金原2005)			
					カゴ	カゴ	巻き縁	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目	—	経マタタビ、親骨散孔材(金原2005)			
					カゴ	カゴ	—	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目	—	経マタタビ(金原2005)			
					カゴ	カゴ	矢筈巻き縁	ココ添えもじり編み(右)	—	マタタビ、親骨散孔材			
					カゴ	カゴ	巻き縁	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目、網代2廻2漕1送/本目ゴザ目	網代2廻2漕1送×経緯2/網代	マタタビ			
					カゴ	不明	溝	三方/六ツ目	—	経マタタビ(金原2005)			
					カゴ	不明	—	網代1廻1漕1送×経緯2/ザル目	—	広葉樹(若年枝)			
					カゴ	カゴ	巻き縁(左)	ココ添えもじり編み(左)、網代2廻2漕1送/飛びゴザ目	網代2廻2漕1送×経緯2/網代	マタタビ			
					カゴ	カゴ	矢筈巻き縁	ココ添えもじり編み(左)	網代1廻1漕1送×経緯2/四ツ目	広葉樹(若年枝)	不明木製品が混るよう出土		
					カゴ	カゴ	矢筈巻き縁	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目	網代2廻2漕1送×経緯2/網代	マタタビ、親骨散孔材			
					カゴ	カゴ	矢筈巻き縁	ココ添えもじり編み(右)	—	マツ風(ニコウマツ種)			
					カゴ	カゴ	—	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目、網代2廻2漕1送/飛びゴザ目	網代2廻2漕1送×経緯2/網代	散孔材			
					カゴ	カゴ	矢筈巻き縁	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目	—	マタタビ風、親骨ムラサキキン			
					カゴ	カゴ	—	ココ添えもじり編み(左)	—	—			
					カゴ	カゴ	—	ココ添えもじり編み(左)、網代1廻1漕1送/ザル目	—	—			

野田2005

館蔵 府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・ 資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	体部or破片				
鳥取 青谷上寺地			弥生中期後 葉		33	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み(左)	経・緯・巻きつけ材マタタビ (金原2005)			野田2005
					34	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み(左)	経・緯・巻きつけ材マタタビ (金原2005)			
					37	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代2起2漙1送/ 飛びゴザ目	経・緯・巻きつけ材マタタビ (金原2005)			
					38	カゴ	—	網代2起2漙1送/飛びゴ ザ目	経・緯・巻きつけ材マタタビ (金原2005)			
					39	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代1起1漙1送/ ザル目、網代2起2漙1 送/飛びゴザ目	経・緯・巻きつけ材マタタビ (金原2005)			
					40	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代1起1漙1送/ ザル目	マタタビ属			
					41	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代1起1漙1送/ ザル目、網代2起2漙1 送/飛びゴザ目	経・緯・巻きつけ材マタタビ (金原2005)			
					43	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み(左)	—			
					44	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み(左)	経・緯・巻きつけ材マタタビ(金原2005)			
					45	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代1起1漙1送/ ザル目	広葉樹(若年枝)			
					46	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み(左)	マタタビ属			
鳥取 鳥取市			弥生中期後 葉		47	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代1起1漙1送/ ザル目、網代2起2漙1 送/飛びゴザ目	マタタビ、親骨広葉樹			
					48	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代1起1漙1送/ ザル目、網代2起2漙1 送/飛びゴザ目	マタタビ属			
					49	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代1起1漙1送/ ザル目	経・緯・巻きつけ材マタタビ(金原2005)			
					50	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代1起1漙1送/ ザル目	マタタビ?			
					51	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)	経・緯・巻きつけ材マタタビ、親骨カエデ属 (金原2005)	釈に付着		
					52	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代2起2漙1送/ 飛びゴザ目	経・緯・巻きつけ材マタタビ(金原2005)			
					53	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み(左)	経・緯・巻きつけ材マタタビ(金原2005)			
					58	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み (左)、網代2起2漙1送/ 飛びゴザ目	経・緯・巻きつけ材マタタビ(金原2005)			
					59	カゴ	—	ヨコ添えもじり編み(左)	経・緯・巻きつけ材マタタビ(金原2005)			
					63	不明	—	網代1起1漙1送×経2/ ザル目?	—			
鳥取 鳥取市			弥生後期		64	不明	—	網代編み	—	経条・緯条6本1単位		
					66	不明	—	もじり編み(左)/縄目	—	経条3本1単位		
					11	カゴ	—	巻き上げ編み	—	巻き材広葉樹、芯材不明 (金原2005)		

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方			素材	備考1	備考2	文献				
							口縁部	体部の破片	底部								
鳥取				9	カゴ	溝	矢筈巻き縁	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1題1漕1送/ザル目、網代2題2漕1送/飛びゴザ目	網代2題2漕1送×経緯2/網代	緯マタタビ?(金原2005)							
				15	カゴ	溝	矢筈巻き縁	ヨコ添えもじり編み(左)、網代2題2漕1送/飛びゴザ目	—	緯マタタビ(金原2005)							
				16	カゴ	溝	—	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1題1漕1送/ザル目、網代2題2漕1送/飛びゴザ目	—	経・緯マタタビ(金原2005)							
				17	カゴ	溝	矢筈巻き縁	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1題1漕1送/ザル目、網代2題2漕1送/飛びゴザ目	—	緯マタタビ(金原2005)							
				18	カゴ	溝	巻き縁?	ヨコ添えもじり編み(左)	網代1題1漕1送×経緯2/四ツ目	—	—						
				19	カゴ	溝	矢筈巻き縁	ヨコ添えもじり編み(左)	網代1題1漕1送×経緯2/四ツ目	—	緯マタタビ(金原2005)						
				20	カゴ	—	—	ヨコ添えもじり編み(左)	網代1題1漕1送×経緯2/四ツ目	—	緯マタタビ(金原2005)						
				21	カゴ	溝	矢筈巻き縁	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1題1漕1送/ザル目、網代2題2漕1送/飛びゴザ目	—	経・緯・巻きつけ材マタタビ(金原2005)							
				22	カゴ	溝	矢筈巻き縁	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1題1漕1送/ザル目	—	緯広葉樹、靑骨広葉樹(金原2005)							
				23	カゴ	溝	—	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1題1漕1送/ザル目	—	経・緯・巻きつけ材マタタビ、靑骨ムクロジ(金原2005)							
				24	カゴ	溝	不明	ヨコ添えもじり編み(左)、網代1題1漕1送/ザル目	—	—							
				56	カゴ	溝	—	ヨコ添えもじり編み(左)	—	緯マタタビ(金原2005)							
				60	カゴ	溝	—	網代編み	—	—							
				30	カゴ	—	—	網代1題1漕1送/ザル目	—	—							
				42	カゴ	—	—	—	—	網代2題2漕1送×経緯2/網代	緯マタタビ(金原2005)						
				62	不明	—	—	網代1題1漕1送×経緯2/ザル目?	—	—	経広葉樹、緯不明(金原2005)	田下駄に重なるように出土				北瀬ほか1986	
				W-227	不明	米子市	弥生後期	—	—	—	タケ皮状	ほかに樹皮6点あり				内田1988	
				図版71上	カゴ?	松江市	弥生中期	—	—	—	—	—					
				第48図	動物?	松江市	弥生中期～古墳前期初頭	—	—	—	—	—	経サクラ皮?、緯イグサ?				三宅・広江ほか1987
				第4図	動物	岡山市	弥生中期	—	—	—	—	—	植物茎	ほか同様の編物1点あり			厨崎・安川1997
				W2	カゴ	池	弥生中期後葉	—	—	—	—	—	—				
				W148	篋?	岡山市	弥生後期後葉～古墳前期初頭	—	—	—	—	—	ワラ状の植物茎	ほか弥生中期の樹皮1点、弥生後期の樹皮5点、樹皮1点・被覆土器16点あり			金田ほか2003
				W299	不明	津島	—	—	—	—	—	—	樹皮様				
				W300	カゴ	岡山市	—	—	—	—	—	—	ワラ・カヤ状の植物茎				

都道府県	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方			素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	体部の破片	底部				
岡山	津島	岡山市	弥生後期	図版28-1	カゴ	土坑	—	網代1題1漕1送/ザル目、網代2題2漕1送/網代	—	—	—	平井ほか2000	
香川	多肥松林	高松市	弥生中期	1402.2	カゴ	河道・流路	巻き縁(左)	ヨコ筋えもじ9編み(左)、網代1題1漕1送/ザル目、網代2題2漕1送/網代	—	—	—	—	山下1989
					不明	河道・流路	—	1条絡の編み(左)	—	—	—	—	—
愛媛	釜ノ口	松山市	弥生後期後半	246A	カゴ	貯蔵穴	—	ヨコ筋えもじ9編み(左)、網代1題1漕1送×経2/ザル目	—	植物珪酸体を根ざない植物(古環境研究所1997)	把手付き、箕?	—	相原・山本・宮内ほか1997
				246B	カゴ	貯蔵穴	当て縁	ヨコ筋えもじ9編み(左)、網代1題1漕1送×経2/ザル目	—	—	—	箕?	—
福岡	辻田	春日市	弥生中期	799	カゴ?	河道・流路	—	網代1題1漕1送×経2/ザル目	—	—	—	—	小池ほか1979
			弥生後期後半	798	釜	河道・流路	—	ヨコ筋えもじ9編み(左)	—	—	—	—	—
長崎	里田原	平戸市	弥生後期前半	79	カゴ	井戸	巻き縁(左)	網代1題1漕1送/ザル目	—	—	—	—	山口・春田ほか1990
			弥生後期後半	図版20	カゴ	—	—	網代1題1漕1送×経2/ザル目	—	—	カズラ?	—	—

付表3 中国新石器時代の編物実物資料 一覧表

※1本表は、本論の分析対象とした中国新石器時代の編物実物資料の諸情報と、省略・遺跡ごとに整理したものである。
2表の体裁・記載方法については、付表1に準じる。

省級	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	編み方		素材	備考1	備考2	文献		
							口縁部	体部の編み						
江蘇	圩墩	常州市	新石器中期 馬家浜	T8504⑤:108	動物?	—	網代編み(×経緯4~8)	—	アシ?	—	—	常州市博2001		
	草鞋山	蘇州市	新石器中期 馬家浜	図版6-22 図版6-23	動物? 不明	—	網代2起2層1送×経緯4 ~5/網代 不明	—	タケ? タケ?	—	—	シンボ編作起源委員会1996		
	少卿山	蘇州市	新石器後期 良渚前期	図版2-4 編号30	壺材	住居跡	網代1起1層1送×経緯4織 2/サル目	—	アシ?	—	—	蘇州博・崑山文化局ほか2000		
	跨湖橋	杭州市	新石器前期 跨湖橋	T0410溝III:15	動物? 箕?	丸木舟関連	網代2起2層1送/網代	—	—	タケに似た素材	—	—	浙江文物考古研・蕭山博2004	
	田螺山	寧波市	新石器中期 河姆渡	図13	動物?	—	網代編み(×経緯8?)	—	アシ?	—	—	孫2010(中村ほか2010)		
	河姆渡	寧波市	新石器中期 河姆渡	T233(4A):105	動物or壺材	建物跡	網代編み(×経緯8)	—	アシ?	—	—	—	浙江文物考古研2003	
	羅家角	嘉興市	新石器中期 馬家浜	H5 H13	不明 不明	灰坑	網代3起2層・5起4層5送/網代 不明	—	アシ? アシ?	—	—	—	羅家角考古隊1981	
	莊橋墳	嘉興市	新石器後期 良渚	—	不明	灰坑	不明	—	アシ?	—	—	—	浙江文物考古研・平湖市博2005	
	浙江	錢山漾	湖州市	新石器後期 良渚	13:65	不明	—	網代/サル目の類	—	タケ?(マダケorシノダケに似る)	—	—	—	浙江文物管理委1980a
					17:14	箕?	—	円形or楕円形の骨が付く	網代編み	—	タケ?(マダケorシノダケに似る)	—	—	
13:68					不明(覆い、扉ほか?)	—	—	網代編み(×経緯2)	—	タケ?(マダケorシノダケに似る)	—	—	—	
16:52					不明(覆い、扉ほか?)	—	—	網代編み(×経緯4?)	—	タケ?(マダケorシノダケに似る)	—	—	—	
22:80					カゴ	—	—	三方/六ツ目	—	タケ?(マダケorシノダケに似る)	—	—	—	
16:44					不明	—	—	三方/麻ノ葉?	—	タケ?(マダケorシノダケに似る)	—	—	—	
12:52					カゴ?	—	—	網代/サル目の類	—	タケ?(マダケorシノダケに似る)	—	—	—	
13:45					カゴ?	—	—	網代/サル目の類	—	タケ?(マダケorシノダケに似る)	—	—	—	
13:45-2					カゴ?	—	—	網代/サル目の類	—	タケ?(マダケorシノダケに似る)	—	—	—	
23:23					カゴ?	—	—	網代/サル目の類	—	タケ?(マダケorシノダケに似る)	—	—	—	
尖山灣	紹興市	紹興市	新石器後期 良渚	12:57	帽子?	—	不明	—	草木?	—	—	浙江文物管理委1980b		
				—	カゴ	—	—	不明	—	タケ?	—		—	
				図16	不明	—	—	網代3起3層1送?/網代	—	タケ?	—		—	
				—	不明	—	—	網代2起2層1送/網代	—	—	—		—	
				ZJT26⑥:4	カゴ?	—	—	網代1起1層1送×経緯2/ サル目	—	—	—		—	—
				ZJT25⑤:11A	不明	—	—	網代3起2層1送/網代	—	—	—		—	—
				ZJT25⑤:9	カゴ	—	—	網代1起1層1送×経緯2/ サル目	—	—	—		—	—
				ZJT26⑥:7	カゴ	—	—	網代1起1層1送×経緯2/ サル目	—	—	—		—	—
				—	カゴ	—	—	網代1起1層1送×経緯2/ サル目	—	—	—		—	—
				ZJT26⑥:6	カゴ	—	—	網代3起3層2送?/履び コサ目	—	—	—		—	—

省級	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	口縁部		編み方		素材	備考1	備考2	文献				
							口縁部	編み方	口縁部	編み方								
浙江	尖山灣			ZJT26⑥:6	カゴ	—	編目返し縁の一種?	もじり編み(左)/編目? 網代1組1漣1送×経2/サル目、三方/六ツ目の一種	—	—	割り裂き材							
					ZJT25⑤:3	カゴ?	—	—	網代1組2漣1送/横ひす目	—	—	割り裂き材						
					—	不明	—	—	網代3組2漣・3組4漣5送/網代	—	—	割り裂き材						
					ZJT25⑤:10	カゴ	—	—	三方/六ツ目の一種	—	—	割り裂き材						
					—	カゴ	—	—	網代3組3漣1送/網代	—	—	割り裂き材						
					ZJT25⑥:7	カゴ?	—	—	網代3組3漣1送/網代	—	—	割り裂き材						
					ZJT25⑥:?	カゴ	—	不明	三方/六ツ目?	—	—	割り裂き材						
					ZJT25⑥:4	カゴ?	—	—	網代1組1漣1送×経2/サル目	—	—	割り裂き材						
					ZJT26⑥:9	不明	—	—	網代/サル目の類	—	—	割り裂き材						
					ZJT25⑤:11B	不明	—	—	網代編み	—	—	割り裂き材						
					ZJT26⑥:8	カゴ	—	—	巻き上げ編み?	—	—	割り裂き材						
					ZJT26⑥:5	不明	—	—	巻き上げ編み?	—	—	網代1組1漣1送/サル目	—	2片あり				
ZJT25⑤:12	不明	—	—	—	—	—	網代1組1漣1送/サル目	—	—									
ZJT25⑥:5A	カゴ	—	—	—	—	—	もじり編み(左)/編目、網代1組1漣1送×経2/サル目	—	—									
ZJT25⑥:5B	カゴ	—	—	—	—	—	網代1組1漣1送×経2/サル目	—	—									
ZJT25⑥:2	カゴ	—	—	—	—	—	網代1組1漣1送×経2/サル目	—	同一番号の2片のうち1片									
ZJT25⑥:2	カゴ?	—	—	—	—	—	網代1組1漣1送×経2/サル目	—	同一番号の2片のうち1片									
湖南	八十垱	常德市	新石器初期 彭頂山	T47⑦:195	敷物	河道・流路	—	—	—	アシ?								
				T43⑧:284	敷物	河道・流路	—	—	—	—	アシ?							

付表4 中国初期青銅器時代の編物実物資料 一覧表

※1.本表は、本論の分析対象とした中国初期青銅器時代の編物実物資料の諸情報を、省級・遺跡ごとに整理したものである。
2.表の体裁・記載方法については、付表1に準じる。

省級	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	口縁部		編み方		素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	編み方	口縁部	編み方				
上海	亭林	金山区	初期青銅器 原備	H2:2	カゴ	灰坑	巻き縁(左)?	—	三方/麻ノ葉?	—	タケ?			
				H2:4	敷物	灰坑	—	—	網代1組1漣1送×経緯4/網代	—	—	アシ?		
浙江	毘山	湖州市	初期青銅器 馬橋	H11	カゴ	灰坑(井戸)	縦芯材折り込み縁	—	網代2組2漣1送/網代	—	アシに似た素材			浙江文物考古研・湖州 馬橋2006

付表5 朝鮮新石器時代の編物実物資料 一覧表

※1.本表は、本論の分析対象とした朝鮮新石器時代の編物実物資料の諸情報を整理したものである。
2.表の体裁・記載方法については、付表1に準じる。

道	遺跡名	所在地	時期	報告番号・資料番号	器種	出土遺構	口縁部		編み方		素材	備考1	備考2	文献
							口縁部	編み方	口縁部	編み方				
慶高 龍道	飛鳳里	昌寧郡	新石器初期 後半	409	編袋	貯蔵穴	不明	—	もじり編み(左)/編目	—	アシ?			任・李・金2008

遺跡名	所在地	時期	A類																						備考	文献
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	三方	その他	不明	1L	1R	2L	2R	3L	3R	4L		
野場(3)	三戸郡陸上町	縄文中期後葉～後期初頭																								
野場(5)	三戸郡陸上町	縄文中期後葉～後期初頭				27							2		1											
泉山	三戸郡三戸町	縄文中期前半～上葉				3									4	2										
三内丸山(第6集探)	青森市	縄文中期末～主体				19									1	1										
隈無(4)	五所川原市	縄文中期最花				1																				
最花	むつ市	縄文中期最花				3																				
三内	青森市	縄文中期～後期				9										1										
上田	上北郡七戸町	縄文中期～後期初頭				11																				
三内丸山(8・9次)	青森市	縄文中期末～後期初頭				7																				
千歳(13)	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期初頭				2									1											
千歳(13)	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期初頭				5							5													
原原縄織場	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期初頭				3																				
富ノ沢(2)	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期前葉				104									20											
能ノ沢	西津姫町	縄文中期末～後期前葉				43																				
弥宗平(6)	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期前葉				16									1											
大石平(1)	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期前葉				2									1											
上牡丹森	南津軽郡大鰐町	縄文後期				2									1											
隈無(4)	五所川原市	縄文後期				3																				
弥宗平(8)	上北郡六ヶ所村	縄文後期初頭				4																				
八雲久保(2)	三戸郡五戸町	縄文後期初頭～前葉				6									2											
館平	八戸市	縄文後期十層内I主体				1																				
古街道長根	三戸郡五戸町	縄文後期十層内I				1																				
睦栄(1)	上北郡六ヶ所村	縄文後期十層内I																								
全次	西津軽郡睦ノ沢町	縄文後期十層内I				1																				
戸沢	むつ市	縄文後期前半				4																				
隈無(4)	五所川原市	縄文後期十層内I																								
西山	三戸郡青森町	弥生後期念仏													1											

遺跡名

遺跡名	所在地	時期	A類																						備考	文献
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	三方	その他	不明	1L	1R	2L	2R	3L	3R	4L		
経塚森	花巻市	縄文前期中葉～前葉													1											
牧田	陸前高田市	縄文前期中葉～後葉主体	2	1		1			3																	

遺跡名	所在地	時期	A期										B期						C期	H類	備考	文献							
			221	222x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	三方	その他	不明	1L					1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R
石管根	北上市	縄文中期初頭～中葉				1	1																					佐々木・小田野・酒井1992	
本郷	北上市	縄文中期初頭～中葉			4	5									3	13											Aその他はA311/2などにE1が1点あり	酒井・小田野1992	
上八木田V	盛岡市	縄文中期前葉															1										ほか時期不明小型蓋底部	平井1992	
長谷堂	大船渡市	縄文中期大木瓦主体													1	5	1											Aその他はA312、E1の二重痕1点含む	金子・阿部・工藤1999
上村	宮古市	縄文中期前葉～後葉	1		13		1									10											E1の二重痕3点含む	鈴木ほか1991	
信田IV	岩手郡岩手町	縄文中期後葉～末主体			15																						神・斎藤・藤村1994		
龍IV	北上市	縄文中期後葉～末主体			2		2						1														大木9Aに属する「竹状正痕」1点あり	佐々木1993	
大畑II	下閉伊郡山田町	縄文中期後葉～末			12												2										A11とE1の多重痕1点、E1の二重痕1点含む	渡辺・酒井1995	
下館御屋	一関市	縄文中期後葉～後期初頭	1	1	2		32	5	1		1				13												A321は321基間の模様編み	松本1999	
龍石野I	下閉伊郡田代町	縄文中期後葉～後期前葉			25		1								4						1?						A11とE1の多重痕1点、E1の二重痕2点含む	菊池・阿内・高橋・山本ほか1997	
芦名沢I	盛岡市	縄文中期末～後期	1		3										2	1												村上・熊谷1999	
柳上	北上市	縄文中期末～後期初頭主体			1		2								1												E1の二重痕3点含む	小原1995	
江刺家	九戸郡九戸村	縄文中期末～後期前葉			6																							田嶋ほか1984	
馬立II	二戸市	縄文中期末～後期前葉			16										1												A11とE2の多重痕1点含む	菊池・酒井・高橋1988	
本内	北上市	縄文中期大木			2																							菊池・金子・高橋1998	
上八木田IV	盛岡市	縄文中期～後期																										平井1992	
本内II	和賀郡昭和町	縄文中期～後期			19		11		1						1													星・阿部・高橋1998	
袴の木	二戸郡二戸町	縄文後期			8																							吉田・高橋1997	
泉前II(A地区)	奥州市	縄文後期			6		4		3																			酒井1999	
寺久保	二戸市	縄文後期初頭			9		2																					金子・高橋1996	
青ノ久保	二戸市	縄文後期初頭～前葉			7																							中村1987	
馬立I+木田	二戸市	縄文後期初頭～前葉			19												1											田嶋1988	
才津沢	盛岡市	縄文後期灰沢主体			5																							金子・高橋・金子1998	
平沢I	久慈市	縄文後期灰沢			10												1											金子・高橋1987	
門前	陸前高田市	縄文後期前葉															1											E1の二重痕4点含む	
森内	盛岡市	縄文後期前葉			1																							E1の二重痕1点、E1とE2の多重痕1点含む	神原2009
間瀬II	盛岡市	縄文後期前葉～中葉	1		3																							縄文後期中葉～晩期初期の繩物出土	工藤1982
長谷堂	大船渡市	縄文後期新山種珪社3																										E1の二重痕1点含む	水戸口1997
上甲子	大船渡市	縄文後期中葉～弥生前期初頭			1												2											金子・阿部・工藤1999	
上八木田III	盛岡市	縄文後期～晩期	1		22		2		1																			A11の二重痕1点含む、ほかコンクリート状1点あり	平井1992
本内II	和賀郡昭和町	縄文晩期	1				2		1																			星・阿部・高橋1998	

遺跡名	所在地	時期	A類											B類				C類	D類	E類	F類	G類	H類	備考	文献										
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	23方	243	23方									243	不明	1L	1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R
			1	3	2	2	1	6	7	3	1	5	6	1	1	1	1									1	1	1	1	2	1	1	1	1	1
仲ノ縄B	田村市	縄文前期大穴系	1	3	2	2	2																				A21EとA21Fの複合集1点含む	山岸・松本・中浦・高橋 1993							
小屋館	福島市	縄文前期大木5a				1																						山岸ほか1999							
羽白D	相馬郡葦館村	縄文中期																										鈴鹿ほか1987							
八方塚A	福島市	縄文中期	2		3	3	7								5			6	1								A211の二重痕1点、A2E3の二重痕1点を含む	山内・佐藤ほか1999							
弓手原A(1次)	福島市	縄文中期			1	1	6																				A111とA211の多重痕1点含む	山内・阿部・佐藤ほか1996							
上ノ台A	相馬郡葦館村	縄文中期大木8a																										鈴鹿ほか1990							
大畑	いわき市	縄文中期中葉～後葉					3	1																				馬目ほか1975							
上ノ台A	相馬郡葦館村	縄文時代中期後葉～後期					1								2													鈴鹿ほか1990							
小屋館	福島市	縄文中期～後期																										山岸ほか1999							
獅子内(1次)	福島市	縄文後期			2		4																					鈴鹿ほか1996							
獅子内(2次)	福島市	縄文後期	1				5																					鈴鹿ほか1997							
獅子内(3次)	福島市	縄文後期	1				11																					鈴鹿ほか1998							
弓手原A(1次)	福島市	縄文後期	1	2			28																					A211の中には二重痕3点含む	山内・阿部・佐藤ほか1996						
弓手原A(2次)	福島市	縄文後期	3	1			13	1																				A221は221基調の規模縮小、A211の二重痕2点、E1の二重痕1点を含む	山内・奥田・土井ほか1997						
八方塚A	福島市	縄文後期													1														E1の二重痕1点含む	山内・佐藤ほか1999					
羽白D	相馬郡葦館村	縄文後期					2																												
大畑	いわき市	縄文後期中葉～中葉																																	
荒小路	郡山市	縄文後期中葉			1		26	1	1																										
山田	会津若松市	縄文後期加曽利B																																	
相子島	いわき市	縄文後期～晩期	1	1			17																												
久串原館・番匠地	いわき市	縄文後期～晩期	1	3			59	9	2																										
弓手原A(3次)	福島市	縄文後期～晩期					7																												
小屋館	福島市	縄文晩期					1																												
獅子内(1次)	福島市	縄文晩期					6																												
獅子内(2次)	福島市	縄文晩期					1																												
獅子内(3次)	福島市	縄文晩期前半					2																												
連郷B	いわき市	縄文晩期後半																																	
荒鷹敷	大沼郡三島町	縄文晩期大洲A					1																												
荒鷹敷	大沼郡三島町	縄文晩期大洲A主体					31																												
山田	会津若松市	弥生前期初頭					1																												
荒鷹敷	大沼郡三島町	弥生前期～中期前葉																																	
連郷B	いわき市	弥生中期																																	

遺跡名	所在地	時期	A類										B類										F類	G類	H類	備考	文献										
			221	221x	221/2	I11	I11x	I11x	211	332	331	331x	321	322	423	3方	その他	不明	1L	1R	2L	2R						3L	3R	4L	4R						
龍岡寺	いわさき市	弥生中期																			1(OB)+2 (不明)																
大畑	いわさき市	弥生中期																									22										馬日ほか1975
相子遺	いわさき市	弥生後期主体																								9										本権ほか1997	

3. 関東・甲信越地方
茨城県

遺跡名	所在地	時期	A類										B類										F類	G類	H類	備考	文献										
			221	221x	221/2	I11	I11x	I11x	211	332	331	331x	321	322	423	3方	その他	不明	1L	1R	2L	2R						3L	3R	4L	4R						
野中	小美玉市	前胡花縄下層															1																				江坂1954
老杯清水西	土浦市	縄文前期後半 ～中期後半															1																				黒澤・関口・駒澤1997
小山台	つくば市	縄文中期?																																			水松・斎藤・渡辺1976
老杯清水西	土浦市	縄文中期阿玉 台															1																			黒澤・関口・駒澤1997	
前谷	土浦市	縄文中期前半 主体															7																			関口ほか1998	
小山台	つくば市	縄文後期主体															8																			水松・斎藤・渡辺1976	
新堀東	土浦市	縄文後期															7																			黒澤・関口・駒澤1997	
上高津貝塚 (A地点)	土浦市	縄文後期前葉 ～中葉															1																			佐藤・大内ほか1984	
上高津貝塚 (B地点)	土浦市	縄文後期前葉 ～中葉															1																			Akezawa1972	
稲田(神明前)	稲敷市	縄文後期前葉 ～晩期前葉															38																			Aその他はA21など、質 感がヒトホに似る	
上高津貝塚 (B地点)	土浦市	縄文後期前葉 ～晩期前葉															4																			Akezawa1972(近藤ほか 1994)	
老杯清水西	土浦市	縄文晩期前半 ～中葉															2																			黒澤・関口・駒澤1997	
法堂	稲敷郡茨浦 村	縄文晩期前半 ～中葉															2																			戸次・丰田1966	
広畑	稲敷市	縄文晩期前葉 ～中葉															1																			藤本1988	
北原	筑西市	弥生中期前半															2																			石川2004	
砂尾(安土屋)	水戸市	弥生後期十五 台																																		黒沢2000	
磐根(国子内)	東茨城郡大 塚町	弥生後期十五 台																																			黒沢2000

栃木県

遺跡名	所在地	時期	A類										B類										F類	G類	H類	備考	文献											
			221	221x	221/2	I11	I11x	I11x	211	332	331	331x	321	322	423	3方	その他	不明	1L	1R	2L	2R						3L	3R	4L	4R							
品川台	大田原市	縄文中期前葉 ～中葉															4																					
三輪仲町	那須郡那珂 川町	縄文中期前葉 ～後期前葉															1																				A11xは別種の可能性あり、Aその他はA131、A211の二重鎮1点含む	
御蔵前	芳賀郡益子 町	縄文中期前半 ～後期中葉主 体															8																				Aその他はA322	
安塚坂下	下都賀郡壬 生町	縄文中期阿玉 台															4																				中村1996	
台榭上	宇都宮市	縄文中期大木 7b																																			上野・今平1998	
台榭上	宇都宮市	縄文中期阿玉 台IV																																			上野・今平1998	
浄法寺	那須郡那珂 川町	縄文中期中葉 主体																																			塚本1997	

通称名	所在地	時期	A類										B類				H類	備考	文献						
			221	221x	221/2	111	111x	211	331	331x	321	322	423	三方	その他	不明				1L	1R	2L	2R	3L	3R
三ヶ倉落合	高崎市	縄文晩前期	1				6	1	2	1					4										井川・大塚ほか1997
新堀東源の原	安中市	弥生							1						2										A331は331基部の後継編み 大塚・千田・長谷川ほか 1997
神保富士塚	高崎市	弥生中期	4	5		1	1	3	1	2	1			6											A不明とBの多重編み点含む 小野1993

埼玉県

通称名	所在地	時期	A類										B類				H類	備考	文献							
			221	221x	221/2	111	111x	211	331	331x	321	322	423	三方	その他	不明				1L	1R	2L	2R	3L	3R	4L
打越	比企郡朝川町	縄文前期 ～縄文中期	1																							木村・中島1988
在家	上尾市	縄文前期後葉	1																						細田ほか1991	
塚屋	大里郡寄寄町	縄文前期後葉																							市川ほか1983	
二反田	日高市	縄文中期加曾				2																			岡本・金子・赤瀬1993	
種ノ下	大里郡寄寄町	縄文後期主体	1	2		14	2																		細田・若田1994	
赤坂	鴻巣市	縄文後期初頭 ～晩期中葉	3	2	1	30	5	2							4										A211の二重編み5点、A331 の二重編み点含む	
上組Ⅱ	川越市	縄文後期初頭	1			5	1		1																黒坂1989	
中三谷	鴻巣市	縄文後期初頭 ～中葉	1			8																			富田・細田1989	
入波沢西	秩父市	縄文後期初頭				9	1																		渡辺智2000	
入波沢東	秩父市	縄文後期初頭 ～中葉				5	1								1										渡辺智2000	
高井東	川越市	縄文後期初頭 ～晩期中葉	26	4	29	79	11	1	7					2	18	1?									吉川1974	
石神	川口市	縄文後期前葉 ～中葉	1	1		8									4										A211の中には二重編み2点 含む	
新盛坂東	深谷市	縄文後期前葉 ～晩期中葉	4			8									3										新盛2000 田中・新盛・小野1992	
雅楽谷	蓮田市	縄文後期前葉 ～晩期中葉	19	3	1	123	2	12	10					4	58										橋本1990	
宮原	狭山市	縄文後期編之 内主体	1			2																			石塚2007	
打越	富士見市	縄文後期編之 内	1			7																			荒井・佐々木・小出ほか 1978	
修理山	加須市	縄文後期編之 内2主体	2			6																			吉田1995	
神明	さいたま市	縄文後期編之 内2	2			2	1								1										細田ほか1987	

遺跡名	所在地	時期	A類												不明	B類												C類	D類	E類	F類	G類	H類	備考	文献
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423		23方	その他	1L	1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R										
原ヶ谷戸	深谷市	縄文後期中葉～晩期中葉	11	3	1				37	2				2	2														16					A331は331を331を基調とする横線細み、Aその他は2点ともA横線細み、A211の二重線7点含む、ほかA211の圧痕を有する土器断面2点あり	村田1993
西本竹	さいたま市	縄文後期加曾利B	1					3	1					2	2																		うち4点は表採品、A211の二重線1点含む	田中・新屋1992	
寿能	さいたま市	縄文後期加曾利B	15	3		10		147	1	1		8		1	1														1				(注)時期不明のA211が2点あり	吉川1984	
松の外	入間郡毛呂山町	縄文後期加曾利B	3			1		9	2					1	1																				
石神	川口市	縄文後期安行～晩期安行						2							1	1																			
寿能	さいたま市	縄文後期安行						5																											
さくら	蓮田市	縄文後期～晩期	3					18	1						3	3													2						
上敷免	深谷市	縄文後期～晩期	5	6	1	1		45	2	1			2	2	57	119												19					横線細み点(A211)も含めたもの1点+Aその他も含めたもの2点、E11には複数の圧痕が含まれる	瀬瀬ほか1993	
上敷免北	深谷市	縄文後期～晩期	2	1				8	2					7	7																		数量不明	木戸2000	
在家	上尾市	縄文晩期大洞A						1																											
上敷免	深谷市	弥生中期須和由主段						2						2	2													10							
池上西	熊谷市	弥生中期須和由	2	1				3	1					2	2													2							
前中西	熊谷市	弥生中期後半～後期						1						2	2														1						
北島	熊谷市	弥生中期後葉						1																					13				同時期の縄物出土	吉田2003	

千葉県

遺跡名	所在地	時期	A類												不明	B類												C類	D類	E類	F類	G類	H類	備考	文献
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423		23方	その他	1L	1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R										
水砂	柏市	縄文前期直浜																																	
水砂	柏市	縄文中期	1			4								5	5																				
中山新田 I	柏市	縄文中期阿玉台	1					1						9	9																				
新橋	富里市	縄文中期阿玉台						8						6	6																				
栗野 I・II	佐倉市	縄文中期阿玉台 I	1					1						2	2																				
中山新田 I	柏市	縄文中期阿玉台 I	1																																
池花	西街道市	縄文中期加曾利B						1																											
海保野口	市原市	縄文中期加曾利B	1					3	1																										
中野菅御堂	千葉市	縄文中期後葉～後期中葉	6					37	2	1			3	3																			A21のうち2点はE221を基調とする横線細み、A211の二重線2点含む	森本・新田・川島1998	
能満上小	市原市	縄文中期後葉～晩期中葉	4					40	1	3				5	5													2							
加曽利	千葉市	縄文後期主体				1		3						1	1																				
高内	成田市	縄文後期主体	1					1						1	1																				
養田高田	千葉市	縄文後期主体				1		3																											
瓶淵原	市原市	縄文後期初頭～晩期前葉	5	4	1	4		97					3	3	1	18	1																Aその他はA311横線の縦線細み、A211の二重線8点、A21/2と不明の横線1点を含む	忍澤1999	

遺跡名	所在地	時期	A類										B類				C類		D類	E類	F類	G類	H類	備考	文献			
			221	222x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	三方	その他	不明	1L								1R	2L	2R
下北原	伊勢原市	縄文後前期築 ～中葉	53			1	524	13		9		5	29										12					鈴木ほか1977
東田院	鎌倉市	縄文後前期築 ～中葉	53				299	2		3		5											1					鈴木ほか1972
馬場(Na6)(1次)	愛甲郡清川村	縄文後前期築 ～中葉	22		10		240	9					117										10					鈴木・近野1995
馬場(Na6)(2次)	愛甲郡清川村	縄文後前期築 ～中葉	3		1		14	1					30															鈴木・市川・近野1999
日向南新田	伊勢原市	縄文後前期築 ～中葉			1		4																					服部・梅淵1987
宮久保	綾瀬市	縄文後前期築 ～中葉	9				38	2				71																服部・長岡・御堂島1987
表の屋敷(Na8)	愛甲郡清川村	縄文後期掘之 内					24	1		2		1	7										1					近野・恩田・谷口1997
帷子峯	横浜市	縄文後期掘之 内					12			1																		鳴原・土井・吾瀬ほか1984
金沢文庫	横浜市	縄文後期掘之 内					1																					山本・服部・谷口1988
上相屋・川上(Na5)	伊勢原市	縄文後期掘之 内	3	1																								矢戸・宮坂1998
上吉浜市場地区	平塚市	縄文後期掘之 内	2				5						2															高杉・小山・中山・佐々木2000
川尻	相模原市	縄文後期掘之 内	3				3						1															加藤・小川・伊丹2000
下九沢下作/口	相模原市	縄文後期掘之 内	1				3	1			7																	松井1998
北原(Na9)	愛甲郡清川村	縄文後期掘之 内	5		1		14	1		1		4																市川・恩田・谷口1994
北原(Na10)	愛甲郡清川村	縄文後期掘之 内					4					1																市川・鈴木・能崎・恩田1997
北原(Na10・11北)	愛甲郡清川村	縄文後期掘之 内					1																					市川・鈴木・吉田1998
北原(Na11)	愛甲郡清川村	縄文後期掘之 内	3				8	1				2																市川・恩田・谷口1994
久保/坂(Na4)	愛甲郡清川村	縄文後期掘之 内	1																									恩田・近野・吉田1998
白久保	茅ヶ崎市	縄文後期掘之 内					1																					松田・井辺・田村1999
多摩区W61	川崎市	縄文後期掘之 内1主体					1																					戸田1998
相模原市W62	相模原市	縄文後期掘之 内2	2				6					2																後藤・若井・各本・門田1998
上村	愛甲郡清川村	縄文後期掘之 内2	1																									鈴木・坂口・谷口・恩田1990
上相屋・三本松(Na7)	伊勢原市	縄文後期掘之 内2	4				5	1		1																		矢戸・宮坂1998
上土册	綾瀬市	縄文後期掘之 内2	9				9	1				7																阿部・小宮山・矢島ほか1993
上土册南(1次)	綾瀬市	縄文後期掘之 内2					1					1																市川・井田2000
白久保	茅ヶ崎市	縄文後期加曹 利田					1																					松田・井辺・田村1999
鶴巻上/麓(Na25上)	秦野市	縄文後期加曹 利田主体					2																					木村・相木1998

遺跡名	所在地	時期	A類										B類										C類	D類	E類	F類	G類	H類	備考	文献			
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	3方	その他	不明	1L	1R	2L	2R	3L									3R	4L	4R
尾越	上伊那郡飯島町	縄文中期中葉～後期中葉	16	6		6	261	4	5	1				19	205											27						A21のうちA1は221基層の規模約24点、その他のA2は約7基層の規模約21点(個別)がA17点、A11(231、61点、A32/231が1点、B1は地形場分のみに二重痕点含む	大沢・今村・榎村ほか1972a
北丘B	伊那市	縄文中期加曾利E			1																					1						飯野・根津・深沢・小池ほか1973	
北高根A	上伊那郡菅野郷飯島町	縄文中期加曾利E			3			1																								A111の三重痕点含む	大沢・今村・丸山ほか1973
道満	上伊那郡飯島町	縄文中期加曾利E																								2						大沢・今村・榎村ほか1972a	
鳴尾天白	上伊那郡飯島町	縄文中期加曾利E																								5						大沢・今村・榎村ほか1972a	
増野新切	下伊那郡高森町	縄文中期加曾利E	1				1																			9						E1の三重痕点含む	遊那・金井・酒井ほか1973
増野川子石	下伊那郡高森町	縄文中期加曾利E					3							2	2											1						遊那・金井・酒井ほか1973	
歴代	千曲市	縄文中期後葉					1																									Aその他の点はA322	永沢ほか2000
駒込	佐久市	縄文中期後葉					2	1																		4						川崎・宇賀神2001	
郷土	小諸市	縄文中期後葉～後期初葉					2	1																								飯井・宇賀神2000	
村東山手	長野市	縄文中期加曾利EIV主体		1			2																									遺構外出土資料+SK33下層出土資料、ほかの層以外に時期不明のB1Lが1点、B1が2点あり	鶴田・石原ほか1999
松原	長野市	縄文中期加曾利EIV					2																									A211の二重痕点含む	上田ほか1998
出原西部	下伊那郡高森町	縄文後期					1		1																							大沢・今村・榎村ほか1972b	
大芝原	上伊那郡菅野郷飯島町	縄文後期					1							1	1																	Aその他のA232(個別)	大沢・今村・丸山ほか1973
大芝東	上伊那郡菅野郷飯島町	縄文後期					2																			1						大沢・今村・丸山ほか1973	
百敷刈	伊那市	縄文後期	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	28	1											5						A221のうち1点は221基層の規模約21点、A331はA111xとA不明の複合痕点を含む	飯野・根津・深沢・小池ほか1973
細ヶ谷B	伊那市	縄文後期					1																										飯野・根津・深沢・小池ほか1973
正木原I	下伊那郡高森町	縄文後期					1								1																	大沢・今村・榎村ほか1972b	
稲穂寺前(中島地区)	下伊那郡高森町	縄文後期	1	2			2																			1						大沢・今村・榎村ほか1972b	
中田	東御市	縄文後期					1																										川崎1999
茂原青石堂	北佐久郡軽井沢町	縄文後期	1				8	1	1	1																1						上野ほか1983	
真行寺	東御市	縄文後期?					1																										川崎1999
山溝	上伊那郡飯島町	縄文後期前半			3		6							3																		山間・伊藤・井上ほか1973	
中原	東御市	縄文後期初頭～中葉	2	1			28	3					3	3												3	1					Aその他のA33点とA332層の規模約21点、Aその他のE1の多重痕点を含む、E2としたものは「水位差」と記載	川崎1999
松原	長野市	縄文後期併名寺					1																										上田ほか1998
吹付	佐久市	縄文後期中葉					1		1																	1						宇賀神・岡村・新溝・寺島・百瀬ほか1991	

遺跡名	所在地	時期	A類												B類				C類	D類	E類	F類	G類	H類	備考	文献							
			221	222	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	三方	その他	不明	1L									1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R
			1	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1									1	2	1	2	1	2	1
古鷹敷	新発田市	縄文中期前葉 ～中葉														2												増子1998					
千石原	長岡市	縄文中期前葉 ～中葉	1													5(1L)+45 (不明)													縮久不明 菅沼・宮内2007				
幅上	十日町市	縄文中期前葉 ～中葉	3	1										1		4	6				3?								菅沼・宮内2007				
笹山	十日町市	縄文中期前葉 ～後期前葉	2	2		8	1	4	1							17	8												菅沼・阿部・石原1998				
長峰	上越市	縄文中期新前期 主体														2	8				1								室岡・関・本間1984				
三盛原B	糸魚川市	縄文中期新前期 主体							1							2													池田・柳・山本・竹田1988				
石倉	長岡市	縄文中期新前期														2													武田・山本・佐藤・斎藤 2007				
石倉	長岡市	縄文中期中葉							1																				武田・山本・佐藤・斎藤 2007				
通房手	中魚沼郡津 南町	縄文中期高 高	2	2		1							2			80													中田2005				
沖ノ原	中魚沼郡津 南町	縄文中期中葉 ～後葉主体				1																											
宮下原	南魚沼市	縄文中期中葉 ～後葉	1						3	1																							
長峰	上越市	縄文中期中葉 ～後葉							1																								
壺平	中魚沼郡津 南町	縄文中期中葉 ～末主体	5	3	1	8			29	1																			松永2011a				
兼保(A地区)	妙高市	縄文中期後葉 ～後期前葉主 体	1						17	1																							
寺地	糸魚川市	縄文中期古早 田新																															
二本松東山	北蒲原郡聖 籠町	縄文中期後葉 ～末																															
多賀屋敷	長岡市	縄文中期後葉 ～後期中葉	2			3			17	1																			山武考古館1993				
岩野原	長岡市	縄文後期				3			15	1											1?								駒形・寺崎1981				
根立	長岡市	縄文後期初期 ～前葉																															
万條寺林	南魚沼市	縄文後期初期 ～前葉	1						6																				池田・荒木ほか1988				
向原II	十日町市	縄文後期初期 ～前葉				1	1		5												1												
平	新潟市	縄文後期初期 ～中葉主体	1						6																				川上・遠藤ほか1982				
内後	十日町市	縄文後期初期 ～中葉	1	2		1			26	1	1																		長瀬ほか2006				
耳取	見附市	縄文後期三十 稲場主体							3																				関1971				

遺跡名	所在地	時期	A類										B類										C類	D類	E類	F類	G類	H類	備考	文献				
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	その他	不明	1L	1R	2L	2R	3L	3R									4L	4R		
筋生	能美市	縄文中期中葉～後葉	13		104											5(1L)+17(不明)																	「A331」「A321」記載のものにA221x	底口町教委1978
中海	小松市	縄文中期中葉～後葉	2		24											11	4																湯沢・山本ほか1987	
真脇	鳳珠郡能登町	縄文中期中葉～後葉	2													4	88																山本1986b	
真市瀬	金沢市	縄文中期中葉～後期初葉	11		6											4	11(1L)+5(不明)																増山・徳田・田村・南ほか1985	
蛸海西芳寺	小松市	縄文中期中葉～後期初葉	3		2	18										3																	岩瀬・栢田・宮田1998	
北塚(14次)	金沢市	縄文中期中葉～後期初葉	3		2	6										5	33(1L)+4(不明)																谷口1998	
長滝	能美市	縄文中期中葉～後期前葉	1		1								2			1																	金沢大考古研1976、西野ほか1987	
尾添	白山市	縄文中期中葉～後期前葉	4		29											41	5(1L)+1(不明)																	川端1983、平田ほか1977
高屋小瀬出	珠洲市	縄文中期中葉～後期前葉	1													2	2	1	1	1													平口・杉島・西柳・高瀬1976	
長滝(90年度)	能美市	縄文中期中葉～後期前葉	1																														小嶋・松山ほか1993	
上原A	加賀市	縄文中期上葉	1		3																												米澤ほか1985	
赤浦	七尾市	縄文中期後葉	2		1											1	13																杉島・西柳ほか1977	
北塚(17次)	金沢市	縄文中期後葉			1												1	1															松浦・宮川1998	
加護	珠洲市	縄文中期後葉～末主体															2(1L)+3(不明)																平口・杉島・西柳・高瀬1976	
宇出津崎山	鳳珠郡能登町	縄文中期後葉	2													41	5(1L)+127(不明)	3															川端1983(高瀬・平田ほか1982、渡辺1985a)	
北塚(15・16次)	金沢市	縄文中期後葉	4		3												11																浅野・沢田・松山・安ほか1999	
気屋	かほく市	縄文中期後葉																															山川・松田・米澤1996	
北塚(13次)	金沢市	縄文中期後葉	3		1											18	6(1L)+8(不明)																沢田ほか1994	
高波ふるや	珠洲市	縄文中期後葉	1																														平口・杉島・西柳・高瀬1976	
北塚(6次)	金沢市	縄文中期後葉			1												4																南ほか1977	
波並西の上	鳳珠郡能登町	縄文中期後葉	7		1											103	21(1L)+63(不明)	8	1														川端1983(高瀬・平田ほか1976、赤柳・加藤ほか1982、渡辺1985a)	
宮地心ひき	鳳珠郡能登町	縄文中期前中葉														2																	高瀬・加藤ほか1982	
真脇	鳳珠郡能登町	縄文中期末～後期初葉	23													18	43																	拓本で確認できるB類は全て左書き(時期は不明)、縄文前期後葉の編物出土
萩市	羽咋郡互達志水町	縄文中期～後期	1																														川畑・沢辺ほか1998	
八日市地方	小松市	縄文後期	3																														藤本・福海・宮田2003	
下開発茶白山	能美市	縄文後期初葉	1													3																	展中理文調査委・石考研1982、西野ほか1987	

遺跡名	所在地	時期	A類																備考	文献									
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	23方	その他	不明	1L			1R	1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R	
近岡(98年度)	金沢市	縄文晩期中葉 ～後葉	5					9							5	13(1L)+2 (不明)											B11の二重痕1点含む	楠・新田・向井1998	
下野	白山市	縄文晩期下野														4											B1類はA類の可能性あり、ほかA類またはB類2点あり	吉岡1971	
長竹	白山市	縄文晩期長竹	2			3		2							3	5(1L)+2(不明)												中島・藤尻1977	
真脇	鳳珠郡能登町	弥生以降	1			3		2							4	2	1											拓本で確認できるB類は全く左書き(時期は不明)、縄文前期後葉の編物出土	山本1986b(山本1989)
八日市地方	小松市	弥生前期																										橋本・福海・菅田2003	
八日市地方	小松市	弥生中期前葉 ～中葉	2													1												橋本・福海・菅田2003	
矢木シツリ	金沢市	弥生中期尖木 シツリ	1													1												増山1987	
尖木シツラ	金沢市	弥生中期小松																										増山1987	
西念・南新保	金沢市	弥生中期～後期	1													1												橋本1989	

福井県

遺跡名	所在地	時期	A類																備考	文献										
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	23方	その他	不明	1L			1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R			
井江渡	あわら市	縄文中期				3										2													楠本1986	
古宮	勝山市	縄文中期初期 ～前葉				4																							渡辺ほか1978	
浜島	福井市	縄文中期初期 ～後期中葉	1			2		1																				南1990		
北杉谷	坂井市	縄文中期新碓																										楠本1986		
小谷堂	大野市	縄文中期中葉 ～後葉主体	4																									楠本1986		
法栄山	丹生郡越前町	縄文中期中葉 ～後葉主体														2	1											楠本1986		
落合	大野市	縄文中期中葉 ～後葉	1													1												楠本1986		
角野前坂	大野市	縄文中期中葉 ～後葉														1												楠本1986		
右近次郎	大野市	縄文中期後葉 主体	2			1		2							?	1644												楠本1986		
舟津	あわら市	縄文中期～後期	1																										楠本1986	
北寺	三方上中郡 若狭町	縄文後期前半	2			3		1																					楠本1986	
鳴鹿手島	吉田郡永平寺町	縄文後期前葉 ～中葉	32			3		1							1	6												A21・A43・A882が若干存在と記載(詳細不明)、E2としたものは「藤原」と記載	楠本1986	
鹿谷本郷	勝山市	縄文後期中葉	3																										A21・A311の東倉痕1点、A21・A11・91Lの集合痕1点、A11の二重痕1点含む、Aその他は621基層の集積層か、E2としたものは「藤原」など記載	楠本1986
下永生跡	丹生郡越前町	縄文後期中葉 ～晩期中葉	2																										中山・平井ほか1977	

岐阜県

遺跡名	所在地	時期	A類																備考	文献										
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	23方	その他	不明	1L			1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R			
堂之上	高山市	縄文前期神之木																												戸田ほか1997

遺跡名	所在地	時期	A類												C類	B類				D類	E類	F類	G類	H類	備考	文献									
			221	222	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423		三方	その他	不明	1L								1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R		
			221x	222x	221/2x	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423		三方	その他	不明	1L								1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R		
堂之上	高山市	縄文前期末～中期初頭													1																				
下田	飛騨市	縄文中期主体	7	2		36		1							1	29 (1L)+5 (不明)	2 (2L)+1 (不明)?	1 (3L)+1 (不明)																	
いんべ	掛養郡掛養川町	縄文中期														4	1																		
岡前	飛騨市	縄文中期中葉～後葉	50		23	121		8							1	2 (1L)+12 (不明)	1?																		
中野山越	飛騨市	縄文中期中葉～後葉	3		6	34		1							4	4	1																		
堂之上	高山市	縄文中期中葉～末			26	34		1							17																				
牛堀内	高山市	縄文中期後半	8		1	37		5							34	34	1																		
野雀	美濃加茂市	縄文中期後半～晩期	6					3							7																				
岩井谷	掛養郡掛養川町	縄文中期後葉	1					2																											
荒吹神社	高山市	縄文中期後葉～後期中葉主体	55	6	76	112		16							2	1 (1L)+1 (不明)	1 (2L)+6 (不明)																		
上野田村平	掛養郡掛養川町	縄文中期末主体	2		2			1							4																				
中村	中津川市	縄文後期主体	25		1			292		1			1	3	236																				
高見	関市	縄文後期中葉	4																																
中野山越	飛騨市	縄文後期福之	3												1																				
西田	高山市	縄文後期中葉～末主体	72	6	6	26		175		1				7	546	1 (1L)+35 (不明)	1?																		
いんべ	掛養郡掛養川町	縄文後期～晩期			1																														
牛堀内	高山市	縄文後期主体	8	3	4	3		109		6					2																				
中切	草加市	縄文晩期						1																											
野雀	美濃加茂市	弥生中期初頭																																	

特別展

遺跡名	所在地	時期	A類												C類	B類				D類	E類	F類	G類	H類	備考	文献								
			221	222	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423		三方	その他	不明	1L								1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R	
			221x	222x	221/2x	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423		三方	その他	不明	1L								1R	2L	2R	3L	3R	4L	4R	
仲道A	伊豆の国市	縄文草創期多																																
平野山	賀茂郡松崎町	縄文系																																
押出少	三島市	縄文中期加曾和						1																										
善福寺	菊川市	縄文中期～後期			3			1																										
松林A	三島市	縄文後期初頭～中葉	1		3			2							5																			
前山	浜松市	縄文後期初頭～晩期前葉	1		1			1							2																			
蛸塚(3次)	浜松市	縄文後期前葉																																

付表7 中国新石器時代・朝鮮新石器時代の「敷物圧痕」資料一覧表

※1.本表は、本編の分析対象とした中国新石器時代・朝鮮新石器時代の敷物圧痕(資料)の情報を、地方・行政区(省・自治区・道)・遺跡・時期ごとに整理したものである。
 ※2.表の体裁・記載方法については、付表6に準じる。

**1. 中国東北地方
内蒙古自治区**

遺跡名	所在地	時期	A類										B類				C類	D類	E類			F類	G類	H類	備考	文献								
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	3方	その他			不明	1L	1R						2L	2R	3L	3R	4L	4R	1	2
西水泉	赤峰市	新石器中期 紅山(前期~中期)		2										1																			Aその他はA模様の2(山形縁紋)	中国社科院考古研究所内蒙古隊1982
大沁他拉	通辽市奈曼旗	新石器中期/後期 紅山(前期~後期)		1																													朱1979	
那斯台	巴林右旗	新石器中期/後期 紅山(前期~後期)																							1								巴林右旗博物館1987	
紅山後	赤峰市	新石器中期/後期 紅山(前期~後期)		4																													瀋田・水野1938	

**2. 華北・華中地方
山東省**

遺跡名	所在地	時期	A類										B類				C類	D類	E類			F類	G類	H類	備考	文献								
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	3方	その他			不明	1L	1R						2L	2R	3L	3R	4L	4R	1	2
北辛	濰州市濰州	新石器中期 辛	5																														Aその他はA×4+2	中国社科院考古研究所山東隊・山東省龍興博物館1984
陶上村	濰州市濰州	新石器後期 大汶口(中期)																							1								山東省博物館1963	
西夏侯	曲阜市	新石器後期 大汶口(中~後期)																							20								中国社科院考古研究所山東隊1986 大汶口後期のものが多く、2次遷移(中国社科院考古研究所山東隊1986)でもおなじみ(図なし・敬義不明)	
大汶口	泰安市	新石器後期 大汶口(後期)																							2								山東省文物管理處・濟南博物館1974	
六里井	兗州市	新石器後期 大汶口(後期)																							1								国家文物局考古隊隊務訓練班1999	
西吳寺	兗州市	新石器後期 大汶口(後期)																							14								国家文物局考古隊隊務訓練班1990	

河北省

遺跡名	所在地	時期	A類										B類				C類	D類	E類			F類	G類	H類	備考	文献								
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	3方	その他			不明	1L	1R						2L	2R	3L	3R	4L	4R	1	2
磁山	邯鄲市武安	新石器前期 磁山																																邯鄲市文物管理處・邯鄲地區磁山考古隊1977
磁山	邯鄲市武安	新石器前期 磁山																																河北省文物管理處・邯鄲市文物保護隊1981
磁山	邯鄲市武安	新石器前期 磁山																																B2Lのうち1点は一部疑似土織
下澗汪	邯鄲市磁縣	新石器後期 磁山																																A不明としたものはA111の可能性あり

河南省

遺跡名	所在地	時期	A類										B類				C類	D類	E類			F類	G類	H類	備考	文献										
			221	221x	221/2	111	111x	211	332	331	331x	321	322	423	3方	その他			不明	1L	1R						2L	2R	3L	3R	4L	4R	1	2	1	2
賈湖	濮州市開封	新石器前期 裴李崗																																	B2RはR+L集合の可能性あり	河南省文物考古研究所1999
三里橋	三門峡市陝	新石器中期 仰韶(三里橋)																																	中国社科院考古研究所1959	
下王廟	南陽市淅川	新石器中期 仰韶(下王廟)																																	Aその他はA32/345	

付表8 日本列島先史時代の縄代圧痕素材 一覧表

※1.本表は、本論の分析対象とした日本列島先史時代の主要縄代圧痕の素材(a×e×1.硬質、2.軟質)を、地方・都道府県・遺跡・時期ごとに整理したものである。
 2.所在地については、できる限り最新の行政区分に合わせた。
 3.素材については、ほとんどの遺跡の場合、拓影・写真が掲載されている分しか確認できないため、数量は示していない。

1. 北海道地方

北海道

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
八千代A	神代市	縄文早期沼尻					d2?									北沢ほか1990
小岱	檜山郡上ノ国町	縄文中期中葉～後葉				c2										鬼柳ほか1986
新道4	上磯郡木古内町	縄文後期前葉				c2										葛西ほか1986
原歌(S地点)	檜山郡上ノ国町	縄文後期前葉				c2										松崎・長内・福田1998
大津	松前郡松前町	縄文後期大津				c2										斉藤1974

2. 東北地方

青森県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
沢部Ⅱ号	弘前市	縄文前期円筒下層a				c2										村越ほか1974
小敦野	青森市	縄文中期				c2・d2										児玉1998
富ノ沢(2) (74年度)	上北郡六ヶ所村	縄文中期中葉～後期初頭				c2										北林1975
西山	三戸郡南部町	縄文中期後半～後期前半				c2・d2								c2		白鳥・成田1991
富ノ沢(1)	上北郡六ヶ所村	縄文中期後葉～後期初頭				c2										成田・奈良ほか1991
富ノ沢(2) (88年度)	上北郡六ヶ所村	縄文中期後葉～後期初頭				b2・c2・d2										成田・奈良ほか1991
野場(5)	三戸郡陸上町	縄文中期後葉～後期初頭				b2・c2・d2								c2		島山・成田・三浦1993
泉山	三戸郡三戸町	縄文中期円筒上層e				c2・d2										市川1976
三内丸山 (第6発掘)	青森市	縄文中期末主体				b2・c2										小笠原ほか2000
隅無(4)	五所川原市	縄文中期最花				c2										木村・坂本1997
最花	むつ市	縄文中期最花				c2										橋ほか1978
三内	青森市	縄文中期～後期				c2										桜田ほか1978
上田	上北郡七戸町	縄文中期末～後期初頭				c2										秦ほか1996
三内丸山 (8・9次)	青森市	縄文中期末～後期初頭				c2										岡田・中村・齊藤・小笠原2002
千歳(13) (73年度)	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期初頭				c2										三浦1974
千歳(13) (75年度)	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期初頭				c2								c1・c2		成田ほか1976
原原種農場	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期初頭				c2										北林ほか1973
富ノ沢(2) (89年度)	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期前葉				b2・c2・d2										三宅・天間・鈴木ほか1991
餅ノ沢	西津軽郡 鮎川町	縄文中期末～後期前葉	d2			c2・d2								d2		太田原・野村2000
弥栄平(6)	上北郡六ヶ所村	縄文中期末～後期前葉	d2			c2								c2		工藤・木村1991
大石平(1)	上北郡六ヶ所村	縄文後期				c2										北林1975
上牡丹森	南津軽郡大鰐町	縄文後期				b2・c2								a1		福田・羽柴ほか1986
隅無(4)	五所川原市	縄文後期				c2										木村・坂本1997
弥栄平(8)	上北郡六ヶ所村	縄文後期初頭				c2										工藤・木村1991
八雲久保(2)	三戸郡五戸町	縄文後期初頭～前葉				a1・c2										中村1997
館平	八戸市	縄文後期十腰内I主体				c2										渡1998
古街道長根	三戸郡五戸町	縄文後期十腰内I				c2										吉市ほか1976
壱沢	西津軽郡 鮎川町	縄文後期十腰内I				c2										三浦ほか1990
戸沢	むつ市	縄文後期前半				c2										神1999
西山	三戸郡南部町	弥生後期念仏間					c2									白鳥・成田1991

岩手県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
経塚森	花巻市	縄文前期初頭～前葉									a1					金子・藤村1992
牧田	陸前高田市	縄文前期中葉～後葉主体	c2	c2		d2		b2							c2	村上・佐々木1996
石曾根	北上市	縄文中期初頭～中葉				c2		d1						a1		佐々木・小田野・酒井1992
本郷	北上市	縄文中期初頭～中葉				c2		a1・b2								酒井・小田野1992
上村	宮古市	縄文中期中葉～後葉	a1			b2・c2・d2		e1								鈴木ほか1991
倍田Ⅳ	岩手郡岩手町	縄文中期後葉～未主体				c2										神・斎藤・藤村1994
館Ⅳ	北上市	縄文中期後葉～未主体				d2		c2				a1				佐々木1993
大畑Ⅱ	下閉伊郡山田町	縄文中期後葉～未主体				c2										渡辺・酒井1995
下館銅屋	一関市	縄文中期後葉～後期初頭	c2	c2		c2		a1・b2・c2・d2・e1	a1・c2	a1		d2				松本1999
館石野Ⅰ	下閉伊郡田野畑村	縄文中期後葉～後期前葉				c2・d2										菊池・岡内・高橋・山本ほか1997
戸名沢Ⅰ	盛岡市	縄文中期末～後期		c2		c2・d2										村上・熊谷1999
柳上	北上市	縄文中期末～後期初頭主体				c2		b2・c2								小原1995
江刺家	九戸郡九戸村	縄文中期末～後期前葉				c2										田鎖ほか1984
馬立Ⅱ	二戸市	縄文中期末～後期前葉				c2・d2									c2	菊池・酒井・高橋1988
本内	北上市	縄文中期大木10				c2										菊池・金子・高橋1998
本内Ⅱ	和賀郡西和賀町	縄文中期～後期				c2・d2		a1・b2・c2		a1				a1		星・阿部・高橋1998
榎の木	二戸郡一戸町	縄文後期				c2・d2										吉田・高橋1997
尿前Ⅱ(A地区)	奥州市	縄文後期				c2・d2		d2	b2・d1							酒井1999
寺久保	二戸市	縄文後期初頭				c2	c2									金子・高橋1996
青ノ久保	二戸市	縄文後期初頭～前葉				c2										中村1987
馬立Ⅰ・太田	二戸市	縄文後期初頭～前葉				c2									c2	田鎖1988

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
才津沢	盛岡市	縄文後期前葉主体				c2										金子・高橋・金子1998
平沢 I	久慈市	縄文後期前葉				c2										金子・高橋1997
門前	陸前高田市	縄文後期前葉						a1								神原2009
萩内	盛岡市	縄文後期前葉				d2										工藤1982
間洞 II	盛岡市	縄文後期前葉~中葉	a1			c2										木戸口1997
長谷堂	大船渡市	縄文後期新山権現社3						d1								金子・阿部・工藤1999
上甲子	大船渡市	縄文後期中葉~弥生前期初頭		a1		d2		b2・d1	d1							大道・高橋1997
上八木田 III	盛岡市	縄文後期~晩期	d2			b2・c2・d2		b2・d2			e					平井1992
本内 II	和賀郡西和賀町	縄文晩期	a1					d2		a1						星・阿部・高橋1998
長谷堂	大船渡市	縄文晩期後葉~弥生前期主体								a1						金子・阿部・工藤1999
石曾根	北上市	弥生前期							e1							佐々木・小田野・酒井1992
上村	宮古市	弥生前期	e1			d2					e1					鈴木ほか1991
上甲子	大船渡市	弥生中期							e1							大道・高橋1997

宮城県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
中ノ内A	柴田郡川崎町	縄文中期大木7			a1	c2		a1						a1		宮城県教委1987
6反田	仙台市	縄文中期末~後期初頭	a1			d2		a1・c2・e1		a1・e1				a1・c1・c2		松岡1981
大谷地	加美郡色麻町	縄文中期末~後期前葉主体			c2			c2						c1		茂木ほか1984
農学寮跡	仙台市	縄文中期末~後期前葉						d2						c1		吉川1982
二星敷	刈田郡蔵王町	縄文中期末~後期前葉	d2			c2		a1・b2・c1・c2・d1・d2	a1・c2					a1・c1・c2		加藤・阿部・小徳1984
西林山	柴田郡川崎町	縄文後期						d1・d2・e1								宮城県教委1987
山口	仙台市	縄文後期前葉						b2								田中1984
東足立	柴田郡村田町	縄文後期金剛寺						d1	d2							黒川ほか1981
山口	仙台市	縄文晩期				d		d1								田中1984
東足立	柴田郡村田町	縄文晩期大洞B						d1								黒川ほか1981
里浜(西畑)	東松島市	縄文晩期大洞C2						e1								藤沼ほか1983
高田B	仙台市	弥生中期崩形遺						d1								高橋・古川ほか1994

秋田県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
桐内C	北秋田市	縄文中期前葉~後期前葉				d2										河田2000
森吉家/前A	北秋田市	縄文中期中葉~末				d2										山本・菅原ほか2006
奥棒信	秋田市	縄文中期後葉~末主体						d2							c2	藤原・藤本2000
上熊ノ沢	にかほ市	縄文中期後葉~弥生前期				c2		a1						c2	c2	武藤・和泉1991
上熊ノ沢	にかほ市	縄文中期末~後期前葉				a1・c2		a1								武藤・和泉1991
桐内D	北秋田市	縄文中期末~後期初頭主体				c2									c2	牧野・吉田2001
大湯	鹿角市	縄文後期				c2・d2		b2							c1・?	秋田県教委1975
深渡	北秋田市	縄文後期				c2										菅野・榮・三浦2006
小田IV	横手市	縄文後期初頭	a1・d2													栗澤・高橋・榮1994
湯前(1次)	仙北市	縄文後期前葉主体				c2		e								藤澤1999
湯前(2次)	仙北市	縄文後期前葉主体				c2・d2		d1								松本・伊藤2000
森吉家/前A	北秋田市	縄文後期十腰内 I				b2										山本・菅原ほか2006
盛上	横手市	縄文後期中葉				c2・d2		b2								工藤ほか1993
中小坂	鹿角郡小坂町	縄文後期~晩期				d2		e1								武藤・栗澤1988

山形県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
押出	東置賜郡高島町	縄文前期大木4	a2	a1・c2		c2										佐々木・佐藤ほか1990
原の内A	尾花沢市	縄文中期前葉~中葉				c2										佐藤・志田1983
山居	西村山郡西川町	縄文中期中葉~後葉主体	a1・d2・e1			c2・d2		a1・c2・d1・e1								氏家・志田1998
上平柳	東置賜郡高島町	縄文中期大木8a						e1								佐々木1971
野新田	鶴岡市	縄文中期大木8b主体	c2			c2		d1								伊藤・黒坂1996
津谷	最上郡戸沢村	縄文後期初頭~前葉主体	a1						a1	e1						小関・渡辺1997

福島県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
八方塚A	福島市	縄文前期					c2									山内・佐藤ほか1999
網取	いわき市	縄文前期前葉~中期前葉		d2		c2	c2									佐藤・山崎1996
冨宮西	大沼郡津美里町	縄文前期中葉~後葉主体		a1・e1				c2								芳賀・丹野1990
仲ノ縄B	田村市	縄文前期中葉~後葉	a1	d2・e1		a1・c2		c1・c2								山岸・松本・七海・高橋1993
羽白D	相馬郡飯館村	縄文前期中葉~後葉		a1		a1										鈴鹿ほか1987
小屋館	福島市	縄文前期大木5a					c2									山岸ほか1999
八方塚A	福島市	縄文中期		a1・c2		a1・c2		a1・d1						a1・c1		山内・佐藤ほか1999
弓手原A(1次)	福島市	縄文中期				a1		a1・c2・d2								山内・阿部・佐藤ほか1996
大畑	いわき市	縄文中期中葉~後葉						c2・d1		a1						馬目ほか1975
上ノ台A	相馬郡飯館村	縄文時代中期後葉~後期						d1						a1・c1		鈴鹿ほか1990
小屋館	福島市	縄文中期~後期						d1								山岸ほか1999
獅子内(1次)	福島市	縄文後期				d2										鈴鹿ほか1996
獅子内(2次)	福島市	縄文後期	a1					c2・d1・d2								鈴鹿ほか1997
獅子内(3次)	福島市	縄文後期	a1					d1・d2								鈴鹿ほか1998
弓手原A(1次)	福島市	縄文後期	d2	a1・e1				d1・d2・e1								山内・阿部・佐藤ほか1996
弓手原A(2次)	福島市	縄文後期	a1・c2・d2	c2				a1・d1・d2	e1							山内・鹿目・土井ほか1992
八方塚A	福島市	縄文後期		a1				d1・d2						a1		山内・佐藤ほか1999
羽白D	相馬郡飯館村	縄文後期						d1・d2								鈴鹿ほか1987

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
大畑	いわき市	縄文後期前葉～中葉						d1・d2								馬目ほか1975
荒小路	郡山市	縄文後期前葉～中葉	a1・d2			c2		a1・b2・c2・d1・d2・e1	a1	a1						山内ほか1985
山田	会津若松市	縄文後期加曾利B						d1・e1								石田・平吹1999
相子島	いわき市	縄文後期～晩期	c2	c2				a1・d1・d2・e1								木幡ほか1997
久世原館・番匠地	いわき市	縄文後期～晩期	c2	a1				c1・c2・d1・d2・e1	c1・c2・d1・d2・e1			a1・c2				高島・木幡1993
弓手原A(3次)	福島市	縄文後期～晩期						d1								山内・土井・佐藤1998
小屋館	福島市	縄文晩期						d1								山岸ほか1999
獅子内(1次)	福島市	縄文晩期						d1・d2								鈴鹿ほか1996
獅子内(2次)	福島市	縄文晩期						d2								鈴鹿ほか1997
獅子内(3次)	福島市	縄文晩期前半						d1・d2								鈴鹿ほか1998
荒屋敷	大沼郡三島町	縄文晩期大洞A						e1								小柴ほか1990
荒屋敷	大沼郡三島町	縄文晩期大洞A'主体						d1・d2・e1								小柴ほか1990
山田	会津若松市	弥生前期初頭						d1								石田・平吹1999

3. 関東・甲信越地方

茨城県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
志杯清水西	土浦市	縄文中期阿玉台	a1													黒澤・関口・駒澤1997
前谷	土浦市	縄文中期前半主体				a1・d2		a1・e1				c2				関口ほか1998
小山台	つくば市	縄文後期主体	a1			a1		a1・d1・e1								永松・斎藤・渡辺1976
上高津貝塚(A地点)	土浦市	縄文後期前葉～中葉	a1・c2					a1・c2・d1・d2・e1		a1						佐藤・大内ほか1994
上高津貝塚(B地点)	土浦市	縄文後期前葉～中葉			a1			d2								Akazawa1972
福田(神明前)	稲敷市	縄文後期前葉～晩期前葉	a1	a1・e1				a1・e1			a1・e1	e1				渡辺1991a
上高津貝塚(B地点)	土浦市	縄文後期後葉～晩期前葉						d1・e1								Akazawa1972
法堂	稲敷郡美浦村	縄文晩期初頭～中葉						e1								戸沢・半田1966
広畑	稲敷市	縄文晩期前葉～中葉						e1								藤本1988
北原	筑西市	弥生中期前半						d1								石川2004

栃木県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
品川台	大田原市	縄文中期前葉～中葉	c2			d2		a1・c2・e								塚本1992
三輪仲町	那須郡那珂川町	縄文中期前葉～後期前葉		a1		c2	a1	c2・d1・d2		a1				a1		塚原・後藤・安永1994
御堂前	芳賀郡益子町	縄文中期前半～後期中葉主体	a1	a1・c1?				a1・c2・d1・d2・e1								新藤・合田・後藤2000
安塚坂下	下都賀郡壬生町	縄文中期阿玉台		a1				d1・e1								中村1996
台耕上	宇都宮市	縄文中期阿玉台IV		c2				d2								上野・今平1998
浄法寺	那須郡那珂川町	縄文中期中葉主体						a1・d2・e1								塚本1997
寺野東(土坑)	小山市	縄文中期中葉～後期前半		a1		c2		a1・d1・d2								江原ほか1999
台耕上	宇都宮市	縄文中期加曾利E I						d								上野・今平1998
台耕上	宇都宮市	縄文中期加曾利E II								c2						上野・今平1998
寺野東(環状盛土遺構・水場遺構)	小山市	縄文後期主体	a1・d2					a1・d1・d2・e1		a?						江原ほか1997
金沢	宇都宮市	縄文後期						d								上野・今平1998
浄法寺	那須郡那珂川町	縄文後期中葉						a1・d1								塚本1997

群馬県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
糸井宮前	利根郡昭和村	縄文前期後半	a1					d1・d2								谷藤・関根ほか1987
新堀東源ヶ原	安中市	縄文前期末～中期	c2	c2・e1		c2		c2・d2								大賀・千田・長谷川ほか1997
白井大宮Ⅱ	渋川市	縄文中期前葉～中葉						e1								山口ほか2002
白川傘松	高崎市	縄文中期後半	a1			a1		a1・c2・d1・e1		a1						関根1998
八寸大道上	伊勢崎市	縄文中期加曾利E						d2				a1				坂井・原1989
内匠上之宿	富岡市	縄文中期後葉～後期前葉主体	a1			d2		a1・d1・e1								新井1993
仁田	安中市	縄文中期～後期						a1・c2・d1・d2								大江ほか1990
深沢	利根郡みなかみ町	縄文後期主体	a1・c2	c2				a1・c2・d1・d2・e1								下城・女屋1988
糸井宮前	利根郡昭和村	縄文後期						a1・c2・d1・d2		a1						谷藤・関根ほか1987
暮井	安中市	縄文後期	a1	a1				a1・c2・d1・d2								大江ほか1990
行田梅木平	安中市	縄文後期	a1・c2			d2		a1・c2・d1・d2・e1	d2	a1						関宮1997
南蛇井増光寺	富岡市	縄文後期称名寺	c2													小野・大木・櫻井1997
五科野ヶ久保	安中市	縄文後期前葉～後葉	a1			d2		a1・c2・d1・d2	c2・d2							福山・松田・桐谷1997
上栗須楽師裏	藤岡市	縄文後期前葉						c2・d1・d2								石塚1995
馬場東矢次Ⅱ	前橋市	縄文後期加曾利B主体	a1					a1・c2・d1・d2・e1			c2					原田・水田・徳江ほか2000
南蛇井増光寺	富岡市	縄文後期加曾利B						c2・d1								小野・大木・櫻井1997
八寸大道上	伊勢崎市	縄文後期加曾利B2						d1								坂井・原1989
南蛇井増光寺	富岡市	縄文後期曾谷	c2					a1・d1								小野・大木・櫻井1997
行沢大竹	富岡市	縄文後期～晩期	a1	a1	c2	d2		a1・c2・d1・e1	c2			c2				飯田1998
五日牛清水田	伊勢崎市	縄文後期～晩期	a1・c2			c2・d2		a1・c2・d1	d1	a1	a1					藤巻ほか1993
三ヶ倉落合	高崎市	縄文後期後葉	a1					a1・c2・e1	c2	a1・c2	c2					井川・大越ほか1997
新堀東源ヶ原	安中市	弥生														大賀・千田・長谷川ほか1997
神保富士塚	高崎市	弥生中期	a1・c2	a1・d2・e1		c2	d2	c2・d2	c2		c2・d2	a1				小野1993

埼玉県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
打越	比企郡滑川町	縄文草創期瓜形文		d2?												木村・中島1988
在家	上尾市	縄文前期後葉	a1													細田ほか1991
二反田	日高市	縄文中期加曾利E						e1								岡本・金子・赤熊1993
樋ノ下	大里郡寄居町	縄文後期主体	a1	c2・d2				a1・c2・d1・e1		a1						細田・岩田1994
赤城	鴻巣市	縄文後期初頭～晩期中葉	a1・c2	d1・d2		d2		a1・c2・d1・d2・e1	a1・c2・d1	a1						新屋1988
上組II	川越市	縄文後期初頭～前葉	a1					d1		a1		a1				黒坂1989
中三谷	鴻巣市	縄文後期初頭～前葉	a1					a1・d1・e1								富田・細田1989
入波沢西	秩父市	縄文後期初頭～中葉						a1・d1・d2		a1						渡辺清2000
入波沢東	秩父市	縄文後期初頭～中葉						d1・d2	d1							渡辺清2000
高井東	川越市	縄文後期初頭～晩期前葉	a1・c2・e1	a1・d1		a1・b2・d1・d2		a1・d1・e1		a1・e1	?	a1				吉川1974
石神	川口市	縄文後期前葉～中葉	a1	a1				a1・d1・e1								新屋2000
新屋敷東	深谷市	縄文後期前葉～晩期前葉	a1・d2					e2・d1・e1								田中・新屋・小野1992
雅楽谷	蓮田市	縄文後期前葉～晩期中葉	a1・c2・e1	a1・c1・d2	a1	a1・d2		a1・c2・d1・d2・e1	d2	a1・c1・e2		a1・c2・e1				橋本1990
宮原	狭山市	縄文後期堀之内主体	a1					d1								石塚2007
打越	富士見市	縄文後期堀之内	a1					a1・d1・e1								荒井・佐々木・小田ほか1978
修理山	加須市	縄文後期堀之内2主体	c2					d1・d2								吉田1995
神明	さいたま市	縄文後期堀之内2	a1					d1		a1						細田ほか1987
原ノ谷戸	深谷市	縄文後期中葉～晩期中葉	a1・c2	a1・c1・d2	a1			a1・c2・d1・d2・e1		a1・c2						村田1993
四本竹	さいたま市	縄文後期加曾利B	a1					e1		a1						田中・新屋1992
寿能	さいたま市	縄文後期加曾利B	a1・c1・e1	a1・e1		a1・c1・d1・e1		a1・c1・d1・e1	d1		a1	a1・c1				吉川1984
松の外	入間郡毛呂山町	縄文後期加曾利B	a1					d1・e1	c2・d1							村木ほか1987
石神	川口市	縄文後期安行～晩期安行						d・e1								新屋2000
寿能	さいたま市	縄文後期安行						c1・e1								吉川1984
ささら	蓮田市	縄文後期～晩期	a1					d1・d2・e1		a1						橋本ほか1985
上敷免	深谷市	縄文後期～晩期	a1・c2	a1?		?		a1・c2・d1・e1		c2		?				瀧瀬ほか1993
上敷免北	深谷市	縄文後期～晩期	a1	d2				d1・e1		a1						水戸2000
在家	上尾市	縄文晩期大洞A						e1								細田ほか1991
上敷免	深谷市	弥生中期須和田主体						d1・e1								瀧瀬ほか1993
池上西	熊谷市	弥生中期須和田	a1・c2	c2				d1・e1		a1						宮1983
前中西	熊谷市	弥生中期後半～後期						d1								吉野2002
北島	熊谷市	弥生中期後葉						e1								吉田2003

千葉県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
水砂	柏市	縄文中期	a1			a1・c2・d2										清藤・田中ほか1982
中山新田I	柏市	縄文中期阿玉台	a1					d1								原田ほか1986
新橋	富里市	縄文中期阿玉台						a1・e1								戸田ほか1978
栗野I・II	佐倉市	縄文中期阿玉台I		c2				d2								山口・上野・田島1991
中山新田I	柏市	縄文中期勝坂I	c2													原田ほか1986
池花	四街道市	縄文中期加曾利E						e1								渡辺1991
海保野口	市原市	縄文中期加曾利E	a1					a1・d1・e1		c2						森本・新田・川島1998
中野僧御堂	千葉市	縄文中期後葉～晩期中葉	a1・e1					a1・b2・d1・d2・e1		a1		a1				中村・齋木ほか1977
能満上小	市原市	縄文中期後葉～晩期中葉	a1・e1					a1・c2・d1・d2・e1		a1		a1				忍澤1995
加曾利	千葉市	縄文後期主体				c2		c2・d1								古内1986
身内	成田市	縄文後期主体	a1					d								鈴木・小林1985
善田高田	千葉市	縄文後期主体				d2		a1・e1								出口1991
祇園原	市原市	縄文後期初頭～晩期前葉	a1・c2	a1・c2・d2	d2	c2・d2		a1・c2・d1・d2・e1				a1				忍澤1999
寺ノ代	君津市	縄文後期前葉～中葉主体	a1・e1					a1・d1・e1								小林・高梨2001
山田橋亥の海道	市原市	縄文後期前葉～中葉	a1					a1・b2・e1								忍澤1992
大寺山(5次)	館山市	縄文後期前葉～中葉						d1								岡本・内田ほか1997
奈木台第6	千葉市	縄文後期前葉～中葉						d2								中山ほか1979
矢作	千葉市	縄文後期前葉～晩期中葉	a1					a1・c2・d1・e1				a1				清藤1981
上新宿	流山市	縄文後期堀之内	a1					e1								岡田1995
伊藤白幡	印旛郡酒々井町	縄文後期堀之内1				c2		d1・e1								高橋・三浦・宮城・田島1986
奈木台第5	千葉市	縄文後期中葉						d2								中山ほか1979
池花南	四街道市	縄文後期加曾利B						e1								渡辺1991
岩名第14	野田市	縄文後期加曾利B						e1								岡田・落合1994
大寺山(3・4次)	館山市	縄文後期加曾利B						d1								岡本・押野ほか1996
御山	四街道市	縄文後期加曾利B	a1					d1・e1								渡辺・矢木1994
菊間手永	市原市	縄文後期加曾利B	a1					a1・d1・d2・e1		a1						近藤ほか1987
千代田	四街道市	縄文後期安行主体	a1			a1		a1・d1・e1	a1							米内・宮入1972
菊間手永	市原市	縄文後期安行～晩期安行	d2					d1								近藤ほか1987
東金野井	野田市	縄文後期安行～晩期安行						e1								安井1994
余山	銚子市	縄文晩期中葉～弥生前期初頭	a1・c2・e1	c2				c2・d1・d2								新田・石橋1991
荒海(2次)	成田市	縄文晩期後葉～末主体		d1												西村1975
御山	四街道市	縄文晩期末						e1								渡辺・矢木1994
常代	君津市	弥生中期	a1・c2・e1	a1		c2		d1								甲斐ほか1996

東京都

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A3方	文献
丸山東	練馬区	縄文前期前半				a1										荻澤・鶴沢・安達1995
多摩ニュータウン No.872	稲城市	縄文中期	a1													岩橋・鶴間ほか1989
多摩ニュータウン No.380	稲城市	縄文中期前半		a1												千野ほか1989
貫井南	小金井市	縄文中期初頭～前 葉	a1							a1						伊藤1980
木曾中学校	町田市	縄文中期初頭～前 葉	a1・c2	a1		a1		a1・d1								渡辺・川口・池田・大森ほか1983
神谷原	八王子市	縄文中期初頭～中 葉	a1	a1・e1		a1	a1	a1		a1		a1				嶋1982
多摩ニュータウン No.469・470	稲城市	縄文中期初頭～中 葉		c2												栗木・松崎・伊藤1989
多摩ニュータウン No.471	稲城市	縄文中期初頭～中 葉	a1	a1・c1		a1・c2・ d2・e1		a1		a1	c1	a1				小栗ほか1993
北北	練馬区	縄文中期五領ヶ台	a1・c2・d2	a1												川辺ほか1996
北江古田	中野区	縄文中期五領ヶ台		c2												滝口ほか1987
多摩ニュータウンNo.7	稲城市	縄文中期五領ヶ台	a1			a1				a1						川崎・小坂井・千野・小 栗1981
多摩ニュータウン No.382	稲城市	縄文中期五領ヶ台	a1													川田・江里口・石橋ほか 1984
多摩ニュータウン No.383	稲城市	縄文中期五領ヶ台		a1						a1						川田・江里口・石橋ほか 1984
丸山東	練馬区	縄文中期五領ヶ台								a1						荻澤・鶴沢・安達1995
駒沢学園校地内	稲城市	縄文中期五領ヶ台II	a1													呉地1989
等々力根	世田谷区	縄文中期前葉～後 葉	a1	a1		c2						a1				寺田ほか2000
多摩ニュータウンNo.3	稲城市	縄文中期前葉～中 葉	a1・c2			a1										小栗・丹野・千野ほか 1982
落越	八王子市	縄文中期前葉				c2										新聞・高梨ほか1992
北江古田	中野区	縄文中期阿玉台	c2													滝口ほか1987
駒沢学園校地内	稲城市	縄文中期阿玉台	a1					a1・d1								呉地1989
下野谷	西東京市	縄文中期阿玉台	a1・c2・e1	d2				a1・c2・d1・ e1		a1・e1						柳谷ほか1998
等々力原	世田谷区	縄文中期阿玉台		c2				d2								寺田ほか2000
北江古田	中野区	縄文中期勝坂	a1													滝口ほか1987
多摩ニュータウン No.722	八王子市	縄文中期勝坂						d								山口・今井・鶴間ほか 1982
等々力原	世田谷区	縄文中期勝坂	a1			c2				a1						寺田ほか2000
多摩ニュータウン No.939	町田市	縄文中期中葉～後 葉	a1			a1		a1・c2・d1・ e1		a1						原川・松井・及川2002
御殿山	三鷹市	縄文中期後半						e1								下原・加藤ほか1989
多摩ニュータウン No.245	町田市	縄文中期後半～後 期前半	e1					c2・d1・d2				c2				山本・川島・及川・五十 嵐1998
多摩ニュータウン No.341	町田市	縄文中期加曾利EII						e1								山本・川島・及川・五十 嵐1998
多摩ニュータウン No.519	多摩市	縄文中期～後期	c2													小島・甲崎ほか1981
愛宕下	練馬区	縄文後期	a1													都築ほか1992
多摩ニュータウン No.339	町田市	縄文後期	a1					c2・d1								川島・山本・大西2000
徳丸東	板橋区	縄文後期	a1													秋山ほか1992
日暮里延命院	荒川区	縄文後期	a1・c2			d		a1・d1・e1		a1・c2		a1・c				菅谷ほか1990
多摩ニュータウン No.388・389・431	八王子市	縄文後期前半						d2								石橋・齋藤ほか1987
城山	練馬区	縄文後期初頭～前 葉	a1・c2					d1		a1						菊池ほか1994
北江古田	中野区	縄文後期称名寺						d2								滝口ほか1987
落越	八王子市	縄文後期前葉						d2								新聞・高梨ほか1992
綾部原	町田市	縄文後期前葉～中 葉	a1	a1				d1・d2・e1								吉田ほか1998
多摩ニュータウン No.426	八王子市	縄文後期前葉～中 葉	a1					d2								今井・丹野・佐藤ほか 1989
袋低地(1次)	北区	縄文後期前葉～中 葉	c2					e1	a1							小林・實川・村松ほか 1992
下宅部	東村山市	縄文後期前葉～晩 期中葉	a1・c2・e1	a1	a1	a1・d2		a1・c2・d1・ d2・e1	d2	a1						千葉・石川・小川・秋本ほか 2006
赤塚大塚原	板橋区	縄文後期堀之内						a1・d1・e1								小林・宮尾1992
丸山東	練馬区	縄文後期堀之内	a1													荻澤・鶴沢・安達1995
四葉地区	板橋区	縄文後期堀之内	a1・c2			c2		a1・c2・d1・ d2・e1		a1		a1				小林・山村・松尾1994
北江古田	中野区	縄文後期堀之内1				c2		c2・e1		c2						滝口ほか1987
弁天池	練馬区	縄文後期堀之内2主 体	a1・c2					d2								川本ほか1989
北江古田	中野区	縄文後期堀之内2	c2	a1				c2・d1・d2・ e1	e1	c2		c2				滝口ほか1987
井の頭池(C地点)	三鷹市	縄文後期堀之内2						d		c2						吉田ほか1989
多摩ニュータウン No.950	町田市	縄文後期堀之内2	a1					d								五十嵐ほか1995
貫井南	小金井市	縄文後期堀之内2						d1								伊藤1980
多摩ニュータウン No.482	稲城市	縄文後期中葉						d1								小坂井ほか1981
松原	世田谷区	縄文後期加曾利B主 体	a1					d1・e1								水沢ほか1979
北江古田	中野区	縄文後期加曾利B	a1・c2				a1	c2・d1・d2・ e1	c2・e1	a1・c2						滝口ほか1987
多摩ニュータウン No.863	稲城市	縄文後期加曾利B						d1・e1								石橋・齋藤ほか1987
平尾No.9	稲城市	縄文後期加曾利B	a1・c2	a1		a1・d?		c2・d1・e1		c2		c2				安孫子1971
四葉地区	板橋区	縄文後期加曾利B	a1・d2			d?		c2・d1・d2								小林・山村・松尾1994
下石原	調布市	縄文後期後半	a1・c2					a1・d1・e1								生田1987
多摩ニュータウン No.591	八王子市	縄文後期～晩期						d2								小島・甲崎ほか1981
袋低地(2次)	北区	縄文後期～晩期	a1・c2					d1・e1				a1				山口ほか2001
南広間地	日野市	縄文後期～晩期				d2		d2								和田・中島ほか1996

神奈川県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A3方	文献
あざみ野	横浜市	縄文前期末～ 中期初頭		c2							d2					小西ほか1986
大入	伊勢原市	縄文中期五領ヶ台				a1										小林ほか1984
金沢文庫	横浜市	縄文中期五領ヶ台	a1・c2	e1		a1		a1・e1								山本・服部・谷口1988

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
鶴巻上ノ窪 (No.25上)	秦野市	縄文中期五領ヶ台	a1	d2				e1		c2						木村・柏木1998
竹鼻	横浜市	縄文中期前葉～中葉	a1							a1						追ほか1986
鶴巻上ノ窪 (No.25上)	秦野市	縄文中期阿玉台	d													木村・柏木1998
殿屋敷 (C地区)	横浜市	縄文中期阿玉台1b	a1													戸田・田村・麻生ほか1985
吉岡	綾瀬市	縄文中期勝坂2						d1・e1								小宮山・阪本・砂田ほか1997
真田大原	秦野市	縄文中期後半						c2・d1								近藤・秋田・桑折ほか1990
相模原市No.27	相模原市	縄文中期中葉～後葉						c1								三ツ橋1996
川尻	相模原市	縄文中期曾利				c2										加藤・小川・伊丹2000
北原 (No.10・11北)	愛甲郡清川村	縄文中期曾利						c2・d2								市川・鈴木・吉田1998
大地開戸	相模原市	縄文中期加曾利E						a1								河野・井澤1995
尾崎	足柄上郡山北町	縄文中期後葉				c2		c2	c1・c2							岡本・河野・鈴木1977
御屋敷添	厚木市	縄文中期加曾利IV						a1								相原・河合・中山1998
天塩	横浜市	縄文後期初頭	a1													玉林・矢野1990
東向 (No.33)	足柄上郡中井町	縄文後期初頭～前葉		a1				d								村上・吉垣1998
吉岡	綾瀬市	縄文後期初頭～中葉	a1					a1・d2・e1								小宮山・阪本・砂田ほか1997
寸嵐二号	相模原市	縄文後期初頭～中葉	a1					a1・d1・e1								吉田・麻生1998
上土欄南 (3次)	綾瀬市	縄文後期前葉	a1					d								矢島・阿部・小滝・井上ほか1998
中里 (No.31)	秦野市	縄文後期前葉～中葉主体	a1・c2・d2				d2	a1・c2・d1・d2・e1		a1						村上・吉垣・谷口1997
三ノ宮・下谷戸 (No.14)	伊勢原市	縄文後期前葉～中葉						a1・c2・d1・d2・e1								穴戸・宮坂・松田・三瓶2000
下北原	伊勢原市	縄文後期前葉～中葉	a1・c2・e2			d2		a1・c2・d1・d2		a1・c2		a1・c2				鈴木ほか1977
東正院	鎌倉市	縄文後期前葉～中葉	a1・c2	c2・d2				a1・c2・d1・d2・e1		a1		a1・c2				鈴木ほか1972
馬場 (No.6) (1次)	愛甲郡清川村	縄文後期前葉～中葉	c2・d2	c2		?		d1・d2	c2・d2	?						鈴木・近野1995
馬場 (No.6) (2次)	愛甲郡清川村	縄文後期前葉～中葉	a1			?		d・e1		?						鈴木・市川・近野1999
日向南新田	伊勢原市	縄文後期前葉～中葉				?		d?								服部・樽淵1987
宮久保	綾瀬市	縄文後期前葉～中葉	a1・c2					a1・c2・d1・d2		a1						國平・長岡・御堂島1987
表の屋敷 (No.8)	愛甲郡清川村	縄文後期前葉之内						a1・d1・d2・e1		a1		a1				近野・恩田・谷口1997
韓子峯	横浜市	縄文後期前葉之内						c2・d2・e1				e1				鳴原・土井・百瀬ほか1984
金沢文庫	横浜市	縄文後期前葉之内						e1								山本・服部・谷口1988
上粕屋・川上 (No.5)	伊勢原市	縄文後期前葉之内	a1・e1	a1												穴戸・宮坂1998
上吉沢市場地区	平塚市	縄文後期前葉之内	a1・c2					d1・d2								高杉・小山・中山・佐々木2000
川尻	相模原市	縄文後期前葉之内	a1・c2					d1・e1								加藤・小川・伊丹2000
下九沢下ノ口	相模原市	縄文後期前葉之内	c2					d・e		c2						松井1998
北原 (No.9)	愛甲郡清川村	縄文後期前葉之内	a1・c2			d2		c2・d1・d2・e1		c2		c2				市川・恩田・谷口1994
北原 (No.10)	愛甲郡清川村	縄文後期前葉之内						c2・d								市川・鈴木・能崎・恩田1997
北原 (No.10・11北)	愛甲郡清川村	縄文後期前葉之内						a1								市川・鈴木・吉田1998
北原 (No.11)	愛甲郡清川村	縄文後期前葉之内	a1・c2					c2・d2		a1						市川・恩田・谷口1994
久保ノ坂 (No.4)	愛甲郡清川村	縄文後期前葉之内	c2													恩田・近野・吉田1998
白久保	茅ヶ崎市	縄文後期前葉之内						e1								松田・井辺・田村1999
多摩区No.61	川崎市	縄文後期前葉之内1主体						d1								戸田1998
相模原市No.62	相模原市	縄文後期前葉之内2	a1					d1・e1								後藤・若井・谷本・門田1996
上村	愛甲郡清川村	縄文後期前葉之内2	c2													鈴木・坂口・谷口・恩田1990
上粕屋・三本松 (No.7)	伊勢原市	縄文後期前葉之内2	a1・c2・e1					a1・d1・e1		e1		c2				穴戸・宮坂1998
上土欄	綾瀬市	縄文後期前葉之内2	a1・c2					d1・d2・e1	d2	c2						阿部・小宮山・矢島ほか1993
上土欄南 (4次)	綾瀬市	縄文後期前葉之内2						e1								市川・井澤2000
白久保	茅ヶ崎市	縄文後期加曾利B						e1								松田・井辺・田村1999
鶴巻上ノ窪 (No.25上)	秦野市	縄文後期加曾利B主体						d1								木村・柏木1998
御屋敷添	厚木市	縄文後期加曾利B						d1								相原・河合・中山1998
上土欄南 (90年)	綾瀬市	縄文後期加曾利B	a1・d2			d2		d1・d2								阿部・小宮山・矢島ほか1993
上土欄南 (70年表様)	綾瀬市	縄文後期加曾利B1	c2			d2		d2・e1								阿部・小宮山・矢島ほか1993
上土欄南 (4次)	綾瀬市	縄文後期加曾利B1						d1・e1		a1						市川・井澤2000
下大槻墓 (No.30)	秦野市	縄文後期後半						d1・e1	c2							大上・大塚・飯塚1997
中里 (No.31)	秦野市	縄文晩期水I	c2													村上・吉垣・谷口1997
池子	逗子市	弥生中期中葉主体	a1					a1								山本・谷口1999
池子	逗子市	弥生中期宮ノ台	a1	c2・d2		a1・c2・d2		d2								山本・谷口1999

山梨県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
金の尾	甲斐市	縄文前期十三番堤						d2								末木ほか1987
上平出	北杜市	縄文中期五領ヶ台	c2													長沢1988
釈迦堂 (三白神平)	甲州市	縄文中期藤内		c2												小野ほか1987
頭無	北杜市	縄文中期曾利							c2							末木ほか1975
大月 (10次)	大月市	縄文中期曾利						c2								笠原2000a
釈迦堂 (三白神平)	甲州市	縄文中期曾利			c2			c2	c2							小野ほか1987
柳坪	北杜市	縄文中期曾利	a1													末木ほか1975
牛奥	甲州市	縄文中期曾利III		c2												小林広ほか1984
甲ッ原	北杜市	縄文中期曾利III						c2								山本・川手・今福・網倉1998
桂野	笛吹市	縄文中期曾利IV						a1								野代・網倉2000

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
甲ヶ原	北杜市	縄文中期曾利V						c2								山本・川手・今福・網倉1998
釈迦堂(野呂原地区)	富吹市	縄文中期曾利V	a1													長沢ほか1987
西馬鞭	富吹市	縄文中期後葉～後期前葉						c2								野代・網倉2000
金の尾	甲斐市	縄文中期末						a1・c1・c2	c2							末木ほか1987
御蔵地	北杜市	縄文中期末						a1・c2								田代1987
水口	富吹市	縄文後期初頭～前葉	a1	e1				c2・d1・e1		a1		a1				今福・田口1994
大月(7・8次)	大月市	縄文後期前葉～中葉主体	a1・c2・e1	c2・d2				a1・c2・d1・d2・e1								小林・笠原2000
塩瀬下原	大月市	縄文後期前葉～中葉	a1					e2・d2・e1	c2・d1							吉岡2000
日影田	北杜市	縄文後期前葉～中葉		c2				c2・d2								山本・三田村ほか1995
釈迦堂(原越北山地区)	富吹市	縄文後期堀之内	a1・c2	a1				a1・c2・d1・d2	d2							小野ほか1986
釈迦堂(原越北山地区)	富吹市	縄文後期堀之内						d								小野ほか1986
池之元	富士吉田市	縄文後期堀之内2	c2			d		c1・d1		c2		a1				須賀1997
金生	北杜市	縄文後期～晩期			c2			c2・d1・d2	c2・d2			c2				新津ほか1989
中谷	都留市	縄文晩期清水天王山	a1・e1	c2	c2	a1		a1・c2・d1・d2・e1		a1		a1		a1		長沢1997
豆塚	富吹市	縄文晩期清水天王山						c2・d1								長沢ほか1984
南大浜	上野原市	弥生中期平沢					e2									笠原2000b

長野県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
松原	長野市	縄文前期中葉	a1			d2										上田ほか1998
巾田	千曲市	縄文前期諸磯b				c2										森島・笹沢1966
市道	上水内郡信濃町	縄文前期諸磯c併行	c2													中村2001
南丘A	伊那市	縄文中期						c2								辰野・根津・深沢・小池ほか1973
山寺垣外	伊那市	縄文中期		c2												辰野・根津・深沢・小池ほか1973
風呂屋	中野市	縄文中期前葉～中葉主体	a1					d								土屋・石原・鶴田・中島1997
山溝	上伊那郡飯島町	縄文中期中葉～後葉				c2	c2	c2		a1						山岡・伊藤・井上ほか1973
尾越	上伊那郡飯島町	縄文中期中葉～後期中葉	a1・c2・d2	a1		c2・d2		a1・c2・d2	c2	a1	a1					大沢・今村・神村ほか1972a
北丘B	伊那市	縄文中期加曾利E				c2										辰野・根津・深沢・小池ほか1973
北高根A	上伊那郡南箕輪村	縄文中期加曾利E				c2										大沢・今村・丸山ほか1973
道満	上伊那郡飯島町	縄文中期加曾利E						c2								大沢・今村・神村ほか1972a
増野新切	下伊那郡高森町	縄文中期加曾利E	c2					c2								藤部・金井・酒井ほか1973
厩代	千曲市	縄文中期後葉						c2・d2								水沢ほか2000
駒込	佐久市	縄文中期後葉						c2								川崎・宇賀神2001
郷土	小諸市	縄文中期後葉～後期初頭						d2	c2							桜井・宇賀神2000
松原	長野市	縄文中期加曾利EIV						d1								上田ほか1998
村東山手	長野市	縄文中期加曾利EIV主体				c2?		c2・d1								鶴田・石原ほか1999
出原西部	下伊那郡高森町	縄文後期						c2			c2					大沢・今村・神村ほか1972b
大芝原	上伊那郡南箕輪村	縄文後期						d2								大沢・今村・丸山ほか1973
大芝東	上伊那郡南箕輪村	縄文後期						c2								大沢・今村・丸山ほか1973
百駄刈	伊那市	縄文後期	a1・c2		c2		c2	a1・b2・c2・d1・d2・e1		e1		a1				辰野・根津・深沢・小池ほか1973
細ヶ谷B	伊那市	縄文後期						a1								辰野・根津・深沢・小池ほか1973
正木原I	下伊那郡高森町	縄文後期						c2								大沢・今村・神村ほか1972b
瑞瑞寺前(中島地区)	下伊那郡高森町	縄文後期	a1	c2				c2・d2								大沢・今村・神村ほか1972b
桜畑	東御市	縄文後期						c2								川崎1999
中田	東御市	縄文後期	a1					c2								川崎1999
茂田南石堂	北佐久郡軽井沢町	縄文後期	c2					c2・d1・d2・e1		a1		c2				上野ほか1983
真行寺	東御市	縄文後期?						d								川崎1999
山溝	上伊那郡飯島町	縄文後期前半				c2		a1・c2								山岡・伊藤・井上ほか1973
中原	東御市	縄文後期初頭～中葉	c2		c2			a1・c2・d1	c2・d2							川崎1999
松原	長野市	縄文後期称名寺						a1								上田ほか1998
吹付	佐久市	縄文後期前葉							c2							宇賀神・岡村・新海・寺島・百瀬ほか1991
出早神社附近	下伊那郡高森町	縄文後期前葉～中葉	a1・c2・d2	c2	a1	c2		a1・c2・d2	c2			c2・d2				大沢・今村・神村ほか1972b
駒込	佐久市	縄文後期堀之内						c2・d1								川崎・宇賀神2001
鐘鈴原A	下伊那郡高森町	縄文後期堀之内						d2								大沢・今村・神村ほか1972b
小垣外・辻垣外	飯田市	縄文後期堀之内	a1・c2	c2	c2			a1・c2	c2							矢口ほか1973
松原	長野市	縄文後期堀之内						c2・d2								上田ほか1998
釜村田	東御市	縄文後期堀之内1						c2								川崎1999
栗毛坂	佐久市	縄文後期堀之内1						d2								宇賀神・岡村・新海・寺島・百瀬ほか1991
東塚ふた	佐久市	縄文後期堀之内1						d								宇賀神・岡村・新海・寺島・百瀬ほか1991
村東山手	長野市	縄文後期堀之内2	c2			c2?		c1・c2・d1・d2・e1		c2						鶴田・石原ほか1999
大島山東部	下伊那郡高森町	縄文後期加曾利B						d2								大沢・今村・神村ほか1972b
神堂垣外	下伊那郡高森町	縄文後期加曾利B						d2								大沢・今村・神村ほか1972b
瑞瑞寺前(青木地区)	下伊那郡高森町	縄文後期加曾利B						c2			d2					大沢・今村・神村ほか1972b
坪井	上高井郡高山村	縄文後期加曾利B1						c2・d?								関1969

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
北高根A	上伊那郡南箕輪村	縄文後期～晩期				c2	c2	a1・c2・d2								大沢・今村・丸山ほか1973
南高根	上伊那郡南箕輪村	縄文後期～晩期	c2	c2	c2	c2・d2		a1・b2・c2・d2								大沢・今村・丸山ほか1973
うどん坂II	上伊那郡飯島町	縄文晩期	a1・c2					a1・c2								山岡・伊藤・井上ほか1973
出早神社附近	下伊那郡高森町	縄文晩期前半						d2			c2					大沢・今村・神村ほか1972b
保地	埴科郡坂城町	縄文晩期前半主体	a1	e1				a1			e1					関1966
大日ノ木	上田市	縄文晩期水I						a1・c2・d1・d2		a1・d2						若林・川崎・廣瀬・宮島1999

新潟県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
吉野屋	三条市	縄文中期主体	a1・d2			c2		d1・e1								新潟県立三条商1974
大塚	上越市	縄文中期初頭						c2・d2								高橋2005
上中島(94・95年度)	上越市	縄文中期前葉		a1												飯坂ほか2000
幅上	十日町市	縄文中期前葉～中葉	a1・c2	d2											a1	菅沼・宮内2007
笹山	十日町市	縄文中期前葉～後期前葉	c2	c2		c2・d2	c2	c2・d1・d2	e2							菅沼・阿部・石原1998
三屋原B	糸魚川市	縄文中期新崎主体						a1								池田・柳・山本・竹田1988
石倉	長岡市	縄文中期中葉						d2								武田・山本・佐藤・斎藤2007
沖ノ原	中魚沼郡津南町	縄文中期中葉～後葉主体				a1				c2						江坂・渡辺1977
宮下原	南魚沼市	縄文中期中葉～後葉	c2					a1・c1・d2?	a1							池田1981
長峰	上越市	縄文中期中葉～後葉						a1								室岡・関・本間1984
堂平	中魚沼郡津南町	縄文中期中葉～末主体	a1	a1	c1	c1・c2・d2		a1・c1・c2・d1・d2・e1		a1		a1			a1・e1	松永2011a
寺地	糸魚川市	縄文中期古串田新	a1													寺村・青木・関ほか1987
多賀屋敷	長岡市	縄文中期後葉～後期前葉	a1・c2			c2・d2		a1・c2・d1	a1			a1				駒形・松井・渡辺1983
岩野原	長岡市	縄文後期				b2		a1・c2・d1・d2・e1		a1						駒形・寺崎1981
万俵寺林	南魚沼市	縄文後期初頭～前葉	a1					c2・d1								池田・荒木ほか1988
向原II	十日町市	縄文後期初頭～前葉			c2	c2		c2・d1・d2								長澤ほか2000
平	新潟市	縄文後期初頭～中葉主体	a1					a1・d1・d2				c2				川上・遠藤ほか1982
内後	十日町市	縄文後期初頭～中葉	a1	c2・d2		d2		a1・c2・d1・e1	c2	a1					a1	長澤ほか2006
耳取	見附市	後期三十稲場主体						a1・d1								関1971
水上	南魚沼市	後期三十稲場主体						a1								池田・荒木1988
柳古新田下原A	南魚沼市	縄文後期前葉～中葉	c2					c2・d1								池田・荒木1987
道尻手	中魚沼郡津南町	縄文後期堀之内	?	?				a1・d1		c2						中田2005
現明嶽	東蒲原郡阿賀町	縄文後期中葉						d1								高橋・奥村・木村・村上2006
窪畑B	上越市	縄文後期中葉						d2								立木・吉澤ほか1999
和泉A	上越市	縄文後期中葉						c1								荒川・加藤1999
野地	胎内市	縄文後期中葉～後葉						d1								渡邊・坂上ほか2009
二夕子沢C	新発田市	縄文後期中葉～後葉						d?・e1								田中・鈴木2003
有馬崎	燕市	縄文後期中葉～後葉						e1								前山1997
籠峰	上越市	縄文後期中葉～晩期後葉		d2		d2		a1・c2・d1・d2・e1	d1	d2						観崎・野村2000
八反田	中魚沼郡津南町	縄文後期加曾利B1						d1								山本1984
三仏生	小千谷市	縄文後期三仏生	a1					a1・c1・d1・e1		a1						中村・寺村・松崎1957
長峰	上越市	縄文後期三仏生	a1					d2・e1								室岡・関・本間1984
上中島(94・95年度)	上越市	縄文後期後葉						c2								飯坂ほか2000
中野	新発田市	縄文後期後葉～晩期初頭主体						c2・e1								石川ほか1997
上中島(89年度)	上越市	縄文後期末～晩期	a1・c2・d2			c2	c2	a1・d1・d2	c2							立木・吉澤ほか1999
金谷	新発田市	縄文後期～晩期						d1								鶴巻・田中1994
二本松東山	北蒲原郡聖籠町	縄文後期～晩期	d2					d1								山武考古研1993
野地	胎内市	縄文晩期前葉前半						e1								渡邊・坂上ほか2009
細池	糸魚川市	縄文晩期中葉主体	a1					d1								安藤ほか1974
寺地	糸魚川市	縄文晩期中葉～後葉	a1					d1・e1								佐藤・江端・相羽・田中2002
原山	糸魚川市	縄文晩期中葉～弥生前期	c2													寺崎・高橋・川村・田中ほか1988
現明嶽	東蒲原郡阿賀町	縄文晩期後葉						d1								高橋・奥村・木村・村上2006
藤橋	長岡市	縄文晩期大洞A主体						d1								駒形ほか1977
入ヶ谷	東蒲原郡阿賀町	縄文晩期大洞A'						e1								上川村教委1986
青田	新発田市	縄文晩期島屋2						d1・e1	d1・e1							荒川・石丸2004
六野瀬	阿賀野市	縄文晩期島屋2b	a1					d1								渡邊ほか1992
和泉A	上越市	縄文晩期～弥生前期	a1					c1・d1・d2・e1		a1	d	d2				荒川・加藤1999
大塚	糸魚川市	弥生前期				d2		d1				c2				寺崎・高橋・川村・田中ほか1988
釜山	阿賀野市	弥生前期～中期						d1								古澤・酒井・石田2003
西郷	新潟市	弥生前期～中期						d1・d2・e1	d1	a1	a1					土橋ほか2009
村尻	新発田市	弥生中期初頭	d2					d1・e1			e1					石川・田中ほか1982

4. 北陸・東海地方

富山県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
千鳥	滑川市	縄文中期前葉～晩期中葉			d2										c1	小島ほか1979
小竹	富山市	縄文中期中葉	a1													山内・林寺・小林・古川1993

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
境A	下新川郡朝日町	縄文中期中葉～晩期後葉	a1・c2・e1	a1・c2	a1	c2・d2	c2	a1・c2・d1・d2	c2	c2	c2	c2			c2	布目1992a(狩野・酒井・橋本ほか1992)
黒河尺目	射水市	縄文中期後葉主体	a1・c2				c2・d2									金三津・町田2004
舌山	黒部市	縄文中期後葉	c2			c2・d2		d2								金三津2010
妙山寺	富山市	縄文中期後葉	c2													中村・岩崎1997
黒河・中老田	射水市	縄文中期後葉～後期前葉	a1・c2	a1				a1								稲垣・土生・小村2002
小竹藪	高岡市	縄文中期後葉～後期前葉	a1・c2			c2・d2		e1								小島1964
若栗中村	黒部市	縄文中期後葉～晩期	a1・c2					e1								金三津2010
矢張下島	南砺市	縄文中期串田新主体	c2			c2・d2		d2								岡田ほか2007
下山新	下新川郡朝日町	縄文中期串田新				c2										金三津・朝田2009
串田新	射水市	縄文中期串田新	c2・d2	c2												橋本ほか1994
外輪野I	富山市	縄文中期串田新	c2													堀内・山本ほか2000
笠前	高岡市	縄文中期串田新II	a1・c2													越前・町田ほか2008
古沢	富山市	縄文中期～後期主体	c2													藤田1975
柳田	下新川郡朝日町	縄文中期～後期	a1													金三津・朝田2009
下山新東	下新川郡朝日町	縄文中期～後期		c2				d1								金三津・朝田2009
東尾崎	魚津市	縄文中期～晩期	c2	c2・d2				c2								山本1990
桜町(舟岡地区)	小矢部市	縄文中期～晩期?	a1・c2・d2	a1・d2	d2	b2・c2	c2	d2			c2・d2					中田2007
古屋敷IV	中新川郡立山町	縄文後期主体	c2													三橋・瀬戸1994
下山新	下新川郡朝日町	縄文後期岩崎野	a1													金三津・朝田2009
有田ヶ原D	南砺市	縄文後期前田	c2													上野・神保・酒井1976
岩崎野	中新川郡立山町	縄文後期前田・岩崎野	c2					c2								池野・柳井1976
惣領浦之野	氷見市	縄文後期前葉主体	a1・c2					c2								島田・新宅・朝田2010
五百歩	南砺市	縄文後期築屋	a1・c2	c2				a1								山本・林1990
馬場山D	下新川郡朝日町	縄文後期中葉～後葉	c2													山本・狩野・酒井・橋本ほか1987
本江	滑川市	縄文後期中葉～晩期	a1・c2・d2	c2・d2		c2・d2		c2・d2				a1				小島ほか1979
堀切	黒部市	縄文後期中葉～晩期後葉	a1・c2	d2				e1								森川ほか2006
矢張下島	南砺市	縄文後期後葉～末			c2											岡田ほか2007
桜町(雀谷地区)	小矢部市	縄文後期後葉～末				d2										山森・林1987
金剛新	中新川郡立山町	縄文後期後葉～晩期	c2	c2		c2		c2				c2				山本・神保1975
岩瀬天神	富山市	縄文後期後葉～晩期中葉主体	a1・c2	c2											c2	宮田1995
杉谷81	富山市	縄文後期末～晩期前半	c2					d2								藤田・山本1973
柿ノ木平	小矢部市	縄文後期末～晩期中葉	a1・d2					e1								後藤ほか1984
勝木原	高岡市	縄文後期末～晩期後葉	a1					c2								小島ほか1967
本江四升田	滑川市	縄文晚期主体				d2										小島ほか1979
惣領野際	氷見市	縄文晚期中屋主体	a1					d・?								島田・新宅・朝田2010
杉谷67	富山市	縄文晚期中屋	a1・c2													藤田・山本1973
羽根下立	富山市	縄文晚期中屋				c2		d								中川・青山・町田・永井2011
黒河尺目	射水市	縄文晚期中屋	a1													金三津・町田2004
桜町(雀谷地区)	小矢部市	縄文晚期中葉～後葉	a1													山森・林1987
不動平	中新川郡立山町	縄文晚期中葉～末主体	c2					d2								森・山崎・川端1991
下老子笹川	高岡市	縄文晚期中葉～末	a1・c2		c2	c2		d2								町田ほか2006
小杉流通業務団地内No.19	射水市	縄文晚期下野	a1													関ほか1986

石川県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
徳前C	鹿島郡中能登町	縄文前期末～中期前葉				c2		c2								西野ほか1983
藤ノ木	加賀市	縄文中期				c2	c2									中村ほか1985
曾福	鳳珠郡穴水町	縄文中期初頭～後期前葉	a1・c2	a1			c2・d2	c2・d2・e1								米澤ほか1980(渡辺1985a)
福田原山	鹿島郡中能登町	縄文中期初頭～後期初頭	a1・c2													平口1982
岩内(テラダ地区)	能美市	縄文中期初頭～後期中葉	c2													山本ほか1988
灰多社僧坊跡群(寺家オオバタケ地区)	羽咋市	縄文中期新保主体	a1													湯尻ほか1984
念仏林	小松市	縄文中期前葉～中葉	a1・c2			c2・d2	c2	c2・d2		c2						望月ほか1988
岩内(86年度)	能美市	縄文中期新崎主体	c2			c2・d2		c2								小嶋・松山ほか1993
奥原縄文	七尾市	縄文中期中葉				d2										平田ほか1982
笠舞A(1次)	金沢市	縄文中期中葉～後葉主体	a1・c2			c1		d2								端野1979
笠舞A(2・3次)	金沢市	縄文中期中葉～後葉主体	c2・d2		c2	c2・d2	d2	d2								南ほか1981
笠舞A(4次)	金沢市	縄文中期中葉～後葉主体				c2・d2										西野・本田1987
笠舞A(7次)	金沢市	縄文中期中葉～後葉主体	a1・c2		c2	c2・d2		c2								景山2001
助生	能美市	縄文中期中葉～後葉	c2	c2・d2		a1・c2・e1										辰口町教委1978
中海	小松市	縄文中期中葉～後葉	a1・c2			c2・d2		a1								湯尻・山本ほか1987
東市瀬	金沢市	縄文中期中葉～後期初頭主体	a1・c2・d2	a1・c2		c2・d2		d2								増山・徳田・田村・南ほか1985
軽海西芳寺	小松市	縄文中期中葉～後期初頭	a1		a1・c2	c2・d2										岩瀬・柿田・宮田1998
北塚(14次)	金沢市	縄文中期中葉～後期初頭	a1・c2		c2	c2・d2										谷口1998
長滝	能美市	縄文中期中葉～後期前葉主体	c2			c2		c2			a1・c2					金沢大考古研1976、西野ほか1987
尾添	白山市	縄文中期中葉～後期前葉	a1・c2			b2・c2・d2										川端1983、平田ほか1977
高屋小浦出	珠洲市	縄文中期中葉～後期前葉	c2													平口・杉島・西柳・高堀1976

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
長滝(90年度)	能美市	縄文中期中葉～後期前葉	c2													小嶋・松山ほか1993
真脇	鳳珠郡能登町	縄文中期中葉～弥生	a1・a2・c2	c2	c2	c2		a1・c2・d2				c2				山本1986b
上原A	加賀市	縄文中期上山田	c2			c2・d2										米澤ほか1985
赤浦	七尾市	縄文中期後葉主体	c2			?		a1・c2・d2								杉島・四柳ほか1977
北塚(17次)	金沢市	縄文中期後葉主体				c2										松浦・宮川1998
宇出津崎山	鳳珠郡能登町	縄文中期後葉～後期初頭主体	c2													川端1983(高畑・加藤ほか1982・渡辺1985a)
北塚(15・16次)	金沢市	縄文中期後葉～後期初頭	a1・c2			c2・d2			c2							浅野・沢田・松山・安ほか1999
北塚(13次)	金沢市	縄文中期後葉～後期前葉主体	a1・c2		b2	c2		a1								沢田ほか1994
高波ふるや	珠洲市	縄文中期後葉～後期前葉主体	a1													平口・杉島・四柳・高畑1976
北塚(6次)	金沢市	縄文中期後葉～後期前葉				c2										南ほか1977
波並西の上	鳳珠郡能登町	縄文中期後葉～晩期中葉	c2	a1・c2		c2		c2				c2				川端1983(高畑・平田ほか1976・高畑・加藤ほか1982・渡辺1985a)
萩市	羽咋郡宝達志水町	縄文中期～後期	c2													川端・沢田ほか1998
八日市地方	小松市	縄文後期	a1・c2													橋本・福海・宮田2003
下開茶白山	能美市	縄文後期初頭	a1													辰口埋文調査委・石考研1982・西野ほか1987
気屋	かほく市	縄文後期気屋	a1・c2													山川・松田・米澤1996
火打谷大垣内	羽咋郡志賀町	縄文後期気屋	a1・c2					c2								市堀1974
福浦港ヘラソ	羽咋郡志賀町	縄文後期気屋	a1・c2					a1								平口・米澤ほか1991
八日市ヤスマル	金沢市	縄文後期中葉～晩期中葉	c2													宮本・谷口1999
横北	加賀市	縄文後期中葉～晩期中葉	a1・c2					c2・d1			c2	d2				湯尻1977
御経塚	野々市市	縄文後期中葉～晩期中葉	a1・c2	c2		c2	c2	c2・d2		a1	c2	c2・d2				川端・渡辺ほか1983
白山	白山市	縄文後期中葉～晩期中葉	c2・d2	a1		d2		a1								垣内・西野ほか1985
上町和住下	鳳珠郡能登町	縄文後期加曾利B1	c2			c2		c2・d2								宮田ほか1998
馬替	金沢市	縄文後期加曾利B1	a1・c2・d2	a1・c2	c2	c2・d2	c2	c2	c2		c2・d2					南ほか1993
米泉	金沢市	縄文後期酒見主体	a1・b2・c2・d2・e1					d1・d2			d2					西野・岡本ほか1989
チカモリ	金沢市	縄文後期後葉～晩期中葉	a1・c2								d2					南・増山ほか1986
雁川鉄橋	金沢市	縄文後期末～晩期中葉	a1・c2													橋本ほか1989
中屋サワ	金沢市	縄文後期末～晩期中葉	a1・c2・d2・e1			d2		d1・d2・e1			a1	c2				楠・谷・前田・向井2009
道下元町	輪島市	縄文後期～晩期主体	a1・c2・d2	c2		c2		c2		a1	c2					西野ほか1985
岩内(ハチマング地区)	能美市	縄文晩期初頭～中葉	a1													山本ほか1986
中屋	金沢市	縄文晩期中層主体	a1			d2		c2								出越1981
米泉	金沢市	縄文晩期中層	e1			d2										西野・岡本ほか1989
中屋サワ(90年度)	金沢市	縄文晩期中層3主体	a1			c2										南ほか1992
近岡(70年度)	金沢市	縄文晩期中葉～後葉						d2								久田ほか1995
宮永雁場	白山市	縄文晩期中葉～後葉						d1・d2								木田2000
近岡(93年度)	金沢市	縄文晩期中葉～後葉	a1・c2					c2・d1								楠・新出・向井1998
長竹	白山市	縄文晩期長竹	c2			c2・d2		c2・d1								中島・湯尻1977
八日市地方	小松市	弥生中期前葉～中葉	c2													橋本・福海・宮田2003
矢木ジワリ	金沢市	弥生中期矢木ジワリ		c2												増山1987
矢木ヒガシウラ	金沢市	弥生中期小松						e1								増山1987
西念・南新保	金沢市	弥生中期～後期	c2													楠ほか1989

福井県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
井江藪	あわら市	縄文中期				d2										南ほか1986
古宮	勝山市	縄文中期初頭～前葉				c2・d2										渡辺ほか1978
浜島	福井市	縄文中期初頭～後期中葉	a1			d2		c2								南1990
小谷堂	大野市	縄文中期中葉～後葉主体	a1・c2			c2・d2										南ほか1986
落合	大野市	縄文中期中葉～後葉	c2													南ほか1986
角野前坂	大野市	縄文中期中葉～後葉		d2												南ほか1986
右近次郎	大野市	縄文中期後葉主体	c2		c2	c2		?								工藤ほか1985
舟津	あわら市	縄文中期～後期	d2			d2										南ほか1986
北寺	三方上中郡若狭町	縄文後期前半	a2・c2	d2	c2	d2										田辺ほか1992
鳴鹿手島	吉田郡永平寺町	縄文後期前葉～中葉	a1・c2・d2	c2・d2	c2	d2	c2	c2			c2					工藤ほか1988
鹿谷本郷	勝山市	縄文後期中葉～未	a1・c2													中山・平井ほか1977
下糸生郷	丹生郡越前町	縄文後期中葉～晩期中葉	a1・c2					c2								赤澤ほか1999

岐阜県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
下田	飛騨市	縄文中期主体	c2・d2	c2		c2・d2		c2								大江田ほか1987
牛垣内	高山市	縄文中期後半	a1	c2	c2	c2		c2								谷口ほか1998
岡前	飛騨市	縄文中期中葉～後葉	a1・c2	c2・d2	c2	b2・c2・d2		c2				a1				谷口ほか1995
中野山越	飛騨市	縄文中期中葉～後葉	c2			c2・d2	c2									戸田ほか1993
堂之上	高山市	縄文中期中葉～末			c2・d2	b2・c2・d2		d2								戸田ほか1997
野佐	美濃加茂市	縄文中期後半～晩期	a1・c2					a1・c2								千藤ほか2000
岩井谷	揖斐郡揖斐川町	縄文中期後葉	a1					c2・d2								浅野・河瀬ほか2000
荒城神社	高山市	縄文中期後葉～後期中葉主体	c2	c2	c2	b2・c2		c2・d2								谷口ほか1993

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
上開田村平	揖斐郡揖斐川町	縄文中期末主体			c2			c2								武藤・小谷ほか1999
中村	中津川市	縄文後期主体	c2	a1		c2		c2・d2	d2	c2		d2			?	市原・住田ほか1979
高見	関市	縄文後期前葉	c2・d2									c2				長谷川1998
中野山越	飛騨市	縄文後期短之内	c2			c2										戸田ほか1993
西田	高山市	縄文後期中葉～末主体	a1	a1・c2・d2	c2	c2	c2・d2	a1・c2・d1・d2・e1		a1		a1				谷口ほか1997
いんべ	揖斐郡揖斐川町	縄文後期～晩期			a1											小谷・藤岡・藤根ほか2000
牛垣内	高山市	縄文後期主体	?	?	?	?		d2・e1		?						谷口ほか1998
中切	恵那市	縄文晩期				d2		d1								西部・三宅1996

静岡県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
仲道A	伊豆の国市	縄文草創期多縄文系				c1・d2					a1					漆畑・渡谷ほか1986
平野山	賀茂郡松崎町	縄文中期後半						c2								山下・金子・外岡・高橋1983
押出シ	三島市	縄文中期加曾利E						c2								岩名・栗木・山本2000
善福寺	菊川市	縄文中期～後期	a1		a1・c2			e1								塚本・後藤1994
松林A	三島市	縄文後期初頭～前葉						c1・d								小川1998
前山	浜松市	縄文後期初頭～晩期前葉	a1		a1			d2								向坂・西井・鈴木1992
半場	浜松市	縄文後期前葉～中葉	a1					d1・e1	c2			a1				向坂・栗野・平賀1982
蛭塚(2次)	浜松市	縄文後期中葉	a1・c2		c2			c2・d1								後藤ほか1958
蛭塚(4次)	浜松市	縄文後期中葉									a1					後藤ほか1961
粟下・メノト	掛川市	縄文後期中葉～晩期	a1・a2・c2					a1・c1・c2・d1・d2・e1	a1・c1・c2			a1・a2				大熊ほか2006
蛭塚(3次)	浜松市	縄文後期後葉～晩期前葉			c2			c2								後藤ほか1960
勝田井の口	静岡市	縄文後期後葉～晩期中葉主体						d1	a1							井鍋・西尾・伊藤2002

愛知県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
内田町	瀬戸市	縄文中期後葉～後期中葉	a1・c2・d2・e1						c2	c2・e1		d2				岡本・佐野・河合2002
吉野	瀬戸市	縄文後期初頭～前葉主体			c2			a1・d2								永井ほか2004a
権現山	岩倉市	縄文後期初頭～前葉			c2			d1								早野ほか2003
神明社	知多郡南知多町	縄文後期前葉～中葉	a1													山下ほか1989
川地	田原市	縄文後期前葉～晩期初頭	a1・c2													原田ほか1995
三ツ井	一宮市	縄文後期前葉～晩期中葉			c2			c2								田中ほか1999
大坪西	瀬戸市	縄文後期中葉						c2								川添ほか2009
牛牧(4次)	名古屋市長	縄文後期後葉～晩期後葉主体						c2・d2								川添ほか2001
大西	豊橋市	縄文後期後葉～晩期末						d2								岩瀬・蔵本1996
神明社	知多郡南知多町	縄文後期吉胡下層	a1					c2								山下ほか1989
神明社	知多郡南知多町	縄文後期末～晩期初頭	a1					c2・d2				a1				山下ほか1989
伊川津	田原市	縄文後期末～晩期前半主体	a1					d2								小野田・春成・西本1988
白石	豊橋市	縄文後期～晩期						c1								豊・岩瀬ほか1993
中川原	豊田市	縄文後期～晩期	c2・d2		c2			c2								松井・高橋1999
真宮	岡崎市	縄文晩期	c2					a1・c2・d1・d2・e1								斎藤2001
東光寺	額田郡幸田町	縄文晩期						c2・d2								酒井ほか1993
保美	田原市	縄文晩期						d2								小林・高平・長谷部・早川1966
牛牧(1～3次)	名古屋市長	縄文晩期						d2								川添・福崎・佐野2001
須ヶ谷	稲沢市	弥生中期						c2								石黒・加藤・鬼頭2008

三重県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
大石	津市	縄文中期末		a1				c2								伊藤・森川ほか1992
東庄内A	鈴鹿市	縄文中期末～後期初頭			a1			d1								木野本・伊藤2009
新徳寺	多気郡多気町	縄文後期初頭～前葉	a1・c2			c2										小瀬・松本ほか1997
天道	伊賀市	縄文後期前葉	c2													服部・平子・山田1989
権現坂	いなべ市	縄文後期中葉	c2		c2											清水・森川ほか2002
大原堀	松阪市	縄文晩期	a1													小瀬・小山ほか2008

5. 近畿地方

滋賀県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
粟津湖底	大津市	中期前葉				d2										伊藤・松澤2000
滋賀里	大津市	縄文後期	c2													田辺・加藤・高谷ほか1973
弘川御	高島市	縄文後期前半	a1・c2		a1			c2・d1								中村・堀2007
林・石田	東近江市	縄文後期初頭～前葉	a1・c2		c2			a1・c2								西1995
穴太	大津市	縄文後期前葉	a1		a1											仲川・林・田路ほか1997
宮司	長浜市	縄文後期前葉	a1・c2					a1								重田1999
小川原	犬上郡甲良町	縄文後期北白川上層	a1・c2					c2・d2								中村・鈴木ほか1996
正義寺	東近江市	縄文後期前葉～中葉	a1・c2・e1					a1・d2								植田1996

京都府

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
平	京丹後市	縄文中期新保			c2											河野ほか1997
北白川小倉町	京都市	縄文後期北白川上層	a1													梅原・小林1935
桑飼下	舞鶴市	縄文後期桑飼下	c2	a1	a1	d2		a1・e1		a1		c2			a1	渡辺1975

大阪府

遺跡名	所在地	時期	A221	A221x	A221/2	A111	A111x	A211	A332	A331	A331x	A321	A322	A423	A三方	文献
春木八幡山	岸和田市	縄文後期宮滝	a1													畠田1965

奈良県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
大川	山辺郡山添村	縄文中期末～後期末	a1													松田ほか1989
宮滝	吉野郡吉野町	縄文後期後半～晩期末	a1													末永1986

和歌山県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
溝の口	海南市	縄文後期	c2													武内1997

6. 中国・四国地方

鳥取県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
島(82年度)	東伯郡北栄町	縄文後期				c2										清水1983
栗谷(2次)	鳥取市	縄文後期中津主体	c2													谷岡・中原・瀬川1989
栗谷(3次)	鳥取市	縄文後期中津主体	a1		c2	c2・d2		c2		e1						谷岡・中原・瀬川1990
桂見(A地区)	鳥取市	縄文後期中津	a1	a1		c2・d2		a1・e1								植松1981
布勢	鳥取市	後期前葉	a1		c2							e1				中野ほか1981
桂見(八ノ割・堀谷東)	鳥取市	後期中葉	a1・c2・e			d2	c2・d2		d2							牧本・小谷・高垣ほか1996

島根県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
神原I	飯石郡飯南町	縄文後期～晩期	c2													鳥谷・綿織ほか2000

香川県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
永井	普通寺市	縄文後期中葉	a1													渡部ほか1990

高知県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
松ノ木	長岡郡本山町	縄文後期松ノ木	c2													出原1992

7. 九州地方

福岡県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
中村石丸	豊前市	縄文後期				d2										水ノ江1996
山崎	築上郡築上町	縄文後期				c2										小池ほか1992
宇野代	築上郡上毛町	縄文後期前葉～中葉				d2										柳田・小川1995

長崎県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
弘法原	雲仙市	縄文早期押型文		d2												高野ほか1983

熊本県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
庵ノ前	熊本市	縄文早期押型文	a1	d2・e1												濱田1997
御領	熊本市	縄文早期出水下層		d2												下村1976
小浜	球磨郡五木村	縄文中期～後期				a2・b2										福原1998

大分県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
飯田二反田	宇佐市	縄文後期前葉～中葉				d2										松本ほか1993

宮崎県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
木島	東諸県郡国富町	縄文早期		a1												曾永2001
上牧第2	都城市	縄文中期後葉～後期初頭主体				b2										久木田・高橋1999
石河内本村	児湯郡木城町	縄文後期前葉～中葉				a2・b2										白岩2000
崩野	日南市	縄文後期前葉～中葉	a2			a2・b2・d2	d2			a2・c2	d2					長津1991
丸野第2	宮崎市	縄文後期前葉～中葉	a1・a2・b2・c2			a1・a2・b2・c2・d2				a1		c2				後藤・長津・菅付1990

鹿児島県

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A三方	文献
東原	霧島市	縄文早期貝殻条痕文				d2										諏訪ほか1978
中尾田	霧島市	縄文中期即線文主体				b2										新東・中島・井ノ上・出雲1981
宮之迫	曾於市	縄文中期後半～後期前葉	a・b2			a2・b2・d2										長野・井ノ上1981
倉園	志布志市	縄文中期末～後期中葉				b2				c2						瀬戸口1974
武	鹿児島市	縄文中期末～後期中葉	a1・b2			a2・b2				a1・b2						廣田1998
中谷	曾於市	縄文後期				b2										池畑・中村1984
上水流	南さつま市	縄文後期前半	b2・c2													富山ほか2007
鎮守ヶ迫	鹿児島市	縄文後期前葉				b2										池畑・中村1984
高塚A	曾於市	縄文後期前葉				b2										池畑・中村1984
帖地	鹿児島市	縄文後期前葉～中葉				b2	b2									永野・成尾1999
南宮島	姶良市	縄文後期前葉～中葉								c2						青崎1977
宿利原	肝属郡錦江町	縄文後期指宿										c2				長野・中村1983
成川	指宿市	縄文後期指宿				b2・c2				b2・c2・d2						出口ほか1983
大園原	日置市	縄文後期市来								c2						辻・池畑1982

付表9 中国新石器時代の網代圧痕素材 一覧表

※1.本表は、本論の分析対象とした中国新石器時代的主要網代圧痕の素材(a~e×1.硬質、2.軟質)を、地方・行政区(省・自治区)・遺跡・時期ごとに整理したものである。
2.表の体裁・記載方法については、付表8に準じる。ただし、「A三方」の欄は、「A模様」に変更した。

1. 中国東北地方

内蒙古自治区

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A模様	文献
西水泉	赤峰市	新石器中期紅山(前期~中期)			b2										b2	中国社科院考古研内蒙古隊1982
大沁他拉	通遼市奈曼旗	新石器中期/後期紅山(前期~後期)			b2											朱1979
那斯台	巴林右旗	新石器中期/後期紅山(前期~後期)	b2				d2									巴林右旗博物館1987
紅山後	赤峰市	新石器中期/後期紅山(前期~後期)	b2		b2											濱田・水野1938

2. 華北・華中地方

山東省

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A模様	文献
北辛	棗莊市滕州市	新石器中期北辛	a1・c2・d2				d2									中国社科院考古研山東隊・山東省滕縣博物館1984

河南省

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A模様	文献
賈湖	濮陽市舞陽縣	新石器前期裴李崗	a1・c2													河南省文物考古研1999
下王崗	南陽市淅川縣	新石器中期仰韶半坡(下王崗)	a1?・b2?			a1?										河南省文物研ほか1989
鮑家堂	安陽市	新石器後期仰韶大司空			b2				b2							中国社科院考古研安陽隊1988

陝西省

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A模様	文献
元君廟	渭南市華縣	新石器中期仰韶半坡	a1?・c2			b2?					a1?					北京大歴史系考古教研室1983
北首嶺	宝鸡市	新石器中期仰韶半坡	a1?			b2?										中国社科院考古研1983
竜崗寺	漢中市南鄭縣	新石器中期仰韶半坡	a1?			a1?・d2?										陝西省考古研1990
半坡	西安市	新石器中期仰韶半坡~後期仰韶西王村	a1・b2・c2		b2	b2	b2	b2			a1					中国科学院考古研・陝西省西安半坡博物館1963

寧夏回族自治区

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A模様	文献
紅園子	固原市	新石器後期常山下層紅園子			b2								b2			固原県文管所・中国歴史博物館1993

甘肅省

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A模様	文献
辺家溝	臨夏回族自治州和政県	新石器後期馬家窯半山	b2													Palmgren 1934
瓦罐嘴	臨夏回族自治州和政県	馬家窯新石器後期半山											b2			Palmgren 1934
辺家溝	臨夏回族自治州和政県	新石器後期馬家窯馬廠											b2			Palmgren 1934

3. 華南地方

広東省

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A模様	文献
龍頭嶺	深圳市	新石器後期後沙湾	a1			a1										深圳博物館・中山大人類学系1990
龍頭嶺	深圳市	新石器後期後沙湾				d2										西谷1997

雲南省

遺跡名	所在地	時期	A221	A221*	A221/2	A111	A111*	A211	A332	A331	A331*	A321	A322	A423	A模様	文献
馬鞍山	保山市竜陵県	新石器後期木城馬鞍山				a1										耿1991